
また別のマビノギ

タルキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また別のマビノギ

【Nコード】

N5784S

【作者名】

タルキ

【あらすじ】

オンラインゲーム「マビノギ」を元した二次創作の小説です。実際にゲーム内にいるNPCやオリジナルキャラクター達が織り成すG1をベースにしたストーリーとなっております。

挿絵は描けないので文章により描写説明が多い書き方をしています。未熟者ですのでご満足して頂ける内容に仕上がっているか判別つきませんが、少しでもお目を通してくれた方々が楽しい時間を過ごせることを祈っております。

『注意点』一章がものすごく長いです。一章1万文字（四百字原

稿用紙、二十五枚分)くらいが普通にあります。読むのに時間が掛かるのが苦手という御方にはあまりお勧め出来ません。

『注意点2』実際のゲーム内のNPCや地名、装備名などは同じであります。ゲームとは全然違う物語です。実際のゲームはこんな感じではないので勘違いなさいませんように願います。

初めに『お読み頂く前の注意点』（前書き）

【強い注意点】

あらすじにも書きましたが、実際のゲームとはほとんど違います。勘違いませぬように願います。

初めに『お読み頂く前の注意点』

『お読み頂く前の注意点』（読みたい方だけどうぞ。必須ではありません）

若干、マビノギをプレイした方以外だと分かり辛い描写があるかもしれません。ご容赦ようじやうください。

この物語は実際の公式設定と、創作設定の入り混じって織り成されるストーリーとなっております。

本小説では、実際は「ミレシアン」ですが、異世界から来た者を「ミレンシア」と描写まじりかきしております。

この物語の中ではミレンシアは世界にほんの数人程度しかない設定となっております。故に元々エリン（舞台となる世界の名前）にいるトウアハ・デ・ダナン（ゲーム内でのNPC達のこと）のオリジナルキャラクターと、本来ゲーム内にいるNPC達が出てくる構成となっております。

挿絵はありません。

筆者は完全に素人であります。文章が読み難いことや、変な文法を使っている部分があるかも知れませんがご容赦して頂ければ幸いです。

この物語の中ではNPC達の性格は創作設定と公式設定が混じっております。そのため「このキャラはこんなキャラじゃないっ！」と、こだわりのある御方はお読みにならない方が良いかと思われれます。

二次創作なので「メアリースー」に該当するのは当たり前ですが筆者はそれを踏まえた上で物語を展開していきます。受け付けなという御方は読まない方が良いかと思われれます。

詠唱呪文は全てウェールズ語表記となっております。ケルト神話の舞台は三つほどありますが、マビの大部分は「ウェールズ神話」を題材とされているようなので。文法に少し怪しい点もありますが、

生暖かく見てやって頂けたら幸いです。

ちなみにウエールズ語は一部英語と同じ表現があります。

例 学校

(英語) S c h o o l

(ウエールズ語) Y s g o l i o n

例 攻撃

(英語) A t t a c k

(ウエールズ語) A t t a c k

以上のことが大丈夫、と言われる御方だけお読み頂くことを強くお薦め^すします。

では、お読み頂ける方々へ。少しでも楽しい時間が訪れることを未熟者ながら祈っております。

序章 (前書き)

そこはどこか分からない世界で、どこか分からない空間だった。

序章

そこは白かった。

白い床と、真っ青な空。空にはハトが無数に飛びまわっていた。だが、何かが違う。そのハトは生きて飛んでいるようだが実体がないようにうつすらとした体をしていた。

白い虚無空間。そんな言葉が思い浮かんだ。あの世とはこんなところのような感じだろうか。

自分自身にも実体がないような感覚で、ぼんやりと虚像のようなハトの飛び回っている空を見上げていると黒い女性が空から、いや突然現れて舞い降りてきた。

綺麗な女性だった。絹糸のような銀色の髪をツインテールにまとめていた。そして、どこか悲しそうな憂いを帯び透き通るような青い目をしていた。

その女性はふわりと、重力などないような軽やかさで地面に降り立った。

もしかしたら、この白い世界には本当に重力なんてものはないのかもしれない。もしくは、この女性はそんなものに束縛されない存在なのか。

まるで女神のような女性を呆然と見つめていると、先ほどの疑問が伝わったのか。くすり、と。その女性は口に指を当てて魅惑的な笑みを見せた。

そして、自分自身に変化が起こっていたことに気がつく。

先ほどまでは、ぼんやりとしか感じられなかった世界が急に、眠りから覚醒するときを感じるような感覚で世界を実感し始めていた。困惑しているといつの間にか目の前まで来ていた女性が、優しく微笑んだ。そして、魅惑的な笑みを浮かべたままその女性は言葉を発した。

「わたしは

」

それが全ての始まりだった。

第一章 テイルコネイルのミレンシア（前書き）

補足

人物紹介の部分がくどいかもかもしれません。より細かく説明を入れていきますので、そういう作風ですので、軽く流すかくどいのがお嫌いという場合はお読みになられない方が良くも致しません。

第一章 テイルコネイルのミレンシア

そこはエリンと呼ばれる世界。そして場所はテイルコネイルという村。

ウルラ大陸北西にある北に雪深いシドスネッター、南に伐採キャンプトウガルドアイルへの道を持つ山間の村である。坂道が多く、自給自足を行なうテイルコネイルの印象は小ぢんまりとした平穏という言葉を具現化したようなので小さな村。

最近は魔族が動物を魔符まふで凶暴化させる事件が各地で多く起きている。だが、まだまだテイルコネイルのような辺境の地にはあまり多くの凶暴化された動物はなく、平穏である。

「キヤインツ！」

一人の青年が剣の腹で見舞った一撃で、一匹のオオカミが殴り飛ばされて気絶した。

「Yr wyf yn gwella i chi, unleash (我は汝を癒し、解き放つ)」

呪文を唱えてマナを操り、オオカミを癒す。そして、オオカミの中から薄っすら暗い光を放つ魔符が浮かび上がった。

それを手に取るとオオカミは目を覚まし青年を見て怯え、森のほうへ逃げて行った。魔符からの光も消える。

「ふう」

一仕事を終え、青年は一息もらず

青年の名前はコウサカ。ただの人間ではなく異世界から現れた存在『ミレンシア』である。

年齢は十九歳。無駄のないがっしりとした筋肉質の身体で背は百八十四cm。短い藍色あいいろの髪をオールバックにしてまとめ、鋭く光ら

せている瞳の色は茶色。

アリツシユアシユビンアーマーという全身を覆う服のように上下に着られるチェインメイルにその上から肩まで覆う胸鎧、前腕から指を除いて覆うガントレット、膝まで包むグリーブ、口元以外を覆い隠す兜でその身を固めている。

ただこの世界に来たせい、元からなかったのか記憶がない。

ソウルストリームと呼ばれる異世界とエリンの狭間はざまにある世界より引導者ナオに導かれるままにティルコネイルへと降り立ち、コウサカは今現在ティルコネイルの自警団の団員として、またモンスターハンターとして生計を立てている。

自警団に入っているのはダンカン村長の厚意でそのほうが村の者とも自然と交流が生まれるからと、コウサカは下げた頭が上げられない思いである。

またダンカン村長より魔族により操られた動物から魔符を引き剥がす魔法を教えてもらってあるため、無駄な殺戮さつりくを行わずに魔符の回収を行なえる。

今日も日課である魔符によって凶暴化させられた動物「魔操獣まそうじゅう」と化した動物から魔符を回収していた。

魔操獣とは「魔族に操られた獣」の意である。操られたからと言って強くなっているわけではないが恐怖心というものが一切失せており、ただ無差別に殺戮を行なう。特に積極的に人間を襲うようになっていている。

「最近、増えたな」

誰にともなくコウサカは言う。

「ホントにねえ」。おかげであたしはボロボロよっ！ まったくっ！！」

と周りに誰もいないはずが少女の声が聞こえる。それはコウサカの握った刃渡り百五十cmほどもある大剣クレイモアから発せられていた。

「愚痴を言うな、朔絆。増えたものは仕方がない」
そうコウサカは全く驚く様子もなく、握った剣を背中の中の厚手の皮で作られた鞘に戻しながら話しかける。

精霊武器と呼ばれる武器に宿る精霊、朔絆。精霊石と呼ばれる希少なものをドルイドと呼ばれる魔法的に高度な技術を有する僧侶に契約してもらい以後、コウサカの相棒となった。

外見はせいぜい十三、十四で背が百四十四cmほどの少女であるが精霊の外見年齢など当てにならない。茶色と肌色を基調とした胸当てに、どこか鋭角的なデザインのスカートに身を包み、スカートの中が見えてもいのように黒いスパッツのようなものを穿いている。強気そうな深緋色の瞳、金茶色の肩を少し超える髪をちょこんとツインテールにまとめていた。ただ、その背には剣の羽があり、頭には複雑な紋様の刻まれた金属製であるう三角の形をしたものがまるで耳のように二つあった。ちなみに、本来の耳はある。スリーサイズはB75・W59・H78くらいである。

身体の大きさを自由に調整して剣の中から現れることが出来るらしく、実体化が三十cmほどの背丈で現れること、完全実体化を本来の背丈で現れることと言っている。

『まったく。ホント、どうなってんのよ』
「あとで食べ物やるから、機嫌を直せ」

コウサカは周りに敵意を感じないことを確認して、村へ向かう。
「ふむ。しかし、確かに最近の出没頻度は少し異常だな」

今日、魔符を剥がしたオオカミの数は十匹ほど。先月は一日でせいぜい多くて四匹がいいところだった。

コウサカにとって魔符は、主な収入源である。モンスターハンターもやってはいるが、ほとんど自警団としての仕事が多いためそちらでの収入は全くない。そもそも、ギルドがあるのはティルコネイルから遠く離れたダンバートンである。そうそう軽々いけるもので

はない。それは時間的な意味もあるが、いまは動けない別の理由もあつた。

(俺が離れたら自警団が厳しくなるだろうからな)

ティルコネイルの村には、だいたい八十人程度の人が住んでいる。それで自警団がコウサカも含め十五人程度。しかも、その中でまともにも正面きつて戦えるのは、トレボー、レイナルド先生、コウサカ程度だ。他は全くの素人と言つていい。

そしてそんな中、魔操獣が多くなってきてしまっている。

「俺としては、商売繁盛なのだが」

と、コウサカが小さく冗談がましく言つと。

「冗談じゃないわよっ!!」

そう怒鳴つた朔絆は、いまは剣から出て肩に乗れるくらいの大きさになってコウサカの目の前に浮かんでいる。

「毎回、毎回使われるあたしの身にもなつてよねっ!?!」

まあ分からないことはない、とコウサカは心中で苦笑する。生き血を浴びているわけではないにせよ、相手に力いっぱい叩きつけられるのだから。

「わかつた。今度からお前は使わない」

「え?」

朔絆がきよとん、とした。

「カイトシールドと、銀行に預けている剣でも引つ張り出すとする」
コウサカは、さも特に何も気にしていないように言う。

「あ、え、えつと……。あ、あたしね? 別にそんなにイヤじゃないんだよ? でも、やっぱり無駄に使われるのはイヤって言つるか」

と、さっきの威勢はどこへやら。朔絆はしどろもどろに、早口で言い募る。

「ふ、ふふ……」

コウサカは堪えきれずに吹き出した。

「あ……、あんだねえーっ!!」

からかわれていたのがわかって、朔絆は顔を真っ赤にしてコウサカの眼前に飛び出てくる。コウサカは足を止めた。

「はは。いや、すまない。つい何となくな」

「なんじゃそりゃーっ!!」

大激怒。付き合いの長いコウサカはこら辺が引き際であると判断する。

「まあ、もう少しお前を大事にすることにする」

手を伸ばして、指の腹で優しく朔絆の頭を撫でる。

「そうやって、いつつも誤魔化す」

そうは言いながらも朔絆は別段抵抗もせず、怒りのボルテージも急激に下がっていく。

「まあ、誤魔化しでもあるのは否定しない」

「あんたのそういう正直なところ、結構スキだわ」

いきなり、がつくりと肩を朔絆は落とした。

「そう落ち込むな。大事にするという部分も本心だ」

「えっ？」

顔を上げてまたきよとん、とする朔絆。

「あの程度の相手にお前を使うまでもない。今度からはカイトシルドと　バスタードソードでもあれば十分だ」

コウサカは指の腹でもう一度、朔絆の頭を撫でる。

「俺は朔絆、お前を単なる使い捨ての武器として見てはいない」

コウサカは真っ直ぐ、眼前にいる朔絆の目を見つめてそう言った。

「え、あ、あう……………。い、いきなり何いってんのよっ！　バ、バカあっ!!」

朔絆は顔を真っ赤にして、姿を消した。剣の中に戻ったのだろう。(…………こうして話して、触れて、笑っている女の子を単なる武器として見られるわけがないだろう)

一度、コウサカは空を見上げた。

(…………心は残っているのだろう)

そうコウサカは心の中で呟き、再び村を目指して歩き出す。

旅館。

「村長が？」

「ええ。ついさっき、こちらに來られて」

コウサカは自分が部屋を貸してもらっている旅館に帰ってきて、すぐに旅館の主人から村長の伝言を聞いた。

「ふむ。わかりました。わざわざ感謝でした」

「いえいえ。では、いつてらっしゃい」

帰ってきてすぐに鎧姿のまま旅館を後にする。

村長の家。

「ダンカン村長」

「おお、コウサカ。よく来てくれた」

コウサカが村長の家に入ると、ロッキングチェアに腰掛けていた村長が立ち上がって出迎えてくれた。

ダンカン村長は百七十cmほどの背に顎には白くなつた髭を蓄え、背にかかるときの白髪に、茶色の瞳の高齡であるが背の真つ直ぐ伸びた御仁である。若かりし頃は弓の名手として知られ、過去に人間と魔族の争つた第二次モイトウラ戦争にも参加した古強者である。だが今はテイルコネイルの村長として村人に慕われながら、悠々自適な隠居生活を送っている。

「ああ、そのまま構いません」

「いや、ちよつと付き合つてほしいことがあつてね」

そう言つて村長は、出入り口まで上がってくる。

「？ なんです、一体」

「まあ、とりあえずついて來なさい」

「ふむ。わかりました」

そう言った村長が歩き出したので、コウサカもそれに続いて歩き出す。

「何か問題が？」

「問題と言えば、問題だね」

村長の顔が曇った。

「そんなに深刻なんですか？」

「いや、一概いちがいにそうとも言切れないのだが」

「要領を得ないですね。何なのです？」

「いや、とりあえず来てくれ。話はそれからしよう」

釈然しやくぜんとしなかったが、コウサカはやはり見た方が早いと村長に続いた。

聖堂。

「お邪魔するよ」

「あら、ダンカンさん。それにコウサカさんまで？」

聖堂の中に入ると、背の中ほどまでかかる黒髪に茶色の瞳をして女性用の司祭服に身を包んだエンデリオン司祭が二人を出迎えた。

エンデリオン司祭はティルコネイルの聖堂の女性司祭である。優しく、美しく、また気遣いも出来る。故に村で人気の司祭である。いつも優しく微笑んでいて、そして本当に心から優しい女性である。背は百六十cmほどでスリーサイズはB82・W57・H83くらいである。

「あの子の様子はどうかね？」

「ああ、それでコウサカさんを連れて来られたのですね」

「どういうことですか？」

二人は事情を知っているようだが、コウサカには全く事情がわか

らない。

「こつちに来なさい」

そう言って村長は聖堂の中にある一室へ入っていく。コウサカがエンデリオン司祭の方を見ると、頷かれたので村長に続いて部屋に入る。

「コウサカ。この娘を見て、どう思うかね？」

村長がそう言って示した方を見ると、一人の見知らぬ少女がベッドの上に寝かされていた。

セミロングの触り心地の良さそうなサラサラとした金色の髪をした少女で、白いポポワンピースがよく似合っている。

「知らない子ですが、迷子か何かですか？」

コウサカがそう言った途端、村長は溜息を吐いた。

「そうではない。この子から何か感じるものはないかね？」

「感じるもの？」

そう言われて、コウサカは改めて安らかに眠っている少女をまじまじと観察する。すると、村長やエンデリオン司祭たちとは全く異質な気配を感じ取った。

「この子、ミレンシアですか」

「やはり、そうなのか」

村長が目を瞑って唸った。

「ナオからは何も？」

コウサカはソウルストリームの引導者の名前を口にする。

「いや、送り届けてきたのはナオだね。しかし、困惑していたな」

「ふむ」

「ということとは全く予想外のことだったのだろう、とコウサカは考える。」

ミレンシアとはどこか異世界よりソウルストリームを通じてエリオンに降り立った者のことを指し示すが、それはその者自身の意思で来るわけではない。前にいた世界のころを全て忘れソウルストリームにいるのである。または召喚される場合もある。ナオはそれを感じ

じ取ってだいたい来ることが分かると言っのだが、今回はそれが一切なかったということになる。

「とりあえず、俺ではわかりません。様子を見ましよう」

「やはり、同じだからと言って何かが分かるわけではなかったか

」

「残念ながらそのようです。俺もミレンシアに会ったのは初めてですが」

口にはしないが、もしかしたら魔族の活動が活発になっていることにも何か関係あるかもしれない。

(これは、何か起こるかもしれない)

コウサカは何となく、そんな悪い予感を感じ取った。

「では、村長。俺は失礼しますよ。魔操獣の数も増えてきているので、レイナルド先生と相談して守りを堅くしてきます」

「お、おお。わかった。すまないね」

「お気になさらずに。俺がやるのが一番でしょうから」

そう言っコウサカは少女の眠っている部屋を後にする。

「あら、おかえりですか？」

堂内で何か仕事をしていたエンデリオン司祭がコウサカに気付いて、近寄って行った。

「ええ。少し村の防備を堅くしようと」

堅くすると言っても限界はあるが、とコウサカは心中で付け足しながらそう言った。

「あまり無理し過ぎないくださいね。あなたを心配する人も大勢いるのですから」

「俺が一番強いのですから、それ相応に働かないと。他が危険なことも、俺には大したことない」

「そうやっていつも無理をするんですね」

エンデリオン司祭に悲しそうな表情が見て取れる。

「エンデリオン司祭はお優しいですね。だからこそ、こちらも命を張って守る気になるというものです」

「 エンデリオン司祭は何かを堪えるように俯いた。コウサカとエンデリオン司祭はよくこの問答をしている。暖簾のれんに腕押しではあるが、だからコウサカはここら辺が引き際だと判断をする。

「では、俺はこれで」

コウサカは多少、後ろ髪を引かれながらも聖堂を後にする。

「 神よ、どうかコウサカさんをお守りください。お願い、します」

一人。それは司祭ではなく、少女のような顔で表情を曇らせたエンデリオン司祭が閉まる扉を見つめていた。

『 あんたつてさ、ホントにバカだよねえ』

「 いきなり何だ？」

落ちて着いたのか、また軽口を叩きに朔絆が出てきた。

『 ミレンシアつてのを抜いても、かなりすごい奴なんだけどなあ』

人生経験がまだまだ

「 お前には言われたくはないな」

コウサカとしては知識をくれと言って毎回毎回、物を強請ねだられている身としてそれだけは言いたかった。

『 なんか心の中で余計なこと言った？』

「 いや別に」

朔絆は契約のせいかどうか分からないが、たまにコウサカの心を讀んだようなことを言う。

『 まあ、鈍感だから誰にもなびかないからいいけどさ』

「 ？ 何だそれは」

『 な、なんでもないっ！ ないっ！！』

「 最近のお前は何か面白いな」

すぐに赤くなってあたふたするところとか。言ったら確実に怒るからコウサカは口にしないが。

「まあ、何故鈍感なのかはよくわからないが、いまは強さだけで十分だ」

いまコウサカが必要としているのは、全てを守り切れるだけの力である。

「強くなければ、守れない」

それはどんな世界。時間。場所。全てにおいて変わらない。

『あんまり 気負い過ぎても失敗するよ』

「わかっている。その程度の初歩を忘れはしない」

コウサカは自分を英雄だ、特別だとくだらない勘違いはしていない。

「だが、いまは俺しかない」

ただ、この村を守りきれぬ最も有力な力として自分の持てる力を行使しようとしているだけである。

ティルコネイルの学校。

「足が狭いつ！ もっと開いて、地面に踏ん張って力を込めろつ！

！ そこおつ！ 気合が足りん、気合がっ！！ 声を出せいつ！！」

学校は聖堂のある丘を下ったところであり、まだ聖堂から結構距離があるがコウサカの耳にはレイナルド先生の怒声が聞こえてきた。

レイナルド先生は百七十七cmほどの背で藍鉄色あいてついろの背中にかかる髪を後ろで縛り、力強い濃藍色こいあいろの瞳をした中年の中ほどの男性である。自警団の一員としても活動しているが、その戦闘における知識と技術を学校の先生として、ティルコネイルの学校で剣術や体術を教えている。戦うことの意味、強くなるとはどういうことかということも同時に教えている。勇敢な戦士として数々の噂を持つ。

「やっていますね、先生」

生徒　　と言つても成人男子から子供までいるのだが
前で声を張り上げていた先生に、コウサカは声をかける。

「ああ、コウサカか。よく来たな。各自、自由っ！」

先生がそう言つても皆、木刀を振るうのを止めない。皆、大事な
もの、人がいるのだ。そして、自分達が弱いことをよく自覚してい
る。だからこそ、いまこの瞬間に一生懸命に少しはマシになろうと
頑張っている。

「　　将来有望ですね」

「まだまだ心意気だけだな」

そう厳しく評価する先生の顔は、しかし嬉しそつだった。

「先生。少し村の防備のことで相談したいことが」

「わかつた。中で話そう。茶くらいは出すぞ」

「わかりました」

二人は平建ての校舎にある教室に入る。本当に習うための設備し
かないため、客間などはない。

「ちよつと待つている」

「お構いなく」

そう言つて先生は、校舎に併設へいせつしている自宅へと向かつた。

「そこまで時間が経つたわけではないが、懐かしいものだな」

コウサカは少し老化した校舎と少し痛んだ椅子と机、使い込まれ
て白く汚れた黒板しかない味気のない教室を見回す。コウサカがこ
こで習つたのは六カ月ほど前で、たつた一週間ほどで一通りのこと
をクリアして自警団へ入団したが、すでにここで習っていた者達と
一緒に励んだことを思い出し束の間の感慨かんがいに耽ふけつた。

「あ、コウサカじゃん。ご無沙汰ぶさた〜！」

コウサカが感慨に耽ふけっているとラサ先生に発見されてしまった。

ラサ先生は百六十四cmのほどの背で紅赤色べにあかいのウエーブのかかつた
背中の中ほどの長さの髪に、少しイタズラっぽい赤銅色しゃくどういろの瞳をし
ている。

魔法の素質に恵まれ、湖畔都市イメンハマで魔法を学んできた女性である。またティルコネイルの学校で魔法も教えている。実用的な魔法を丁寧に分かりやすく教えてくれるため、彼女を訪れる生徒は尽きることが無い。そのはずなのだが、コウサカにとっては授業中によくいじられたため、人をからかうのが大好きな人物でもあると認識されている。ちなみに酒癖が悪い。

スリーサイズはB84・W59・H82くらいである。

「なに？　なんか不満でも？」

「いえ、別に」

この人に正論を言っても利かないことはよく理解しているので、コウサカは特に何も言わない。授業なのか、いじられたのかよくわからない魔法についての講義を受けさせられたのをよく覚えているからである。

「もお、相変わらず釣れないなあー」

そう言ってラサ先生は、コウサカの後ろから腕を回して、抱き着いた。コウサカは鎧姿であるから、何も感触は伝わって来ないため一切効果がない。鎧が無くても利かないが、コウサカには。

「むうー　鎧とはひきょうな〜」

「意味がわかりませんが」

「だったら、そりゃっ！」

ラサ先生は勝手にコウサカの兜を取った。おまけに頬ずりをした。「うりうり〜、いい匂いでしょ〜」

得意げに頬ずりをされるコウサカだが、しかし。

「　　はあ」

「なんで溜息っ!？」

もうコウサカは散々やられているので、慣れてしまっている。もはや、鈍感とかそんなレベルではない。

コウサカは誰かに好意を抱いたり、異性との接触で緊張したりと、そういうことがその感情部分だけが欠落しているのではないかと思

えるほど異常に反応しない。ただ無愛想ではあるが、基本的に親切でお人良しだったりするので感情がないというわけでもない。

「そういうのはもっと純情なやつにやっつけてください」

「つまんなーい。コウサカ、つまんなーいっ！」

「つまらなくて結構です」

コウサカはこれで本当に年上かと思いつながら、ふと思う。

「そういう先生は変わりませんね」

「そりゃそうよー。変わる必要ないんだもん」

「なるほど」

コウサカはこういうことをさらっと言って仕舞えるあたり、そこは羨ましい（あつひ）と思った。

「ねえ、コウサカ」

急にラサ先生は真剣な声色になった。

「なんですか。珍しい声色使って」

少し間をおいて、珍しくどもりながら口を開く。

「あ、あのね」

「なにをしているんですか、ラサ先生」

「っ！」

面白いタイミングでレイナルド先生が戻ってきた。

「やれやれ。相変わらず、コウサカに絡んでいるのですか」

そう言っつ溜息ひとつ。その辺にあった椅子と机を引っ張ってきてコウサカの対面に座る。そして、持ってきたポットからカップに茶を注ぐ。とうもろこし茶である。

ティルコネイルは山間の村だが、この村のあるここだけがちょうどぼっかりと開いた平地も多く、日当たりもよく、奥にはシドスネッターがあるわりには温暖である。ゆえに、とうもろこしも少し小振りではあるが育成も可能なのである。

「な、なんですか！ いいじゃありませんかっ！ わたしの楽しみのひとつなんですからっ！」

コウサカは傍迷惑（はためいわく）な、と思ったが口には出さなかった。余計に面

倒なことになるのがわかっていったからである。

「先生。とりあえず、離れてください。話の邪魔です」

「もぉー」

コウサカが身体に回してきているラサ先生の腕を軽く叩くと、素直に離してくれた。コウサカは心底レイナルド先生がいて助かったと思った。

「それで、今度はどんな問題だ？」

すでに、とうもろこし茶を一口つけたレイナルド先生が事が落ちていたと判断したか、話を促した。^{しんが}ラサ先生も椅子に座った。

「魔操獣の数がこのところ激増しています」

「ほう」

レイナルド先生の目が鋭く細まった。反対にラサ先生の顔色が変わる。

「先月は一日だいたい多くても五、六匹がいいところだったのが、今日は十匹以上いました」

「やれやれ……。まだ新人どもの教育が終わっていないのだがな」

「まだ俺だけで十分持たせられるので、時間はあります。ただ夜は少し怖いかもかもしれません」

「そうか。夜の見回りを増やした方がいいな。新人共も知らせ役程度なら出来るだろう」

「そうですね。俺ももう少し巡回時間を増やしますよ」

ティルコネイルには、アデア川という小川^{おがわ}を挟んで村側と南の平原から続く東の道に木の板を使って銃眼付きの防護壁を作っている。板の厚みは一cmほどのものを二枚合わせて立ててあり、高さが一mほどのものをつなぎ合わせて二・五mを超えるほどの高さ。勿論、簡単には折れない、倒れないように細工も施してある。

「ち、ちよつと待ってっ！」

ラサ先生が慌てたような声を上げた。

「なんです？」

「コウサカ、大丈夫なの？」

不安そうなの、それでいて心底心配そうな顔でラサ先生が詰め寄ってくる。

「どつという意味ですか？」

「君、いつつも無理するから」

コウサカは自分が強いことをよく知っている故に、周りから見ると明らかにオーバークークと見えるほどのことをよく行なっている。本人としては無理という程の負担にならなくとも。ラサ先生もそれをよく見てきているため、心配なのである。

「いまは余裕です。しかし、今後はわからない。そんな状況です」
「今後つて」

「もしかしたら、ひと嵐が来るかもしれない。そういうことです」
コウサカはとうもろこし茶を一口飲む。コウサカの口内にとつてもろこしの香ばしい香りが広がった。

「なんで」
「ズズ」

キツと顔を上げたラサ先生の顔には怒りのような不安のような、そんなものが入り混じったものが浮かんでいた。

「なんで、そんなに他人事みたいにしてられるのっ」
それは怒声、というよりは悲鳴のような声だった。

「慌てても仕方ありません。いまのところは間引きを続けるくらいしか手がない」

「死ぬかもしれないのに」

「守りきって死ねるなら本望です」

ラサ先生の言葉を遮って、コウサカは言葉を口にする。その声はあまりにも達観たつかんとしていた。

「俺はいま出来ることをするだけです。それ以外、出来ることもないので」

そう言っつてコウサカはもう一口、とうもろこし茶を飲む。

「……バカっ!!!」

とうもろこし茶の香りが広がった教室から、ラサ先生は走り出て

行った。たぶん泣きながら。

「 全く。あれで年上だと言うのは無理があるでしょうに」

「 もう少し 言い方があったと思うがな」

一部始終を見ていたレイナルド先生から、コウサカは嗜められた。「いいんですよ。それにほとんどは事実です」

その言葉にとうもろこし茶の入ったカップを口に運んでいたレイナルド先生の手が止まった。

「お前がいても、キツイのか？」

「恐らくは。だんだんと多くの動物を使役できる力をつけてきているのだと思いますよ、魔符を使っている魔族も」

その生き物の全てをコントロールするには、多大な精神力と魔符が必要である。魔符はまだ簡単に作れるとしても、一度に多くを使役するための精神力は早々つけられるものではない。もし失敗したら、使役した動物たちの思考と憎悪に飲まれて、精神崩壊を起こしかねない。

「 こういう場合は元凶を叩くのが一番ですが、如何せん。その元凶がどこにいるか全くわからない。ですが」

「 考えはあるのか」

「 たぶん、圧倒的な戦力を整えたらそいつも一緒に攻めに来ると思いますよ。こういう姑息な手を使う輩は、自分の成し得る結果を見に来たがるものです」

それについては、ほとんどコウサカの勘ではあるが。

「 つまり、いまは待つだけか」

「 その通りです」

またコウサカは、とうもろこし茶を一口。

「 新人の育成をお願いします。せめて、弓をしっかりと引けるレベルで構いません」

「 俺を見くびるな。それよりはずっとマシにしてやる」

とうもろこし茶を飲み干して見せたレイナルド先生の顔は、挑戦的に笑っていた。

「お願いします」

コウサカはとうもろこし茶を飲み干して、取られた兜を脇に抱えて席を立つ。

「任せておけ」

コウサカは虚勢ではなく、本気でそう言える先生を心から尊敬できると思った。

ティルコネイル北、鎮守の森。

ティルコネイルには村長の家のある小高い丘から少し上がったところに墓場がある。鎮守の森はそのさらに奥にあり、その更に奥には、過去の大戦時に山自体をくり抜いて作られた大要塞・大迷宮の地下要塞ラフが存在する。いまはアルビダンジョンと呼ばれているそこは、魔族や野生動物たちの巣窟そくくつと化している。ある仕掛けで入り口は封じてあるため、そこから何かが這い出て村に危害をもたらすことはない。

鎮守の森には、大きな朽ち果てた巨木がある。村人たちは、その木を「神の木」と呼んでいる。

その由来は、その巨木を護って住み着いているクモたちにある。以前、アルビダクモたちの魔符が消し飛んだと言う。さらに、クモたちを率いていた赤いクモは人語を解せるようになり、テレパシィで対話も行なえるようになったという。

「全くどんな仕掛けなんだか」

「あたしに聞かれてもわかんないよ」

「独り言だ。気にするな」

鎮守の森に住み着いているクモたちは、とにかく巨大である。ボスの赤いクモは成人男子ほどもある。クモ嫌いの人間にとってはまさに地獄のような場所だろう。

巨大ゆえにクモの巣を張ることは出来なくなってしまっているが、上質の糸が取れるため村人はよくここへ来て糸の採取を行なってい

る。その礼として村人は食料の提供や住処作りの手伝いを行なっているため、村とは共同体のような関係にある。

このクモ達もまた、ティルコネイルの守り手を担っている。

「朔絆、お前も精霊であるならあの木から何か感じないか？」

コウサカは実体化して肩に乗って足をぶらぶらさせている朔絆に聞いてみる。

『も、つてところが気になるけど。あたしは何も感じないよ？』

「ふむ」

コウサカも木には神が宿ると聞くことはある。だがそれは果てしない年月を生き、生命を感じさせる大木であるならである。朽ち果てて葉の一枚も残っていない枯れ木に神が宿るなど聞いたことが無い。

『あんま気にしても仕方ないと思うよ？ あの木が何で不思議なんだ、つて考え始めると限がないよ』

「哲学に果ては無い、か」

確かにその通りだとコウサカは思う。何で、何でと考えていてはどれだけ時間があっても足りはしない。

「それもそうだな。不思議なもの不思議だ」

『あいつかわらず、切り替えはやっ』

朔絆が呆れて溜息をついているがコウサカは気にせず、過去の大战やこの村で亡くなっていった人々の眠る墓地を過ぎて、鎮守の森へと向かう。

コウサカが白クモ達がかかさ、わさわさして村の人達が糸を分けてもらっている中を過ぎていくと「神の木」が見えた。何故かこの木の周りだけ木々が避けているように少し開けた空間が広がっている。「神の木」のすぐには目立つ赤い色をした巨大なクモが一匹いた。

「ボス」

コウサカが声をかけると赤いクモが振り向き、いやその場で旋回

してこちらに向き直った。

《 貴様力 》

ボス。モンスター間には、もしくはクモの社会には名前をつける習慣や必要がないのか、名前のない赤いボスクモ。

人語を解し、村とのパイプ役も勤めていて、一族と共に「神の木」を守っている。性格は鉄板のような真面目。

伝わってくる言葉が微妙におかしいのは、人間とモンスターでは波長が完全一致しないからだとか。

ボスに表情はないが、コウサカには嫌々というような感情が伝わってきた。

「ご挨拶だな」

何故かは知らないが、コウサカはボスにひどく嫌われている。人間が嫌いというわけではなく、ただ単にコウサカ個人が気に入らないだけらしいが。

《 何のヨウだ 》

このボスには冗談や軽口が一切通じないため、コウサカはすぐに本題を話す。

「最近、オオカミの数が増えてきている。そっちはどうだ？」

《 同じだ 》

今度はコウサカに真剣な感情が伝わってきた。そういえば、とコウサカは通ってきた中で見たクモ達の中で成人、というか成体の白クモ達の数がいつもより少しだけ少ない気がした。

「恐らくだが、ひと嵐来ることになるだろう。村に防備を堅めるのを手伝ってもらえないか？」

《 いいダるウ 》

「ずいぶんとあっさりだな」

《 》

ボスは森の中で遊んでいる人間の子供達と、白クモをちらりと見

た。

《貴様八きらいだが》

「はつきりだな」

《子供が笑っていらしめる世界は守りたい》

「そうだな」

このボスも、このクモたちの長なのだ。未来が何を意味するのかよくわかっている。

「なら、頼んだ。俺はもう少し巡回を行なう」

《村長や村ノ者には、世話二なつている。任せろ》

単なる実力社会だと思っていたが動物、いやモンスターの世界にも長の資格というものがあるようだ、とそうコウサカは思った。

コウサカは踵かかとを返すと、村中心部へと足を向けた。

第一章 テイルコネイルのミレンシア（後書き）

ちよつと余談を。

朔絆とは筆者の創作漢字であります。朔は、陰暦で月のはじまりを意味し、絆はそのまま。このふたつで「はじまりのきずな」という意味で、両漢字の頭を取って「朔絆」です。実際にはないので、勘違いなさいませんよう。

第二章 変わらないはずだった日常（前書き）

『補足』

本文中で出てくるギルド『ダンブレテン』は現実に存在するイギリス、スコットランド中西部の工業都市ダンバートン（Dumblarton）がある地名のダンブレテンより取らせて頂きました。この地名はゲール語のDunbreatain（「ブリトンの要塞都市」の意）に由来致します。

第二章 変わらないはずだった日常

食料品店。

腹が減っては、戦は出来ぬ。その言葉の通り、いくらミレンシアであるコウサカとてスタミナが無尽蔵にあるわけではない。腹は空しくし、常人よりは遙かに少ない時間とはいえ、睡眠も必要である。

「ケイティンさん、腹が減った」

それがコウサカの店に入って開口一番の言葉。

「あんた、バツカだよねえ」

朔絆トクが何か言うがコウサカは無視した。

「くすくす。あらあら、ちよつと待っていてくださいね」

昼食の時間も過ぎて、ガラガラの店内で店番をしていたケイティンは笑いながら店に並べられていた食品をいくつか手に取って奥に引込む。軽く料理をしに向かったのだ。

ケイティンは母と二人で食料品店を経営する女性で、素朴な味わいが人気のポポスカートというロングスカートの上にエプロン姿がトレードマークの食料品店の看板娘である。また病気で床の伏せっている祖母をいつも案じている優しい女性でもある。店の食品を使つてその場で軽い軽食も作っており、その場で食べられるように店内には小さな卓と椅子を置いている。最近、少し体重が気になる様子。

スリーサイズはB83・W69・H90くらいである。

「ねー、あたしのゴハンはー？」

「コウサカは黙って、店の隅に置いてある収納箱を指し示す。ケイティンの厚意で、朔絆の食料もここにおいてあるのだ。食料というか、武器や道具類が。置く量は少量に止めて邪魔にならないように

している。

「その箱から勝手に取って、食べている」

『わ〜いつ』

朔絆は声と同時に完全実体化を行なって、店の隅に置いてある木製の収納箱に向かって行って物色を始めた。

「やれやれ。いつもは自分で子供扱いするなと言うものを」

コウサカには、元気な女の子が無邪気に収納箱を漁っているようにしか見えない。

「まあ、あれがなければ、だが」

背中から羽のように生えている剣と頭の飾りのようなものがなければ、本当に普通の少女と変わらない。

「ふう」

コウサカはクレイモアとカイトシールドを壁に立て掛け、店内においてある小さな卓に向かって行き、椅子を引き寄せ腰かける。

と、コウサカの鼻孔が何かを焼く香ばしい匂いを感じた。厚意であり商売で行なってもらっていることではあるが、コウサカは毎度申し訳なくなる。

『〜』

コウサカが妙にご機嫌な鼻歌がしてくる方を見ると、朔絆が両手いっぱい食べ物（鎌や短剣、パズルキューブなど）を持って来て、コウサカの隣に座った。

「怪我するなよ」

『剣の精霊にする心配じゃないって、それ』

コウサカもそれはわかってはいるのだが、言わずには居られないのは性分せいぶんだろうか。

『いったただつきま〜すっ』

「」

コウサカは暇つぶしに幸せそうに食べ物（無機物）を口に運ぶ朔絆を観察してみる。

武器の精霊たる朔絆が食べるのは武器や雑貨、農具などそう言っ

たものである。精霊が道具や武器などを食べる時にバリバキ、ボキとそんな音がするわけではない。その物体の構成分子を分解させて吸収しているとか何とか。とりあえず、口に入れたところで入れた部分が消失して、光の粒子となったそれを吸収している。という程度の理解しかない。

「お待たせしました」

「いつも申し訳ない」

幸せそうに、たぶんわざと美味そうに食べる朔絆を見ていて、コウサカもいよいよ本当に空腹になってきた頃、ケイティンが軽食を持って戻ってきた。

「大丈夫ですよ。こういう売り方もしていますからね」

「しかし、これだけしてもらって、この価格というのは」

ほとんど材料代程度である。その場で調理を行なって売っていると言っても、ここ価格では採算が取れないだろう。

「あなたは、自警団としてこの村を守ってくれていますから。このくらいは当たり前ですよっ！」

「他の奴等もいます」

コウサカは他の奴等から、こんなサービスをしてくれるとは聞いたことがない。

「あなたは特に頑張ってくれていますから。特別です」

「ふむ」

コウサカは特別扱いが嫌いな性格だが、せつかくの厚意を無下にするのも忍びないと思う。

「あ、そんなことより暖かいうちに食べてしまってくださいね？」

「有難く頂きます」

まあ、厚意は素直に受け取っておくもの。恩着せでもないのだから理由もない、とコウサカは半分無理やり納得した。

作ってきた軽食と水の入ったコップを卓の上に置いて、ケイティンも座った。

「今日は溶けたチーズを乗せたベーコンエッグを野菜とパンで挟ん

「でみました」

「美味しいです」

簡単な軽食だがやはり出来たては美味しい、とコウサカは思う。そして、わざわざ簡単にでも料理をしてくれるケイティンに感謝だ、とも。

「ふふ」

「？ なんですか」

先ほどから、食べるコウサカを微笑みながらケイティンが見つめている。

「いえ、なんかいいなあ。って」

「なんのことです？」

ガツガツと食べながらコウサカが聞く。

『どなか〜ん』

同じくガツガツと食べていた朔絆が、いきなり横からコウサカに呆れたように言う。

「なんだ？」

『べつつに〜』

と、何故か朔絆はふてくされた感じで返事を返した。

「朔絆ちゃんも、相変わらずねえ」

そう言っつて朔絆の頭を撫でようとケイティンは手を伸ばした。

『気安く触んなっ！』

と、朔絆は伸びてきた手を払い除けた。

「あらあら」

そんな朔絆の行為にも、ケイティンは笑って見ている。

「おい、朔絆」

さすがにコウサカも見かねて諫めようとするが。

「いいんですよ。ふふ」

「む。しかし」

「い・い・ん・で・す」

「ふむ」

コウサカもこう言われては引き下がるしかないが、朔絆にはあとで注意しておこうと心に誓った。

『ふんっ！』

朔絆は残った食べ物（鉄の残骸）を口に放り込んで、剣に戻ってしまった。

「はあ。すみません」

「いいんですよ。ムキになって可愛いですから」

「なんですか、それは？」

「あなたには、たぶん言ってもわからないと思いますよ？」

コウサカは、ケイティンの悪戯っぽく笑っている表情を見て、聞き出すのを諦めた。

「ご馳走様です」

「はい、お粗末さまです」

コウサカは最後に水を飲み干して席を立つ。と、手がベタベタになってしまっていることに気付いてカバンから手ぬぐいを引っ張り出そうとするが、ケイティンがそれを制止させる。

「これ、使ってください」

そう言っケイティンがコウサカに水で湿らせた手ぬぐいを渡した。

「何から何まで、本当に感謝です」

「いえいえ。ふふ」

コウサカは手ぬぐいを使って、手を拭う。

「では、俺は巡回に戻ります」

コウサカは金貨袋から代金を取り出し、卓の上に置く。

「はい、いってらっしゃい。お腹が空いたらまたいつでも来てくださいね？」

「感謝です」

コウサカは悪戯っぽい笑みを浮かべたままのケイティンにお礼を述べてから、装備を持って店から出る。

「無理　　しないだね」

残ったケイティンは、不安そうな表情を浮かべて小さくそう言った。

「おい、朔絆」

「まだ不貞腐ふてくされているのか、朔絆は返事すらししない。」

「おいつて」

もう一度、声をかけるがやはり返事はない。

「やれやれ」

これはしばらく放っておいた方がいい、とコウサカは判断して構わないことにした。

「さて、巡回するにしても装備を出しておくか」

小さく呟くとコウサカは食料品店を出たそのまま、同じく村の広場にある銀行へ向かう。

広場では、村の中心部にある巨木に登ったり、駆け回ったりと遊んでいる子供達とそれを見守りながら談笑に興じる母親たちがいた。

と、一人の男の子がコウサカに気付いた。

「あー、コウにいだっ！」

そう言いながら嬉しげにコウサカに飛びついてきた。

「今日も元気だな」

コウサカがその子供の頭に手を乗せていると、その声に気がついた他の子供達も我も我もと駆け寄ってきた。

「って、おいおい」

好かれて飛びつかれるのはコウサカも問題ないが、何人も飛びついてくるわ、登って兜は捕まれるわ、さらに蹴られるわでコウサカも対処が出来ない。約百八十cm以上の背丈のコウサカは登り甲斐がいがあるだろう。

「親御おやぢさん、どうにかしてくれ」

そうコウサカが助けを求めるとその光景を微笑みながら見ていた母親たちが、しょうがないわねえ、と笑いながら子供を回収していた。だが、引っ付いて離れない子供もいた。

「ほらほら、あんまりコウサカさんを困らせては駄目よ」

「いやーだーっ！」

これが一人ではないから、余計にコウサカは困る。

「俺はこれから、巡回に出ないといけないんだって」

「あそぶーっ！」

「コウにい、あそんでーっ！」

「やっぱり、ボクモーっ！」

と、わいわいとまた戻ってくる始末。

「だから、忙しいと」

割と本気でコウサカは言っているが全く効き目はない。

「いい加減、回収してくれっ」

そうコウサカは母親たちに言ってみるが、今度は面白そうに微笑みを返されただけだった。

コウサカは、村人達から鎧姿と類稀たぐいまれな戦闘力から尊敬と畏敬の対象として見られている。だが本人は別として、それを含めても村の全員が良い人だと認めて好かれている。しっかりとした気遣いも出来、子供の面倒見も良いため、強くて怖い人と言うよりは、良いお兄さんと認識している者がほとんどである。

「っと、おい飛びつくな。倒れたら背中にいるやつが危な

蹴るな」

だから、コウサカが身体をよじ登れられたり、メチャクチャにされて困っていたとしても。

「あらあら。あんなに懐いちゃって」

「普段はあんなにクールなのに、子供たちには敵わないのねえ。可愛いわあ、うふふ」

「うちの子なんて、コウサカくんと遊んだ日にはずっと同じことばかり話すのよ？」

「うちの子は、コウサカさんのお嫁さんになるんだー。って、うふふ」

「何っ！？ コウサカ、娘はやらんぞっ!?!」

「あーあー、私ももう少し若かったらなあ」

「なにいつ　！？　てめえっ、コウサカっ!」

「子供に好かれてるってことが、一番その人がどんな人物か表しているよなー」

「じゃなあ。全くこんな将来有望な若者が村にいて嬉しいことじゃて」

「ジイさん、それ死亡フラグっばいぞ」

「なんじゃとっ!?!　わしゃまだまだまだ現役じゃいつ!」

「そんだけ元気がありゃ、まだまだだな」

「「「「あははは」」」」

「いい加減、助けてくれ!」

と。こんな状態で、わいわい村の人が集まってきたてしまう始末。母親や村の年長の子供達が小さい子供達を回収していつの間にか集まってきた村人達が解散したのは、ここから数十分後のことだった。

「はああ　。　なんで、ただ銀行に行くだけだったはずがこんなに疲れているんだ」

普段は冷静なコウサカも子供達には敵わない。今は広場にある腰掛けのひとつに腰を下ろしてげっそりしている。コウサカをポロポロにして満足した子供たちは、まだまだ元気に広場で遊んでいる。

『　　バツカじゃない』

「よつやく機嫌を直したか、我がまま娘」

剣から出ては来なかったが、朔絆がよつやく口を開いた。

「今回はどうした?」

『　別に。何でもないもん』

この場合は、深く突っ込まない方が賢明かと、コウサカは思う
「まあ、言いたくないならいい」

「バカ」

拗ねたような声で返事をした。

「さて、銀行で装備を出してくるか」

コウサカが立ち上がりながら別の装備のことを口にする、背中のクレイモアの光が戸惑ったように一瞬大きく波打った。

「安心しろ。お前は俺の唯一無二の相棒だ」

「何も 言っていないもん」

言葉とは裏腹にその声には安堵したような、それでいて泣きそうな感情が混じっていた。

「それは、すまない」

謝っている割には、コウサカの口は少し笑っていた。

「邪魔するぞ」

コウサカが銀行の扉を押し開けて入ると、カウンターで暇そうな顔していた少女の顔が華やいだ。

「あ、コウじゃんっ！」

「相変わらず、暇そうな顔で商売をやっているな。ベビン」

ベビン。十七、十八歳の少女で、珊瑚色の背中に届くストレートの髪に薄花桜色の瞳をしたティルコネイルにあるアスティン銀行支店を受け持っている少女である。持ち前の記憶力の良さで銀行業務をこなしつつ、噂話の収拾も忘れない。明瞭活発な性格で仕事もしっかり行なうのだが、いつも暇そうにカウンターに頬杖を着いている。

スリーサイズはB80・W58・H83くらいである。

「だって、人なんて来ないもん」

「まあ、それはそうだろうな」

ティルコネイルは辺境の山間の村である。そして、ほとんどの家

は自給自足である。故にダンバートンから来る隊商たいしやうと村の農産物やクモの糸などを取引するとき以外は、外貨の流入はなく、金銭は特に増えず減らずに村の中で動くだけである。

だから、銀行には村の金をまとめて預けることはあっても、個人が銀行に預金をしに来ることはほぼないのである。

「楽しんでお金もらえるのはいいけど、ヒマすぎい〜」

ベビンはカウンターに疲れたように突っ伏した。

「本当に何故、ティルコネイルにまで支店を出そうとしたんだろうな」

「ほんとにね〜」

そう頭を捻ひねっていたが、コウサカは当初の目的を思い出した。

「ああ、そつだ。忘れていたが、ベビン」

「ん、何？ あ、もしかしてデートのお誘いっ!？」

ベビンは見当違いな答えを口に出しながら目を輝かせる。しかし、何の逡巡しゆしゆもなくコウサカは返す。

「いや、違うが」

「うーわー、即答だよ。ベビンちゃん傷ついた〜」

「なに、なんのことだ？」

その限りない鈍感に対して、ベビンと元に戻った相棒は。

「コウのバ〜カ」

「バーカ」

ベビンは明らかに傷ついたとは思えない意地の悪い笑い方をして、朔絆は完全実体化をしてベビンの横で楽しげな笑みを浮かべコウサカを罵ののった。

「はあ、やれやれ。ドウモスミマセンデシタ」

「わ〜い、勝った〜」

「鈍感バカに勝った〜」

そう言っ二人でハイタッチをしている始末。この二人は妙に仲が良い。いつもコウサカと朔絆は一緒にいるため、ベビンが秘密の話が出来なくてよく残念がっている。

「　　はあ。ベビン装備を出してくれ」

もう面倒になり、溜息をつきながらコウサカは勝った、勝ったとはしゃいでいるベビンにそう言った。

「え、装備？　朔絆ちゃんがいるじゃん」

「事情が変わってな」

ベビンはハイタッチを交わした朔絆を見ると、朔絆はちょっと嬉しそうな悲しそうな、そんなものが入り混じったような表情で苦笑を見せた。

「　　もしかして、コウ。朔絆ちゃんを」

『わあーっ！　わああああーっ！』

ベビンが複雑そうな表情で何かを言いかけたところ、何かに気付いた朔絆が大声を上げて両手を振り回して遮かざった。

「なんだ？　何か言いかけたようだが」

『あんたは、気にしなくていいのっ！』

朔絆が怒鳴りつけられて、これは口を開かないほうが得策だと判断してコウサカは押し黙る。

『べ、ベビンっ！　いきなり何てこと言うのよっ！？』

「おつかしいな〜？。言う途中で遮られちゃったから、まだ何も言っていないんだけどな〜？」

ベビンは飛びつきり意地の悪いニヤニヤとした笑みを朔絆に向けた。

『うっ、バ、バカあ〜』

「あっはははっ！」

「　　あ〜、そろそろ剣を出してほしいんだが」

この二人が揃うと毎回こんな感じになるため、いつ頃声をかければいいのか鈍感なコウサカでも予想できるようになっていた。

「ああ、はいはい。ちよつと待っててね〜」

そう言っつて、奥の倉庫に行こうとするベビンにコウサカは声をかけた。

「ベビン、怪我するなよ」

「あつははつ。鞘に収まっている剣で、どうやったら怪我できるの
く？」

「む、それもそうだな。無駄なお節介だった」

「だね」。でも、ありがとう」

ベピンはそう微笑んで、今度こそ奥の倉庫へ向かった。

「やれやれ。何でお前等は毎回こうなんだ」

「あんたが、バカ過ぎるからだよ」

「さっぱり分からん理由だな」

『バカ』

「言われないでもわかっている」

『バカバカバカバカっ！』

「同じことばかり言っただうする」

「仲が良いよね。相変わらず」

そう呆れたような顔で倉庫から剣を持って戻ってきたベピンが言
った。

「喧嘩も出来ないほど、表面での付き合いしかできない奴を相棒と
は呼べない」

『バカ』

さも当然のようにそう言うコウサカと、呆れたような嬉しそうな
顔で苦笑する朔絆を見ながらベピンは剣をコウサカに渡す。

「羨ましいな」

「精霊か？ だが、精霊石が手持ちにあつたとしても、出来るなら

普通の人間が持たないほうがいいぞ」

「大外れ」

「ん？ ふむ？」

頭に？を浮かべながら剣を受け取ったコウサカは、剣を腰のベル
トに差した。

「コウには絶対わからないから、考えるだけ無駄」

「ふむ。まあならいいか」

あっさりと思考を中断して、コウサカは朔絆に声をかけた。

「朔絆。巡回に戻るから、そろそろ戻れ」

『はいはい』

すっかり満足したのか、素直に幻のように朔絆の姿が消える。

「巡回？ あれ、昼もやっていたっけ？」

「巡回時間を増やした。それだけだ」

「　　なんかヤバイことになっているの？」

わざわざ馬鹿正直に言うところがコウサカらしいが、当然ベビンはそれを聞いて表情を曇らせた。

「いや、そこまで問題でもない。俺一人で事足りる」

「それって、コウが無理するってことだよな　　？」

ベビンは更に表情を曇らせ、カウンターから身を乗り出してコウサカに詰め寄る。

「いや、それも違うが。ただ暇だから巡回時間を増やしてみるだけだ」

「え、そなの　　？　　はあー　　、もう心配させないでよ」

ベビンは力が抜けたようにカウンターの向こうにある椅子に腰を下ろして、溜息をついた。

「まあ、そういうことだ。ではな」

「ん。まったね」

ベビンは手を振りながら、コウサカが出て行くのを見ていた。そして、コウサカの姿が消えてから、ふと思に至る。

「あれ、でもコウって他にも色々やって忙しいのに何もなければ巡回時間って増やさないよね　　？」

翼々々《よくよく》思い直して考えてそう呟いたベビンは、急に背中が冷たくなるのを感じて慌ててコウサカを追いかけた。

「さて。とりあえず南の平原にでも行くか」

そう呟いて、コウサカが広場から見て西側の道から平原に向かおうと歩き出そうとした時。

コウサカは駆け抜けてくる際に聖堂のある丘の前の坂を下りながら平原を見て、隊商の馬車がおびただしい数のオオカミに襲われていたのをはつきりと目視していた。

コウサカは坂を下りきってから、直線の道でさらに増速した。坂から学校を通り過ぎるまで約百mを数秒掛からず駆け抜け真っ直ぐに進む。そして、アデリア川が眼前に迫った時、腰に付けた道具入れのカバンを外して落としながら思い切り足に力を込める。

そして、異常なまでの高さを跳躍した。

身軽な格好をした常人にもまず不可能な、総重量五十kg以上の完全装備をその身に纏っているなら絶対的に不可能な高さだった。二m以上はある防護壁を飛び越え、さらに川幅が二mはあるアデリア川まで越えてティルコネイル南の平原に飛び込んだ。

それは目視距離だけでも軽く五m以上の距離であった。しかも横ではなく、縦方向への。縦横含めれば十mは飛んでいるだろう。

その跳躍の時にコウサカが思い切り踏みしめた地面が深く円形状に抉れていた。コウサカは無意識的にエリンに生きるモノ全てに内在されているマナと呼ばれる魔力を操り、足に集中させ地面を思い切り踏みしめた瞬間に爆発させ、その衝撃も利用して跳躍したのである。

コウサカは平原に着地する。その時、両足に奔った衝撃は常人なら足が骨折するほどだったが平然としていた。そして、一瞬で力を溜め、また凄まじい速度で馬車へ向かって駆け出す。馬車は四百mほど先に迫っていた。

駆けながらコウサカは意識を集中させイメージする。イメージはアイスボルトという氷塊を形作る魔法。マナを操りイメージ通りの工程を実践させていき空気中の水分を集約し氷結させていく。

「 Y r w y f a m i r i ? (我は氷塊を求める)
っ !」

最後に魔法を発現させる呪文を口にする。それと同時に、先の鋭く尖った二十cmほどの大きさの氷塊、アイスボルトが完成する。

「Attack（往け）っ！」
その号令一下、超速で駆けるコウサカの倍以上の速度で五つのアイズボルトが馬車を襲っているオオカミに飛翔ひしょうしていく。コウサカもそれに続くように更に加速した。
襲われている馬車はすでに目の前に迫っていた。

時は少し戻る。

それはティルコネイルに向かっていているオオカミたちに襲撃を受ける前の隊商の馬車の中。

「ここはまだまだ平和だな」

そう言ったのはダンバートンに拠点を置くギルド『ダンブレテン』に所属する、馬車の幌ぼろの中から後ろを見ている一人の男性ハンターの言葉。いつものようにティルコネイルまで行く隊商の馬車の護衛を務めている一人である。

「何言ってやがる。途中で倒したオオカミどもの数をもう忘れたのか？」

そう言うのは馬車の護衛パーティーのリーダーを務めている男だ。
「頭かしらあ、そいつは鳥頭なんすよ。だからすぐに忘れちまう」

そう軽口を開いた男も護衛パーティーの一人である。この男と頭と呼ばれた男、それに鳥頭と呼ばれた男の三人で護衛を務めている。この三人は元々三人で動いているパーティーで、よくティルコネイルへ行く隊商の護衛のクエストを好んで引き受けている。故にティルコネイルの村人や隊商の商人たちとは顔見知りである。

三人はティルコネイルの出身ではなくダンバートン出身であるが、ティルコネイルに漂うのんびりとした雰囲気が好きだと二つ目の故郷のように想っていた。

「なるほど。がはははっ！」

「うはははっ！」

軽口を言った男と頭と呼ばれた男は大笑いをし、矢面やおもてに立たされ

た鳥頭と呼ばれた男は苦笑を浮かべた。それを聞いた隊商の商人たちまで笑い出し、馬車は楽しい笑い声で包まれていた。

それはいつも変わらない光景であった。そう笑いながら時折、馬車を襲ってくる数匹の魔操獣と化したオオカミを蹴散らして、そしてティルコネイルに到着して、いつものように懐かしい故郷のような村に住む温かい村人たちと談笑に興じるのだ。

そのはずだった。ただ少し敵の数が多いな、と思うくらいの日になるはずだったのだ。

そのはずは、何の慈悲もなく奪われることになる。

「おい」

後ろを見ていた鳥頭と呼ばれた男が声を上げた。その目は大きく見開かれていた。

「がはははっ！」

「うはははっ！」

だが、声が小さく周りには聞こえない。

「おいっ！！」

男の腹の底から出した大音声に、馬車の中が静まった。

「あれは、なんだっ！？」

手綱たづなを握っている者以外、後ろを見た。

「マジかよ」

さつきまで陽気に笑っていた頭と呼ばれた護衛頭の男がそう呟いた。

馬車から五百mほど後方から、真っ黒に染まった何かが迫って来ていた。いまは真っ昼間で、森の中というわけでもない。

よく目を凝らしてみると、それは一つ一つが何かの生物だということがわかる。

オオカミである。

だが、ただのオオカミならハンターが恐れることは有り得ない。

その数が異常だった。群れが全て襲ってきたなどと言うような、そんな生易しい数ではない。数十匹、もしかしたら五十匹を超えるかもしれない数のオオカミが馬車を目指して走り迫っていた。

「う、うわあああああああああああーっ！」

商人の一人がパニックを起こして、叫んだ。

「はっ、呆けている場合じゃねえっ！ あんた等は出来るだけ前に詰めるっ！ そのパニック野郎は押さえておけっ！ いま馬車から落ちたら確実に死ぬぞっ！！！」

我に返った護衛頭が大声を上げる。その声にまだ呆けていたハンター二人も我に返った。二人が我に返ってすぐに何かの発射音が聞こえた。

「とつとと撃ちやがれっ！ 時間稼ぎだけでも出来れば十分だっ！

テイルコネイルには、あのミレンシアの坊主と先生がいるっ！！」

「り、了解っ！」

「わ、わかりやしたっ！」

二人もクロスボウを構えて、矢をオオカミ達に撃つ。

クロスボウは専用の矢を板ばねの力で、これに張られた弦に引っ掛けて発射する武器である。引き金を持ち、狙いが定めやすい。だが、弦を戻すのは人力では難しいため、一般的にウインドラス（簡単に言うと手動の弦巻き上げ機）を使って再装填を行なう。これをなしにクロスボウの再装填を行なえるのは余程の怪力の持ち主である。

クロスボウは再装填にウインドラスを用いるため時間が掛かる。

一撃必殺の時以外は滅多に使わない三人にとっては切り札的なものであるが、相手との距離が開きすぎているためクロスボウを使うしかなないのだ。

比較的連射の利くショートボウの最大射程は曲射をしてもせいぜい100mを少し超える程度で、有効射程は50mといったところである。ショートボウが届く距離まで待つては手遅れになる。ゆえに使い難く連射も利かないクロスボウを使うしかないのである。ク

ロスボウの最大射程は四百五十m、有効射程は百五十m。短い矢を使っているため安定性に欠けてしまうが、真つ黒な塊となって迫ってくる集団には狙いなどつける必要は無い。

鎧も何も着けていない毛皮だけのオオカミならばクロスボウの最大射程内に入れば十分である。この場合、殺傷能力がほとんど無くなったとしても当たった部分を痛めて走れなくすれば、それだけでいいのである。

「重いぜ、くっそっ」

三人とも撃ち終えて、馬車の中に置いてあるウィンドラスをひつたくる様な勢いで手に取り、クロスボウの弦を引き始めた。

その間にも、明らかに魔操獣と化しているオオカミたちがぐんぐんと走り迫ってくる。

オオカミの最大速度は時速七十kmほどと言われているがせいぜい二十分程度でスタミナが尽きる。だが、時速三十km前後ほどまで速度を落とせば一晩中獲物を追い続けるほどのスタミナを持っている。当然、その時速三十kmだとしても普通の人間は簡単に追いつかれる。

隊商の馬車は重種二頭立ての四輪馬車である。重種は平均で一トンを超えるほどの大きさで他にはない力強さがあるが他の馬と比べて足が遅いため、これだけ大きいモノを牽ひいていなくとも身軽なオオカミから逃げ切ることは不可能である。おまけにいまは緩やかな坂道であるため余計に馬の足が鈍る。

撃つ。装填する。撃つ。装填する。

そんなことを数回繰り返したとき、護衛頭が叫んだ。

「装填したら、撃たずにショート（ショートボウ）に持ち換えろっ

！！」

オオカミたちはすでに、ショートボウの届く百m圏内にまで迫っていた。

「了解っ！」

「ういっすっ！」

護衛頭に続いて二人は切り札としてしかあまり使わないクロスボウを離し、愛用しているそれぞれのショートボウに持ち換えて、クロスボウの時の何倍もの早さで矢を撃ち始める。

百m圏内までに走り迫っていたオオカミ達だが、ここに来て一気に足が鈍り始める。撃たれ倒れるオオカミの数に増えるにつれ避けきれずに激突したり、飛び越えてもまた別のオオカミが倒れていて一旦足を止めねばならないからである。

護衛の三人は弓矢の名手というわけではないが、剣で戦いより弓矢で戦うこと得意としている。なかなか洗練せんれんされた動作で矢を放ち、番つがえてまた放つ。さらに今回は狙う必要はないため、矢を番えながらすでに弓に角度を合わせたまま引き絞ってまた即放つ。

倒れるオオカミの数が増えるにつれ、護衛の三人の顔から徐々に絶望感が消えていった。

「村までもう少しなんだっ！ 絶対、持たせるぞっ！ いいなっ！」

「当たり前ですよっ！」

「あつし等の底力、見せ付けてやりましょうぜっ！」

三人のハンターが少しずつ絶望の中に希望を見出しながら奮闘ふんとうしているのは、ティルコネイルの南の平原のもうすぐ目の前だった。

疾走しっそうしたコウサカが馬車にたどり着いた。

「Attack（往け）っ！」

コウサカは全力で疾走しているというのに、絶叫に近い大音声を張り上げた。

その声に馬車に取り付いていたオオカミ達の動きが止まり、一斉にオオカミ達の目がコウサカに向いた。

「グルル　　キャインっ!？」

目が向いたのとはほぼ同時、馬車からパニックを起こして降りて来てしまった商人達を襲っていたオオカミを、五つのアイスボルトが

突き刺さりながら弾き飛ばした。

（ すまない。手加減している暇がないっ）

コウサカは心の中で操られているだけのオオカミたちに詫びた。

「ぜあああっ！」

疾走した速度そのまま、商人の一人の腕に噛み付いているオオカミに蹴りを放つ。

「キヤインっ！」

その蹴りがオオカミに当たった瞬間、グリーブ越しに骨が折れる感触、そして内臓を潰す感触が伝わってきた。

「グルワアアっ！」

「ギャンっ!？」

その蹴りの威力は凄まじく、蹴り飛ばしたオオカミはそのまま何匹ものオオカミを巻き込みながら飛んで往った。

コウサカは蹴った勢いを利用しその場で素早く一回転しながら、腰のベルトから刃渡り八十cmほどの刀剣バスタードソードを右手で抜き、左手で縦に長い楕円形だえんけいの盾カイトシールドを構える。蹴りを放ったままの体勢だと、動きが止まってしまうためである。

「時間は稼ぐっ、村へ走れっ！」

その声に、商人達は呆けたように目を白黒させた。運悪く、腕を深く噛まれて痛みで泣き叫ぶ者以外。

「走れっ!!!」

コウサカの発した大音声に、商人たちは足をもつれさせながら怪我人に肩を貸すとよろよろと走っていった。

「よし、これで」

「せりやあっ！」

馬車の反対側から声が聞こえた。それも悲鳴ではなく、戦う者の声だ。

「護衛のハンター達か」

馬車に繋がれたままの馬の拘束を剣で叩き斬りながら、コウサカは呟く。

「邪魔をするな」

コウサカが馬を逃がしてから馬車の反対側へ向かおうとすると、オオカミたちが襲い掛かって邪魔をしてくる。その中の一匹をカイトシールドの横薙ぎにした一撃で弾き飛ばしながら、オオカミの中に斬り込む。

バスタードソードは片手剣の部類に入るが、それでも一・八kg前後はある（ちなみに実際にある一般的な日本刀は重くても一・五kg程度である）。それを右手だけの膂力りょりょくでコウサカは縦横無尽じゅうおうむじんに走らせながらオオカミ達を切り倒していく。一刀が通り過ぎる度にオオカミは真つ二つに切断され鮮血が飛び散り、鎧が真つ赤に染まっついていくがコウサカは全く気にせず次々とオオカミ達を、操られているだけのオオカミ達に心中で詫びながら絶命させていく。

「大丈夫かっ？」

コウサカは僅か十数秒で十以上のオオカミの中を切り抜けて馬車の反対側へ行き着く。

「ミレンシアの坊主かっ！」

その行き着いた場所には、ライトレザーマイルをオオカミに喰らいつかれながらも刃渡り六十cmほどの刀剣フルトシヨートソードと円形で軽量の盾スモールシールドでオオカミと戦っている血だらけのハンター達がいた。だが、まだ戦えているところを見ると致命傷は負っていないようだ。

このハンターたちは、コウサカも知っている。よく隊商の護衛として村に来るため、何度か話をしたことがある。

「やはり、あんた達か。走れるか？」

「なんとかなっ！」

護衛頭が飛び掛ってきた一匹を真正面からスモールシールドで受け、オオカミの横腹をフルトシヨートソードで一突きにした。他の二人も足は負傷していないようだった。おそらく逃げるために足だけは庇かばいながら戦っていたのだ。

「さすがだな。村の自警団もそろそろ出てきているはず。殿しんがりは引

き受けるから、先に」

「わかったつ！ おい、行くぞてめえらっ！」

「「おうっ！」」

三人は一人ずつ村の方へ走って行き、護衛頭も離れたところでコウサカも動こうとする。だが。

「獲物が一つになれば、狙われて当たり前か」

残った二十四匹以上のオオカミが一斉にコウサカを目掛けて、四方八方から襲ってきた。

「コウサカ、あたしをっ」

「すでに剣を抜いている暇などない」

それは嘘である。

コウサカなら襲われながら背中の中を抜くことも可能であり、確かに朔絆を使えばこの程度の数は一瞬で倒せるだろう。だが、朔絆が生き血に塗れるのは避けたかったのだ。甘い考えだろうが、その馬鹿な考えを命がけて通すの馬鹿がコウサカなのである。

コウサカはオオカミと戦いながら少しずつ、後ろに下がり始める。だが四方八方から襲われているため、下がれない。真後ろからの攻撃にはさすがに対処できず、すでに体はオオカミに喰らいつかれている。

アリツシユアシユビンアーマーの布のような部分でも鎖帷子が縫い込まれている為、オオカミの牙は通らない。だが、顎の力で絞めつけ続けられているため、だんだんと血流が滞ってくる。そして動きも阻害される。だがしかし。

「はああっ！」

オオカミに喰いつかれたままの腕を振るって、真正面から飛び掛ってきたオオカミを殴り飛ばす。前に突き出した腕を横薙ぎにして、数匹のオオカミを弾き飛ばす。だが、それでも足元までは手が回らずグリーブを着けた足に喰いつかれ始め、コウサカのバランスを崩そうとオオカミは足を目掛けて体当たりをしてきた。

一方的にやられているように見えるが、完全武装したコウサカが

硬過ぎて、また重過ぎてオオカミ達は一行に引きずり倒せずに攻めあぐねる。

と。コウサカに真横から飛びかかるうとしたオオカミの一匹に矢が突き刺さる。

「ミレンシアの坊主っ！ 次は俺達が助けてやらあっ！！」

先に逃がしたハンター達だった。逃げずに弓矢で援護を始めたのだ。さらに続けて飛んできた矢がさらに数匹のオオカミにも突き刺さる。

「コウサカっ！」

「貴様だけにいい格好はさせんぞっ！」

新たに二人の声が響く。レイナルド先生と、レイナルド先生の教え子で自警団の中でもまとともに戦えるトレボーである。ガーディアンヘルムに、スリーベルトレザーメール、ガントレット、鉄のグリーブという格好ゆえである。

「よしっ！ 俺達も行くぞっ！！」

「りょーかいつ！」

「ういすっ！」

護衛の三人も走ってくる音がした。

「ギャンっ！？」

コウサカの真横から飛びかかるうとしていた一匹のオオカミが斬り伏せられた。

「全く無茶をするな、お前はっ！」

レイナルド先生がバスタードソードを一刀流に構えながら、コウサカの左横に並ぶ。

「貴様っ！ 自分だけ格好つけければポイントを稼げるなどと

勘違いも甚だしいっ！」

トレボーがいつものように馬鹿なことを言いながら、刃渡り六十cm程度の最も標準的な刀剣ショートソードを構えながらレイナルド先生の横へ並ぶ。コウサカはあとでコイツだけは殴ろうと心に決めた。

「ミレンシアだつっても、やっぱり無敵じゃねえようだなっ！

あゝあゝっ？ 坊主っ！？」

護衛頭が精悍な笑みを浮かべながら、コウサカの右横へ並んだ。

「元々馬車の護衛は我々の仕事だっ！ 我々が戦わなければ面目が立たんっ！」

「その通りっ！ あっし等の底力 ってこれ、さっき言っちま
つたっ！」

他の二人のハンターも頭の隣に並ぶ。

「おいおい」

一人、コウサカだけは溜息をついた。が、

「 まあ、こういうのも嫌いじゃない」

体に喰らいついていたオオカミは周りが倒してくれたので、再びコウサカは自由になる。全身に再び力を込め、意識を強く集中させる。

「Y r w y f a m i ' r i ? (我は氷塊を求める)っ！」

コウサカは剣と盾を構えたまま、アイスボルトを詠唱する。水分を集約している時間が短いため小振りな氷塊が二つしか出来なかつたが十分である。

「A t t a c k (往け)っ！」

アイスボルトを放ちながら、一番にコウサカが斬りこむ。

「あ、この俺が一番最初に行こうと」

「せいっ！」

トレボーが言いかけたところ、レイナルド先生がトレボーの真横に剣を走らせた。

「ギャウっ！」

トレボーに真横から忍び寄っていた一匹のオオカミが切り伏せられて絶命した。

「戦闘中に無駄口を叩くなっ！」

レイナルド先生がトレボーを振り向きもせず、怒声を上げる。

「は、はいっ ! すみませんっ！」

その怒声にトレボーは改めて構え直し、オオカミに斬りかかる。

「ずいぶんと余裕かましてやがるなあ、おい」

「キャンっ!？」

護衛頭が呆れたように言いながら、飛び掛ってきたオオカミにスモールシールドを真っ直ぐに突き出して、オオカミの顔にぶつけた。しかし、トレボーはともかく、あの先生とミレンシアは強いですよっ!」

鳥頭と呼ばれた男の至近距離から放ったショートボウの矢をまともに喰らって、オオカミが吹き飛ぶ。

「あっし等じゃ、とても真似できねえ。ああ、くそっ。外れたっ!」

「グルギヤアっ!」

軽口の男が真横から仕掛けようとしたオオカミに向かって矢を放つが、外れてオオカミの目の前あたりの地面に突き刺さった。それを見てオオカミが走りこんでくる。

「なめてんじゃねえっ!」

軽口の男は弓を放してスモールシールドと短剣を抜くと、オオカミに向かって行った。

弓を収めてスモールシールドと短剣を抜いてオオカミに向かって行った。

「まあ、これなら退けられるな」

護衛頭がニヤリとそう言いながら見つめる先には、ほとんど二人だけで残ったオオカミの群れを蹴散らすミレンシアの青年と、熟練した戦士がいた。

そんな撃退戦がティルコネイルの南の平原で行なわれていると同時に、聖堂の一室。

「ん」

白いポポワンピースを着て、金色の髪をした少女が目を覚ましていた。

その少女は部屋の窓から外を望む。南の平原が見えることは無いが、鶏やひよこが闊歩かつぽしている長閑な風景が広がっていた。

「きれい」

呆けたような表情を浮かべながらミレンシアの少女はそう言った。

ミレンシアの少女が目を覚ましていた頃、オオカミを撃退したコウサカ達は、一旦防護壁の内側に下がっていた。

「感謝だ、デイリスさん」

コウサカは道中で落としたカバンをベルトに付け直しながら礼を言う。

「全くあなたは O s g w e l w c h y n d d a g
w e i l l a n y d y n h w n (この者に癒しを)」

そうぼやきながら護衛を務めてきた三人に手当てを行なっている女性はティルコネイル唯一のヒーラー、デイリスである。

デイリス。

茶色がかったショートカットの黒髪に、茶色の瞳をした女性である。ティルコネイルのヒーラーで、人だけではなく羊などの治療も行なうすごい人である。ラサと魔法を学びにイメンハマに留学したが、医学に興味を持ち、ヒーラーの道へと進んだ。イメンハマで修行後、故郷であるティルコネイルに帰ってからヒーラーとして開業をした。家を建てるにはいろいろあつたらしく、村のはずれにあるのをちよつと残念がついているとか。

少しだけ男性不信気味で、美しい自分の容姿にも自身が持てないでいる様子。

スリーサイズはB85・W61・H85くらいである。

ティルコネイル南西のアデア川に架かった西側の橋から渡った防護壁の内側で、他の自警団と共にデイリスが待機をしていた。商

人達もすでに自警団に保護され、いまは護衛で来ていた三人の手当てを行なっている。

「Heal、Heal」

デイリスがヒーリングの魔法を詠唱し、光球が護衛の三人に当たると流血が止まった。

ヒーリングの魔法は決して何でも治せるといふような便利な魔法ではない。対象の自然治癒力を引き上げる、細胞の活性化を促進させる魔法なのである。

かすり傷程度の軽いものなら一瞬で跡形あとかたもなく消えるが、深い傷になると血は止まり傷口も塞がるがそれだけである。それは表面だけを塞いだけで治ったわけではない。ヒーリングを受ければ通常よりは遥かに少ない手間と時間で済むとは言え、しっかりとした手当てと休養を行なわなければ治り切らない。

またヒーリングの魔法は高位魔法に分類され、術者の精神をひどく消費する。ゆえに、あまり多用の利くものではないのである。

「ふう。はい、おしまい」

若干、疲れた色を見せながら護衛頭に包帯を巻き終わったデイリスが立ち上がった。

「すまん、お嬢さん」

「いえ、これがわたしの仕事ですから。治り切るまでは無理な運動は控えてくださいね」

「ああ、わかった」

座ったままの護衛頭と他の二人も頭を下げると、デイリスは小さく微笑んだ。

「さて、それでは馬車を見てくるとします」

「ち、ちよつとっ！ あなたは大丈夫なの？」

鎧の表面の至る所がズタズタになり、オオカミの返り血で赤く染まった鎧のまま馬車を見に行こうとするコウサカをデイリスが引き止める。

「問題ありません。鎧のおかげで怪我と呼べるほどのものは一切負

ついでに、スタミナの点でもまだまだ余裕です」

総距離にして約1km以上の距離を全力疾走し、そのまま戦闘を行なった後だというのにコウサカは息切れのひとつもしていなかった。

「全くもう」

「ディリスは少し俯うつむいて頭に手を当てながら溜息をついた。

「まあ、とりあえず行って来ます」

「はいはい、怪我しないようにね」

ディリスはおざなり言い方をしたが、コウサカはそれに気を悪くした様子もなく小さく肩をすくめて歩いて行った。

「あの〜、ディリスさん。俺も手当てを」 「うるさいっ!!」

「は、はひっ!!」

下心丸見えでディリスに話しかけたトレボーは、ディリスの怒鳴った剣幕を受けビクツツとして腰を引かせて小さくなった。

「つたく、男つてのは」

小さくなったトレボーを横目で一睨みしたディリスは、のんびりと馬車に歩いて近づいていくコウサカを見つめた。

「ほんと、男つてのは」

トレボーに言った声色とは全く違う、小さな声色でそう呟いた。

コウサカは馬車の後ろ側から中に入って品物の状態を確認していた。納入箱などの影になって村側からは見えない。

「なんで、あたしを使わなかったのさ」

「背中の剣を抜いている余裕がなかった」

「嘘、あんたはそんなに弱くない」

「だから」 「あんたが、さ」

尚も同じことを繰り返そうとしたコウサカの言葉を、朔絆トクハが遮る。「あたしを、とっても大事にしているのはわかっているよ。たぶん、あんた自身が大怪我負うような時になってもあたしを使わないだろ

うってことも」

「分かつているなら無駄なことを言」「ふざけないでよっ！」

朔絆が叫ぶ。

コウサカが振り返ると、完全な実体化を行なって本来の背丈で泣きそうな顔をした朔絆がいた。

「ふざけ ないでよっ ! あたしは武器なのっ! それ

なのに武器として主人に使われないあたしって、なんなのっ!?!」

「俺はお前が」「自分で何かを斬り殺されて、血を被^{かぶ}ったあたしのことを考えているってっ!?!」

コウサカが続けようとした言葉を朔絆が先に言う。

「じゃあ 。 じゃあ、あんたはあたしの気持ちを考えたことがあるのっ !?!」

朔絆がコウサカの腹部あたりに額を押し付けるようにして、抱き付く。

「あんたがあたしを大事にしているように あたしだって、

あんたが傷付くところなんて見たくないよっ!!!」

コウサカは、もう何も言わずに静かに朔絆を見下ろした。

「あんたが無駄な殺しを嫌っているは知ってるよっ! あたしをただの武器としてじゃなくて、ちゃんとした一人の人格だって見ていることもわかっているよっ !!!」

コウサカと朔絆は三ヶ月程度の付き合いである。だが、四六時中いつも同じ場所において、話して、笑って、喧嘩^{けんか}をしてきた。

「あたしは大丈夫だよっ ! だから危ないときは使っ

てイヤだよおっ 。 う うあ、うわあ〜んっ!!!」

朔絆は泣いた。泣きじゃくった。

精霊だとか人外だとか、武器だとか。そんなことは一切感じさせず、そこには大事なパートナーを心から案じて泣く一人の少女がいた。

「
」
コウサカは泣きじゃくる朔絆を、静かに見下ろしていた。と、ひとつ溜息をついた。

「 はあ、俺の負けだ」

『 へあ ？ グス』

泣きじゃくったせいで、涙や鼻水と鎧に飛び散っている血糊ちのじで顔がすごいことになっている朔絆がコウサカを見上げると、兜を取って諦めたような表情を浮かべながら藍色の髪をオールバックにした頭をガシガシと搔いていた。

「やれやれ、俺もまだまだだ。結局、自分しか見えていないままか」

『 え あの、ぐす な、に ？ 』

泣くのを止めた朔絆はコウサカが何を言っているのか分からず、首を傾げた。そんな朔絆にお構いなしにコウサカは片手をカバンに突っ込む。

『 わぶっ!?!? 』

「動くな。色々とすごいことになっているぞ、お前」

先ほど付け直した腰のカバンから手ぬぐいを取り出して、コウサカは朔絆の色々とベタベタになっている顔を拭いた。

「あゝ、駄目だな。Y r w y f a m i r i ? (我は氷塊を求める)」

コウサカはアイスボルトを詠唱する。が、水を集約させた段階で詠唱を中断してその水を手ぬぐいに染み込ませた。魔法とは、別に攻撃するだけにあるのではない。

「ああ、これなら良い感じだな」

『 ひゃうっ!?!? 』

今度は水が染み込んでいるため、朔絆の顔の色々とベタベタしたものを拭い取れた。いきなり好き勝手された朔絆は堪らず、コウサカから離れた。

「ついでに、と」

コウサカは鎧についた血糊を適当に拭き取った。

『いきなり、なにすんのよっ!?!』

朔絆は濡れた顔を猫が顔を洗うように手で湿り気を拭いながら、コウサカに食って掛かった。

「綺麗きれいにしてやったと言うのに、ひどい言い草だな」

『するにしても、もっと優しくやってよねっ!?!』

コウサカがやれやれと溜息をつくとき、朔絆が怒鳴った。

「ああ、朔絆」

『なにさっ!』

「危ないと感じたら、何も言わずにお前を使うから。そのつもりでいろよ」

『はい?』

いきなり訳の分からないことを言われて、朔絆がキョトンとする。

「お前の想いは理解した。だから今度からお前をいつも使う。例えば相手を殺さなければならぬ場合でも、お前を問答無用で使う。それでもいいな?」

『へ?』

「違うのか?」

間違えたか?と言う表情を浮かべながらコウサカは、朔絆を見た。

『え あ 、いいっ!』

「そうか。ならガンガン使わせてもらっぞ、相棒」

『うんっ!』

その時見せた朔絆の笑顔は、天真爛漫てんしんらんまんとした嬉しさと幸せという言葉そのまま表情したような笑顔であった。

馬車から出たコウサカは、手振りで大丈夫だと待機している自警団に合図を送った。朔絆はコウサカの肩に乗れるほどの大きさになっている。

「やれやれ、これは一度洗わないとな」

コウサカは拭ったがまだ血糊が残るアリツシユアリュビンアーマーや他の部位を、兜を脱いで見下ろした。

『錆びるかもね』

「錆びるわけがないだろうが」

コウサカの鎧にはラサ先生によって魔法がかけられている。防錆ぼうせいは勿論のこと、鎧として使われている金属自体の強度を上げるものや魔法耐性も若干ながら上げるものまで。すでにこの鎧はアリツシユアシユビンアーマーとは外見は同じでも中身は別ものとなっている。

ちなみに、ラサ先生は数日かけてこの魔法を染み込ませた。その恩もあるため、コウサカはラサ先生にあまり強くものを言えない。

『あ、そうだ。さつき、あんた何か上から目線で偉そうだったよね』

「なんだと？」

『あたしに偉そうに命令してんじやないわよっ！』

「おい、待て。何でそうなる」

いきなり朔絆が先ほどのことを掘り返した。だが、かなり自分勝手な言い分になっているためコウサカが戸惑ったような声を上げる。

『バカっ！』

勿論、これが朔絆の今更ながら恥ずかしくなった照れ隠しだとコウサカが気付くわけがない。

「さっきのは、お前が泣いて 「バっ！？ バカ、なにいつ

てんのっ！！』

事実をそのまま口にしようとするコウサカに、朔絆が顔を真っ赤にして怒鳴る。

「いや、実際そうだったろう」

『 こんの、鈍感バカあっ！！！！』

そんな二人の言い合いを、逃げた馬と商人達を連れて馬車に近づいてきた自警団達が見て、大笑いをした。

それを見て、さらに顔を赤くしてコウサカに食って掛かる朔絆と、その怒っている理由がよくわからずに首をかしげながら朔絆の相手

をするコウサカを見て、また更に大きな笑い声がティルコネイルに響き渡った。

その光景を聖堂のある丘から眺めている金色の髪をした少女と、その傍らには心配そうな顔でいるエンデリオン司祭がいた。

「あの 司祭さん。あの方はどなたなのですか？」

不思議そうな表情をした少女は笑いの種を中心となっているコウサカを指差して、エンデリオン司祭に問うた。

「あの人 ？ コウサカさんのことですか？」

エンデリオン司祭は少女の指差した先で、トレポーを殴っているコウサカを見た。

「コウサカ、さん ですか」

そう呟き直ぐにコウサカだけを見つめた少女の瞳は、綺麗な翡翠色ひすいいろをしていた。

第二章 変わらないはずだった日常（後書き）

ちよつと余談を。

最大射程とは命中精度等を考慮せず単純に銃の弾丸、火砲の砲弾、ミサイルなどが飛翔できる最大の距離のことです。榴弾砲など一部の例外を除いて、実質的にはほとんど意味（殺傷能力や実用性など）がありません。

有効射程とは銃の弾丸、火砲の砲弾、ミサイルなどが飛翔し、本来の命中精度を維持したり、目標を捉えたりすることができる距離のことです。飛翔距離≠射程ではありません。

第三章 その少女の名は（前書き）

補足

本章内で出てくるミレンシアの少女の外見は身長百五十二cmで、癖のない真っ直ぐな金色のセミロングの髪に、優しそうな翡翠色の瞳をしていて性格は穏やか。いまは真っ白なポロワンピースというワンピース姿にロングサンダル姿です。歳は十六歳くらいの童顔。スリーサイズはB83・W58H82くらい。

第三章 その少女の名は

「坊主。おい、坊主っ！」

「ん、交代時間か」

「そういつこった。とつとと起きやがれ」

「ああ。あんたは傷が治っていないんだから、ゆっくり休めよ」

「言われねえでも、そうすらあ。じゃあ、あとは任せたぞ」

「ああ」

手をひらひらさせながら、護衛頭は寢床に潜った。

「ふう」

学校の教室の床に直に敷かれた布団から、コウサカは這い出る。

「今夜はもう何もなければいけないな」

まだ覚醒し切っていない頭を片手で押さえ軽く振りながら、コウサカは呟いた。

コウサカは少し待ち頭が覚醒したことを感じてから、傍らに置いてある装備を付け始める。兜を被り、最後に輝きを放つクレイモアを背中に背負った。

「おはよ」

「まだ深夜だがな」

背負われた振動で朔絆さくまが目を覚ました。

精霊も眠るのである。

精霊も人間と同じように意識を保っていると疲れるのだと言う。

これは実体化していようが、剣に宿ったまま意識を保っていようが疲れる度合いは同じで、どちらの状態でも回復量は変わらないらしい。食欲があるのだから睡眠欲があったとしても不思議ではないのだが、それでも不思議な現象である。宿った武器があれば、自由に実体化を行なって人間と遜色てんしよくないような姿形でそこに存在する精霊は、もしかしたら人間と変わりない存在なのかもしれない。

寝惚ねぼけている朔絆に交代のことを告げながらコウサカは外へ出た。

そして、ふと空を見上げる。

「月が綺麗だな」

『昼間にあんなことがあったのに　　のんきだよ〜』

雲ひとつ無い空に満月のイウエカとラデカが隣に寄り添うように煌々としている様を見上げながらコウサカが呟くと、朔絆が呆れたように返した。

「四六時中、殺気立っていても仕方がないだろう。力を入れすぎても疲れるだけだ」

『まあ、それはそうなんだけど』

剣に入ったままの朔絆と話しながら、コウサカは村南西部の西側の橋にある防護壁へと向かう。防護壁には橋の前だけ通過用に木製の門が備え付けられている。

コウサカは急ごしらえで立てられた二つの見張り小屋の内、右側は護衛頭が引き上げて無人となつているためそちらへ入った。左側にはまだ当直している者がいる。だが、コウサカが来たことを知ると軽く手を上げて挨拶をし、引き上げていった。

ミレンシアたるコウサカには強靱な精神力と、無尽蔵とも思えるほどの体力がある。それに普通の人間よりも夜目よめも利く。だから、コウサカは深夜から朝方までの見張りを一人だけで引き受けたのだ。

「ふう」

小屋の中には申し訳程度に設けられた卓と椅子があった。コウサカは椅子に腰を下ろし、防護壁に開いた銃眼から南の平原にある馬車を通ってきた街道を見る。

幸い、月明かりにより明るく照らされているため街道はよく見えた。これが月のない夜であつたら松明たいまつを焚き、いちいち薪を入れに小屋から動かなくてはなくなる。ただ手間がかかるだけなら問題は無いが、人間は動物ほど夜目が利かない。もし新しく松明を焚きに出て行つたところを襲われたら、最悪の事態になる。

「今日だけで　　色々変わったな」

『うん、そだね』

コウサカは月明かりに照らされて今は静かな街道を睨み付けるように凝視しながら、今日あったことを思い出した。

オオカミを撃退したその日の夕方。

「表面にやすりでも掛けた方が早いかな、これは」

「かもね」

今のコウサカは鎧の下に着込む灰色のアンダーウェアに、半ズボン姿だった。

コウサカは鍛冶屋の前の川で水を汲み、水に塗らした雑巾で血糊により赤く汚れた鎧を拭っていた。ガントレットや兜も脱いで、傍らに置いてある。

「おい、コウサカ。やっぱりワシが」「結構です」

コウサカは鍛冶屋の主、ファーガスの申し出を一蹴した。

ファーガス。別名、破壊神（道具や武器の）。

ティルコネイルの鍛冶屋の主である。百六十六cmの背、黒い短髪に豊かな顎鬚、赤い瞳の中年の男性。但し、作るのは得意だが修理するのは苦手という鍛冶師としてどうかと思う極端な人物である。コウサカは一度も修理を頼んだことは無く、全てコウサカ自身が行っている。ただ腕はともかく知識は大したもので、修理で行き詰ったところでコウサカもよく助言を受けている。ぶっきらぼうなところもあるが、基本的に親身になってくれる人である。

「修理が下手なのは不本意ながら同意するが」

「なら、黙っていてください。これは替えが利かないのです」

失敗されたらまた別のを使う、という手は使えない。そもそもこのアリッシュアシュビンアーマー自体、ティルコネイルより南にある都市ダンバートンのさらに南、ウルラ大陸南端の都市バンホールで扱われているものを商人がダンバートンに仕入れているもので、

それを隊商の頼んで持って来てもらったものである。価格もさることながら、いまの状態で届くまで待つなどと悠長なことはしてられない。

「やれやれ」

不貞腐れたように鍛冶屋の奥にファアガスは引っ込む。

「気合で頑張るか」

そう覚悟を決め、コウサカは鎧を擦る手に力を込めた。

コウサカが血糊と格闘すること二時間。ようやく拭い切れ、今度はチェーンメイルを覆う生地きじの表面がズタズタになり、赤く染まってしまったアリツシユアリュビンアーマーを旅館の前のベンチに座りながら染み抜きや破れた部分を縫い始めた。

「そうやっている、いつもと違ってカツコ悪いですね」

「自分でも情けないと思うから、言われないでもわかってる」

まるで主夫のような作業に取り掛かっているコウサカを見て、からから笑っているのは旅館の看板娘ノラである。

ノラ。百五十六cmほどの背に、あめいろ 飴色の癖毛のショートヘア、せ 青色の瞳をした旅館の看板娘で元氣印の少女である。性格はめいりようか 明瞭快活で、いつも楽しげにしている。裁縫が出来るが、少し腕には不安があるらしい。

「きっと良い主夫になれますよっ！」

「トドメをどうも」

情けなさをひしひしと感じさせながら、コウサカは縫い続ける。

「でも、ほんとに何でも出来るんですね」

「これでも裁縫は苦手な部類だな」

コウサカは先ほどから指を針で何回も刺しながら縫っている。

指を何回も刺しながらコウサカは裁縫をし。

『 バツからし 』

朔絆は溜息を吐いて、呆れていた。

「おお、こんなところにいたのかね」

そんな中、ダンカン村長が現れた。

「村長？」

再び手を止めたコウサカは、旅館右側の坂から降りてくるダンカン村長に視線を向けた。

「おお、コウサカか。ちょうどいい」

コウサカを見たダンカン村長はそう言いながら、ノラに詰め寄られている少女の下へと向かう。

「身体に問題はないようだね」

「あ、村長さんっ」

ずっとオロオロしていただけだった少女が村長を見て、安堵あんどしたような表情を見せた。

「ノラ、程々にしておかないと逆効果だよ。あとこの子は聖堂で保護をしているから旅館には泊まらないよ」

「ええ〜、そんな〜」

見るからにがつくりするノラ。どう考えてもあの言い方では客は泊まらないだろう、とコウサカは心の中で突っ込んだ。

「さて、二人ともちょっと私の家まで来てくれ。話したいことがある」

「 わかりました」

コウサカは村長の目に、厳しい光が灯っているのを見逃さなかった。

「さて、行こうかね」

「あ、はい」

村長がゆっくり踵を返し、家に向かうため歩き出すと少女も歩き出した。

「ノラ、置いておくから見ておいてくれ」

「あ、ならわたしが縫って」「触ったら許さない」

コウサカが予想していたことと全く同じことをノラが口にしたため、最後まで聞かずに遮る。^{ナユキ}

「しゅん」

見るからに小さくなったノラを尻目に、コウサカはクレイモアだけを持って村長の後に続いた。

村長の家。

「とりあえず、適当に座ってくれ」

村長がいつも座っているロッキングチェアに腰掛け、他の二人もその対面に座る。

「さて、何から話そうか」「村長」

村長が何かを言うより先に、コウサカが口を開く。

「その前に、この子のことを話してほしいのですが」

「ああ、それもそうだね」

当の本人の少女は、よく分かっていない様子で目を瞬いた。

「この子の名前は、ナユキと言うそうだ。ただ記憶がないらしい」

「記憶がない？」

「うむ」

村長は難しい顔で頷く。

「君、ソウルストリームは知っているか？」

「？ いえ わかりません」

ナユキと言う名の少女は否定をする。到底、嘘を言っているようには思えない無邪気な顔で首を傾げていた。

「コウサカ、どう思う？」

「どう思うと言われましても」

ミレンシアだからと言って、全く別の人間のこととはさすがにコウサカには分からない。だが、コウサカはソウルストリームやエリンについての知識は知って、この世界に降り立った。

「実際にミレンシアに会ったのはこれが初めてですから、何とも言えないですが」

「コウサカ自身はそうだとしても、他がどうかはわからない。」

「まあ、もしかしたら一時的なものかもしれませんが、ミレンシアには本当に元々記憶がないのかもしれないかもしれません」

「ふむ　　そうだね」

「え、っと　　？」

結局少女については名前以外何も分からなかったが、コウサカ自身も自分のことをよくわかっていないため話を変えることにした。

「村長、それで何かあったのですか？」

「お、おお。そうだね、そっちを話そうか」

「？」

何のことか分からずナユキは首を傾げる。

「ダンバートンへ襲撃が遭ったことをフクロウ便で知らせ、ハンターを派遣してくれないかと頼んでみたのだが却下されたよ」

「　　やはりですか」

「ああ。街道の安全が確認できていない以上、下手にハンターを派遣しても犠牲者を出すだけだ。ただ、ダンバートン側から探りは入れてくれるらしい」

たぶん魔族の潜んでいるのは、ティルコネイルとダンバートンの中間にある伐採キャンプトウガルドアイル西にあるウレイドの森だろう、とコウサカは推測している。森は森だが、広すぎるというわけの広さでもないため、時間が経てば経つほど魔族の見つかる可能性は上がっていく。

「敵が炙り出されているのが先か、ティルコネイルに攻めて来るのが先か　　ですか」

「コウサカ、君の考えはどうかね？」

「十中八九、攻めて来るかと」

「やはりか　　」

コウサカがそう推論を挙げると、村長は答えが分かっていたよう

に溜息をついた。

「君にはかり頼り切ってすまないが、村を頼む」

「お気になさらずに。俺がやるしかないでしょうから」

村長の言葉を受け、コウサカはより一層気を引き締めた。

「？」

ナユキだけが終始、首を捻っていた。

村長の家を出ると、もう日が暮れ掛かり夜になろうとしていた。

「あ、あの さっきの縫い物、わたしがやりましようか

？ お、お裁縫は得意みたいですから」

聖堂まで送ろう、とコウサカが提案しようとしたところナユキが先に口を開いた。

「得意って、記憶がないと聞いた気がするが」

「わかりません。でも、出来るような気がするんです」

頭で覚えていなくても、身体で覚えたことは忘れないことが多いと言っが、それだろうか。とコウサカは思った。

「もう夜になるが」

「大丈夫です」

何を根拠に、とコウサカは言葉を続けようとしたが、ナユキのどこか必死さの感じられる表情を見て考えを改める。

「なら、頼む」

「あ、はいっ。任せてください！」

ナユキが何故、いきなりこんなことを言い出したかをコウサカが知るのはまだ先のこととなる。

「」

ナユキは最後に残った糸を歯で切った。コウサカはそれを呆然と見つめている。

「できましたっ」

「あ、ああ」

コウサカは呆然としたまま信じられないといった表情で、縫い終わったアリッシユアシユビンアーマーを受け取った。

「どんな魔法だ」

「ただ単に手先の器用さの問題だと思っただけね」

「わずか数分である。」

わずか数分でナユキは至る所が裂けた表面を縫い直した。それも神がかりなほど綺麗きれいに。実際に魔法を使えるはずがコウサカは、信じられない魔法を見たという表情になり、朔絆はそれに冷静に突っ込む。

「えっ。こ、声　？　ど、どこ　？」

コウサカとしてはいつものことだが、ナユキには精霊武器などと言うものが分からず正体不明な声に怯えた。

「ああ、精霊なんて知らないか。朔絆、頼む」

「え、しょうがないな」

朔絆がしょうがないというよりは、頼まれてまんざらでもなさそうな表情で姿を現した。大きさはコウサカの肩に乗れる程度である。

「えっ　？　い、いまこの子どこから？」

突然、宙空ちゆうくうに小さな少女が現れたことに目に見えて狼狽うろたえるナユキ。

「どこから、という質問にはここからだな」

「コウサカはクレイモアを掲げて示す。」

「それで、これが精霊だ　　痛っ」

「誰がこれだっ！」

朔絆が兜をしていない無防備なコウサカの頭に、ドロップキックを見舞った。

「訂正する。俺の相棒で、剣の精霊の朔絆だ」

「ふんっ！」

蹴れた部分を片手で押さえながら、コウサカが朔絆を紹介する。

「せ、精霊さん　？　絵本とかで見たことあるけど　」

改めて朔絆を恐々と見つめるナユキ。

「絵本のような精霊ではなく、もつと性格が　」『ふんっ！！』
言わなければいいものを、コウサカが絵本の精霊と朔絆を悪く比較しようとする、朔絆の滑空ドロップキックがコウサカの側頭部に炸裂した。

「ぐ　お　おお　」
膝を折って本気で痛みがりながら頭を押さえ、コウサカはうずくま
った。

「あ、あの　だ、大丈夫、ですか？」

ナユキがオロオロしながら膝を着き、うずくまったコウサカを心配する。

『　　バツカじゃない』

その光景を朔絆は面白く無さそうに一瞥いちべつすると姿を消した。

「言葉を間違えたか　」

ズキズキと鈍痛のする頭を押さえながら、コウサカが立ち上がる。

「だ、大丈夫なんですか　？」

「ああ、大丈夫だ」

心配するナユキにそう言いながら、コウサカは手をふらふらとさせた。

「それより、修繕しゅうぜんをありがとう」

「あ、い、いえっ」

コウサカが礼を言うと、ナユキは顔を赤くした。

「聖堂まで送ろう。中で少し待っていてくれ」

「あ、はい」

二人は旅館の中に入り、コウサカは装備を抱えながら旅館二階の自室へと階段を上がっていった。

「　　」
ナユキは何となく旅館の中を見回す。カウンターには誰もいなく、入り口から右の方の部屋からは美味しそうな匂いが漂ってきていた。

おそらく、臨時に旅館へ泊まる事となった商人達、旅館の主人とノラ両人の夕食を作っているのだろう。

「待たせた」

「あ、いえ。全然待つてないです」

コウサカが兜を脇に抱えて、ガントレットを嵌めながら降りてきた。

「では、行こうか」

「はい」

二人は、もうすっかり暗くなってしまった外へ出た。

「あの　コウサカ、さん」

「呼びにくいならコウサカで構わない。何か聞きたいことでも？」
聖堂まで歩き出してすぐに、ナユキが口を開いた。

「ミレンシア　で、なんですか？」

「　やはり、そこに来るか」

コウサカは一度、気難しげに目を瞑り、ゆっくりと息を吐いた。
「ただ、とてつもない力を持って存在する者のことだ」

「抽象的すぎますよ　」

「細かいことは知らないほうがいい。だが、いま言ったような存在なのは確かだ」

ナユキは釈然としないようだが、コウサカはそれ以上何も言わなかった。

ミレンシアとは、『星から来た者』の意である。最も破壊神に近くて遠く、最も救世主に近くて遠い存在である。但し、コウサカはこのことを村長にも話していない。エリンに降り立つと同時に頭の中にこの言葉が響いて刻み込まれただけなため、信憑性が全くないのだ。話したところで混乱を招くだけだと判断している。

「あの　」

「聞くから、落ち着いて話すといい」

ナユキは意を決したように口を開いた。

「あの

わたし、夢の中で女神さまに会った

んです」

「女神？ いや、まさか 　どんな外見をしていた？」

精霊、モンスターと言ったものを聞き慣れたコウサカでも、思わず足を止め聞き返した。

「長い黒髪で、真つ黒な翼をした綺麗な女神さまでした」

どこか呆けたように、またうつとりとした表情をしながらナユキは女神の外見を話した。

「戦の女神モリアン」

どこか呆然としたコウサカはその女神の名前を口に出した。

「モリアン様、と言うのですか？」

ナユキはやつと分からなかったことを知れた嬉しさで、顔が華やいだ。

「いや、だが何故俺だけに話す？ さつき村長といた時に話して然りではないか？」

「女神さまが、そのうちミレンシアの青年に会うからその青年にだけ話しなさいって」

「なんだと？」

そこで、ふと思に至る。

「もしか、裁縫をすと言い出したのは」

「はい、そうです。コウサカさんと二人つきりになるためです」

コウサカは目の前にいる気弱そうな少女を、改めて観察する。

(女神の介入　いや、しかし)

女神モリアンとは過去にあつた人間と魔族の戦争、第一次モイトウラ戦争の折、人間を助けるために魔族をダンジョンに封じ込め、その後自身も肉体を失い封印されたと言われている女神である。

「女神は、何と？」

「ティルナノイが破壊されようとしているって　あの、

ティルナノイって何ですか？」

「ティルナノイは、理想郷であり楽園のことだが」

ティルナノイとは、「若さの地」「永遠の楽園」と言う意味を冠している楽園と称される場所のことである。伝承にだけ残っており、誰もそこには行ったことが無いのだという。

「理想郷」

「だが、ティルナノイが存在するなど。そんなことは一度も聞いたことがない」

「そう　ですか」

コウサカ言葉を受け、ナユキは明らかに落胆して俯いた。

「もし、ティルナノイに行けたとして　それで、どうする気だ？」

「女神さまを助けたいですっ！」

「助けるって」

コウサカを見つめるナユキの目は真剣そのものだった。その目から理由は分からないが脅迫めいた必死さが伝わって来ていた。

「力を貸してやりたいが、いまは余裕がない」

「そうです、よね」

ナユキは一旦力強く上げた顔をまた俯かせた。

「まあ、いま起こっている事態が落ち着いたら手を貸そう」

「ほ、本当ですかっ!？」

コウサカがそう言った途端、ナユキは勢いよく顔を上げた。

「もしかしたら、魔族の行動が活発になっていることと関係があるかもしれないからな。それに」

「それに　？」

「いや、何でもない。とにかく今やるべきことをやる。話はそれからだ」

「は、はいっ。がんばりますっ！」

一体何を頑張るのか、と心の中で呟きながらコウサカは再び歩き出した。

「行こう。もうすっかり暗くなってしまった」

「あ、そうですね。すみません」

「謝られても困るが」

「すみ　」「謝られても困るだけだ。気にしなくて良い」

謝ることが癖にでもなっているのか、ナユキが再び謝ろうとするのをコウサカが遮った。

「え、っと　あつ。ありがとうございますっ」

「　どういたしまして」

「はいっ」

ナユキは急に元気になって少し前を歩いていたコウサカの隣に並び、二人は軽い雑談を交わしながら聖堂まで歩いて行った。

それが今日起こったことで一番コウサカの記憶に色濃く残っている出来事。ナユキのことを話していると朔絆が不機嫌になり始めていることをコウサカは感じていた。

『あの女は　』「朔絆。ちょっと出て話してくれ。完全な実体化をしてくれ」

妙にイライラしている朔絆に、コウサカはそう言った。

『　わかった』

案の定、姿を現した朔絆の顔は不機嫌を通り越して険悪けんあくそうだった。

「まずは肩の力を抜け」

コウサカはそう言うのと、傍らに姿を現した朔絆の頭を優しく撫で始めた。すると徐々に朔絆の顔から険悪な色が薄れていった。

「よし、いい顔になったな」

『　バカ』

険悪さは消え、拗すねたような表情になった朔絆に、コウサカは改めて続きを促す。

「それで、あの子がどうした？」

『あのナユキ、って子　。あんま信用しないほうがいい』

「ふむ　？」

朔絆がここまで、はっきりと誰かを訝いぶかしむのは珍しい。苦手な者の前では姿を現さなかったり、口を開かなかつたりすることは多いが。

「何故、そう思う？」

「わっかんないよ。でも、何か嫌な感じがする。えとその
嫉妬しつととかじゃなくて」

「嫌な、感じ？」

朔絆が恥ずかしそうに言った最後の部分は、コウサカの耳には届いていなかった。嫌な感じとは、コウサカもナユキと対面したときに感じたからである。

「うん、なんだろ。たぶん関わると、とんでもないことになりそうなの。そんな感じ」

「それは俺も感じた」

「ねえ、止めようよ。あんなこと言っちゃったけど、今なら謝れば大丈夫だと思うから。」

朔絆は座っているコウサカの右腕を不安そうに両手で掴んだ。その手は微かに震えていた。

「コウサカは腕に触れている朔絆の手の上に優しく手を重ねながら、静かに黙考もくこうした。」

「今は、とにかく目の前のことを片付けよう。考えをまとめるのは、それからでも遅くない」

「わかった」

珍しく答えを先送りにしたコウサカの顔に苦渋の色が滲んでいた。事を見た朔絆は、一抹の不安を覚えながらも小さく頷いた。

「お前はもう少し休んでいろ。今からはじつと虚空を眺めているだけの時間だ」

「うん。また後、でね」

不安そうな表情のまま朔絆の姿が消える。クレイモアから発せられている光は心なしが小さくなっていった。

「一人、コウサカは山道を睨み付けながらも、静かに深く黙考を始めた。」

『ねえ、そういえばさ』

コウサカが黙考を始めて一時間ほど経った時、実体化せず朔絆がコウサカに話しかけた。先ほどの不安は薄れたような声色こわいろだった。「どうした」

端から見れば座ったまま眠っているように見えるコウサカが、微動だにせずはつきりとした声で答えた。

『あの子と話している時に言いかけたのって、何だったの？』

「魔族の行動が活発になっていいることと関係が、と言ったその後のことか」

コウサカは数時間前のことを、少しの逡巡しゆんじゆんもなく口にする。

「それに女神なら俺、いやミレンシアという存在が何なのか。それを答えてくれそうだからな。そう続けようとした」

『ミレンシアという存在　？』

「俺が何故こんなに化け物じみているのか。そして何故、この世界に来たのか　少し前から考えるようになってな」

そこまで言うてから、コウサカは一度深く息を吐き出した。

『あんたは、あんたじゃん　関係ないよ』

「例えば、自分の出生の理由を知らずに生きていると、その理由を知りたくなる。そんな程度の思いだ」

『ホントにそれだけ？』

コウサカが話し終わると、朔絆が不安そうに口を開いた。

「それだけ、とは？」

『元いた世界に帰りたいんじゃないの　？』

「いつの間にか、再び朔絆が完全な実体化をしていた。泣きそうで、

儂げな表情をしながら核心を突くような問い掛けをコウサカにする。

「ねえ　　そうなの？」

「　　コウサカは答えない。ただ静かに目を伏せたただけだった。」

「なんとか言つてよ　　？　　ねえっ　　！」

コウサカは右腕を強く掴まれる。

朔絆にとってコウサカは、精霊石の中から目を覚まして唯一この世界で心から信じられる相手である。父親でも、兄でも、親友でも、または　　。とりあえず、例えは何でもいい。朔絆にとってコウサカとはそんな存在なのである。

「お願いだよ　　何か言つてよおっ　　！」

朔絆が不安から泣きながらコウサカに訴えかけていると、コウサカの手が朔絆の手の上に置かれた。

「　　今はまだ、わからないとしか言えない」

「なにそれ　　なにそれえっ　　！」

コウサカの煮え切らない答えを受け、朔絆はコウサカの腕に抱きつくように頭を押し付けた。

「　　すまない。だが、今はこの答えしか与えてはやれない」
自分の腕に抱きつき、ぐずぐずと泣き出した朔絆の頭を優しく撫でながらコウサカは詫びた。そして、少し目を伏せ考えると口を開いた。

「実はな、俺にも記憶がない」

「へあ　　？」

コウサカの口にした言葉の意味がわからず、朔絆が顔を上げる。

「記憶がない。前にも話したようにソウルストリームやこの世界のこと、それに好み程度なら覚えている」

コウサカはもう一度同じ言葉を繰り返して、自分に起こっていることの全てを朔絆に話し出した。

「だが、もつと根幹こんかんの俺が誰で、何故ここにいて、前にいたはずの世界がどんな世界か、どんな人物が近くにいたか、どんな生活をし

ていたか。そう言ったことが忘れていたという感覚ではなく、文字通り一切記憶から消えている」

『ぐずつ　　だから、わからない、って　　?』

「ああ。それ以外、答えようがない」

コウサカはそう言うと、カバンから手ぬぐいを引っ張り出した。そして意識を集中させる。

「 Y r w y f a m i r i ? (我は氷塊を求める)。
ほら、これで顔を拭け」

『ぐず　　うん、ありがとう』

コウサカはアイスボルトの詠唱を中断し、集約した水を手ぬぐいに湿らせたものを朔絆に渡した。朔絆はそれで、顔を拭う。

「朔絆」

『　　?』

朔絆は顔を拭いながら、コウサカの言葉を聞いた。

「俺の記憶が戻ったら帰るかどうかは分からない。だが、何も言わずに去ることは絶対にしない。今のところは、それで納得してくれ」

『うん　　わかった。あたしは、あんたを信じてる』

「　　ありがとうな、相棒」

コウサカは傍らで顔を拭っている朔絆の頭を、珍しく嬉しげにくしゃくしゃと撫でた。

『えへへ　　』

コウサカの見せた珍しくしつかりと感情を乗せた行動に、朔絆は嬉しげに笑った。

「そっいえば、朔絆」

『ん、なに?』

朔絆の頭を撫でる手を止めて、ふと思いついたようにコウサカが朔絆を見る。

「お前、泣き虫になったな」

『なっ　　!』

コウサカのその言葉に、朔絆は言葉を無くした。

「今日だけで二回目だな。前に一度だけ泣いたところを見た時以来か。確かあれは」
「わあああーっ!? わあああああっ!」

「コウサカが思い出して口にしようとしたことを、朔絆は真っ赤になりながら遮る。

「バ、バツカッ! せつかく良い雰囲気だったのに、いきなり何言い出すのよっ!?!」

「いや、思い出したから話してみようと思ったただけだが」

朔絆の頭から手を離し、コウサカは再び思い出そうとする。

「だ、ダメえーっ! それは思い出さないでっ!」

「何故だ。俺とお前が初めて出会った時の思い出だっと思ったが」

「そうだけど、ダメっ! 絶対、ダメだかんねっ!?!」

「わかった、わかった」

「そう言っと思いつくそうとすることを本当に止めてしまっなのは、コウサカの性分である。」

「やれやれ。まあ、しっかりと見張りをすることにするか」

「そうしなさいっ! ああ、全くもっ」

「そう言っ朔絆は、頭痛でもするように頭を押さえていた。」

「く くくく はははっ」

その光景を見ていたコウサカは、突然笑い出した。

「なに笑ってんのさ」

笑っコウサカを、慥然とした表情を浮かべながら朔絆が睨む。

「は、はは ふう。いや、よく分からない。よくは分からない

が、急に可笑しくなってな」

「なにそれ」

「朔絆、お前が相棒でよかったと改めて思ったよ」

「なっ」

いきなりそんなことを口にするコウサカに、さっきとは違う理由で絶句し赤くなる朔絆。

「い、いきなり何言ってんのさっ! バ、バカあっ!」

それだけ真つ赤になりながら叫ぶと、朔絆は剣に戻ってしまった。
「やれやれ」

再び静かになった小屋の中で、コウサカは山道を睨みつける。

「俺と朔絆に勝てると思うな」

街道の更に奥、遙か先のどこかにいるだろう相手に向かって、鋭く細めた目を光らせたコウサカはそう呟いた。

第三章 その少女の名は（後書き）

「マビノギ」をやったことがあるお方へ。

本文中で出てくるティルコネイルの鍛冶屋は、ゲームとは違い村から見て川向こうではなく、旅館の隣あたりにある設定となっております。

第四章 静かな旅立ち

日が昇り始め月が沈みかけている朝方、ティルコネイルに警鐘の音が鳴り響いた。

村は人々の駆け出す足音で騒がしくなり、門が堅く閉ざされコウサカが夜通し見張りを行なっていた小屋の周りには自警団とまだ怪我が痛む護衛の三人の男達が集まってくる。今頃は東側にクモ達が罫を仕掛けながら展開している。

「案外、炙り出しが早かったですね」

「ああ、そのようだな」

コウサカの軽口にレイナルド先生は眼光を鋭くしながらも答える。その眼光の先には、真つ黒な塊が街道から四百mほど向こうより近づいて来ていた。

「コウサカ　ひとつだけ徹底しろ」

「なんででしょうか？」

レイナルド先生は視線を街道に向けたまま言う。

「魔族が来たら、たぶん戦えるのはお前だけだろう。オオカミは俺達に任せて何があつても魔族を倒そうとしろ。いいな？」

「わかりました」

少し間を空けてコウサカが頷く。

「ふ　よし。来たぞつ、放てえっ！」

距離にして百mほど。全員が矢を放つ。ロングボウの訓練が間に合わなかったためショートボウで。

最大射程四百mを誇るロングボウを扱えればよかったのだが、引き絞るためには四十五kg以上の力が必要であり、ただ弦を引く力以外にも放つ時でも高度な技術が必要なため、素人が扱うには困難な弓なのである。

数にして約二十人が一斉に放った矢がオオカミの塊に飛んでゆき、次々とオオカミ達を貫いていく。

「今回はまた多いな」

昨日来たオオカミ達も多かったが、今度は百近い数のオオカミの大群だった。何十と矢の応酬が続くが、オオカミ達はその数を減らしながらじわじわと距離を詰めてくる。

ティルコネイルの村に入るには二つのルートがある。ひとつはコウサ力達が今守り、オオカミ達が一直線に目指して進んで来ている山道から真っ直ぐ北にある橋のある道。二つ目は東側から回り込んでいくルートである。

予想としてオオカミ達はこの東側にも流れていくと思われていた。だが、実際はただ愚直に橋を目指して殺到してきている。だが、これがかしたら陽動かもしれないため、クモ達を東側から動かすわけにもいかない。

「うわっ！？」

一人の男が驚愕したような声を上げた。何事かと他の者がその男に目を向ける前に、男が驚愕した理由を全員が知る。

「あれもオオカミなのか？」

そこには異様がいた。

外見こそオオカミであるが、普通のオオカミの数倍は巨大で、額に魔族の紋章が浮かび上がり真っ黒な毛皮をしていた。あまりにも異様なモノを見たため、ほとんども者が弓を引く手を緩めかけた。「手を止めるなっ！」

そこでレイナルド先生の一喝が響く。全員が、はっと我に返り弓を引く手に力を込めようとしたその時、

「ぎゃっ！」

前方から飛んできた火球によって防護壁のひとつが吹き飛ぶ。銃眼から狙いをつけていた一人が吹き飛んだ防護壁にぶつかり後方に弾き飛んで気を失った。

「ファイアボルト、だどっ！？」

レイナルド先生が驚愕し叫ぶ。ただ自然界で生きているだけのオオカミに魔法という高度なものを扱えるわけがない。だが、いまそ

れが起こったのだから驚いて当然であろう。

「いえ、多分いまのはあれが放ったんでしょ」

素早く防護壁の穴が空いた部分に移動していたコウサカは、飛び込んで来ようとしてくるオオカミに強烈な蹴りを見舞いながら前方を見据えて言う。

「何が　はっ！　全員、白兵用意っ！！」

疑問を口にしようとしたレイナルド先生は今すべきことの優先順位にすぐ気付いて、自ら剣を抜きながら号令を発する。

「俺の後ろに何人かっ！」

一身だけで防護壁代わりにオオカミ達を防いでいるコウサカが叫ぶ。

後続のオオカミが次々と空いた穴を目掛けて来ているため、さすがに一人では対処しきれず抜けたオオカミ対策に数人をコウサカの後ろに配置。

「せいっ！」

コウサカは渾身の力でバスタードソードで突きを放ち、そのまま手を離す。串刺しにされたオオカミは剣が突き刺さったまま後ろに吹き飛び、後続のオオカミ達にぶつかり一瞬だが流れが止まる。

「やるぞ。朔絆」

「おっけーいっ！」

その一瞬でコウサカはクレイモアを背中から抜きながら、大上段に構える。抜いたクレイモアの刀身は金色の光で包まれ、光輝いていた。

「ぜああっ！」

「吹っ飛ばえーっ！！」

大上段から振り下ろしたクレイモアから光が放たれる。その光は空いた穴に殺到していたオオカミ達を巻き込み、真っ直ぐに大地を削りながら進んだ。

その光は数にして三十余りものオオカミを巻き込み粉碎して往った。そして、そこでオオカミ達の攻撃が止む。

「何者だ？」

コウサカは川幅が二mほどあるアデリア川を完全装備のまま軽々と飛び越え、南の平原に降り立つ。眼前には巨大な黒いオオカミとそれを取り囲む四十ほどまで減ったオオカミ達、それとその陰にもうひとつの異様がいた。

「化け物め　やはりミレンシアの噂は本当だったか」

その異様は人間のような背格好で赤黒いローブを身にまとい顔を隠していた。そのローブにははつきりと魔族の紋章が描かれていた。

「ブラックウイザードというタイプの魔族か」

魔族の言葉に反応せずコウサカをそう呟く。ブラックウイザードは主に魔法に長けたタイプだと文献ぶんげんにある。

『誰が化け物よっ！ そっちの方がよっぽど』

「朔絆、ちよつと黙っている」

朔絆が怒鳴るが、コウサカは口を閉じろという。

『わかった』

「すまない」

朔絆に詫びながらコウサカは相手の一挙手一投足いっきょしゅいつとつそくを見逃さないように注視する。

「攻撃を止めた、と言うことは何か話すことがあるんだな？」

「ふん　その通りだ。ミレンシア」

魔族（声からして男）は、傲然じょうぜんと腕を組む。

「魔族に知り合いはいないはずだ」

「そうだとも。だが、我等あゐらの主は貴様を知っている」

「主？　なんだそれは？」

「女神モリアン様のことだ」

「なに　？」

魔族の男が発した名前を聞いてコウサカは眉をひそめる。

「女神が魔族を操っているだと？」

「その通りだ。私はお前を迎えに来たのだ」

そして、次に魔族の男が発した言葉の意味が分からず、コウサカ

は二の句が継げられなくなる。

「我等はこの世界を救うため、人間と争っている」

「救うだと　　？　　どういうことだ？」

「それは我等の下へ来れば教えてやるう」

「

コウサカは黙り込む。魔族の男が一体何を言っているのか理解できないためだ。

「ねえ」

「大丈夫だ。鵜呑みになどしない」

朔絛の不安そうな声を聞き、コウサカは混乱した頭を冷静に戻す。いま自分がやるべきことも改めて思い至る。

「ひとつだけ聞かせろ」

「いいだろう。言ってみろ」

コウサカの目には透明な光が宿っていた。

「オオカミ達を操りけしかけたのは何故だ？」

「そんなもの決まっている」

コウサカの注視する魔族の男は、薄ら笑いを浮かべながらこう言った。

「人間どもを駆逐するために決まっているだろう？」

「よく、わかった」

コウサカの頭の中でカチリと音が鳴る。それが何なのか記憶のないコウサカには分からない。だが、意識が切り替わる。ただ、ひとつの目的のためだけに。

「貴様は　　殺す」

その目は捕食者のような、それ以上に情け容赦の一切ないモノ。ただ殺すためだけに意識が研ぎ澄まされていく。しかし、魔族の男はそれに全く怯んだ様子もなく溜息を吐いた。

「やれやれ　　人間ども風情に飼いならされて」

魔族の男は組んだ腕を解くと、片腕を軽く挙げた。

「ミレンシアは滅多なことでは死なん。半殺しにして連れ帰るぞ」

そう言いながら、腕を前に振る。

「誰がお前などに なにつ」

オオカミ達が一斉に駆け出す。だが、全てコウサカを避けて防護壁の穴を目指していく。それにコウサカは、はっと我に返る。

「どの道、人間どもは根絶やしにする予定だからな」

「合図を、クモ達を」

コウサカはそう叫びながら振り向き援護に向かおうとしたが、何かが身体にぶつかってコウサカは弾き飛ばされ防護壁の門に激突して橋の上に落ちる。

「が、あつ」

「コウサカっ!？」

火球を作り出してそれを放つ魔法、ファイアボルトを背後から喰らったのだ。だが、強化された胸鎧の背中に当たったため表面が少し炭化しただけで、激突した衝撃以外はダメージはなかった。

「ほお 普通の鎧とは違うようだな。並の奴なら今の一撃で全身黒焦げになるんだが」

「っ!」

コウサカは飛び上がるように起き上がると、魔族の男に向き直る。レイナルド先生の言葉が頭の中で再生される。

「お前とそこでかいのを倒さないと援護にも行けないようだな」

「出来もしないことを言わないほうがいいぞ」

巨大な黒オオカミが前へ歩み出てコウサカと睨み合う。だが、その目には生き物としての光は宿っていないかった。

「ぜったい許さないっ!」

コウサカがクレイモアを構えようとしたところ、朔絆が叫ぶ。それに呼応するようにクレイモアの刀身に帯びている光が強くなった。

「ほお。大した力を持つ精霊だな」

魔族の男は関心したようにクレイモアから激しく放たれている金色の光を見る。そして、無造作に手を前に振る。

「殺れ。首は喰い千切るなよ」

「グオオオオンッ！」

「ちっ　　！」

コウサカは真っ直ぐ走り迫ってくる巨大黒オオカミを、ひとまず横っ飛びで避けようと素早く横向きになるうとする。そこで朔絆が叫んだ。

『あたしをあいつに叩きつけなさいっ！』

「いや、さすがにあの質量を　　」

『信じてよっ！』

「　　ああ。わかつたっ！」

コウサカは横へ向こうとした勢いをそのままクレイモアを重心に一瞬で一回転をし、光輝くクレイモアを巨大オオカミの体軀たいくに叩き付けた。

「グギャオンッ　　！？」

巨大黒オオカミは重量にして、完全武装したコウサカの三倍以上大きさでも倍以上をした巨大な体軀を持つ。

そんな巨大なものが数mも真横へ弾き飛ぶ。ただ立っているところを弾き飛ばしたのではない。真っ直ぐに飛び掛って来ているのだ。自重以上の力が掛かりながら飛び掛って来ているものを易々《やすやす》と真横に弾き飛ばした。

弾き飛ばされた巨大黒オオカミは起き上がらない。クレイモアが叩き付けられた場所は首である。斬り裂かれたわけではないにせよ、巨大な体軀を弾き飛ばすほどの力が首にかかったのである。当然、首の骨は折れるか砕けたのだろう。

「案外、その精霊は掘り出し物かもしれないな。これはいい、ククッ」

取り巻きをあつさりと倒されたというのに魔族の男は顔色ひとつ変えず、むしろ朔絆により興味が増した表情を浮かべていた。

「Ymddangosiad（出でよ）。Diogellu fi（我を守護せよ）」

魔族の男が何かの呪文を唱えると、周りに微かに脈動する四つの光球が現れた。

「いい土産を見つけた」

「笑えない冗談だな」

コウサカは改めて剣の切っ先を魔族の男に向ける。その顔は一切の表情が消えていた。

「貴様はどうせ意識が消えるのだ。その後のことなど気にする必要はない」

「再確認した。お前は確実に殺さなければならない」

そして、ただ殺すということを通じて、凄まじい殺気を全身から発していた。だが、何故か先程よりは意識は研ぎ澄まされていなかった。

「ふん、ほざけ」

その言葉と同時に魔族の男は手を振る。すると四体のウイスプはライトニングボルトを放つ。

「くっく」

コウサカは横っ飛びをして指向性のある雷撃を放つ魔法ライトニングボルトを避ける。だが、着地点にすぐ次のライトニングボルトが放たれてくる。コウサカはそれを空いている左手だけ体を支え側転をしてまた避ける。

ウイスプ達は一体が撃つたら別の一体が次を撃ち、撃つたものが詠唱し直しまだ撃つ。そんな方法で絶えずライトニングボルトを連射してきた。

「くっく、くっく さっきの大口はどうした？」

さらに魔族の男は悠々とファイアボルトを詠唱し放ってくる。いまコウサカがいるのは隠れる場所が何もないただ広い平原である。圧倒的に不利だった。ライトニングボルト程度ならカイトシールドでも防ぐことが出来るが防戦一方なところにトドメに威力の高いファイアボルトが飛んでくるのが目に見えているため、逃げ回るしかない。

『ねえ』

「ぐっ、なんだっ!?!」

少しでも距離を取ろうと、緩やかな円を描くようにコウサカは疾走しながら叫ぶ。

『あたし、あれ多分斬れるよ?』

「本当かつ!?!」

いやだが、前は刀身が壊れると言っ

いなかっただか?」

『うん。でも、今なら大丈夫』

よくわかんないけど大丈夫っ!

「曖昧あいまいだな。行くぞっ!」

『りょーかいつ!』

朔絆の言葉に疑問すら浮かべずに疾走していたコウサカは急停止をし、放たれてきたライトニングボルトに切っ先を向ける。擬似的な雷を発現させているため実際の雷とは比べられないほど遅い。だがそれでも秒速百m以上の速度(実際はそこまで飛ばないが)で迫ってくるそれをはつきりと目視する。

「はっ!」

精霊の力とは想いである。強力であるが一般に扱われていない理由は精霊石が希少だからだけではない。使う者と精霊。これが互いに信じ合う真のパートナーでなければ力を発揮し切らないのである。不安定ゆえに、まず使われない武器であるが使いこなせることが出来れば。

「なっ!?!」

バシン、と音と共にクレイモアで斬られたライトニングボルトが掻き消える。魔族の男はそれに驚愕した。

「これはっ、いいぞ、朔絆っ!」

続けて放たれてきたライトニングボルトをさらに弾き消したコウサカは、決定的な勝利の確信を深めて魔族の男に向かって走り始める。

「なんだ、あの精霊はっ!?!」

ライトニングボルトを弾き消しながら疾走してくるコウサカに、

魔族の男は動揺しながらファイアボルトではなく連射の利くライトニングボルトを詠唱し、ウィスプ達と同じように連射を始める。

「
コウサカはクレイモアを体の前に真横にしながら疾走する。放たれたライトニングボルトをほんの少し、コンマ秒の間に僅かにクレイモアの角度の修正を加えながら弾き続ける。」

「 Y r w y f a m i r i ? (我は氷塊を求める)

「
コウサカは弾きながらアイスボルトを詠唱し呼び出す。

コンマ秒の間にライトニングボルトを弾きながらアイスボルトを詠唱することは、並大抵の集中力ではない。何十桁もの暗算をしながら、格闘技の試合で相手の拳を見切り一瞬で避け続けているようなものである。」

「 A t t a c k (往け)っ! 」

疾走中なため、集約があまり上手いかず少し小振りな氷塊であるが、出来たアイスボルト二つをウィスプ達に浴びせる。詠唱し直している最中のウィスプを狙ったため動けず、二体のウィスプがアイスボルトの直撃を受けて光を四散させながら消える。

「くそっ ! 化け物めっ! 」

魔族の男はそう吐き捨てると、懐から何かを取り出し詠唱を始める。足元には魔法陣が浮かび上がる。

「 逃がさん 」

「
酷薄に言い放ったコウサカはいつの間にか残り二体のウィスプも倒し、ただ殺すだけの目をして魔族の男の目の前まで迫っていた。だが、魔族の男は魔法陣から溢れ始めた眩いほどの光に包まれ始めていた。それにコウサカの目は少し眩み、目を細めて突進の勢いをそのまま神速の突きを放つ。」

「 ぐえっ ! ? で、 D y c h w e l y d (帰還)っ! 」

「 外したか 」

コウサカの突きは魔族の男の右肩を貫いていたが、それだけだっ

も負っていなかった。首や大きな血管の走っている部位は全員がプロテクターを付け、守っていたためだ。

だが、クモ達は違う。頭部が、つまり致命的な部位が低い位置にあるためオオカミに噛まれただけでもかなり致命的な傷になる。そのせいで、クモの死骸もオオカミの死骸に混ざっていた。

「ひとまず、傷の手当が最優先だ。全員、無理して動くな。コウサカ、デイリスさんを呼んできてくれ」

「わかりました」

レイナルド先生自身もかなりの傷を負っていた。致命傷ではないにせよ、噛み千切られた部分から血が流れ続けている。他の者はそれ以下とは言え、体中から血を流している。

ただ、苦痛に顔をしかめながらも涙を浮かべながらクモの死骸に黙禱もくとうをしている者が多かった。モンスターではあるが、村の人々とクモ達は持ちつ持たれつと共同体であった。言葉は通じずとも村の隣人であり、自分達と同じく村の守り手であった。

コウサカが村人達が避難所として集まっている聖堂に向かい中に入ると、村人達は背中を受けたファイアボルト以外に目立った傷を受けていないコウサカを見て、安堵の表情を浮かべた。コウサカはデイリスを見つけると声をかけた。

「デイリスさん、怪我人の手当てをお願いします」

「わかったわ」

と、ふとコウサカはヌキと目が合った。事情は村人達から聞いたのだから、コウサカを見ると安心したように微笑んだ。

「コウサカはとりあえず、小さく頷いておいた。不思議な少女なため、まだ扱い方がわかっていないためだ。」

「怪我人はどのくらいいるの？」

「あ、ああ。それは」

コウサカはヌキから視線を外すと、デイリスと共に外へ出た。

「何だ、これは」

手当ても一段落した頃、異様なことが起こった。

魔操獣まそうじゅうと化していたオオカミ達の死骸が一気に腐敗を始め、あっという間に骨すらも風化して何も残さず消滅した。

「昨日のオオカミ達の死骸も消えている。魔族の支配が解けたせいかな？」

クモ達の死骸はしつかりと残っていることから、魔符が関係しているということがわかる。

「とにかく、怪我人を早く運びましょう」

目の前で起こった異様に全員が茫然ぼうぜんとしている中、コウサカがそう言う。それに傷の軽い者が肩を貸して、怪我人を運び始めた。クモ達は何とか自力で動けるようだった。

「俺は、残って警戒をしておきます」

「ああ、頼む。すまん、お前にはかり負担をかけて」

肩を貸してもらい立ち上がったレイナルド先生が、すまなそうに言う。

「いえ。まともに動けるのが俺しかいない以上、俺がやるしかないでしょう」

「すまない」

もう一度、レイナルド先生は詫びて聖堂に歩いて行った。他の者も同じように詫びながら聖堂に向かって行った。

《 頼ンダぞ》

「ああ、任せろ」

体中から体液を流しながらボスクモも、そう詫びを入れる。いつもの不快な感情は一切伝わってこなかった。

痛々しい自警団とクモ達を見送ってからコウサカは南の平原に行き、飛ばしたバスタードソードを回収した。不気味に赤い血だけが刀身には残っていた。

コウサカは防護壁の前にある橋の上に行きそこからアデリア川の

水で手ぬぐいを濡らして、腰を下ろすとクレイモアを背中から下ろし刀身を拭い始めた。先ほど一応は拭い取ったがやはり完全に拭いきれておらず、刀身には微かに血の痕が残っていた。

「朔絆、大丈夫か？」

刀身を丁寧ていねいに拭いながら、コウサカは朔絆に声をかける。さつきから一切声を発しないため、心配なのだ。

「朔絆？」

「ん あつ。ごめん、何？」

「 いや、ゆつくり休め」

「 うん 」

朔絆の声には深い疲労の色が見えた。魔法すらも弾き飛ばすほどの力を解放したのだ。それだけ消耗がいつもの比ではないのだろう。川のせせらぎと、風に揺れる草の音だけが静かに場を支配していた。さつき起こったことも幻と思えるほどにのどかな時間だった。

「 よし 」

刀身を綺麗にし終わり湿気を乾いた手ぬぐいで丁寧に拭いきり、クレイモアを背中に戻したコウサカはふと、寂しく思う。

いつもなら刀身を拭っていると朔絆が口うるさく出て来るからだ。今はそんなことを気にすることが出来ないほど消耗してしまっているのだろう。

「 」

そのことに、コウサカは思う。おそらくは、もう今までの平穏な日常を送ることは出来ないだろうと。

それに、ともうひとつ思う。自分はどういうわけか魔族に目をつけられている。自分がいるだけが要因ではないだろうが、少なくとも自分がいることで確実に敵の目はティルコネイルに向いてしまう。

（それならば ）

コウサカはひとつの考えに行き着く。だが、行き着くと同時に顔をしかめる。自惚れ《うぬぼ》をしているわけではないが、たぶん

自分がいなくなれば村人達は悲しむだろうと思ったからだ。礼に失するが、ひとつの方法をコウサカは思いついた。

「まさに、か」

馬鹿馬鹿しい方法であるが、それしかないと言ったコウサカは思いながら拭い終わったクレイモアの刀身を優しく撫でる。

そして、自分の無意識に発した殺気。あれで恐らく

『なに考えてるか知んないけど』

姿は現さず、朔絆が声を上げる。

「無理は」

『してないよ。たぶん、今ひどい顔してるから出て行けないけど』

「そうか」

あまりにもいつもと比べ弱々しい朔絆にコウサカは、今更ながら後悔の念を抱く。だが、信賴すると言った以上それを口にするのは裏切り行為に等しい。その考えを打ち消し、コウサカは話の続きを朔絆に促す。

「ところで、話の続きは？」

『あ、ああ、うん。え、っと』

「ないなら、休んでおけ。無理をしても疲れを引きずる」

『はあ、そうする。タイミング外しちゃったし』

朔絆の呆れたような溜息が聞こえた。

「？」

コウサカの頭の上には？マークがいくつも浮かんでいたが、それつきり朔絆は静かになった。朔絆に答える意思がないと分かるとコウサカは疑問をすぐに放棄して、静かに街道を警戒することにした。兜を脱ぎ傍らに置き、今後のことに思案を深めながら。

日は昇りきり、正午になった頃。橋の上に腰を下ろしたままのコ

ウサカは後ろから近づいてくる足音を感じ取る。明らかに素人の足運びだとわかる。

「あの」

「君か」

コウサカは振り返りもせず、声だけで相手が誰なのかわかった。聞き覚えのない声であるため逆に分かり易かったのである。ナユキである。何やらランチバスケットと思われるものを二つ手に持っている。

「何か用でも？」

「皆さん、朝から何も食べていなかったのだから」

コウサカは半身を捻ってナユキを見る。ナユキは手に持ったランチバスケットのひとつを重そうに地面に下ろすと、もうひとつのランチボックスの中からナプキンに包まれたサンドイッチを取り出した。

「ああ、なるほど」

色々と考えていたせいか気付かず、思い出した途端に腹の虫が鳴いた。

「くす。はい、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

「あ。あと、精霊さんにも」

コウサカにサンドイッチを手渡し、ナユキはもうひとつのバスケットを開ける。中には雑貨類や武器類といった、要するに朝鮮の食べ物が入っていた。

「ありがとう」

朔絆は素直に礼を言った。普段からすればとても珍しい。それだけ余裕がないということだろう。朔絆は実体化をして、バスケットの中に入った。一瞬見えた顔には疲れの色が残っていた。

「じゃあ、わたしはこれで」

「待った」

聖堂の方に帰ろうとしたナユキをコウサカは呼び止めた。

「君には話しておいた方がいいと思っただけ」

「？ はい、なんででしょうか？」

ナユキは不思議そうに首を傾げた。

「女神のことだ」

「っ！」

ナユキは目を見開き、言葉もなく驚いた様子だった。

「なにか女神様のことがわかったんですかっ!？」

「俺は女神を探しに、いや多分助けに行こうと思っただけ」

「え？」

「君が見た女神の夢想は、単なる夢ではないのだろう。探しに行くのなら君も連れて行かなくてはならないだと思っただけ。どこにあるかわからないが、おそらく魔族の本拠地に行くことになる。そんな危険な旅になるが君は来たいと思っただけ？」

「はいっ！ 当たり前ですっ！」

コウサカは静かに目を伏せる。

「そうか。ただし、他言無用だ。近いうちに出るから、もう少しマシな格好を用意しておいてくれ」

「はい、わかりました」

「引き止めて悪かった」

「いえ、では」

そう言うとナユキは小走りに聖堂に向かって行った。

『なんで、あの子を？』

それまで黙っていた朔絆が口を開いた。食べて元気が出たのだから、声に張りが戻っていた。声にいつもの棘がある。

「勘でしかないが、たぶん魔族の本拠地を見つければあの子が必要なんだと思う。そんな目で見ると、俺だって、外道な方法だと思っただけ」

『あたしが言ったのはそういう意味だけじゃないんだけど。ま、いいか』

「どづいことだ？」

『べつに。まあ、とにかく　その』

食べ終わった朔絆がバスケツトの中から、ひょこつと出てきて最後に言い辛そうにひとつだけ付け足した。

『あたしはあんたを信じてどこまでも付いて行く』

「　ああ、俺も信頼しているよ。相棒」

コウサカは目を瞑り、少し嬉しそうにそう言った。

『え、えつと　それ、それだけっ！』

朔絆は真っ赤になりながら姿を消した。そんな朔絆のいつもの姿を見て、コウサカは今まで送ってきたティルコネイルの日常を思い出す。

「　やはり、寂しいものだな」

たった数ヶ月だが、平穏なティルコネイルで送ってきた日常がコウサカの頭の中を通り過ぎる。コウサカは立ち上がり、村長の家へと向かった。

「　本当にいいのか？　何度も言うが危険だ」

「　大丈夫です。わたしは女神様に会っんです」

「　わかった」

ナユキのその言葉を確認すると、コウサカは深夜にも関わらず見送りに来てくれた村長に向き直る。

「　すみません。勝手に決めてしまっって」

「　いや、構わないよ。コウサカ、君には助けられてばかりだった。

このくらいの我がままは安いよ」

「　本当にすみません」

コウサカは深々と村長に頭を下げる。

「この村には護衛で来ていたあの三人が残ってくれと言う。ダンバートン側もそれを了承した。大丈夫だから安心して行っておいで。

村の者達は悲しむだろっがね」

「　事情云々はお願ひします」

「ああ、勿論。何とか説得してみるよ。まあ、君の書いた手紙だけで納得してくれると思うがね」

コウサカは村人、八十二人全員に向けて手紙を書いた。一人ひとりとの出会いから始まり、今まであった各々との出来事を詳細に書き出して、最後にはお礼で締めくくってある。特にお世話になった村長や、朔絆と仲の良かったベビンへの手紙は長文となった。

「ダンバートンにはすでにフクロウ便で伝えてある。この書状を官庁の受付に見せなさい」

村長は一通の手紙をコウサカに渡す。

「何から何まで、本当にありがとうございます」

「いやいや。言っただろう、君には助けられてばかりだ。このぐらいは安い」

そして、村長は少し寂しそうな表情を浮かべる。

「では、達者でね。皆で待っているよ」

「はい。必ず戻ってきます」

最後に村長と握手をして、コウサカも馬車に乗り込む。乗り込んだことを確認すると馬車は出発した。

「村の人たち、すごく良い人ばかりでしたね。たった数日だけでしたが、とてもお世話になりました」

「そうだな」

コウサカが乗り込むとナユキが話しかけてきた。村人達とはすでかなり仲良くなっていたようだった。それだけに何も言わずにいなくなることを申し訳なく思っているのだろう。と、朔絆が実体化して出てくる。

「なにいつてんの。終わらせて戻ってきたら謝らばいいでしょうが」

「それも、そうですね。ありがとう、精霊さん。気にしてくれて」

『べっ、べっ、べっ、べっ』

「くすくす」

「な、なに笑ってんのよっ！」

コウサカはすっかり仲良くなった（？）二人を見て、小さく微笑んだ。実際は実体化した朔絆がナユキに食って掛かっているだけだが。

「あ、コウサカさん」

「？」

コウサカの視線に気付いてナユキが向き直った。

「頑張りましょうねっ！」

「あ、ああ。そうだな、頑張るとしよう」

「はいっ！」

コウサカは一瞬ポカンとしたが、そう答えた。それにナユキは満面の笑みを浮かべて答えた。

「」

一方、朔絆は苦々《にがにが》しくコウサカを睨んだ。と、コウサカが手を伸ばして朔絆の頭に手を乗せた。

「頼りにしているぞ、相棒」

「バーカ」

一転して恥ずかしそうな表情になった朔絆はそう言い残して姿を消した。

「あれ、精霊さんは？」

「ああ、色々あったからな。疲れて寝たんだろう。君も寝るといい。ダンバートンまでは半日以上かかるからな」

「？ はい。なら、そうさせてもらいます」

ガタゴトと揺れる馬車で素人が早々寝られるわけがないのだが、ナユキはあつという間に寝息を立て始めた。村の中で色々と手伝っていたようだったから、だいぶ疲れていたのかもしれない。

ナユキの寝顔を見て、コウサカは思った。世界がどうかは実感が沸かないが、ティルコネイルの人々がこういう安らかに眠れる場所を護るために戦おうと改めて思い至る。そして、戦いが終わったら必ず戻ってこようと。

「 帰ってきたら散々怒られるだろうがな」

コウサカはそう呟いて声には出さず笑った。寂しげに、悲しげに、申し訳なさそうに。

ダンバートンを目指し、馬車は多少揺れながら走って行った。

第五章 城郭都市ダンバートン

深夜の街道を揺れながら馬車が走っている。コウサカの身体もそれに合わせて右へ左へと少し傾く。

御者台きよしやだいに灯るランプ以外には、月明かりしか光源のない薄暗い荷台の中で一人コウサカだけが起きていた。そして、自分の手をただじっと見つめていた。

（あの男を殺すと言った、その後　俺は確かに　　）
ぐっ、とコウサカは拳こぶしを握る。だが、何も起こらない。何も思い出されない。

（　　止めよう。記憶のない俺には詮無いことだ）
考えを振り払って、コウサカは向かべき場所のヒントをくれたタルラークのことを思い出した。

コウサカがティルコネイルを出発する前、手紙を書く以外にも行なったことがある。それは村長に会いに行った時のこと。

「三戦士　、ですか？」

「そう。君も知っているタルラークという男のことだよ」

村長には話しておこうと村長の家に訪れたコウサカは、村長に魔族と女神のことを話していると村長からその言葉が出た。

タルラーク。

理想郷ティルナノイを求めて旅立ち、消えた三戦士のドルイド。魔導士としての才能が豊かで若くしてドルイドの高僧であった。以前、とある事件によって瀕死の重傷を負い、その傷を癒すため今もマナハーブというマナを内在したハーブを摂取しなければならぬ身体になった。

マナハーブの摂取時はクマの姿へとどうい魔法か分からないが

変身する。それは、マナハーブは適切に処置してから服用しないと人間の身体では害を及ぼす薬草で、拒絶反応を起こすためである。何故、クマの姿を選んだのかは不明。

「以前、とある二人と共に各地のダンジョンを巡り、旅を続けながら魔族のことを調べていた。たぶん、話を聞いておいて損はないよ」

一瞬、村長の顔に物憂げな表情が見えたがすぐに消えた。

「しかし、話すでしょうか。あの様子では、とても話すとは思えないのですが」

コウサカは以前、村長の頼みでタルラークの住むティルコネイルより更に北、雪深いシドスネッターの奥にある山小屋までマナハーブを届けに行ったことがある。その時に見たタルラークの様相はまるで世捨て人のそれだった。朔絆の契約の時も。

「・・・これを」

村長は表情を曇らせながら一通の、少し色褪せた手紙をコウサカに渡す。

「・・・おそらくタルラークもこれを見れば、協力してくれるだろう」

コウサカは手紙の表裏をみるが宛名や差出人の名前などはなく、ただ裏に何かの絵のような下手な文字のような、よくわからない記号のようなだけがあった。

「・・・本当にいいのですか？ かなり大事な手紙のようですが」

「構わないよ。あの子も、きつと・・・」

「あの子・・・？」

「ああ、いや。こつちの話だよ。気にしないで」

村長の顔に苦しげな表情が一瞬浮かんだことをコウサカは見逃さなかった。

「・・・わかりました」

コウサカはこの事は今後、口にしないように心に誓った。今まで

村長のこんなに苦しげな表情を見たことがなかった。

「タルラークさんの下へ行って見ます」

「ああ、そうか。話を聞けるといいね」

コウサカは椅子から立ち上がると村長に一礼し、シドスネッターへと向かった。

「・・・確か、マナハーブの補充にはまだ日があったと思いますがタルラークはコウサカと認めると、山小屋の中に入れた。」

「いえ、今回は違う目的で来ました」

「・・・違う目的、ですか？」

「これを」

「・・・？」

コウサカはタルラークにダンカンから預かった手紙を渡す。タルラークもコウサカが行なったように何となく表裏を確認する。

「・・・っ！ これは・・・」

タルラークは裏にあったよく分からない記号を見て、目を見開いた。コウサカはタルラークから初めて感情らしい感情を目にした。

「これを、どこで・・・？」

「ダンカン村長より預かりました」

「そうですか・・・ダンカンさんが」

タルラークは沈痛な面持ちとなった。

「・・・こんなものをわざわざ私に渡すということは、何か頼み事があるのですね？」

「はい。タルラークさんは、以前魔族について調べていたと村長より聞きました。魔族の本拠地について何かわかりませんか？」

魔族の本拠地、という言葉でタルラークの顔色が変わった。目を細め、厳しい表情を浮かべる。

「・・・一体、何故そんなことを聞くのですか？」

「それは」

コウサカは魔族の襲撃と女神、それにナユキの夢について話した。
「・・・ティルナノイ。確かに心当たりはあります」

「それは一体・・・？」

タルラークはさつきよりも沈痛そうで、苦しげな表情を浮かべながら話す。

「・・・私はティルナノイという場所に行ったことがあります。最も、あそこは到底楽園などと言えるものではなかったですが・・・」

「・・・そこに行く方法は？」

「・・・少し、待っていてください」

そう言うとタルラークは奥にある卓に向かうと、その上で何かを書き始めた。

「ダンバートンの聖堂にクリステルという女性がいます。その女性にこの手紙を。あと聖堂のメイブン司祭にはこの手紙を。これはあなたに」

タルラークはそう言って三通の手紙をコウサカに手渡した。

「・・・あなたなら、もしかしたら」

「？ 何です？」

「・・・いえ。それともうひとつ。グラスギブネンという巨人についてです」

「グラス、ギブネン・・・？」

「魔族の召喚しようとしていた太古の怪物ですよ・・・」

大きさは約七m前後、四本の腕を持ち、二本足で立つ魔導生命体だと言う。

その昔、現エイリフ王国の建国するよりも遙か以前、古のウレイいししえド王国を治め、強力な力を持っていた人間族。パルホロンと魔族。ポウオールとの戦いでその姿が確認され、現在ウルラ大陸に住むトウアハ・デ・ダナン族よりも遙かに強かったパルホロン族がたった一体のグラスギブネンを打ち倒すのに数万人の犠牲を払った。だが、グラスギブネンの息絶えながら吐き出された毒と暗黒のマナにより、

今でも戦いの舞台となったセンマイ平原は人の住めない土地なつてしまった。そして、その戦いで壊滅的打撃を受けたパルホロン族は、強大だった力のほとんどを失い滅んだとされている。

そうタルラークは深刻な表情で語った。

「・・・なるほど。もし魔族の本拠地・・・ティルナノイまで行けたとしてもそいつと戦わなければならない・・・。そういうことですか」

「・・・はつきり言って、いくらあなたがミレンシアと言っても勝ち目はないでしょう。それでも行くのですか？」

タルラークの目には光りがあった。修羅場を経験し、生死の境を見た者だけが持つそれだ。

「大層な大儀たいぎや志こころざしはないですが・・・。ただ、襲撃してきた魔族の男・・・奴だけは野放しに出来ない・・・。それと女神と会いたがっている子の願いを叶えついでに、俺も聞いてみたいことがあるので」

「・・・そんな理由で命をかけるか？」

「それともうひとつ・・・ティルコネイルの人たちには世話になりましたから、その人たちを守りたい。まあ、俺にやれることがあるならやり切つてから死にたいのです」

コウサカは最後の部分に笑みを見せながら言い放った。

「そう、ですか・・・」

タルラークは一度目を伏せると、ゆっくりと息を吐き出した。その顔はいつもの悄然しんせつとしたものではなく、もっと人間らしさが浮かび上がっていた。

「私に出来るのはここまでです。こんな病み上がりな身体では、足手まといになるだけですから」

「いえ、大助かりです。本当にありがとうございます」

コウサカは深々と頭を下げた。

「・・・ご武運を祈ります」

もう一度一礼をすると、コウサカは山小屋を出て行った。

「……マリー」

色褪せた手紙の裏の記号のようなものを見て、タルラークは一人そう呟いた。

魔操獣まそうじゅうの一件でしばらく閉鎖されることになった伐採キャンプを馬車ばしやが通り過ぎてしばらく経った頃。

コウサカは馬車に揺られながらタルラークとの会話を思い出しながら、道具入れの大きなカバンから小瓶こびんを取り出す。その中には黒いバラが入っていた。タルラークからの手紙をティルコネイルの男性司祭、メイブン司祭に渡すと代わりに渡されたものである。クリステル司祭という女性に手紙と一緒に渡してほしいのだという。

「……」

コウサカは再びカバンの中に小瓶を戻すと馬車の先頭、御者ごしやの隣に身を乗り出す。すでに日は昇り辺りは明るくなっていた。

「何もなくて何よりだ」

「……それが返って不気味ですけどね」

手綱たじなを握っていた御者にコウサカが声をかけると、不安を隠さずに御者は言った。ティルコネイルの一件、それと山道の所々真っ赤に染まった地面を通ってきて、精神的に堪こたえているのだろう。

「不気味なだけで何もないならそれでいいと思うが」

「まあ、それはそうなんです……」

そう言われて御者は不安そうな顔のまま、困ったように頭を掻いた。不安は不安だが、確かに何も起こっていないため言う言葉が出ないのだろう。

「もうすぐ森も抜ける。あまり気にせずに」

「そう、ですね……。そうします」

コウサカは幾分か表情が晴れた御者から離れ、荷台へ戻ると納箱などで狭せまい苦しいが腰を下ろす。

「ん……んんう……。あ、おはようございます……」

「朝と言うより昼だがな。すでに」

コウサカが腰を下ろすと、ちょうどナユキが寝惚け半分で目を覚ましていた。

「寝心地はどうだった？」

「ちよつとだけ、身体が痛いです・・・」

少し恥ずかしそうにナユキは起き上がる。

「慣れない者には厳しかったか。まあ、夜通し徒歩で来るよりはマシだと思って納得してくれ」

「そうですね・・・歩いてたら大変でした」

ナユキは見るからに体力が無さそうだった。徒歩で来ていたら夜通し歩くどころか途中で野宿しなければならなかっただろう。

ちなみに、馬車が大型で牽く馬も重種だったため車速が遅かった。コウサカだけでダンバートンに向かっていたら半日以上どころか数時間も掛からずに到着していただろう。

「しかし、なかなか似合っているな。マシな格好を、と言ったがそこまでしつかりしたものを身に着けてくるとは」

「村長さんがわざわざ用意してくれて饒別だつて・・・」

ナユキはそう言いながら身に着けている鎧を大事そうに撫でた。

今、ナユキはワンピース姿ではない。らふティオズ・アーマーという胴体を覆う緩やかな形をしたプレートアーマーと黒いシヨートパンツ、黒いニーハイソックスで包んだ足はニーハイブーツ、腕も深い蒼に金色で紋章のような細工が施されている前腕の中ほどまで覆うエルビンググローブという装備に身を包んでいた。

ちなみに、コウサカの装備とは比べるべくもないが普通の少女が身に付けられる重量ではない。だが、ナユキもミレンシアなため平気である。

「ちよつと・・・、肩がすーすーしますけどね。あはは」

そう言っ腕を交差するようにナユキは自分の露出している肩を抱いて、寝るときに使っていた毛布を手繰り寄せた。鎧の関係上、覆われているのは胴体だけで腕や足はほとんどの部分が露出している。他のグローブやブーツなどで補ってはいるが寒いのだろう。

「寒いのか？」

「あ、ちよつとだけですよ。ちよつとだけ・・・」

その言葉とは裏腹に寒いという言葉に反応したのか、明らか寒気が差したようだった。ふと、コウサカは思い至る。

「少し待て」

「？」

ナユキの頭の上に？マークが浮かんだが、コウサカはナユキの手繰り寄せた毛布を断ってから渡してもらおう。毛布にはまだナユキの体温が残っていた。

コウサカは毛布を内側から手で支え、テントのような形になったその中にもう片方の手を入れる。

「・・・Rwyn gobewithio yfflam（我は火炎を求める）・・・」

そこでファイアボルトの詠唱を行なう。ファイアボルトの詠唱はアイスボルトの詠唱よりも何倍も難しい。マナを操って空気中の水分を集めてそれを氷結させることは案外簡単だが、火を起こすとなると一気に難易度が跳ね上がる。

一般に火が点火するには、可燃物、酸素ガスのような酸化剤、これらの混合物が引火点を越えるための熱が必要である。分かりにくいと思うので摩擦熱を例に説明を。『何かと何か』を摩擦し続けることで発火する温度、つまり引火点に達することで火が起こるのである。

魔法で火を起こす場合この『何かと何か』が問題なのである。それは空気中の微粒子であったり、マナ自体の素粒子であったりとするのは人それぞれであるが、それをマナを感じて見つけ操り、それを凄まじい勢いで摩擦させ発火させなければならぬ。そして発火させた火の元、火の粉のようなものをさらに巨大なものにしなければならぬため、マナを操り周囲の空気をその火の粉に集中させる。それが火になり炎になり、そうして大きくなって初めて実用化できる『火』という火力を生み出すことが出来る。

「これを被^{かぶ}っている」

「・・・？ わっ、あつたかあい・・・」

暖め終わった毛布をコウサカがナユキに被せてやると、幸せそうな声が聞こえてきた。

「ありがとうございます。あ・・・すみません、ご迷惑かけて・・・」

ナユキはお礼を言った後にコウサカが何をしてくれたのかを理解して、顔を赤らめながら謝った。

「いや」

コウサカはふう、と一息を吐く。そこで朔^{さつき}絆が実体化して出てきた。かなり不機嫌な顔で。

「・・・まだ着かないの？」

「体感時間的に考えればもうしばらくすれば着くだろう。腹でも空いたのか？」

「・・・フンッ」

そう吐き捨てるように言うと朔絆はコウサカの肩に座った。

「どうかしたのか？」

「べっつにい・・・」

「ふむ」

理由は分からないが朔絆の機嫌が悪いことを察して、コウサカは肩をすくめた。

「？」

コウサカと朔絆のそんな様子にナユキは小首を傾げた。そんな風に話していると、

「ダンバートンが見えたぞー」

御者が後ろを振り返りながら言った。馬車はいつの間にか森を抜けて、ダンバートンに続く見晴らしの良い街道に出ていた。

「これはすごいな・・・」

コウサカは啞^{あせひん}然としたようで言葉もないようだった。ナユキも、先ほどまで不機嫌だった朔絆も小さく口を開けながらダンバートン

を見て茫然とした。

まず目に付いたのはその壮大さだった。まだ何kmかは離れてい
るはずが、巨大さがよくわかる。高さ10mはあるとかというほどの
城壁が一辺500mは伸び、街を正方形に囲っていた。起伏の少ない
平野に立っているため、よく目立つ。中にはもう入らないのか城壁
の外にもかなりの数の家が城壁にびったり寄り添うように数百ある
が、普通の家がまるでおもちゃのように小さい。街の周りには広大
な田畑が広がり、農業に従事している大勢の人々が見られた。平野
はティルコネイルの何十倍もの広さだろう。

ダンバートンはエイリフ王国の東端に位置する大都市である。交
通の要所として北にはトウガルドアイルを経てティルコネイルへ、
南にガイレフを経て鉦山都市バンホールへ、西にオスナサイルを経
て湖畔都市イメンハマへ、北西にアブネアを経て城塞都市タルティ
ーンへ向かうことが出来る。そのため、ダンバートンは商業都市と
してもウルラ大陸で他に類を見ないほど栄えている。

この街を守っているのはウルラ大陸最大のギルド『ダンブレテン』
である。ギルド構成員約千人を数える巨大ギルドで、様々な依頼を
こなしながらもダンバートンの守り手として日々腕を磨いている。

「良い意味で想像を裏切られたな・・・」

「どうだい、すごいだろう?」

コウサカから溜息が漏れると馬車に同乗している商人が誇らしげ
に言った。

「ああ、これはさすがに驚いた」

「だろう? 俺達の自慢の街さ」

商人は嬉しげに笑みを見せながら言う。他の商人達も笑みを浮か
べていた。

「誇りたくもなるだろうな。これほどの街なら」

これだけの規模の城壁と街をどのくらいの年月をかけて建造した
のだろうかと思いが、コウサカは商人の言葉を肯定した。

「今まで魔族の奴等と小競り合いが何度もあったが、全勝だぜ?」

怖いもんなしだっ！」

「小競り合い？ 魔族が襲撃して来ているのか？」

商人の一人が言い放った言葉に、コウサカは目を細める。

「ああ、最近になって特に多くなってきたんだが、それでも余裕よ
おっ！」

「なるほど。ということは、あれは歩哨か」

コウサカは農作業をするわけでも何か作業に取り掛かるわけでもなく、ただウロウロとそこら辺を歩き回っている者達に目を向ける。その眼光は鋭い。

「ダンブレテンのハンターさん達だ。ああやって、農作業している奴等を守ってくれてんだ。一人ひとりが笛を持っていて何か起こったらそれを鳴らして仲間がすぐに駆けつける、ってことらしいぜ」
「なるほどな・・・」

コウサカは関心してまた溜息を漏らす。テイルコネイルの自警団とは規模も個々人の力量も組織力もまさに桁違いである。

馬車は緩やかに曲がった街道を進み、ダンバートンの北門を目指した。

横幅二、三mはある大型馬車が楽々すれ違うことの出来るほどの巨大な門を通り過ぎたところで、コウサカ達は下ろしてもらった。街道から門までの道を家々が、露天が囲むようであった。まだ門からすぐだというのにすでに多くの人が行き交っており、活気に溢れている。地面には石畳いしだたみが敷かれ、しっかりと舗装ほそつされた地面はテイルコネイルの土がむき出しで当たり前なことに慣れた者には新鮮だった。

商人達に礼を言いながら別れると、コウサカ達は今居る北門からダンバートン領主のいる官庁かんちやうを目指すことにした。商人達の話からすれば、中央区にある一番背の高い建物だと、多少曖昧あいまいな言い方で意地悪く教えてくれた。

「にぎやかですね・・・」

ナユキは興味津々といった風で周りをしきりにキョロキョロと見渡している。まだ入ったばかりの位置だというのに露天が至るところに出て食べ物や小物、他にも武器の叩き売りまでやっている露天がある。

「あ。あの剣、おいしそう・・・」

朔絆も違う意味で興味津々といった風だった。朔絆は剣の中だが、何となくコウサカは朔絆の視線が剣の置かれた露天に注がれているとわかった。それも値段が張りそうな剣ばかり並んだ。

「朔絆、さすがに無理だ。というより食い意地を張るな」

「なっ!? ち、ちがつっ! あ、あれはその、えっと・・・そ、そう! いい剣だなっつ!」

「イコール美味そう、ってことだよな。お前にとって」

「うっ・・・バ、バカあ」

そんなコウサカと朔絆のやり取りを行き交う人々は怪訝けげんそうな視線を向けていた。客観的に見れば鎧の男がどこからか聞こえる声と話している。と、コウサカがその視線に気付く。

「ああ。これは精霊武器だ。いまのは精霊と話していた」

そう周りに言いながらコウサカが背中から金色に光り輝くクレイモアを抜いて見せると、人々の視線は物珍しそうなものに変わった。「そういえば、ナユキはどこだ?」

剣を背中に戻しながら、ふと気付いたようにコウサカは左右を見渡す。と、少し離れたところでナユキが小物を扱っている露天の主人に捕まってしきりに何かを勧められてオロオロという様子が目に入った。

「やれやれ・・・」

コウサカは小さく溜息を吐きながらナユキの下へと向かった。

「キミにはこれなんてよく似合うよ、どうだい?」

「い、いえっ。あの、わたし・・・」

「なら、こっちは値段も手頃だしよくないかい?」

「あ、あのですから・・・」
「待った」

ナユキと主人の間に溜息を吐きながらコウサカは割り込んだ。

「あ、コウサカさんっ・・・！」

ナユキの顔に安堵の色が浮かんだ。

「おや、彼氏さんも一緒だったか。こっちのペアリングなんて、どうだい？」

「か、かれしっ・・・!?」 『ぬわにいつー!』
「・・・はああ」

ナユキは『彼氏』という言葉に顔を真っ赤にし、朔絆はものすごい勢いで実体化して飛び出て来た。コウサカは、一人明らかに面倒なことになる予感に深い溜息を吐いた。

「なっ・・・なんだい、このちっこい子はっ!?!」

精霊など見たことがないのだろう露天の主人はいきなり目の前に現れた小さな少女に、目を見開いて驚いた。

「・・・朔絆、今後同じことを繰り返しそうだから俺が言うまで入っっていてくれ。主人、その子は精霊だ。この剣のな」

コウサカが多少ウンザリと朔絆に言いながら、さつきも行なったように背中のの光り輝いているクレイモアを抜いて主人に見せた。

『・・・フンッ』

朔絆は不貞腐ふてくされたように姿を消した。コウサカは後で何か買っつてやるっと思った。

「は、はあ・・・精霊ねえ。初めて見たよ。てっきり御伽噺おとぎばなしの中だけの存在かと思っていたよ」

主人はまだ信じられない様子で金色の光を放つクレイモアをしげしげと観察している。

「まあ、色々とな。俺の大事な相棒だ。それより官庁への行き方を教えてもらえないか？」

商人達からは北門からただ真っ直ぐ南に歩いていけば見つけれられると言われていたが、コウサカは念のため聞いてみた。

「おや、官庁に行きたいのかい？　でも、わざわざ露天で聞くことかねえ」

主人の目はちらちらと並んでいる小物を見ていた。

「・・・やれやれ。商魂^{たくま}逞しいとはこの事を言うものかな。ナユキ「は、はい？」

まあ別にいいか、と思つてコウサカはナユキに声をかける。

「適当に選べ。ただし高いのはなし、だ」

「え？」

ナユキは言われた意味が分からずキョトンとした。

「主人から情報を聞くには何か買わないと駄目だそつだ。ちよつど小物だし、何か買つてやるつ」

「えつ、ええつ!?!」

突然ナユキが驚いた声を上げた。

「えつ。い、いいんですか？」

「いいから買つてやると言つたんだが、とりあえず選んでくれ」「はつ、はい」

何をそんなに緊張しているのか、遠慮がちだが真剣な表情で選び始めたナユキにコウサカは、女の子にとってはこつものを選ぶことはそれほど大事なのか？と微かに首を傾げた。

「それで官庁はどこだ？」

「ここの通りからずつと南に歩いていくと、デカイ建物と広場がある。その建物が官庁だよ。広い広場だからたぶんすぐに分かると思つよ」

「なるほど。つまり、聞くまでもなかったと、そついうことか」

「こつちだつて、生活かかっているからね。少しでも売らないと」

「まあ、そつだな・・・。これをくれ」

「おや、あの子はまだ選んでいるけど？」

「こつちは別件で使う」

主人の言葉に肩をすくめながら、コウサカは複雑な結び目模様の描かれたペンダントを手にとつた。これは朝鮮用である。食べ物的

な意味で。

「ありがとうございます。包装はいかがでしょうか？」

「いや、そのままがいい」

代金を払って受け取ったペンダントをコウサカはカバンの中に入れた。今までフランクな話し方をしていた主人が急に丁寧な言葉遣いになったことに苦笑しながら。

「あの、コウサカさん・・・」

「決まったか？」

遠慮がちにナキがコウサカに声をかけた。その手には青み掛かったアミュレットが握られていた。

「これでいいんだな？」

「はい・・・お願いします」

少し恥ずかしそうにしているナキからアミュレットを受け取ると、コウサカはある違和感を覚えた。アミュレットから微かだが魔力の気配がするのだ。

アミュレットとは、お守りことである。より厳密に言うと、悪霊や悪魔など霊的な悪い力を「遮断」して身を守ってくれるのがアミュレット (amulet) といい、蛇足となるが霊的な良い力を「与えて」御利益をもたらすのをタリスマン (talisman) と言う。

コウサカは大したものだと思う。たぶん、無意識的にこの効力を持つ「本物」のアミュレットを選んだのだろう。もしかしたら記憶喪失になる前は魔法について詳しくあったのかもしれない。そうでもない、とても魔力の気配など記憶喪失で無意識的に感じ取れないだろう。そう思いながらコウサカは主人にアミュレットを渡した。主人はアミュレットの値段からして効力には気付いていないようだった。

「毎度、ありがとうございます」

代金を払う時だけ丁寧な言葉遣いになる主人に多少呆れながらコウサカは支払いを済ませてアミュレットを受け取った。

「ほら」

アミュレットをナユキに渡すと嬉しそうに両手のひらで包んだ。

「君はもしかしたら魔法の心得があるのかもしれない」

「え？」

「ご機嫌となった露天の主人と別れ、官庁を目指す道中コウサカはナユキに言う。

「そのアミュレット。それには守護の魔法が染み込まれている、本物のアミュレットだ。魔力の気配を感じ取って無意識的に選らんだのだと思う」

コウサカは振り返りもせず歩きながら、ナユキに言う。だが、ナユキからは全く見当違いな返答が返ってきた。

「わたし、かわいくて値段も手頃だったからこれに決めただけなんですけど・・・」

「ふむ」

ナユキは恥ずかしそうにそう言いながら、前を歩くコウサカから目を逸らした。

「何にせよ。一度、魔法について教えてみよう。外れたとしても、記憶が戻るきっかけになるかもしれない」

と。ふと、壁際に置かれたベンチがコウサカの目に入った。

「あそこのベンチに座って、少し待っていてくれ」

「？ はい、わかりました」

ナユキは首を傾げながらもベンチへと向かった。コウサカは近くで果物を売っている露天に近づき、リンゴをひとつ買った。

「あ、ありがとうございます」

コウサカは腰のベルトから小さめのナイフを抜くとリンゴを二つに割って、片方をナユキに渡した。コウサカは鎧が重過ぎるので座らず壁に背を預けた。

「朔絆、ちよつと出てきてくれ」

『・・・なにぞ』

コウサカが名前を呼ぶと朔絆が実体化をして、ものすごい不機嫌

な顔でコウサカの肩に座った。

「ほら」

『・・・なにこれ？』

コウサカがカバンの中から先ほど買ったペンダントを出して朔絆の目の前に掲げると、朔絆がキョトンとして聞いてきた。

「さつきから扱いが悪かったからな。機嫌を直せ」

『プレゼントってこと、あたしに・・・？』

朔絆が信じられないような表情でポカンとしながら聞いた。

「まあ、安物だがな」

『ふ、フンツ。全然センスないんだから・・・』

「センス？ なんのだ？」

『う、うるさいっ！』

赤くなりながらコウサカが掲げたペンダントに朔絆の手が触れると、ペンダントは光の粒子となつて消えた。そして、小さくなつたペンダントが朔絆の首から下げられていた。

『えへへ・・・』

「？」

コウサカは朔絆が何を喜んでいるのか分からず、片割れのリンゴを芯ごと噛み砕いてバリバリと咀嚼する。ちなみに、コウサカはただ単に朔絆の食べ物としてペンダントを買つたつもりだったので、朔絆が喜んでいる意味は全くわかっていない。

「あの・・・ご馳走様でした」

にへら、と表情を緩めている朔絆をしばらくコウサカが観察していると、残った芯をベンチの横に設置されたゴミ箱に捨てながらナユキはコウサカにお礼を言った。

「リンゴひとつで礼を言われてもな」

そう言つとコウサカは壁に背を預けたまま、

「ここは良い街だな」

唐突に呟いた。行き交う人々の顔には笑顔ばかりが見える。さっきの主人も常に笑顔だった。これだけの城壁、ハンターに守られて

いることから不安などないのだろう。

「そうですね……。皆さん幸せそうです」

コウサカの呟きが聞こえたナユキは微かに頷きながら肯定した。「女神様なら、この人達がずっと幸せのまま暮らせる方法を知っているのでしょうか……」

「さてな。聞いてみないことには分からない」

そういえば、コウサカはナユキが女神に会いたがっている理由を聞いていないなと思った。だが、まあいいかとその考えをさっさと放棄して壁から背を離れた。

「さて、そろそろ行こうか。朔絰、戻ってくれ」

『はい』

「はい、わかりました」

妙に素直で機嫌がいい朔絰にどこか不気味さを覚えながら、コウサカはナユキが立ち上がったことを確認すると先に歩き出した。

コウサカ達が少し歩くと巨大な建物の壁がすぐ右側に現れ、その壁伝いに歩いていくと鐘塔（うづつみ）と百m以上はあるだろう広場に着いた。

広場には通ってきた通り以上の露天が開かれてさらに活気があった。

コウサカは官庁の入り口を見つけると、その扉に手をかけた。

第六章 手紙の想い

「これが官庁か・・・」

コウサカ達は官庁の中に入ると、ダンバートンを見た時のように少しの間、啞然あぜんとした。

官庁内はエントランスホールだけでも奥行き五十m以上はあるだろう。階段は受付の右にひとつだけある。二階は吹き抜けになっており、左右から一階を見下ろせられるようになっていて、よく見ると二階には手すりではなく銃眼のようなものがあり、官庁というよりは城である。ただ、絵画や装飾品類がほとんど見られない。

コウサカは視線を二階に向ける。さりげなく何人かがクロスボウを手に持って立っていた。

(煌きりびやかな装飾より、実用性が・・・)

コウサカは何となくダンバートンを統治している領主の人柄が分かったような気がした。少なくとも私利私欲を肥やす人種ではない。そういう人間ならもっと装飾品を増やして自己顕示じこけんじをするはずである。

「君は座って待っていてくれ」

「はい、わかりました」

ナユキは少し左右を見渡してホールに設置されているソファアームを見つけて歩いて行った。コウサカは受付へと向かう。受付には良く言って静かな、悪く言って無愛想な表情で何かの書類仕事をしている長いブロンドの髪に青い瞳の美人がいた。だが、どこか儂さを感じさせた。近づいて来たコウサカに気がつく顔と顔を上げた。

「何かご用でしょうか」

その女性が発したのはひどく事務的な声色こわいさだった。普通の人なら眉をひそめるだろうが、コウサカは全く気にせず村長より預かった書状を取り出した。

「ティルコネイル村長、ダンカンの紹介状です」

「ダンカン村長の・・・？」

一瞬だったが村長の名を口にした女性の顔には少し驚いたような表情が浮かんだ。ティルコネイルにいた時、村人達が口々に村長の評判はすごいと言っていたが本当にダンバートンでも有名人なのだろうか、とコウサカは女性の反応を見て思った。

「失礼しました。お預かりして拝見させて頂きますので、少しの間お待ちください。終わりましたらお呼び致します」

「わかりました」

そう言っ受付を離れようとコウサカが身を翻ひるがえそうしてふと思う。呼ぶと言われたが名前を名乗った覚えはない。

「俺の名前、知っているのですか？」

「はい。ですので、しばらくお待ちください」

そう言つと女性は代わりの者に受付を任すと、書状を持って奥へと姿を消した。コウサカはそれにひとつ首を傾げるとナユキの座っているソファァーに向かい、装備が重過ぎるためソファァーの隣の壁に背を預けた。

「終わったんですか？」

「いや、待てと言われた。書状に目を通して、たぶん領主に報告をしに行っただけだろうから、またすぐに呼ばれると思うが」

「そうなんですか。あ、そういえば何で首を傾げていたんですか？」

「よく見ていたな・・・。受付が何故か俺の名前を知っていてな。それを不思議に思った」

「村長さんがフクロウ便で先に知らせたのでは？」

「たぶん、そうなのだろう・・・。ふむ」

コウサカは何が引つ掛かるのか分からず、兜を脱いで頭を掻く。だが、まあいいかとさっさと考えを放棄した。

「ところで、君はもう少し体力を付けた方がいいな。本当に最後まで付いてくる気はあるのか？」

「はい・・・すみません」

ナユキは恥ずかしそうに顔を赤らめる。ちゃんと自覚はあるよう

だ。

「ミレンシアであるなら、そんなに体力がないということ自体がおかしいのだが。ふむ」

「あの・・・そんなにすごいですか？ ミレンシアって」
ナユキは遠慮がちにコウサカに聞く。どうにかしようと思ってい
るのは目でわかる。

「個人でバラつきはあるのかもしれないが、例えば俺なら数時間全
力で走り続けることができる。この装備ままで」

「絶対むりです・・・」

コウサカのあまりにも常軌せいぎを逸した返答にナユキが力無く呟いた。
コウサカの装備は全て合わせれば五十kgを軽く超える。

「まあ、そうではないとしても・・・そうだな」

コウサカはちらつ、と横目でナユキの身体を見る。腕の細さや線
の細さは実に少女らしい。

「その身体の細さでその鎧よろいを着ていられるだけで普通ではない、か。
さて」

コウサカは無意識的に顎あごの部分に手をやりながら考える。一夜漬
けの体力トレーニングなど意味がない。

「コウサカ様、受付までお越しく下さい」

少し大きめな声がエントランスホールに響く。コウサカが視線を
向けると先ほどの女性が受付の前で佇たまたすんでいた。

「さて、行くか」

コウサカが壁から背を離すと、ナユキもすぐに立ち上がった。

「領主様が執務室でお待ちです。ご案内致します」

女性の下へコウサカ達が行くと、女性はそれだけ言ってすぐに階
段を上がり始めた。

「愛想の無いことで」

コウサカは小さく肩をすくめるとナユキを促して女性に続いて階
段を上った。

ダンバートン官庁三階、領主執務室の中には顔中に傷跡が残る禿頭の大男がいた。何故か椅子に座らずに立ったまま。

「領主様。ダンカン村長より承っていた方達です」

「おう、ご苦労だったなエヴァンちゃん。あとで茶でも」

「それでは失礼します」

エヴァンと呼ばれたブロンド髪の女性は領主の言葉を最後まで聞かずにさっさと退出していった。

エヴァン。ロングストレートのブロンド髪に、青い瞳をした仕事熱心な官庁の職員。業務に関連する話以外はそっけない態度を取ることが多いが、ときおりつかれた様子を見せる。そんな儂さゆえかラブレターをもらうことが多いらしい。領主自身もファンだとか。

スリーサイズは、B87・W59・H85くらい。

「やれやれ……。で。てめえらがダンカンのジイさんがわざわざ紹介状までよこしたミレンシアのガキどもか。オレは領主兼ギルドマスターをやっているバルドラスだ」

領主と呼ばれた褐色肌で初老の大男は扉の前で佇むコウサカ達を青碧色の瞳で見下ろした。身長は約百八十八cmあるコウサカよりもずっと高い、二mを超えるほどだった。全身を何枚のもプレートに合わせたような鎧ダスティンシルバーアーミー一式に身を包んで仁王立ちしているその姿は領主というよりも、歴戦の戦士か騎士だった。

「領主兼ギルドマスター……。？ どういうことですか？」

「ダンブレテンのな。わけを聞いてるとなげえぜ？」

そういつて領主兼ギルドマスターのバルドラスは腕を組む。それに対してコウサカは話を聞く姿勢を取った。それを見てバルドラスは話し出す。

「ここはよ、昔は武装キャラバン（隊商）の集合キャンプだった

んだ。お前等にや分からねえだろうが、第二次モイトウラ戦争のすぐ後は野盗やら盗賊団共が結構いたんだぜ？ キャラバンと一緒の方が生活が安定するからって職人やら小さな村の連中が集まってきた。ダンバートンの前身の町が生まれたってえわけだ。んでよ、キャラバンの頭かしらあ張っていたオレがそのまま町長。んでもって、外壁やら地面の整地やらやってどんどんでかくなって町が街になっていった。そおやってたらよ、王都のタラから通達があつてな。オレが領主のエイリフ王国の城郭都市ダンバートンの誕生ってえわけだ。その頃になつとな、オレのキャラバンの部下共と他の村から集まってきた自警団の連中がかなりの数になつていてな。ダンバートンの自警団としてギルドを創設することになつたんだが、オレが頭じゃねえと嫌だつて連中ばかりでな。そんなわけで領主兼ギルドマスターってえよく分からんもんの誕生ってえわけだ」

バルドラスはまるで笑い話でもするような気軽さでそう語った。だが、話している内容は過酷いんざんで陰惨いんざんだった。

「……」

コウサカは軽く息を呑み、ナユキは話の内容が意味すること悟り顔を青くした。ダンバートンの前身であるキャラバンキャンプが出るまでの間、小さな村、武装できない隊商は……。

「話が長くなつちまつたな。んで、ミレンシアの坊主、用件は？」

バルドラスはニカリと笑ってコウサカの用件を尋ねた。コウサカは本物の地獄を経験し、それを笑いながら話すことの出来るバルドラスに畏敬いけいの念を抱いた。

「用件は村長よりの書状にあつた通りです。それともうひとつ……ん？」

いつの間にかナユキはコウサカの後ろに隠れて背中に震える手だけがみ付いていた。コウサカはそれに一息吐いて用件を切り出す。ちなみに、村長よりの書状にあつた用件とは、要はコウサカ達が魔族の本拠地に行けるまでの手助けをしてやってほしい、という内容である。

「ラビダンジョンへ潜ることを許可して頂きたいのです」

「ラビ？ そりやまた何でだ？」

ラビダンジョンとはダンバートン北西にあるサキユバスという魔族の住処すみかとなっているダンジョンである。

これはコウサカがタルラークから渡された手紙に書かれていたことである。タルラークはラビダンジョンの調査をずっと行なつて来て、ラビダンジョンからティルノイへ向かう方法を見つけたのだと言つ。だから、そこに何か糸口があるかもしれない。手紙にはそう綴つづられていた。コウサカはその手紙の内容を要約してバルドラスに伝えると、納得顔になつた。

「なるほどなあ。わかつた、許可してやる」

「ありがとうございます」

コウサカはヌキに離れるように言つと騎士がそうするように兜を右脇に抱え、左膝をたて片膝を床につけ、左手を胸部に当てて頭を下げた。騎士の行なう最敬礼の行為である。

「ほお、なかなか礼儀がなつてんじゃねえか坊主」

コウサカの行なつた最敬礼にバルドラスは満足そうに笑みを浮かべた。

「では、失礼します」

「待て待て、坊主」

コウサカが立ち上がり、退室しようとするまひすとするとバルドラスが引き止めた。

「今日一日くらいゆっくり腰を据えてみるや。こつちから人員を出してやらあな」

「わざわざハンターを出してくれるのでしょうか・・・？」

バルドラスの思つてもみなかつた提案に、コウサカは驚いてバンドラスを見る。

「ああ。にわかには信じられんが、ここんこの魔族共の動きが活発になつてきた説明がつくからな。本当ならオレ達全員に関係がある。喜んで手助けしてやらあ」

「本当にいいのですか・・・？　こんな与太話よたばなしと思われても仕方がない話を」

バルドラスのあまりに協力的な態度にコウサカは戸惑う。いくらなんでも話が旨すぎる。

「モイトウラ戦争でな」

バンドラスは唐突にその言葉を出した。この場合二、三十年前に起こった人間族と魔族との戦争、第二次モイトウラ戦争のことである。

「モイトウラ戦争では、数え切れねえほどの人間が死んだ。人間だけじゃねえ、魔族もだ。オレも参戦していた。参戦していて死にそうになった。むしろ、生き残ったのが奇跡だったんだよ。そしてな、ダンカンのジイさんも参戦していた。そんなジイさんが嘘でこんな手紙よこすわきゃねえ。だから、信じることにした。んで、やるなら徹底的にやることだった今した」

「・・・何と言うか、すごい方ですね。領主様は」

コウサカはあまりにもメチャクチャな行動動機に呆れてそう言った。

「だろう？　がはははっ」

コウサカの言葉を聞いて、バルドラスは哄笑ウチウチした。それにコウサカは呆れたように苦笑を浮かべた。さっきまで怯えていたナユキは状況の変化に付いて行けておらずポカンとしていた。

官庁を後にしたコウサカ達は少し一悶着あつて今日の宿を決め、二階に部屋をふたつ取った。ベッドと小さな卓と椅子、それに窓がひとつあるだけの殺風景な部屋だった。バルドラスの下には明日の昼の鐘が鳴る時にまた来るという約束をした。

「・・・ふう」

コウサカは宿の自室で一息吐く。朔絆はようやく自由になれる環境になって、今は完全実体化をしてベッドを占領してゴロゴロして

いる。それに苦笑しながら、この宿に決めたまきっかけを思い出す。

「・・・はあ」

そして溜息を吐いた。

「・・・くそっ、どけよっ！」

それは宿を探してダンバートン内を適当に歩き回って、ちょうど人も疎^{まば}らな細い道の脇にあるベンチで一息吐いている時のこと。

人気の薄い路地裏から声がコウサカの耳に届いた。ただの喧嘩の声ではない。

「ナユキ、ここで待っている」

「え？」

路肩のベンチに座って露天で買った苺^{いちじ}を美味しそうに食べていたナユキは状況が分からずキョトンとしていたが、コウサカは構わず兜を被りながら駆け出した。

「大の男が数人がかりなんて、せこいぞっ！」

コウサカが到着すると一人の少女が数人の、明らかに柄の悪そうな男達に囲まれていた。

「あつ、そのの！ 男だつたら助ける！」

「・・・」

コウサカを見つけた少女は指を差してそう言った。少女を囲っていた男達が振り向きコウサカを視界におさめると、明らか敵意を放ってきた。ちなみに、コウサカは少女の物言いがどこかの我がまま娘に似ていたため苦笑していた。

「なんだ、てめえは！？ 取り込み中だ、とつとと失せなっ！」

「おまえ、それでも男かよ！ 助ける！」

「・・・」

コウサカが何も言わず呆れたまま立っているとそれを反抗と取ったのか、馬鹿にされたと取ったのか男達が逆上した。

「いい度胸だ、てめえっ！」

一人の男が全身フルアーマーのコウサカに殴りかかった。唯一、生身の出ている顔した半分を狙って。だが、ライトニングボルトの軌道すら見切ることの出来るコウサカからすれば止まっているような速度だった。殴り方もデタラメで力任せ。完全に素人だった。

「何も言っていないんだが」

コウサカは無造作に手を伸ばすと、相手の拳の側面を軽く押すようにしてするり、と受け流した。それに驚いて男は慌てて身を引く。その明らかな反抗的な態度にまた別の男が今度はナイフを抜いてきた。

「・・・」

それにコウサカの目の色が少しだけ変わる。仕方がない、という風に溜息を吐きながら左足を引き、右足を前に出して重心を移動する。身体を少し横向きにして左手の甲をナイフの腹に当てするり、と受け流す。そして、おそらく全体重をかけると肋骨が折れてしまうので軽く体重をかけた掌底を相手の胸部に叩き込んだ。

「ぐえっ・・・げほ、ごほごぶっ・・・!？」

掌底を喰らった男はナイフを取り落として、その場に崩れ落ち激しく咳き込んだ。

「て、てめえっ!」

残った男達は、それでもまだ数が有利なせいかわ勢がいい。

「・・・やれやれ。どういった状況だ？」

コウサカは勝手に勘違いされて、勝手に助けると決められたことに小さく溜息を吐いた。それに囲まれている少女が声を上げた。

「そんなの、こいつらがあたしが可愛いからって、ナンパしてきたからに決まってるだろっ!」

「違い、このガキっ! 俺たちや、お前をさらうために・・・」

男がそう言った直後、コウサカの頭の中で軽くカチリと音がする。そして、一瞬だったがその場にいた全員がぞくり、としたひどい寒気に襲われた。

「なるほど。人攫いか」

全員が声を発した人物を見ると、先ほどと変わらずにただぼんやりとそこに立っているコウサカがいた。だが、寒気の原因はコウサカであることは全員が感じた。全員が底知れぬ恐怖を抱いて顔を青くした。

コウサカが発したのは紛れも無い殺気であった。

「どちらに非があるのかはわかった。お前達どうする？ 自首するなら穩便あんびんに済むが」

だが、まだ続けるというなら手加減はしない。本気の殺気を受けた男達はそう受け取って、青い顔で大人しくなった。

「さて、警護のハンターを呼んでくるからここで待っていてくれ。

ああ、もし逃げたら」

「に、逃げませんっ！ だから、命だけはっ……！」

チラリとコウサカが男達を見ながらそう言うと、土下座でもするほどの勢いで男の一人が怯えながら叫ぶ。それを一瞥いちへつすると、コウサカは踵かかとを返す。男達はすでに反抗する気が完全に失せて、ただその場に佇たまたんでいた。傍らにいる少女を盾にしようとする者もいなかった。もしそうしたらその瞬間、自分達は殺されると恐怖感からである。

ダンバートンの治安維持もハンターの仕事で、警察のように街中を巡回している。わかり易いようにギルドマークの入った黒い帽子を被っている。

「お、おい！ あたしはどうなるんだよっ！？」

一人、被害に遭あっていた少女のことを何も言わずにコウサカが行こうとするから少女は声をあげた。

「ああ、そうか。もう済んだから行っても大丈夫だと思う」

「え？ ええっ……？」

あまりにもコウサカの投げやりな答えに少女は啞然あぜんとした。コウサカはそれに構わず路地裏を出て行った。

「あ、コウサカさん。何かあったんですか？」

路地からコウサカが出てくると、ナユキが心配そうに立ち上がった。

て近づいて来た。コウサカはカバンから金貨袋を出していくらかナユキに渡すと、

「すまん。もう少し待っていてくれ」

そう行つてコウサカは警護のハンターを探しに人混みに紛れてしまった。

「え、え？ あれ」

再び一人残されたナユキは目を白黒させて渡された金貨と、コウサカの消えていった人混みを交互に見比べていた。

「真人間になれよ」

ハンターに連れられていく男達の背にそう言葉を投げかけたコウサカは少女に目を向ける。今度はナユキも付いて来てコウサカの少し後ろにいる。

「君も暗くなる前に帰れよ」

「待て待て待てえいっ！」

そう見当違いな言葉を残して路地裏を後にしようとするコウサカを、少女が全力で引き留めた。

「希望通り、助けたらう」

「そこじゃないっ！ 普通なんでまだここに？とか、大丈夫だったか？とか言うでしょっ！」

「そうなのか？」

「あの、わたしに言われても……」

コウサカが首を傾げてナユキに聞くとナユキは恥ずかしそうに俯うつむいた。

「おまえ、何なのっ!？」

「ただ今日泊まる宿屋を探して歩き回っている旅人だ」

コウサカがそう言つと少女は動きを止めて、目を白黒させた。

「宿……探してるの？」

「今そう言つたらう」

コウサカは少しウンザリしたように兜を脱ぐと、頭を掻いた。

「あ、カツコイイ・・・」

コウサカの素顔を見て少女は聞こえないほど小さくそう呟いた。

勿論、常人よりも感覚の鋭いコウサカには聞こえたが何のことか分からず眉をひそめた。

コウサカは藍色の髪をオールバックにした髪形で、鼻も高く、だいたいいつも冷静な表情のまま変わらないためキリツ、とした端整で精悍な顔立ちである。俗語で言うといケメンで、無駄な脂質が身体には全くなく、豹を思わせるガツチリとした身体つきで背も約百八十cmと高いので、アリツシユアシユビンアーマーに身を包んだ姿はかなり様になっているのである。

「なんだ？」

「あ・・・なんでもないっ！ それより、宿ならうちに来なよ！」

「・・・はあ？」

少女の言った言葉の意味が分からず、コウサカは眉をひそめた。

「何を言っている？」

「うちは宿屋なの！ ちょうど部屋も空いているからおいでよっ！

まだ探していた最中だったんでしょ？」

「まあ、俺はそれでも構わないが・・・。ナユキ、この子の宿でいいか？」

「はい、大丈夫です」

と、そこで少女は初めてナユキの存在に気付いたようだった。少女は訝しげな視線をナユキに向ける。

「えーと・・・誰？」

「旅の同行人だ。わけあって一緒に旅をしている」

「ふうーん・・・」

少女は意味ありげな表情を浮かべると、とあることを聞いてきた。

「・・・もしかして、恋人？」

「なっ、ち、違いますよっ！」

コウサカが何か言う前に、ナユキが顔を真っ赤にして少女に答え

た。

「ふーん。ねえ、ホント？」

「ああ、本当だ。旅の目的が一緒なだけだ」

コウサカは興味すら浮かべずさも面倒くさそうに言う。そのあまりにも素っ気無い態度に、少女は本当なんだと納得顔をした。

「・・・」

一方、そういった感情を持っていないとしてもあまりな態度なコウサカに、ナユキは不機嫌となった。やはり年頃の少女というのは記憶喪失だとしても変わらないらしい。

「どうかしたか？」

「知りませんっ」

珍しく、というより初めて見せるナユキの態度に、コウサカは軽く目を見張った。ナユキは路地裏から一人、通りへと向かって行った。

「？ まあいいか。ところで君」

「カリン」

「？」

唐突に少女の言った言葉の意味が分からず、コウサカは首を傾げる。少女は不満そうに言う。

「カリン。あたしの名前だよ。君なんて名前じゃない」

カリンは年の頃は一六、七歳で背は百六十六cmほど。勝気そうな菖蒲色あやめいろの瞳に、藍色あいいろの髪をポニーテイル風に結わえて首辺りの長さにしてエプロンスカートを着ていた。

スリーサイズはB81・W64・H88くらい。

「そうか。では、カリン。宿屋へ案内してくれ」

コウサカがそう言うと、少女改めカリンは満足そうに頷いて澀刺はっさつとした笑顔を浮かべた。

「よしっ！ あ、ところでおまえの名前は？」

「コウサカだ。さっきの子はナユキ」

初対面の人間をお前呼ばわりするカリンの態度を全く気にせず、

コウサカはそう教えた。

「コウサカ・・・何か変な名前だねっ」

「放っておけ」

カリンはコウサカの反応が面白かったのか笑いながら、ナユキの後を追った。

酒場兼宿屋『アリアンロッド』の自室で思い出し終えてから、コウサカはもう一度溜息を吐く。探していたため確かにちょうど良いと言えばちょうど良かったが、面倒事が増える予感がしてならない。『全くあんたつて、とことんバカだよねえ』

先ほどからベッドでゴロゴロして満足したのか朔絆がコウサカに声をかけた。明らかに呆れて馬鹿にした口調で。

「あの場合、助けないわけにはいかないだろう」

「それが当たり前だと思っているのが、あんたらしいよね・・・」

朔絆は關心しているような、呆れているような表情を浮かべて寝転んだままコウサカを見上げた。ちなみに背中中の剣の翼は引っ込めである。

コウサカはベッドを占領されているので壁にもたれ掛かっている。椅子に座らないのは、何かあった時にすぐに動けるようにしている。体勢が癖になっているからである。今は上半身は鎧を外し灰色の半袖そでのアンダーウェア、下半身は脱がずにそのままである。念のためバスタードソードだけは腰のベルトに差し、カイトシールドを傍らに立てかけてある。

「そういえば、すまないな。朔絆」

「え、いきなり何？」

唐突にコウサカが詫びたため、朔絆は目を白黒させた。コウサカは静かに目を伏せる。

「ここに来てから、お前を一切自由にさせてやれていないからな」

『それ、あんたのせいじゃ……』

「ティルコネイルを出て、ここに連れて来たのは俺だ」

『あたしはあんたを信じるって、言ったじゃん……』

「それでも、すまない」

朔絆は枕まくらに顔つらを埋めた。コウサカは目を瞑つぶっているが泣きそうな表情を見られたくなかったのだ。単なる武器でしかない自分をこれほど気遣きづってくれている。精霊石に入る前の朔絆の記憶は薄ぼんやりとしか思い出せないが、誰もが武器の付録程度の扱いしかしていなかった。だから、本当の人間と同じ、それ以上の気遣いをしてくれる行為が何度されても堪たらなく嬉しいのである。

『……なんでいつつもバカなのに、こんな時ばっか……』

朔絆の声は枕まくらでくぐもり、とても聞き取れない音量だったためコウサカには届とかなかった。と、部屋の扉が遠慮がちにノックされた。「どうぞ」

ノックの音に剣を抜こうと微かに反応してしまった手に呆れたように一息吐きながら、コウサカはそう言う。

「お、お邪魔します……」

扉を開けて入ってきたのは少し俯き気味のナユキだった。何故か緊張している顔で。

「何か用か？」

コウサカが壁にもたれたままそう言うと、ナユキは意を決したように顔を上げた。

「あの……さつきはすみませんでしたっ」

そう言ってナユキは肩を小さくして両手を身体の前で重ね、ペコリと頭を下げた。

「また突然、どうした？」

謝られたコウサカは理由が分からず首を傾げた。

「あの、さつきはあんな態度を取ってしまった……」

「待て。あんな態度とは、どれのことだ？」

「え、あの、路地裏で……」

「路地裏で何か謝らなければならぬことをしたのか？」

「・・・え？」

コウサカは言葉を受け、ナユキは驚いて顔を上げてコウサカの顔を見る。コウサカは思案顔になり、しきりに首を捻ひねっていた。

「怒って・・・ないんですか？」

「そもそも、俺が怒る原因となる出来事を教えてくれ。記憶にないんだが」

コウサカは真剣に思い出そうとしている。その顔はとても嘘とは考えられなかった。そもそもコウサカは嘘を付けるタイプではない。良い意味でも悪い意味でも馬鹿正直だから。

「ふむ、やはり分からないな。とにかく、君は俺に謝りに来たんだな？」

「え・・・あ、はい」

コウサカは指を立てて、ナユキに問いかけた。

「君は俺を怒らせたと思った。しかし、当の俺は怒るところかその原因すら思い浮かばない。さて、ここから何が導き出せる？」

「え、どう・・・って、言われても・・・。え、っと、わたしの勘違いだった・・・ですか？」

「正解。そういうわけで、全く問題ない。君は部屋に戻つてのんびりするといい」

コウサカは何も無かったように腕を戻してナユキから視線を外した。一方、ナユキは勘違いでとんだ道化どっけを演じてしまったことで真っ赤になっていた。

「あつ、あの・・・お、お邪魔しましたっ！」

真っ赤になったままナユキは部屋を走り出て行った。コウサカはそれを横目で眺めて小さく溜息吐く。そして、扉を閉めることすら忘れて出て行ったナユキに代わり、扉を閉めようと壁から離れた。

「コウサカー、届け物ー」

コウサカが扉に手をかけたところで、階下からカリンの声が聞こえた。そのまま扉を開けて、階下に下りていく。

「はい、これ。官庁のハンターさんが届けてくれたよ」

「官庁・・・？」

階段のところ立っていたカリンから受け取った物は書類だった。一枚目の一番上に「ラビダンジョンについて」と書かれていた。領主バルドラスが気を利かして送ってくれたのだらう。最後を見るとやはりバルドラスの名前でサインがされていた。

「ふうーん、領主様からか。コウサカって、ホントになんなの？」

カリンはいつの間にか隣から書類を覗き込んでいた。だが、コウサカとは背が違いすぎるため、精一杯背伸びをしていた。コウサカは少し書類の位置を下げてやる。

「なんでラビダンジョンの事なんか書かれたのを渡されるの？」

「知りたいなら領主様に直接聞けばいい」

コウサカはそうカリンを煙に巻いて、階段を上っていった。後ろでカリンが何か言うが、すぐにこの店の主人である父親に呼ばれて走って行った。

「なにそれ？」

自室に戻ってきたコウサカが手に持っている物を見て、朔絆がそう聞いた。ゴロゴロすることに飽きたのか今はベッドの上でとんび座りをして両手を太腿ふとももの上に置いて座っている。とんび座りとは、正座の状態で両足を外に開いてM字、またはW字のような形にしてお尻を地面にぺたんとして付けたままの座り方である。あひる座りとも言う。

「明日、潜る予定のラビダンジョンについての資料だ」

「なあんだ、つまらない・・・」

すぐに興味を失った朔絆はつまらなそうに窓の外に視線を移した。隣の建物の屋根のせいで、あまり見えないが。

「・・・ふう」

コウサカは一息吐くと、再び壁にもたれて書類を読み始めた。コウサカは無意識的に、剣の抜きやすい右手を剣の柄に掛けていた。

朔絆は窓の外にも飽きたのか、真剣に書類を読みふけるコウサカ

に視線を移した。コウサカを見ていてそういえば、と朔絆は思う。プレゼント（朔絆の勘違い）なんてものをもらったのは初めてのことだったと。何となくそう思っただけで考えていると朔絆は自分の顔がだんだんと赤くなっているのを感じた。そんなタイミングでコウサカが、体勢は微動だにさせず朔絆に声をかけた。

「腹でも空いたのか？ カバンの中から勝手に引つ張り出せ」

視線は素早く書類に通しながら、コウサカはいつも通り落ち着いた声音で言う。

「あつ……う、うるさいっ！ あんたは大人しくそれでも読んでるっ！！」

「大人しく読んでいるだろうが」

やはり、体勢は全く変えず視線だけは素早く文字を追いつつながらコウサカは朔絆に言う。

「うるさい、うるさいっ！ あんたは黙って読んでればいいのっ！」

「わかった、そうすることにしよう」

そう言うってコウサカは本当に黙り込んで、時折ページをめくる動作をする以外は何もしなくなった。

「バカ……」

朔絆の拗ねたような声を聞きながらコウサカは、ラビダンジョンの資料から得られる情報を頭の中で整理する。

主な敵となるのはダンジョンに潜って死んだ者達、または過去の大战で死んで逝った者達の亡骸、スケルトン。頭蓋骨の内側に魔符が貼り付けられており、それを剥がすか傷つけるかしないと崩しても骨が集まり永遠に再生してくるのだという。

と、そこまで読んで思い出した。タルラクから聖堂のクリステルという女性に届けてほしいものがあると言っていたことを。コウサカは書類を卓に置くと、装備を付け始めた。

「……どっか行くの？」

「ああ。聖堂にタルラクさんに頼まれたものを届けに」

落ち着いたのか普段どおりの顔をした朔絆が装備を着け終わり、

最後に立てかけてあるカイトシールドを持ち上げたコウサカを見て聞く。

『あたしも行く』

「そうか」

朔絆がそう言ってベッドに立てかけてあるクレイモアに戻る。コウサカはクレイモアを手に取ると鞆に繋がったベルトを身体に回して背中に背負った。

仕事中のカリンに聖堂への道を聞き、迷いもせずには到着した。

聖堂前の広場は花壇に色とりどりの花が咲き乱れていた。花壇に水をやっている緋色の瞳に鴉色の髪をショートカットにした司祭服の女性を見つけると、コウサカはクリステルという女性のことを聞こうと声をかけた。

「失礼します。少しお聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「え、はい。構いませんよ」

完全装備のコウサカに面喰らいながらも女性はすぐに笑みを浮かべて、受け答えた。コウサカは礼儀として兜は外して脇に抱えている。

「クリステル司祭はいますか？」

「え、クリステルは私ですが……。何のご用でしょうか？」

クリステル。イメンハマで修行を積み、ダンバートンへと派遣されてきたライミラク教の司祭。かつてはドルイドを目指していたという話もあり、いくつかの魔法も使うことができる。伝承や魔族達にも詳しい。ライミラク教は顔で試験をパスさせているのでは疑いなくなるほどの美人である。知的で美人な彼女に恋焦がれる若者が多いとか。

スリーサイズはB88・W59・H87くらい。

「タルラークという人物から頼まれた届け物があります」

コウサカがタルラークの名を口にする、クリステル司祭は目を見開いて驚いた。コウサカはカバンから手紙を取り出して手渡す。それと小瓶に入った黒いバラも一緒に渡す。

「申し訳ないですが、手紙にすぐに目を通して頂きたい。俺・・・私に関する頼み事が書かれているそうです」

「は、はい。わかり、ました・・・」

クリステル司祭はまだ信じられないといった表情のまま、手紙を開いた。そして真剣に読み始める。

「タルラーク・・・」

クリステル司祭はしばらく手紙を読んでいたかと思うと、急に涙を流しながらそう呟いた。そして、読み終わると大事そうに、愛おしそうに手紙と黒いバラの入った小瓶を胸に抱えた。

「・・・あつ。し、失礼しましたっ・・・！ 私・・・」

「後日、出直した方がよろしいですか？」

すぐに自分の状況に気付いてクリステル司祭は慌てたように顔を赤らめる。コウサカはカバンから取り出したまだ未使用の真っ白なハンカチを差し出しながら聞いた。

「い、いえ・・・ありがとうございます」

クリステル司祭はコウサカからハンカチを受け取って涙を拭いた。そして、上げた顔には凜とした表情が浮かんでいた。

「こちらへどうぞ。誰にも聞かれたくないことなので」

そう言っつてクリステル司祭は、聖堂へコウサカを招き入れた。そして鍵の掛かる一室へと入り、鍵を閉め、声を潜めた。

「驚くと思いますが、冷静に聞いてくださいね。あの・・・。実は私は、元はサキュバスという魔族だつたんです」

「なるほど。だからタルラークさんは貴女あなたの下を尋ねるように言ったのですか。得心しました」

緊張した面持ちでクリステル司祭はそう言い放った。だが、コウ

サカはそれを聞いても顔色ひとつ変えず、むしろサキュバスの話よりも何故ここを尋ねなければならなかったのか、その理由を知れた事の方に反応した。

「驚か・・・ないんですか？ 魔族なんですよ？」

「それがどうかしたのですか？」

「え？」

クリステル司祭はコウサカの反応に驚き呆気に取られた表情になり、そしてコウサカの問いにまた驚いた。

「それよりも、ティルナノイに行く方法をお教え頂きたいのです。何か糸口だけでも」

「え、・・・え？ ま、魔族なんですよ・・・？ 憎かったり怖かったりしないんですか？」

「ふむ。そんなに気になるようならお聞きしますが、貴女は人を殺そうとしているのですか？」

コウサカは表情を全く変えずにティルナノイのことを聞くが、クリステル司祭はそれに困惑した。そして、コウサカの問いに三度驚いた。それに、コウサカは口調をいつもの感じに戻し真っ直ぐにクリステル司祭の目を見ながら問うた。

「い、いえ・・・私はここで平和に暮らしていたいだけです」

「では、元魔族ということを除いてそこに発生する問題を挙げてみてください」

「・・・な、ないと思います」

「YESかNOだけでお答えください」

「い、イエスですっ」

コウサカがあまりにも冷静な表情を変えずに淡々と言ったため、逆に驚いて困惑しているクリステル司祭はどんどん乗せられていく。

「では、ティルナノイへ行く方法をただ聞きに来た俺にとって、貴女が魔族であると問題があるでしょうか。YESかNOでお答えください」

「の、ノー・・・です」

「では、問題もなくなつたところでティルナイへ行く方法をお聞かせください」

「い、イエ・・・あつ・・・っ！」

イエスと答えようとしてクリステル司祭は我に返つて、恥ずかしさで顔を赤らめた。しかも、コウサカはその光景を見ても表情ひとつ変えずにいて真つ直ぐに目を見続けているため、クリステル司祭は余計に恥ずかしくなつて更に顔を赤らめた。

「こ、コホン・・・。ら、ラビダンジョンの最奥さいおうにいるサキュバス達が「黒魔族通行証」を持っていてと思います。それを持って来て頂ければ何とか出来るかもしれません」

クリステル司祭は顔が赤いまま冷静に戻つた振りをしてそう言った。ちなみに、クレイモアの中では朔絆が必死に笑いを堪えている。「それはちょうど良い。私は明日、ラビダンジョンに潜ることになつています」

「なら、私からサキュバスについての注意点を話します」

ようやく話が進んだことにコウサカは丁寧な口調に戻した。クリステル司祭が真剣な表情になる。

「私達サキュバスは人間の男性を惑わせる力、魅了みりようさせてしまう力があります。戦闘能力は魔法が強力ですが、注意しなければならぬのは魅了させる力だけです。目が妖しく光つたらそれが発動したと思つてください。ちよつと待つてくださいね、いま魅了の力を効かなくする封魔のお守りを作りますから」

そう言つとクリステル司祭は自分の首から下げているケルト十字架を外すと、両手のひらに包み目を睨り、何かの呪文を唱え始めた。すると手の中から淡い光が発せられ、すぐに収まった。

「これを付けて行ってください」

コウサカはクリステル司祭の差し出したケルト十字架を受け取る。すると魔力の気配が感じられた。

「感謝します、クリステル司祭」

「いえ、お気になさらずに」

コウサカは頭を下げた。それにクリステル司祭は少し笑みを浮かべる。

「あと、装備を貸して頂けませんか？ サキュバスの魔法は強力です。なので、魔法耐性を付加します。そうすれば、例え魔法が直撃しても少ないダメージで済みますよ」

「そんなことが可能なのですか？ あ、いや、そんなことまでやってくれると言うのですか？」

コウサカはクリステル司祭の思ってもみなかった提案に初めて表情に驚きの色を浮かべた。

「くすくす・・・はい、勿論ですよ。元々私達サキュバスという種族は魔法に長けた種族なんです。魔法の効果を弱めることなんて簡単です」

自分が魔族だと言っても表情ひとつ変えなかったコウサカが、単なる親切くらいで驚いたのが面白かったのかクリステル司祭は手で口元を隠して笑った。

「出来るならお願い申し上げたい」

「では、そのまま立っていてください」

コウサカがそう言うのとクリステル司祭は両手をコウサカの鎧の胸部あたりに手をおいて目を瞑り、また何か聞き取れない呪文を唱えた。上半身の鎧、下半身の鎧、ガントレット、グリーブ、バスタードソード、カイトシールドと順々に魔法をかけられていき、そこでコウサカがストップをかけた。

「少しお待ちを。掛けてもいいかどうか、本人に聞いてみるので」

「本人・・・？」

言葉の意味が分からずクリステル司祭は首を傾げた。

「朔絆、出来ることなら俺は施してもらいたいがお前はどうしたい？」

「・・・やっていいよ。今よりもあんたの力になれるし」

コウサカが声をかけると、実体化した朔絆が不機嫌そうな表情を浮かべてコウサカの肩に座った。

「せ、精霊武器ですか。初めて見ました……」

クリステル司祭は珍しげにまじまじと朔絆を見つめた。それに朔絆は不機嫌そうな視線をクリステル司祭に向けた。

「俺の大事な相棒ですよ」

コウサカはそう言いながら片手で背中中のクレイモアを抜き、もう片方の手で朔絆の頭を撫でた。そうすると朔絆の視線は和らいで目を細めながら小さく溜息を吐いた。コウサカが無意識的にいつも通りの口調で言い放ったことへの呆れと、嬉しさ故である。

「お願いします」

最後に光り輝くクレイモアへの魔法耐性付加を終えたクリステル司祭は少し疲れたように一息吐いた。

「厚意に甘え、ご迷惑を掛けて申し訳ない」

「いえ、タルラークからのお願いですから。……それに少しタルラークに似ていますから」

クレイモアを背中に戻したコウサカは深々と頭を下げる。クリステル司祭は最後の部分は懐かしげな響きの声音で呟いた。

「？」

「いえ、何でもありません。あと、これだけは忘れないでください。いま付加した魔法耐性は無効化するわけではなく、減衰げんすいさせて威力を弱めるだけです。また例えば魔法を切り裂けるようになりましたが、魔法にだけしか効果がないので注意をしてください」

クリステル司祭は噛んで含めるように効果の説明をする。コウサカが勘違いしないように気を遣ったのだろう。

「わかりました。ご厚意に深く感謝を致します。このご恩はいつかお返しします」

「いえ、これを届けてくれたことだけで私は……」

クリステル司祭は、部屋にある机の上に置いた手紙と黒いバラの入った小瓶を再び大事そうに腕の中に抱えた。

「それでは失礼します」

「またいつでもいらしてください。あ、このことは誰にも言わない

「でございますかね？ 魔法耐性のことも含めて」

「無論です。機会があれば、またお伺いします」

そう言ってコウサカは鍵を開けて退室していった。その背を見送りながらクリステル司祭は小さく笑う。ぶっきらぼうなところ、常に冷静なところ、ティルナノイを求めてラビダンジョンに潜りに行くこととしていることなど似ていると、タルラークのことを思い出しながら。

予想以上に準備万端となったコウサカは、静かに目を光らせて明日を待った。

第六章 手紙の想い（後書き）

補足

本章内で出てくる酒場兼宿屋『アリアンロッド』の由来はウェールズ神話のケルトの主神ダヌ（ウェールズの地母神。ドンとも）の娘。月の女神で銀の車輪という意味の名を持つアリアンロッド（Arianrhod）という言葉から取らせて頂いております。

第七章 ラビダンジョンに住まうサキユバス

官庁三階、領主執務室。

そこにはバルドラス、コウサカ、あと二人の女性ハンターがいた。ちなみにナユキはいない。最初は行くと言っていたが、コウサカが生きた屍の巣窟だと話すと次第に顔を青くしてガタガタ震えながらベッドに潜ってしまった。

「こいつがリーダーのアルシアだ。んで、横のがルミル」

「ふーん、キミが噂のミレンシア君ね」

バルドラスに紹介されたアルシアという女性は、コウサカを値踏みするようにじろじろと眺めた。ルミルという女性は静かに目を伏せている。

アルシアは、女性にしては百七十cmを越えるほどの長身で、イタズラっぽい瑠璃色の瞳に、少しウェーブのかかった背中にかかる長い赤い髪をしている。妙に露出の多い軽装に身を包んでおり、豊かな胸を見せ付けている感があった。

スリーサイズはB91・W60・H88くらい。

ルミルは、百六十cmほどの背で物静かそうな栗色の瞳に、首元で綺麗に切り揃えられた濡羽色のシヨートカットの髪をして動きやすそうなスポーツウェアに身を包んでいた。また腰に投げナイフを差したナイフベルトを別に回している。

スリーサイズはB83・W58・H83くらい。

「領主様、本当に大丈夫なのかしら？ 私よりもずっと若い子ではありませんか。やっぱり、私のパーティー全員で行かせてくれませんか？」

アルシアと言う女性はコウサカから視線を外すと、不満そうに領主を見上げた。今日のバルドラスは鎧姿ではなく、公務用のスーツに着込んだ楽な格好をしている。ものすごく似合っていない。アルシアの言葉を受け、バルドラスは声を上げて笑った。

「がはははつ。そりゃあ、そうだろうよ。まだ十九らしいからな。だがよ、実力は本物だぞ？ ダンカンのジイさんからの手紙によりゃあ、オオカミ百匹を相手にして傷一つ負わなかったそうだ。しかも、その装備でメチャクチャ機敏きびんに動ける上に、全然スタミナも切れねえんだとよ」

「そう言われても……。ねえ、ルミル？」

「では、試してみればよろしいかと」

目を伏せて話を聞いていたルミルという少女が物静かな口調でそう言った。それを聞いたアルシアはイタズラを思いついた子供のような笑みを浮かべた。

「いいわね、それ。ミレンシア君もそれでいいかしら？」

「おいおい、待て待て」

「いくら領主様の命令とは言え、無駄に命を捨てる気はありませんわ。このくらいは許して頂きたいですわね」

こう言われてはバルドラスも強くは言えない。実際に危険な目に遭うのはアルシア達なのだから相手を試す資格はある。

「う、むう……。よお坊主、いいのか？」

「構いません」

コウサカは兜を脇に抱えたまま、表情ひとつ変えずに即答した。

その顔には緊張も気負いも何も感じられない。コウサカは視線をアルシアへと向けた。その自信も不安すらも感じられない視線にアルシアは少ししひるむ。

「あ、あら。ずいぶんとあっさりしてるのね……。じゃあ、何で試そうかしら」

「では、そのナイフを俺に向け全力で投げてください。掴んで見せるので」

ルミルが腰のベルトに差している投げナイフに視線を移しながらコウサカはそう言った。それに、その場にいた背中せなかの剣の中なかにいる朔絆さくはを除く全員が驚愕きょうがくした。朔絆はその程度のことは防げると知っている。

「・・・お、おいおい。何をいきなり言いやがる？ 失敗したら死ぬぞ？」

「ですが、それがこの場で可能な一番分かり易い方法なので」
バルドラスが驚いた表情のまま言うと、コウサカは眉一つ動かさずにそう返した。

「ほ、本当にいいの・・・？」
「どうぞ」

動揺するアルシアからの問いに、先ほどと同じ言い方でコウサカは返した。そのあまりにも素っ気無い言い方にアルシアは言葉を無くした。コウサカはルミルへと視線を移した。

「やらないのですか？」
「え・・・？」

先ほどまで無表情でいたルミルはコウサカからの視線を受け動揺の色を浮かべた。コウサカは何の力も込めていないが、ルミルはその平然とし過ぎていて瞳の光に畏れの念を抱いた。おそらく、本当に何事もなかったように掴んでしまっただろう、と。

「はぁ・・・アルシア、てめえの負けだ。素直に付いてってやれや」

「そう、ですね・・・。すごい子なのは、よくわかりました・・・」
バルドラスが溜息を吐き頭に手をやりながらそう言うと、アルシアも諦めたように同意した。

「はぁ、君みたいな子初めてよ・・・。協力してあげるわよ」
「ありがとうございます」

コウサカは試しが取り止めになったことに首を傾げながらも、アルシアに頭を下げた。

「本当に珍しい子ね・・・。私のこれをチラ見すらしないし」
「・・・そういやあ、書いてあったな。そういうことに興味を示さねえ無私な野郎だった」

アルシアは残念そうに自分の豊かな胸に手を当てた。バルドラスは呆れ半分、納得半分といった表情を浮かべた。

「さあて・・・、馬の用意はしてある。一階の受付に言やあ案内してくれっから、とつと行つて来やがれ」

「ありがとうございます。それでは失礼します」

コウサカは初め来た時のように、最敬礼をバルドラスにして退出していった。バルドラスはそれを見届けると、ニヤリと笑つてアルシアとルミルを見た。

「どうだ、言つた通りすげえ野郎だろ？」

「ええ、全く・・・。あんなに平然と言つていたから嘘だつたのかしら・・・」

バルドラスの言葉を受け、アルシアはそう呟いた。

「おら、お前等もとつと行きやがれ」

「・・・ふう。言つて参ります、領主様」

ひとつ溜息を吐いたアルシアはルミルを促して、執務室を後にした。一人残つたバルドラスは改めてコウサカを認めて溜息を吐いた。ダンカンからの手紙に書かれていた通り、とんでもない奴だと思ひながら。

そして、机の上に山と置かれた書類を見て再び溜息を吐いた。

コウサカはダンジョン入り口にある女神像に黙礼した。この像、正確には己の身を挺ていした女神のおかげで魔族はほとんどのダンジョンから出てこられないのだ。礼をすると同時に、全員が無事に出られることを祈つた。同行してくれるアルシア達もコウサカを倣ならつて黙礼を女神像へ送つた。

「よろしく願ひします」

「りょくかい、ミレンシア君」

アルシアはからかうようにコウサカにそう言つと、先に歩き出した。

ダンジョンまで来る間に話してコウサカが真面目な性格であること、色気に全く興味を示さない変なところ、初めてダンジョンに潜

るといふのに気負いすら感じさせないこと、礼儀を弁^{わか}まえてゐること等などに気を良くしたのかアルシアはコウサカのこと気が入つたようだ。また精霊武器という珍しい物を持つてゐる事にも興味を引かれたようだった。ルミルはただ黙つてコウサカとアルシアの会話を聞いていた。

「なんで、私達が呼ばれたと思う？」

「サキユバスが相手となる可能性があるからでは？」

振り返つて後ろで腕を組み、後ろ歩きしながらアルシアはからかうような笑みを浮かべてコウサカに聞いた。

「半分正解。私のパーティーは主にラビダンジョンの調査が仕事なの。だからかしらね、ご指名されたのは」

「なるほど。だから、こんなに迷いなく道を決められるわけですか」

コウサカ達は女神像が安置されている入り口から古い煉瓦^{れんが}で築かれた通路を進み、すでにいくつかの分かれ道に行き当たつてゐる。

だが、アルシア達は何の迷いもなく道を判断して進んでいる。

「そゆこと。道案内はしてあげるから、代わりにモンスターはお願いね？」

「了解しました。出来るところまで潜つてダンジョン探索をしましよつ」

コウサカの言葉にアルシアは足を止め一瞬キョトンとしたが、すぐに苦笑を浮かべた。

「あら、気付いてたかしら？」

「ギブアンドテイク、という言葉があります」

バルドラスにして強いと言わせるほどのコウサカに敵は任せて、自分達は仕事である探索を行なう。アルシアのその考えに気付いたコウサカはそれだけ言つと、アルシアを追い越してさっさと先に進んだ。開けた部屋のような場所へとコウサカは踏み入れる。

「ふう・・・、本当に真面目な子ね」

コウサカの返答にそう一息吐きながらアルシアもコウサカに続くとする。そこでふと、ルミルが何かに気付いたようだった。

「部屋・・・」

「っ！ しまったっ・・・！」

ルミルの言葉に気付いたようにアルシアはコウサカを見た。コウサカはすでに部屋に入ってしまったている。

少し開けた小部屋があった。地下要塞ラフ時代では広く作ってあるのはわざとで、わざと野営などを設置し易い広さになっており設置しようとする敵を隠し部屋から強襲したり、大掛かりな罠が仕掛けてあったり、また何かあるのではないかと言う精神面での仕掛けでもあるらしい、とコウサカはアルシアから聞かされた。

「・・・」

コウサカは全身に力を込めた。この部屋だけ人骨が散乱している。今まで通ってきた通路には一切なかった。何かある、とコウサカの本能が告げていた。

「気をつけてっ！」

白骨を見たアルシアが鋭い声を発してコウサカに警告した。それと同時に、白骨達が起き上がってきた。その手には赤い跡あとの残る棍棒が握られていた。次々とスケルトンは増え、十五体のスケルトンがコウサカを認識すると襲い掛かってきた。

ただ、それにコウサカは驚きを浮かべるでも、剣を抜くでもなく心中で亡骸の主達に詫びた。

「危ないのでそこで待っていてください」

「え？」

駆け寄って来るアルシア達にそう言うと、コウサカは振り上げられる棍棒を気にもせず一番近くにいた一体のスケルトンの、内側に魔符まふの貼られた頭部に凄まじい勢いの拳打けんたを叩き込んで粉碎した。そのままコウサカは頭部を粉碎されて崩れるスケルトンの手から棍棒ぼんぼうを取り、何の予備動作もなく投げる。ただ腕だけの力で放たれた棍棒は円を描きながら、愚直にコウサカ目掛けて直進して来る三体のスケルトンの頭部を砕きながら壁にぶつかって落ちる。

「シィッ！」

そのままコウサカは一番多く残っている四体のスケルトンの集団に突撃する。接近したコウサカに棍棒を叩きつけようと腕を振り上げるが、瞬きする間にコウサカの拳がスケルトン四体の頭部を粉碎する。粉碎されるタイムラグはわずかで、重装備にも関わらず四体の頭部が同時に粉碎されたようにも見えるほどの速度だった。中央の集団を攻撃しに行ったコウサカは、残った七体のスケルトンに囲まれる。すでに七体は棍棒を振り上げている。

「帯びるだけだ」

『りよ〜かいつ！』

剣の力を解放してはアルシア達まで巻き込むため、ただ刀身に力を帯びさせるに止め、それを叩きつける。この会話にはそんな意味があった。コウサカと朔絆の二人だけにしか理解できない会話だった。

「せいっ！」

ギリギリまで引き込んだスケルトン達に、一瞬で背中から抜かれたクレイモアを自分を中心にゴオオツ、と凄まじい風切り音を発しながら円周上に奔^{はし}らせる。光り輝く刀身は振り下ろされた棍棒よりも速く一瞬にして奔り抜け、棍棒ごと触れたスケルトンの頭部を文字通り消滅せしめた。

コウサカはザツ、と音を立てて回転を止めて背中の中の鞘にクレイモアを納める。それと同時に頭部、というよりは胸部より上が消滅した元スケルトンだった骨がガシャガシャと音を立てて崩れ落ちた。コウサカは息一つ乱していない。

「これで終わりのようです」

コウサカは回転ついでに四方を確認してもう敵がいなかったことを確認していた。一方、アルシアは茫然^{ぼうぜん}としていた。ほんの十秒足らずである。十秒足らずでスケルトン十五体を文字通り瞬殺した。たった一人でそんなことが出来るのは、ダンブレテンで十人もいない。ダンブレテンの最精鋭^{さいせいえい}に並ぶ、もしかしたらそれ以上のことを難なくこなしたコウサカを信じられない目で見ている。ルミルも同じく

少し呆けたような表情でコウサカを見ていた。

「アルシアさん？」

コウサカの言葉でアルシアは我に返った。領主バルドラスが、ダンカンのジイさんがここまで手放しで褒める奴あ他に見たことがねえ、と言っていたのを思い出した。

「君って、ホントにすごい子だったのね……。度胸だけじゃなくて」

「？ それはいいとして、進みませんか？」

そのコウサカの様子にまたアルシアは驚いた。自分がどんなにすごいか理解していないのだ。理解していたとしてもそれを誇ろうともしない。

「スケルトンは俺が処理しますので、ダンジョン調査は存分に」

実際、コウサカは本当に自分だけで次から次へと、どこから湧き出てくるスケルトンを粉碎していった。数が少ないと素手だけでガントレットの手甲で振り下ろされる数cmの厚さはある棍棒を叩き折りもした。剣を使うのはスケルトンが多い場合だけで、朔絆の宿ったクレイモアだけであった。

「ねえ、何で腰の剣は使わないのかしら？」

「骨は硬いので刃こぼれする可能性があるのです」

腰のベルトに差したままのバスタードソードについてアルシアが聞いても、コウサカはそう答えた。だから、素手と手甲を使うと。もうアルシアは苦笑するしかなかった。

そして一行が進んでいると十mほど前方にスケルトンではなく人影が現れた。

銀髪を背中を越すくらいまで伸ばして、扇状ウキのスカートに露出の多い黒い服を着て、金色の瞳をした女性が現れた。それは女性、というよりは少女と言った方がいい顔立ちをして迷惑そうな顔をしていた。アルシアとルミルの顔つきが変わった。

「まったく……あんだ達ね？ 人ん家の門番、壊しまくっているの」

「……サキュバスよ」

アルシアもルミルも武器を抜いて臨戦態勢に入っていた。ただコウサカは構えもせずに出る。サキュバスは人間と同じように思考し話すことが出来ることを知ったため、決めていた方法をしに。

「黒魔族通行証、という物を持っているか？」

それはただ頼んで譲って貰おうと言う、馬鹿正直な方法。

「……男？ 男であたしの下に来るなんて馬鹿ね……」

「っ！？ 目を見ては駄目っ！」

話がまったく噛みあっていないが、サキュバスの少女は笑うと目を妖しく光らせた。それが何を意味するか知っているアルシアがコウサカに叫ぶ。だが、しっかりとコウサカの目はサキュバスの少女の目を見ていた。

「なるほど。それが魅了する時の目か」

「……え？」

平然としているコウサカにサキュバスの少女は啞然とした。アルシアもルミルも驚いてコウサカを見た。コウサカの首にはクリステル司祭よりもらったケルト十字架があった。

「黒魔族通行証というものを譲ってくれ」

「ち、ちよつと待ってっ！ なんで効かないの!？」

アルシアとルミルが聞きたいことをサキュバスの少女が代弁した。秘密だ。君は黒魔族通行証を持っていないのか？

「ふざけ……っ！ その十字架……、そうかそのせい……っ！」

コウサカの十字架にサキュバスの少女は気付いたようだった。そして魔法を唱え半秒も掛からずに完成させた。ライトニングボルトだった。

「魅了できなくても、こっちにはまだ魔法があるんだから……っ！」

そう言ってライトニングボルトをコウサカに向け放った。それをコウサカは剣で斬るつける。コウサカはサキュバスの少女が魔法を唱えた段階でバスタードソードを抜きに掛かっていたため余裕で対応した。

バチイイインツ！とライトニングボルトが着弾すると同時に、凄まじい摩擦音のような破裂音のような音が通路に響く。着弾された当のコウサカは、バスタードソードを上から下へ振り抜いた体勢で平然としていた。

「ま、魔法を切った・・・？ うそあ・・・」

「とりあえず、話を　　」 「・・・くっ！」

コウサカが何か言おうとすると、サキュバスの少女は反転して逃げ始めた。そして、サキュバスの少女と代わるようにスケルトン達が現れた。

「とりあえず、追うのでしっかり付いて来てください」

コウサカが振り返って茫然としているアルシアとルミルの肩を叩くと、二人とも我に返った。魅了が効かないなんて自体になるとは思ってもいなかったのだろう。もう一度コウサカが同じ言葉を言うと、二人は頷いた。

コウサカが振り返るとスケルトン達が迫ってきていた。狭い通路なのでスケルトン達はほとんど一列になっていた。コウサカは走り出すとスケルトン達の頭部を先ほどと同じように拳打で粉碎しながらサキュバスの少女を追った。スケルトン達は棍棒を振り上げた段階で、すでに頭部を粉碎されるため次々と現れては崩れていった。コウサカは頭部を粉碎されて、崩れ途中の骨を自らの身体で弾き飛ばしながら進む。瞬く間に通路は骨で埋まった。

「何なのっ、あの化け物はあああああああああーっ！？」

サキュバスの少女は何十というスケルトンを素手だけで粉碎し跳ね飛ばしながら、後ろから追ってくるコウサカに恐怖し半泣きになっていた。

コウサカがスケルトンを粉碎しながら進んでいると、少し広く行

き止まりの部屋に行き着いた。サキユバスの少女は肩でせあはあ息をしながら、何かを唱えていた。魔法かと思いコウサカがバスターソードを抜くが、違った。

「あたしの切り札、見せてあげるっ！」

サキユバスの少女が叫ぶと同時に、スケルトンが現れた。だが、全身が鉛なまりのような光沢こうたくを放ち、手にはショートソードを持ち、弓矢を背中に背負っていた。スケルトンを魔法的に強化したメタルスケルトンである。その数五。三体は剣を構え、今までのスケルトンより遙かに人間に近い動きでコウサカに迫る。残り二体は弓矢を構えてコウサカを狙っていた。サキユバスの少女もライトニングボルトを唱えている。コウサカは資料には載っていなかったため、今まで出現したことがない手強いスケルトンか、と分析した。

「二人は逃げてくださいっ！」

追いついたアルシアとルミルにそう叫びながら、コウサカはカイトシールドとバスターソードを構えた。構え身体をカイトシールドで隠した瞬間、ライトニングボルトが直撃した。クリステル司祭により施された魔法耐性のおかげで衝撃はかなり小さなものだった。しかし、直撃した衝撃でほんの一瞬コウサカの動きが止まる。それを狙って初速六十m以上の速度で一本の矢が僅わずか三、四mの距離から飛んでくる。それをコウサカは難なくバスターソードで切り落とすと、その隙を狙って次は三体のメタルスケルトンが剣を振り下ろす。

「はあっ！」

気合ひとつ。コウサカはそれを矢を斬って隙となっていたバスターソードを半秒で戻すと、力を込めたその横薙よしなぎで三体の剣を軽々と全て弾き上げる。その瞬間にもう一体が矢を放つ。たった数mの距離で放たれたそれは、コウサカの唯一生身が露出している顔へ向かってきた。力を込めて動いてしまったため身体が少し硬直しながらも、それを反射的に首を傾けることで避ける。コウサカの首の薄皮一枚を矢が切り裂いていった。

「っ……!？」

まさかそこまで避けるとは思っていなかったのか、サキュバスの少女は魔法の詠唱もせずに目を見開いて固まった。素早くコウサカは屈んで、剣を弾き上げられた衝撃で体勢を崩しているメタルスケルトン三体に足払いを喰らわせ転倒させる。そして、コウサカはバスターソードとカイトシールドを手放しクレイモアを、転倒した三体を飛び越えながら抜く。残り二体のメタルスケルトンは矢を番えている最中だった。

「さつきと同じだ」

『まっかせなさいっ!』

コウサカはそう朔絆に言いと、矢を番えている二体にクレイモアを横に薙いだ。二体の、体が鉄のように硬くなっているはずのメタルスケルトンは易々と切り裂かれ、頭部が消滅した。コウサカは横に薙いだ勢いをそのままに、振り向くようにしてまた横薙ぎをする。その斬撃はちょうど起き上がったメタルスケルトン三体を切り裂いた。コウサカはようやく詠唱して放たれてきたライトニングボルトをクレイモアで易々とかき消すと、その切っ先をサキュバスの少女に向け視線も少女の目に向けた。

そこで、サキュバスの少女が笑みを浮かべる。

「……あたしの勝ち。もう十字架はない」

そこでコウサカは気がついた。首に掛けていたケルト十字架がなくなっていることに。おそらく、先ほどの矢が吊るしている鎖に当たったのだろう。そうコウサカが場違いに分析していると、少女の目が妖しい光を放った。

「二人は逃げてくださいつ!」

初めて聞くコウサカの大声を聞いたアルシア達は勿論、逃げなどしない。二人とも武器を構えて援護に入ろうとする。しかし、先ほどのコウサカの動きを見ているため、下手に入っても邪魔になるだ

けと判断して動くに動けない。ルミルは短剣を抜かずに投げナイフを構えて、弓矢を放とうとしているメタルスケルトンに投げつけるが、空しく金属音が響いて弾かれただけであつた。しかも、次は弓自体を狙つて投げられたナイフをメタルスケルトンはわざと少し動いて自らの体を盾に弾いた。メタルスケルトンは攻撃されたにも関わらず、ルミルには構わずコウサカに向け矢を引き絞つていた。しつかりと優先順位を理解しているのだ。判断力も動きも、本当に人間のようである。

「・・・すごい」

アルシアもルミルも同じことを口にした。コウサカは全ての攻撃を避け切つて一瞬で足払いを行ない、次の一瞬にはすでにクレイモアを抜いて弓矢を構えているメタルスケルトンに飛び掛つていた。そしてそのまま切り裂き、起き上がった三体のメタルスケルトンもタイミングを計つたように切り裂かれた。最後に予想したようにサキュバスの少女から放たれたライトニングボルトを弾いて終わりだつた。

「・・・あたしの勝ち。もう十字架はない」

そこで二人も気付いた。コウサカが首から下げていたケルト十字架が、足元に落ちていた。

「まずいつ・・・!」

アルシアはコウサカのあまりにも圧倒的過ぎる動きに茫然としているルミルから投げナイフを奪い取り、サキュバスの少女に投げようとした。もしコウサカが魅了されて敵になれば自分達は確実に死ぬことを瞬時に理解したからだ。だが、アルシアの動きは遅すぎサキュバスの少女の目は妖しく光つた。それから一瞬遅れてアルシアはナイフをサキュバスの少女に向け投げ放つた。

「っ!？」

サキュバスの少女はそれに気付いて避けようと動くが遅かつた。ナイフは確実に首を切り裂く軌道だつた。だが、そこで横から手甲をはめた腕が伸びて、飛翔しているナイフを掴んでしまった。コウ

サカの手である。それにアルシアは力なくペタン、と地面に崩れ落ちた。もう打つ手が何もない。

「そん……な……、こんなところで死ぬの……?」

襲い来る恐怖感にアルシアはそう力無く呟いて、涙を浮かべた。ルミルもアルシアを見て状況を理解し、顔を青くして動けなくなった。しかし、そこで魅了されたはずのコウサカが声を発した。

「いや、殺しては駄目ですから」

その言葉に全員が茫然とした。掴んだナイフを捨てると、コウサカは再びクレイモアの切っ先をサキユバスの少女に向けた。

「え……まさか、まだどこかにお守りを……」

「いや、それひとつだけのはずだが」

コウサカは落ちているケルト十字架をチラリと一瞥いちべつすると、視線をサキユバスの少女に戻して言う。

「……あ。ね、ねえひとつ聞いていい?」

「ああ」

「あなた……あたしが可愛くない?」

「いや、可愛いと思うが」

「え、ええ……」

コウサカは大真面目な表情で言うてくるため、場違いだがサキユバスの少女は気恥ずかしくなってしまう。サキユバスの少女は魅了する要因として「可愛さ」というものを使っているので、それが効いているか確認したのだ。

「……な、何なのよ。あなたは……」

今度はサキユバスの少女がペタン、と崩れ落ちて信じられない表情で言った。と、そこで部屋の至る所で発光現象が起こった。全員が眩しさに、コウサカを除いて目を瞑こむってから目を開けると、サキユバスの少女と色違いだが似た格好をした数人の女性達が現れていた。

「お、おねえちゃん……!」

サキユバスの少女は喜色を浮かべてそう言った。数人のサキユバ

ス達は「必死な」殺気を放ちながらコウサカを見た。

「・・・うちの可愛い妹に何をしているのかしら？」

そう言っつて別の二人のサキユバスが腰を抜かして座り込んだままのアルシアと、茫然と立ち尽くしたルミルに剣を向けた。

「・・・とつととその剣、退かどさないで殺すよ」

一人のサキユバスが冷たく言い放つ。どこか必死さを感じさせる声色で。

「・・・あ、あはは。こ、これで形勢逆転っ！ よくも散々やっつてくれたねっ」

突然、味方が増え圧倒的に有利な状況になったことで、サキユバスの少女はよろよろと立ち上がると勝ち誇ったように笑った。

「さあ、とつとと剣を離すんだよっ！」

「痛っ・・・」

サキユバスの一人がアルシアの肩を軽く突き刺した。アルシアは苦痛の表情を浮かべるも傷口を押さえることも出来ない。と、そこで何故か朔絆が三十cmほどの身長で実体化して姿を現した。その表情はサキユバス達を心配そうに見ていた。

『ねえ、あんまそういうの止めた方がいいよ？ こいつキレるから』
それはつい最近、コウサカから朔絆だけに教えられたことだった。どうやら人の生き死、または危ないの場面に遭遇すると頭の中でスイッチが入るらしい、たぶん前にいた世界での記憶が頭では忘れているが身体に染み込んでいるらしいと。その時のコウサカの顔を見て、朔絆は直感的に真実だと悟った。

「あはは、何をいうかと思ったら・・・この状況でその男に何が出来るのかしら？」

一番上らしいサキユバスがそう言っつと、アルシア達に剣を向けている二人にとある一言を言った。だが、やはりどこか必死さを感じさせる声色で。

「そつちには用はないから殺してしまいなさい」

カチリと音が鳴る。それはコウサカの頭の中で。

直後、サキュバス達の全身に鳥肌が立ち、本能的な恐怖で膝が笑い出した。全員が顔を真っ青にして身体を震わせた。その光景を見て朔絆が、あゝあゝ、という表情を浮かべていた。

『あゝあゝ、知らないかね』

そう言っただけ姿を消した。立っているのは剣の切っ先をサキュバスの少女に向けたコウサカだけであった。ただ表情は一切変わっていないが、静かで凄まじい殺気を放っていた。それは数人のサキュバスの殺気を易々と飲み込んでしまったほど、何十倍も濃くしたような濃度だった。

一番間近でその殺気を浴びたサキュバスの少女は失神寸前で顔を真っ青にして身体を震えさせ、その場にまたへたり込んだ。コウサカは体勢を変えないまま静かに口を開く。

「よく聞け。これ以上その二人に何かするということなら本気で殺す」

普段のコウサカとは違い、その声は冷酷こくはくだった。圧倒的有利だったはずのサキュバス達の戦意は木っ端微塵はみじんになっていた。

「何もしないと誓えるなら、こちらで危害を加えない。どうする？」

「わ……、わかり、ましたわ……」

その言葉に、本能的に逆らってはいけないことを悟った一番上らしいサキュバスの女性が力無くそう言う。恐らく、アルシアとルミルは殺せてもこの男にだけは勝てない。自分達は皆殺しにされるだろう。その心中にはそういう考えが占めていた。

と、全員が身体が軽くなったのを感じた。コウサカはクレイモアを背中に戻し、殺気を消していた。すると、目の前でへたり込んでいたサキュバスの少女に、膝を着いて話しかける。

「黒魔族通行証を持っているか？」

「……な、何であたしに聞くのよ」

「目の前にいたからだ」

「……ホントあんだ、なんなのよ」

殺気から開放された事と、コウサカのあまりにも適当な答えにサキュバスの少女は溜息を吐いた。

アルシアの肩の傷は刺した本人にピールを唱えさせて手当てさせると、コウサカ達はサキユバス達に連れられてダンジョンの更に奥へと進んだ。そして、最奥部と言えるところに「家」を見つけた。アルシア達はそれに目を見張るが、コウサカは何の興味も示さなかった。

「少しそこで待つてください」

一番上、ミレイナというらしい名前のサキユバスは「家」の中に入ってしまった。他の者は外で待つ。「家」を背にして四人のサキユバスがコウサカと面をつき合わせて、コウサカの後ろにはアルシアとルミルがいた。

「ねえ、あんたホントに人間？」

一番最初に出てきて、コウサカに追いかけられたサキユバスの少女の名前はエレナというらしい。コウサカを怖々とずっと見ていたが、気になって仕方がないのか、意を決したようにそう聞いた。

「厳密には違う。ミレンシアの人間だ」

「だから、あんなに化け物じみてたんだ……。通行証……。渡した瞬間に斬りかかって来る気じゃないよね……。？」

「その気があるなら、さっき囲まれた段階で一人を残して斬っている」

例えでもなく本気でそう言っていることを察すると、エレナは顔を青くした。コウサカはそれを見て溜息を吐くと、害意はないことを示すように兜を外して脇に抱えた。

「そちらが何もしないなら何もしない。少しは信じる」

「散々追い回したくせに……」

「俺が話そうとすると君が逃げるからだろう」

「ああ、まあ……。何なのあんた……」

エレナはそう言って頭痛でもするように頭に手をやった。コウサカはそれに首を傾げただけだった。

「何となく……魅了が効かなかった理由が分かった気がするわ……」

アルシアは呆れ顔でそう言って溜息を吐いた。そこでミレイナが「家」の中から出てきた。手には黒いお札のような物を持っている。「ふむ。なるほど、それが」

「……条件があります」

コウサカが手を出すと、ミレイナは通行証の上で両手を重ねて胸に当てた。

「この「家」のことは他言無用、ということだろう。アルシアさんも、ルミルさんもいいですね？」

それに全員が驚いた。勿論、アルシアもルミルもである。

「ま、待ってよ、ミレンシア君っ！ さっきはギブアンドテイクだつて自分で……」

「通行証を渡してもらうこともギブアンドテイクです。このくらいの条件は飲みます」

「私達、さっき殺されかけたのを忘れたの……？」

「あれは、俺達を殺そうとしていたわけではなく、ただ妹に危険が迫っていたため攻撃して来ただけかと。殺気に憎しみが感じられなかったのです。それに殺すつもりなら出現した瞬間に二人を殺して、即俺にも襲い掛かっていたでしょう。違いますか？」

それに必死すぎた、と心中で付け加えながらコウサカはアルシアに言った。

「そ、それは……」

「仕方がなく攻撃してきたのです。そこを勘違いしてはいけないうすよ」

ただし、とコウサカは続ける。少し怖い目をしてエレナを見る。

「その子には、もう少し教育をしてほしいがな」

「あ、あんた達が勝手に人ん家に入ってきたから悪いんじゃないかっ！」

「元々、この地下要塞は人間が作った物だ。それに話も聞かずに魔

法を放ってきたのは君だろう。しかも、俺は剣すら抜かずに話しかけたと言つたものを」

「あっ……！う、うるさいっ！」

「エレナ……ちよつと黙っていて」

ミレイナが呆れたように溜息を吐く。子供の喧嘩けんかを仲裁ちゅうさいする母親のような顔をしていた。

「分かりました、よく言つて聞かせます。なので……」

「俺が責任を持って約束は守ろう」

コウサカはアルシア達の意見を聞かずに一方的に決めてしまう。

アルシアは当然、反発した。その顔は厳しかった。

「待ちなさい、ミレンシア君。相手は魔族なのよ？何を言っているの」

「なら、ラビダンジョンのサキュバスが人間を殺したという話を聞いたことがあるのですか？もしくは、ダンジョンから出て来て襲つたという話でも」

コウサカから逆に問われ、アルシアは反応に困る。

「な、ないけど……。だからつて……！」

「私達はポウオールとは違います」

アルシアの話の途中でミレイナが割り込んだ。その目には真摯しんじな光が宿っていた。それに何となく、コウサカは直感的に返した。

「その中に、赤黒いローブを着た男はいるのか？魔法や魔符を使って操ることが得意な」

「赤黒い……？」

コウサカの言葉にミレイナは、はつと何かを思い出したような表情を浮かべた。

「……はい。名前は知りませんが、とても酷い男だったので覚えています。確かにその男もポウオールです」

そう言つミレイナの顔は、強い憎しみを浮かべていた。それにコウサカは目を細める。

「なるほど。あの勢力はポウオールというのか」

「ポウオールと関わったことが……?」

「ああ、その中の一人の男と戦った。……殺し損ねたが」

その場の全員に一瞬だがひどい寒気が走る。コウサカの目に危険な光が宿るがすぐに消えた。そして、アルシアに言った。

「魔族の中にも、平和に暮らそうと思う者もいる。憎しみ、先入観だけでモノを考えてはいけませんよ」

コウサカは上辺うわへではなく、本当に心からそう言っていることが感じられるように平然と言い放った。

「……そう。……はあ、もお……まったく。本当に変わっているわね。キミは」

コウサカのあまりにも公平で泰然たいぜんとした言動を見てアルシアは溜息を吐いて苦笑した。そして笑みを浮かべてコウサカに言った。

「わかったわよ、言わない。絶対にね。ね、ルミル?」

「はい」

清々とした笑みを浮かべるアルシアがルミルにそう言うと、ルミルも微かに笑みを浮かべて同意した。それにコウサカはそれにひとつ頷くと手を出した。

「通行証を」

だが、ミレイナは渡さない。驚いた表情を浮かべたままポカンとしていた。

「どうかしたのか?」

「え、い、いえっ……あなたみたいな人がいることに驚いてしまっ……」

「どういう意味だ?」

『あなたがバカだっ……このバカっ!』

朔絳が実体化して出て来てコウサカの肩に座りながら、面白そうにそう言った。今回は存分に使われたためか、かなり機嫌がよかった。

「なるほど」

「ち、違いますっ!」

コウサカが納得するとミレイナが慌てて否定した。それに、ああ、とコウサカは補足を入れる。

「ああ、わかっている。この状況で罵倒はとうする発言をしても自分の首を絞めるだけだろうからな。たぶん違う意味で驚いたのは理解している。朔絆、話の途中で茶々を入れるな」

コウサカがそう言ってやるとミレイナの顔に安堵の色が浮かんだ。朔絆はイタズラが成功した子供のような笑みを浮かべた。コウサカはやれやれ、と小さく溜息を吐くと再び手を出した。

「通行証を」

緊張した表情を浮かべるミレイナがゆっくりと通行証をコウサカに渡す。コウサカはそれに少し目を向け、すぐにカバンに仕舞う。

「感謝だ」

コウサカは軽く目礼をミレイナに送る。それを見て、ミレイナは疲れたようにゆっくりと息を吐いた。そして、最後にもう一度同じことを確認した。

「あの、この存在はくれぐれも・・・」

「信じる」

ただ一言だけの言葉だが、強い力がこもっていることをミレイナは感じ取る。ミレイナは深く、しっかりと頷いた。それを見て小さく頷いたコウサカはエレナを見た。

「追い返そうとするのもいいが、ほどほどにな」

「う・・・、わ、わかっているよっ!!」

痛いところを突かれたエレナは慌てたように言う。コウサカはそんなエレナに構わず、アルシアとルミルを促して元来た道に戻り始めようとする。それを見たエレナは慌てて口を開く。

「あ、待ってっ！ あんたの名前は？」

「コウサカだ」

兜を被り直しながら、コウサカは首を捻かぶってエレナに視線を向けるとそう言った。そして、今度こそ元来た道に戻って行った。

「コウサカ・・・変な人間」

エレナは口を尖らして、遠くなるコウサカの背にそう言い放った。そして、何故そんなことを聞こうと思ったのか分からず、小首を傾げた。

急いで道を戻るコウサカ達の前に、もう一体として襲い掛かってくるスケルトンはおるか、倒してきたはずの白骨のひとつとして転がっていないかった。

あとからコウサカがバルドラスに聞いて知ったことだが、ラビダンジョンにサキュバス目当てに潜った男達はほとんどが無傷で、潜った時の記憶は無くして帰って来たそうだ。ただ犯罪者などが隠れ^{みの}蓑にしようと潜った後、二度と出てこなかったそうだ。
ただ平和に。それに嘘偽りは無かった。

第七章 ラビダンジョンに住まうサキユバス（後書き）

【おまけ】
サキユバスの『魅了』という能力について（読みたい方だけど
うぞ）

誰かを好きになる、恋愛に強く関連するのは人間の脳の腹側被蓋野（ふくそくひが）という部分です。脳内ホルモンであるドーパミンの分泌にかかわっています。この部分が恋人の写真を見るなどを見ると活性化します。

この活性化によって脳内にはドーパミンが大量に放出されることになります。ドーパミンは強力な麻薬に似た作用を持っていて、人に強い「快の感情」を発生させるとともに、学習によってもう一度その快感を味わいたいと思わせて、特定の行動を繰り返させたり物事に強い集中力を発揮させたりする作用があります。つまり、好きな人とまた会いたい、触れたいと思わせるということ。集中力が増すのは飴（あめ）と鞭（むち）のような感じと思ってくれば。

サキユバスの「魅了」とは、マナの強い操作によって脳を幻惑させ、ドーパミンの放出をさせて自分のことを擬似的に愛していると思ひこませることです。これは相手が自分を好きになる要因がないという意味がなく、サキユバスなら綺麗な女性に男性が見惚れる、下心という要因を用いています。

ちなみに、男性なのに男が好きだったり、女性なのに女が好きな人には効きません。幻惑させる要因が根本から違うからです。男性が好きならインキュバス、女性が好きな女ならサキユバスという状況なら効果があります。

強いマナ（魔力）操作ですが、人間には不可能です。出来るとしても精神が焼き切れます。つまり、もし出来たとしても死にます。洗脳魔法とはそれほど高度なものです。

第八章 女神の見せた悪夢

夢を見た。それは最後には登場人物達が死ぬか殺されるか、または不幸の道へと向かう悪夢だった。

一行がラビダンジョンから出るとすでに夜になっていた。ラビダンジョンから戻ったコウサカ達は報告のために領主バルドラスの下へ行き、コウサカは当然のようにサキュバス達の「家」のことは口にしなかった。アルシアもルミルもそれに倣^{なら}った。

無傷で帰ってきたコウサカを、予想してたが本気でやるたあな、とバルドラスは満足げに笑いながら報告を聞いた。

「失礼します」

「おう、何かあったらまた来やがれ」

アルシア達には特に何も言い残さず、素っ気無くコウサカは最敬礼をして退出していく。その背を見送ったバルドラスは、視線は扉に向けたままアルシアに声をかける。

「どうだったよ、あの坊主は？」

「はい、戦闘能力だけ見てもガーディアンナイトに匹敵するかそれ以上です」

ガーディアンナイトとはダンブレテンの中でも最強の者達を呼ぶ言葉である。その者達はたった十人それだけを持って十倍の百人以上よりも強いとされる。

「人格の方は・・・」

アルシアはコウサカの人格を思い出そうとする。そして、つい笑ってしまう。

「なんだ？」

「ふふ・・・、いえ何でもありません。人格の方も文句なしに素晴

らしいですわ。本当に公平すぎて怖いくらいに・・・」

そう言うアルシアの顔は、困ったような笑みを浮かべていた。

「・・・そうか。わかった。お前等も疲れただろうし、休め」

「では、失礼します。領主様」

アルシアは一礼して退出する。ルミルもアルシアに倣って一礼し、退出していった。

「・・・やれやれ。引き入れんのは無理かなこりゃ」

一人残ったバルドラスは、わかっていたように溜息を吐いた。

『そいえばさ・・・』

コウサカはすっかり暗くなり人気のなくなった道を宿屋に向かって歩いてみると、朔^{さき}絆が実体化はせずに声を発した。

「何だ？」

『・・・なんで、さっきはあんなに察しがよかったのさ』

その声は不機嫌だった。

「いつのことだ？」

『ダンジョンで「家」のことを向こうが言う前にわかったこと』

「ああ、それか。「家」を見た時のアルシアさん達の反応、サキユバス達の顔色、出来る限り侵入者を殺さずに記憶だけ消して何も無かったとして帰す事。それから考えれば「家」がどのくらいサキユバス達にとって大事なのか簡単に考えが至る」

コウサカは、当然だと言う様に言う。

『・・・』

朔絆はコウサカの目の前に実体化をする。その顔は大変お怒りだった。

『バーカっ!!』

それだけ言うと、朔絆の姿は消えた。

「・・・何だ」

コウサカは訳が分からずひとつ首を傾げると、再び宿屋へと歩き

出した。

次の日。

コウサカは聖堂に向かうと、仕事だったクリステル司祭に面会をさせてもらった。

「・・・やはり、これは魔族専用ですね。一週間ほどかかってしまいますが、人間にも効果があるように作り変えてみます」
「お願いします」

さらりとすごいことを言うクリステル司祭にコウサカは頭を下げると、聖堂を出て宿屋に帰る。宿屋にはナユキはいない。コウサカがラビダンジョンに向かう前にナユキに学校で魔法ついて教えてやってほしいとバルドラスに頼み、快諾かいだくされ昼間のうちは学校で魔法について習うことになった。ちなみに授業費はコウサカが出費。

宿屋に戻るとコウサカはカリンに捕まった。

「あ、コウサカっ。暇だろうから一緒に来てよっ」

「・・・まあ、別にいいが」

「じゃ、れっつごーっ！」

そう元気良くカリンが飛び出していくと、コウサカは小さく溜息を吐いて帰ってきてすぐに宿屋を後にした。

「何をしに行く気だ？」

「ちよつと野草を取りに。日々の節約はコツコツとっ」

「それなら、俺が付いていく必要はないと思うが」

「今回はちよつと遠いから念のため、つてとこ」

それにもうひとつ溜息を吐いて、コウサカは何かを言うのを止めた。カリンとコウサカが話しているとよく朔絆が出てくるのだが、もう面倒くさいのか一言すら発しない。

二人はダンバートン西門から出て、南西へと向かった。放牧された羊や牛を見ながら歩いていくと、背の低い林に着いた。常人には色が紛まぎれて見えないだろうが、コウサカの目には林の奥に野生のク

マヤオオカミが見える。魔符まふに関係ない普通の野生動物のようだからコウサカは、まあいいか、とカリンには伝えなかった。

「あまり奥まで行くなよ」

「もっちゃん。そんなの分かっているよ」

そう言いながらもカリンはどんどん林の中へと入っていく。

「奥まで来ているが」

「そのためのコウサカでしょ？」

カリンは顔だけ振り向いてウインクひとつ、コウサカに笑いかけた。

「・・・ふう」

コウサカは一息吐くと、木にもたれ掛かった。だが、感覚だけは鋭く研ぎ澄ます。風に木々が揺れ、木の葉が揺れる音、動物達の気配、それとは別の気配。

そうして気配を探っていると、コウサカは妙な気配が近づいて来ることを感じ取る。だが敵意、害意、殺意などは感じられない。だからそれがおかしい。野生動物が自然と近寄ってくるような雰囲気、コウサカは発していない。むしろ、怯えて遠ざしかからせて然りである。

「・・・」

コウサカはそっと、腰のバスタードソードに手をかける。出来るならカリンに悟られないように終わらせたい。

そしてコウサカの目の前には一匹のオオカミが現れる。しかし、怯えるわけでもなく近づいてくるわけでもなく襲ってくるわけでもなく、ただじつとコウサカを見ているだけだった。その目には不思議な光が宿っていた。

「・・・何だ、お前は？」

敵意のないことを感じるとコウサカは剣から手を離す。そして、膝を着いて視線をオオカミと合わせた。直後、コウサカは自分の頭が揺らされたような錯覚を覚えた。

(・・・何だ?)

夢を・・・私から・・・。

(っ・・・!?)

コウサカは自分の頭を押さえる。確かに今、頭の中に直に声が響いた。気付くとオオカミの姿は消えていた。

「何してんの？ そんなところで」

コウサカは、はっとして立ち上がる。それをカリンが不思議そうに見ていた。コウサカは軽く頭を振って、冷静に戻す。

「野草取りは終わったのか？」

「ん、ああ。終わったよ」

そう言っただけでカリンは取った野草を掲げた。

「そうか。なら戻るとしよう。あまり長居しても仕方がない」

「え、え？ わ、わかった」

コウサカがとつと踵かかとを返してしまったので、カリンも慌てて後続いた。あとで聞いたが、朔絆には声は聞こえていなかったそう。で、オオカミも煙のように突然消えたのだという。

「・・・ふう」

酒場で夕食を済ましてきたコウサカは、自室に戻ってくると同時に面倒くさそうに一息吐いた。朔絆が気持ち良さそうにベッドの上で寝ていたからである。わざわざ完全実体化をしてベッドを占領していた。

「・・・まあ、いいか」

あどけない表情で寝息を立てている朔絆を見てると起こすのも気が引けて、コウサカはランプの灯りを消すと床に腰を下ろして壁に背を預けた。格好は相変わらず下半身は鎧のまま兜は脱ぎ、上半身は灰色のアンダーウェアである。バスターソード、カイトシールドかたわを傍らかたわに立て掛けコウサカは目を閉じた。

いつもよりも妙に強い睡魔すいまが襲かってきてコウサカは眠りに落ちる。そして落ちる直前、ある言葉が頭に響いた。

夢を。私からあなたに。

。

夢。ただ薄ぼんやりとした情景じょうけいが流れるだけのそれではない。その場、人、全てが克明こくめいに現れ、会話も間近で聞いているような不思議なものだった。

そこはアルビダンジョンで、三人の青年と少女が今まさにダンジョンに潜ろうとしているところだった。

「この学校はダンジョンに行く授業もあるのか？ 女の子をダンジョンへ一人で行かせる先生がいるとはねえ……」

「もう、レイナルド先生をそんな風に言っちゃダメ！ 考えがあつてのことなんだから！」

スマートショート風の赤髪に茶色の瞳をした剣を携えてがっちりとした青年がそう言うと、小柄で弓を手に真朱色まそおいろの髪をポニーテールにして緋色の瞳をした少女がそう返した。

「まったく……女の子は若い男の先生に弱いからなあ……」
「……。ダンジョンに行かせる目的は、仲間を探す方法を教えるためだと思いますが……」

やれやれと赤髪の青年が言うと、ルード風の飴色あめいろをした髪に紺碧こんへき色の瞳で、ローブに身を包み眼鏡をかけた青年が呆れたように言った。

三人の名前はそれぞれ赤髪の青年がルエリ、ポニーテールの少女がマリー、ローブ姿の青年がタルラクである。三戦士と呼ばれ各地のダンジョンを巡り、「理想郷」であるティルナノイを探してい

た。ただし、タルラークは世捨て人のそれではなく、泰然^{たいぜん}としながらも活気に満ち溢れていた。

「ティルコネイル出身者は、男も女も強いから大丈夫！」

「ハハツ、マリーを見てるとそんな気がするよ。んじゃま、行つてみようか」

そう言つと、ルエリは先頭を切つてダンジョンへと潜つた

見知らぬ侵入者に対して襲い掛かつてくる人間ほどの白いクモや、凶暴化しているネズミやコウモリを蹴散^{けち}らしながら一行が進んでいくと、二人の後ろを歩くタルラークが声を発した。

「ここで少し休むことにしましょう・・・」

前を歩くルエリとマリーは互いに一瞬、顔を見合わせ頷いた。

タルラークはその辺に転がっている木片や枯れ草など燃えそうなものを集め、ファイアボルトの要領で火を起こした。三人は火を囲むように座る。

「本当にクモが多いな・・・それに大きすぎないか？」

「あのね、ダンジョンの奥にはもっと大きなクモがいるんだよ」

「げ・・・マジで？」

ルエリは道中で蹴散らしてきたクモや動物達のことを愚痴^{ぐち}ると、マリーはそう答えた。二人の話を聞いたタルラークは考え込む表情になった。

「おかしいですね・・・。動物達が急に凶暴になったことと、何か関係あるのかもしれませんが」

「ここへ来る途中も、オオカミがたくさんいたよな」

タルラークの言葉にルエリが付け加えると、マリーは意外そうな顔をした。

「え？ 元々そうじゃなかったの？」

「何年か前に来たときは、本当に静かな田舎^{いなか}だったぞ。おまえ・・・本当にこここの出身なのか？」

「なによ〜！ マリーは誰が何と言おうとティルコネイル出身なんだから！ ただ・・・記憶がないだけ・・・」

ルエリが胡散臭うさんくさそうに言うと、マリーは慌てたように言い繕つくろったあと表情を曇らせた。

「・・・ああ、忘れてたよ・・・そうだった。すまん・・・覚えていないんだつたな・・・」

マリーの言葉に、はっと気付いたルエリは決まり悪げに謝った。

「恐らく、ドルイドの魔法で封印されているのだと思います。私の先生も出来た覚えがありますよ。悪事のために使う魔法ではないので、安心してください」

「わあ・・・タルラークって、優しい〜！ バカのルエリとは本当に違うわあ〜。大好き！」

「なに、バカだと!？」

タルラークがマリーに起こっている事象について自分の分かる範囲で解説し安心させるように言うと、マリーは笑顔を浮かべた。一方、馬鹿にされたルエリはマリーに食って掛かった。そんな様子を見てタルラークは儂はかなげな笑みを浮かべた。

「はは・・・私もたまに記憶を消したときがありますよ」

「ああ、魔族に殺されたお姉さんのことか？」

「こらっ、ルエリは「デリカシー」ってもんがないよ！」

ルエリがそう言うとマリーがルエリを指差して声を怒らせながら言う。だが、タルラークは少しだけ寂しげに笑いながらそれを止めた。

「はは、大丈夫ですよ。単なる事実を述べただけですから。それにルエリと一緒にティルナノイを探しているのもそのためですし」

「へっ、オレが強くなったら魔族なんぞ全部やつつけるから心配すんな！」

「ルエリ、単純で知恵がない〜」

「ハハ・・・」

ルエリが自信満々に言い放つと、マリーは呆れ顔で返した。それ

を見たタルラークは小さく笑うと立ち上がった。

「頼もしいかぎりですよ、ルエリ。さて……そろそろ行きまじょうか」

「おう！」

「うん！」

二人も立ち上がり火を消すと、再び奥へと進んだ。

「うらあつ！」

マリーの放った矢やタルラークの魔法で動きを封じ込められた人間の数倍もある巨大な赤いクモは、ルエリの全身のバネを使って繰り出された一撃を持って体を切り裂かれて絶命した。三人は絶命しながらも、微かに体が痙攣けいれんしている巨大クモの死骸しがいに近づく。タルラークはそんな死骸を見て眼光を鋭くした。

「……ルエリ。ここはちゃんと調査してみる必要があります。こんなクモはエリンにはいません。魔族がやったことに違いないでしょう」

「ダンジョンなんだし、元々こんなヤツくらい居そうじゃない？」

「確かにだんだん増えて来ているようだしな。昨日の女神となんか関係あるのか？」

「え、いきなり何のこと？」

突然ルエリが脈絡もないこと言うと、マリーは怪訝けげんそうな表情を浮かべた。

「夕べの夢ゆべに美しい女神が現れて、『何かが起こっている』って言ったんだ」

「また、イヤらしい夢じゃなかった？」

「ルエリ。その夢の話、もっと詳しく話してくれませんか？」

ルエリの言葉にマリーは呆れたように笑ってからかかっていると、タルラークが真剣な表情を浮かべてルエリに問うた。

「あん？ ええつと……黒い羽の付いた女神がどっか暗いところに

立ってて、『私のところへ来てください』って言ったんだ。世の中が危機に陥る、とか……」

「黒い羽の女神が……？ まさかティルナノイへ……」

ルエリの言葉を受け、タルラークの顔色が変わった。

「タルラーク、何か知っているの……？」

「ダンジョンとは、元々は魔族の世界からエリンを保護する装置。ティルナノイにいる女神の力で迷路となっているんです」

マリーが不安そうに聞くと、タルラークは話し出す。

「しかし……これほどまで魔族がたくさん現れるようになったということは、やはり女神の力に何かしら問題が発生したようですね。ルエリの夢は、本当に女神のメッセージなのかもしれません……」
タルラークが言い終わると、ルエリは驚くどころか喜色を浮かべて笑っていた。

「オレが女神に選ばれた、ってことか？ 光栄だな……オレにも行く理由ができちゃった。ハハッ！」

「マリーも手伝ってあげる！ 女神に記憶を取り戻してもらえるかもしれないしね」

一通りの探索を終えた三人は元来た道を、ティルコネイルに向かった。

そこで、夢は一旦プツリと切れる。

情景が暗転したかと思うとラビダンジョンの祭壇にタルラークが一人で立っていた。そして何度も何度も潜っては帰ってきた。すでに数度目になる。タルラークは祈るように女神像に目を伏せ黙礼を送る。

（魔導力を分析してみると、ダンジョン内には女神像によって封印されている場所が存在する……そこがティルナノイへ行く道。女神よ。あなたが封印している地へ行き、あなたを助けられる栄光をください。私と同じ道を歩むマリーとルエリを守ってください。女

神の恩恵おんけいが私たちを守ってくれるよう、祈りを捧げます・・・
目を開け、顔を上げたタルラークはダンジョンに潜っていく。また彼女と出会うだろうと思いながら。

最下層の最奥部まで歩みを進めたタルラークの耳に、歌声が届いた。一人のサキュバスが悲しそうで儚げで、そして寂しげな声で歌っていた。

それは、まだ魔族であった頃のクリステルであった。

・・・ララ・・・ララ・・・

入ってくるときはその剣を捨てて・・・。

あなたに近づくとき、その剣に映っている私の姿が、私の胸を痛めるの・・・。

・・・ララ・・・ララ・・・

あなたが私のベッドルームに初めて入ってきた日、じつは私は驚かなかったの・・・。

私の心にはもう、あなたの愛が住んでいたから・・・。

・・・ララ・・・ララ・・・

目を閉じないで・・・。

あなたの瞳に、私を閉じ込めて・・・。

あなたは私の主人・・・。

あなたは私の主人・・・。

黒いバラの永遠なる主人・・・。

歌い終えたサキュバス、クリステルはタルラークを認めると寂しげな笑みを浮かべた。

「・・・聞いてた？　あなたのために作った歌よ」

「あなたの美しさと知恵については聞いていますが、人間を惑わせるために作った歌はそれほど聴きたくありません。道を退いてください」

タルラークはただ目を伏せたまま無感情にクリステルに返した。それにクリステルはまた寂しげな笑みをひとつ浮かべた。

「・・・。あら、そう？　あなたがここを訪れるのも、もう五回目ね。他の男達みたいに、私に会いに来たわけじゃなさそうね。一体何をそんなに必死で探しているのかしら・・・？」

タルラークは感情を押し殺した表情でクリステルを見る。

「私はティルノイへ行く道を探しています。この迷路のような複雑な空間の中に、必ず本当の道が隠されていると思うのですよ」

「あなたって本当に分からない人・・・。私も魔族。あなたの意思がどうであれ、退いてあげるわけにはいかないわ。今度も負けるかもしれないけど、もう一度挑戦しようかしら？」

「挑戦はあなた目当てに来る者達がやることではなかったのですか？　まあ、あなたの意思がそうでしたら私も避けません」

タルラークの顔には仕方がない、面倒なといった色はなにひとつ無かった。

「今度が最後よ。今までずっとあなたには負けっぱなしだけど、今度こそ勝って見せるわ。代わりに・・・」

「代わりに・・・？」

クリステルは言葉を詰まらせた。そして意を決したような真剣な表情を浮かべる。

「・・・。私が・・・私が勝つたら、あなたを愛することを許してもらおうわ」

「・・・あなたが決して弱くないことは存じていますが、ドルイドの道歩んでいる身としては、それを受けるわけにはいきません」

ドルイドは禁欲である。その高僧であるタルラークが、それを受けけるわけはなく。

その言葉に、タルラークは驚きも嬉しがりも何も反応は見せなかった。だが、それにクリステルは予想通りの返答が返ってきたことに笑った。

「ふふ……全力でいくわよ」

「……」

タルラークはただ黙って、魔導力たるマナを両手の中に集めた。

圧倒的だった。タルラークは手加減をした魔法を素早く詠唱、またマジックシールドを展開して相手の魔法を防いだ。タルラークの詠唱はサキュバスであるクリステルよりも速く、放った魔法の威力も高く、そして狙いも正確だった。

完敗したクリステルは疲れたように地面に座った。タルラークはクリステルを見下ろしてただ淡々と言う。

「もう進んでよろしいでしょうか？」

「……」

クリステルは何も答えない。ただ静かに目を伏せた。そんなクリステルを見て、タルラークは小さく息を吐いた。

「すみません。あなたの剣に殺意がないのと同じく、私もあなたを害する気はありません」

「……本当に……。本当に勝ちたかったの……。そうしたら、あなたが私の心を受け入れてくれると思ってた……」

「……愛は。愛は、人を屈服させて得るものではありません」

その言葉にクリステルはカツ、と目を開いてタルラークに言い募った。

「うそよ！ すべての男は、女を屈服させようとするじゃないっ！」

「あなたを探しに来る男達は、あなたを屈服させることで、あなたの愛を求めたのかもしれませんが。しかし、そういった愛が全てだとは思わないでください」

「……」

タルラークは噛んで含めるように、少し優しげな声で言う。それを聞いたクリステルは一瞬、寂しげな表情を浮かべると俯いた。

「・・・私はもう失礼します」

そう言っただけでタルラークは静かに俯うつむいているクリステルの横を通り過ぎた。

情景が暗転する。映し出されたのは全体的に赤く薄暗い不気味なダンジョンの中だった。

ひとりの、ローブを着て口元と顎あごに髭ひげを蓄えた初老の男性がダンジョンの中を歩いてきた。そして立ち止まる。

「少し休もう・・・。進んでも進んでも終わりがこないな・・・。これほどダンジョンで迷うことになるとは・・・。」

男性の名はマウラス。タルラークの師匠であり、第二次モイトウラ戦争で人間側に勝利をもたらした要因を作ったエリン最強と呼ばれるほどの魔導師である。第二次モイトウラ戦争後、死亡したと「されて」いた。

疲労が濃いのかその顔はやつれていた。マウラスは横になる。そしてその隣には一人の女性がいた。

（あなたと約束したでしょう・・・必ずまた会おうって・・・。だからここに来たのです・・・）

それは声ではなかった。そもそも彼女、マウラスの妻シラは肉体を持つておらずソウルエディット現象と呼ばれる事象により魂だけの存在となっていた。どんなに想いを抱いて言おうと手を伸ばそうと、目の前にいるマウラスには何一つ届かなかった。

（マリーは無事です・・・。会いたかった・・・あなたと話したい・・・。私は見えているのに、あなたには見えないの・・・？ お願ねがい・・・私を、見てっ・・・）

幽霊のような存在であるシラは涙すら流すことも出来ない。ただ切実せつじつな想いだけを胸に積たもらせて、ただ愛する者に触れたいと想おもい

続けるだけだった。

しばらくしてマウラスは身を起こした。休んだはずだが、その顔は憔悴しやうすいしたままだった。

「・・・ずいぶん長い間、意識を失っていたようだ。やつれたな・・・なるべく体力を温存しなければ・・・。出口は向こうなのか・・・？」

それはダンジョンで目を覚ますまでのこと。身体がこれほど憔悴しているのだから相当な期間だろう。マウラスはダンジョンの通路の向こうに目を向ける。その顔はやつれてはいたが、焦燥しやうそう感も浮かべていた。

「・・・気力を振り絞ってでも・・・帰らねばならん。・・・シラに・・・このトルクに賭けて誓ったのだ・・・。ここで倒れるわけにはいかない！」
力を込めてマウラスは立ち上がる。

「妻と娘の待つ、我が世界へ・・・必ず帰る！　そして国の仲間達に聞くのだ・・・。」

そして上げた顔には強い意志が宿っていた。

「私を裏切った理由を・・・何故・・・何故っ！　・・・私を後ろから刺したのかをっ・・・！」

(あなた・・・)

シラはマウラスの身に何が起こったのか知らない。だが、刺したという言葉から何が起こったのかを理解した。歩き出したマウラスの隣に追いつくと隣に並んで歩き出す。その顔には覚悟があった。愛する人と共にどこまでも行こうとする覚悟が。

ダンジョンを進み、とある広い部屋に着いたときマウラスの目の前に魂を空の鎧よろいに憑依ひきよさせ動かしている、ゴーストアーマー部隊が出現した。生身は持たないが個々が魂であるため、それぞれ意識がある。

「大魔導師マウラスよ、ここにいましたね。怒りを鎮め、私達と一緒に帰りましょう」

ゴーストアーマー達が見せたのは真摯なまでのマウラスへの敬意だった。

「あなたは生きていますが、生きていないのです。あなたの世界では、もう死んでいるとされています。人間の世界へ帰ることはできません」

ゴーストアーマーの言った「されています」というニュアンスが妙だった。だが、マウラスはそんなにことを気にもせず激しい怒りを発した。

「人の格好はしているが、人ではない者達よ……。この怒りに満ちた魔導師の意思に、あえて逆らおうと言うのか！」

「……。気分を害したのなら謝ります。しかし……。あなたの命はあなたのもではありません。あなたが命を維持しているのは、女神モリアンの意思です。そして……。あなたのためにザブキエル様が自らの命を捧げたのです」

ザブキエルとは魔族側に付いた墮落した賢者である。月の石を召喚し地面に墜落させるといふ大魔法によって人間側に苦戦を強いた。最後はマウラスとの戦いにより敗れ去った。

また別のゴーストアーマーが言う。

「マウラスよ、あなたは人間の世界へ行っても命を維持することができません。あなたのために多くの魔族が命を捧げました。あなたの命の価値をお考えください」

ゴーストアーマー達の必死の訴えも、マウラスには届かなかった。瞬時に凄まじい量のマナを操作し詠唱を行なう。一瞬でライトニングボールトを、すぐには放たずに止めて置く形状である光球が五つ出coming。

「……。それ以上、私の邪魔をするな。私は帰る……。人間の世界へ……。私の行く手を遮る者は誰であろうと……。許さぬっ！っ！」

憤怒の表情を浮かべたマウラスはゴーストアーミー達にライトニングボルトを浴びせる。ゴーストアーミー達はそれぞれが盾で防いで、マウラスを押さえようと剣も抜かずに近寄ってくる。それにマウラスは半秒で完成させた魔法を更にぶつける。

ゴーストアーミー達が息も絶え絶えに地面に膝を着いた頃、新たな人影が現れる。漆黒の鎧に身を包んだ魔族を率いる者、ダークロードである。

「マウラス、やめるのだ！ もういい……これ以上意味も無く戦う必要はないっ……！」

マウラスはゆっくりと少し離れた背後に現れたダークロードに目を向ける。その目には強い怒りが渦巻いていた。

「退けっ……！ さっきも言ったであろう……私の行く手を遮る者は誰であろうと許さんっ！！ それがたとえ……女神であったとしてもだっ……！」

「苦しみ続ける存在よ……おまえが帰ろうとする理由は分かる。……だが、帰ればおまえは死ぬ。なぜ私達の言うことを聞いてくれないのだ……？ 私達の言葉を聞かないのならば……おまえは更に傷付くだけだぞ」

「何故、私が帰ったら死ぬと言いつけるっ……！？」
マウラスはダークロードの懇願に、叫ぶように声を発した。

「苦悩する人間の魔導師、マウラスよ……確かめたいか？ おまえは私が見せる真実に……耐えられる自信があるか……？」

「暗黒の君主よ……私をみくびるな」
その強い意志のこもったマウラスの瞳を見て、ダークロードは意を決した。

「ならば……これを見るがいい……」
ダークロードが上げた手から黒い光が溢れ出る。それをマウラスとシラは見る。光の中に情景が浮かび上がった。一軒の家が火を放たれていた。

(……！！！！)

た。おまえは死んで英雄となったが、おまえの家族はそうではなかったのだ……。すべてはおまえが気を失ったときに起こったこと……」

「ああ……。ああ……。シラよ……。娘よ……。すまぬ……。本当にすまぬ。こんな私のせいで……」

マウラスは地に伏せると悔恨かいこんと自責の念で身体を震わせながら泣いた。

(あなた……)

シラは両膝を着き、マウラスの前に座りこんだ。触れられはしないがその肩に手をやった。

「マウラス……。おまえは、人間の世界では英雄だ。ザブキエル様の最終魔法を、自らの命を犠牲ぎせいにして防いだ救世主だ」

そこでダークロードの声に気の毒そうなものが混じる。

「しかし……。死んで英雄となったはずのおまえが再び蘇よみがえて人間の地に現れたら、どういうことが起こるか考えたことはあるか……。？ 人間達は自分達の利益のために、おまえをまた殺そうとするだろう。おまえのかつての仲間達は、みな帰還して英雄となった。

高い地位と財政を以って、魔導師の一人くらいは簡単に抹消できる権力を持つほどの、な……」

そこで一旦言葉を区切る。マウラスを見ると、地に伏せたまま動かなかつた。ダークロードはそれに嘆息たんそくすると、続けた。

「認めるのだ……。おまえが今見たもの……。それこそがまさに人間の本性。奴等に真実は通じん。ただ奴等が認める自分に都合の良い正義があるだけ……。私もかつて、あのような人間の姿を捨てた。復讐ふしうしたいのであれば、女神モリアンの意思に従うのだ。私が女神のいるところへ案内しよう」

「……。頼む」

マウラスは、ただ一言そう力無く言った。

また暗転する。今度はどこもしれない暗いところだった。そこには黒い羽に黒い髪の女神がただ一人いた。だが、それは。

(き、キホールっ……!?!? なぜ……どうして生き残って……あの邪悪な魔神が……)

キホール。

第一次モイトウラ戦争で猛威を振るった魔族の王バロルに代わり、キホールは魔族を統率して人間を滅ぼそうとしていた。クロウクルアフと呼ばれるドラゴンを召喚して王都タラを破壊した記録が残っている。その後は何らかの方法で倒されたと思われたが、それをあざ笑うかのように生き残っていた魔神である。

女神モリアンに化けたキホールが口を開く。

「あなたは……あなたの家族を殺した人間達を許せますか……? 復讐の剣があなたに与えられても……それを振り回さずにいられますか?」

(あなた、その話は聞きちゃダメ……すべての人間をう憎む必要はありません……。お願い……。その人はあなたを利用しようとしているのです……)

だがシラの想いは何一つマウラスには届かなかった。マウラスの瞳には激しい憎悪おいつが宿る。

「必ず、復讐する……。私を殺した奴等、私の家族を殺した奴等……。地の果てまで追い詰める……。許さん……。絶対に」
(あなた……)

マウラスは激しく憎悪しながらも、その顔には家族を守れなかった自分への強い自責も現れていた。

「女神よっ……!」

マウラスは憎悪で光る瞳を、偽りの女神へと向ける。

「……答えてほしいっ! 私は、あなたのために何をすればいいのですか!? あなたの復讐のために何をすればいいのですか!?!」

また暗転する。今度はルエリ、マリー、タルラークがいた。そこは彼らがティルナノイと信じて来た地。だが、それは残酷なことに間違っていた。今やグラスギブネンと復活させようとする魔族の本拠地である。

「ここが、あのティルナノイ・・・？」

「でも、ちよつと暗すぎなような・・・。ここ本当にティルナノイなの？」

「間違いありません。何回も確認しました」

ルエリの発した疑問にマリーも続く。だが、タルラークはそれを一切否定した。

「おまえの話だと、すべての願いが叶う楽園だったはずだよな？」

「ルエリ、女神を信じましょう。あなたもその夢を見たのでしょうか？ 女神が、ここへ来る方法を教えてくれたのですから。楽園がこんなに暗いのは、女神が魔族に捕まって魔力を奪われたせいでしょう。・・・女神さえ救出できれば、私達の願いは叶えられるはずですよ。」

なおも食い下がるルエリにタルラークはそう言う。だが、それはルエリに言うよりも自分でもそうであってほしいと思っていることを思わせる声色だった。

「私、信じてみる。タルラークがそう言うんなら、ね」

「タルラークの話ってか、女神の話だろ？ 美人の女神様を救出すりゃあ、何かお礼がもらえんだろ。じゃ、行こうぜタルラーク。オレが力になつてやるからよ！」

マリーとルエリの言葉を受け、タルラークは目を伏せる。

「ありがとう・・・ルエリ・・・。ありがとう・・・マリー・・・。そして顔を上げる。その顔には気迫が満ち溢れていた。

（もう少し・・・もう少しでティルナノイは私達の手で降臨する・・・そして、楽園が開く・・・）

「行きましょー！」

そこでまたすぐに暗転した。そして次に映ったのはゴーストアー
マーとダークロード、そして偽りの女神とその隣にいるマウラスに
囲まれた三人の姿だった。

「ま、マリー……？ ま、待てっ！ 乱暴にするなっ！ 傷つけ
てはならんっ……！」

マリーに気付いたマウラスがそう叫ぶが女神が返した答えは残酷
なものだった。

「彼らはダークロード。秩序と平和を知らない者達。女神の意思に
逆らい、我々の地に足を踏み込んで来た者達……なぜ、生け捕り
にするのですか？ 戦争と復讐の女神、モリアンの名を持って命じ
ます。彼らの首を、私の前に捧げるのです」

「なっ……なんだと!？」

女神のその言葉が流れた直後、ダークロード達はタルラーク達に
向けて剣を振り下ろした。

「マリー、ルエリっ!!」

タルラークのそんな叫びを最後にプツリとすべてが消え、あとに
は暗闇だけが残った。

コウサカは目を覚ます。外は薄っすらと明るくなっていた。

(夢……?)

だが、それは違うとコウサカはすぐに理解する。

「なんだ、これは……？」

コウサカの手には見覚えのないペンダントが握られていた。そし
て、頭に響くものがあった。

。。
このペンダント……この……門……鍵……早く……

ナユキ……子……渡せば……元へ……。

それつきり何も聞こえなくなった。

「なるほど・・・あの子には辛い夢だったからな・・・」

そうひとり呟き、何故自分が夢を見たのか容易に思い至る。心優しいナユキではあんな残酷な夢は耐えられないだろう。

そこで気付く。コウサカ自信の記憶に何か引掛かることに。

そして残酷な夢であったが自分は何も堪えていないことに。自分は人が死ぬことに慣れている・・・？

「・・・なるほど」

何となく納得してしまっている自分へ自嘲する。だが、すぐに止める。また朔絆がうるさく言いそうだからである。

コウサカは立ち上がるとベッドの上に目を向ける。そこには幸せそうな顔をしながらベッドを占領して大の字になっている朔絆がいた。

「・・・自分が女だということを忘れてはいないだろうな。この我がまま娘は・・・」

無防備すぎる朔絆を見て、コウサカは溜息を吐いて頭を掻いた。

そして悪夢によって悪い方向を向いていた思考が、気楽な考えに変わっていることに気付く。それに、ふつと小さく笑う

「本当に・・・お前でよかったよ。相棒」

小さくそう言ったコウサカは、さてまだ朝早くてすることがないかどうか、と頭を捻った。

女神の見せたのだろう悪夢は、奇しくもコウサカ自身の何かを気付かせる結果となった。それがコウサカの記憶の何に関係するのかは分からない。

ただ、何となく気付いてしまったコウサカは窓の外を見ながら、一息吐くと静かに目を伏せた。

第八章 女神の見せた悪夢（後書き）

余談（「マビノギ」をプレイした方へ。ストーリーのネタについて）

メインストリームG1のムービーをゲーム内でSSを撮ってきて、それを書いたものですが、文章力が無くてこんな風にしか出来ませんでした。申し訳ありません。ここはG1のネタを進める上で外せない部分だったので、恥を承知でこの形として投稿させて頂きました。

第九章 ダンバートン北東平原攻防戦

夢を見てから半日、それは昼過ぎコウサカの部屋でのこと。朔絆^{ハチ}は完全実体化をしてベッドの上に、コウサカは壁に背を預けている。ただ、コウサカは顔を少し気難しくしかめていた。

「・・・ねえ、何かあんた変じゃない？ 何か本当に笑わなくなっちゃったし・・・」
「そうか？」

コウサカは首を捻る。だが、一番近くにいつもいる朔絆には分かるのである。村を出て此の方、ふっ、と小さく苦笑のようなものにするが、大きく声を出して笑うことや楽しげにしていると感ずるところがほとんどないと言ってもいいほど減っていることに。

「・・・何かあつたなら言つてよ。あたしに出来ることなら何でもするからさ・・・」

朔絆はベッドの上にとんび座りで座つたまま、切なそうに片手を胸に当てながら言う。

「・・・」
コウサカはそれ見て一瞬、夢のことを話すか？ と思うが馬鹿馬鹿しいかとその考えを打ち消した。

「特に何も無いはずだ」

「・・・嘘。ねえ、あんたにとってあたしって、そんな程度の相棒なの・・・？」

心底心配しているのか朔絆は少し泣きそうな顔をしていた。いつもは我がままばかりだがこういうところはまだまだ純粋な子供だなとコウサカは思う。子供扱いすると怒るので口には出さないが。

「・・・やれやれ」

コウサカは壁から離れるとベッドの上の朔絆の頭をぼん、と一撫でしてから隣に腰掛けた。本当に夢物語だが、まあいいかと観念をした。

「夢を見た」

「ゆめ……？」

コウサカはそれにひとつ首肯する。

「夢……という表現が正しいのかは分からない。記憶と言った方が正しいかもしれない。タルラークさんがいた。そして……」

コウサカは右手に持った、恐らく女神より授けられたペンダントを見る。朔絆もつられてペンダントを見る。

「そんなペンダント持ってたっけ？」

「女神からもらった。笑わなくなった理由はただ単に面白いと思うことがないだけだと思うが、こっちは本当の夢物語だ」

コウサカは夢で見たことの触りだけを朔絆に話した。だが、朔絆は少しも疑わない。

「よく信じるな。こんな夢物語を」

「当たり前じゃん」

そう言い放つ朔絆を見て、コウサカは一度目を伏せて鼻で小さく息を吐く。

「ふう……。夢の話だが」

コウサカは自分が見た夢の続きを朔絆に話す。三戦士のこと、マウラスのこと、人間の行なったこと、偽りの女神のこと。

「……」

それを聞いた朔絆は次第に顔色を変えていった。それは心底馬鹿らしい、という顔だった。

「何それ……。結局、人間が最悪じゃん」

「権力、財力、軍事力……。手放しがたい強大な力を持った時、大なり小なり人とは醜くなるものだ……」

「……？」

そう無意識的に呟いたコウサカの顔は、今まで朔絆が一度も見たことがないものだった。すぐに、はつとしてその表情は消えた。

「あ……。すまない。何か俺言ったか？」

「……。ううん。何にも」

「そうか？」

「うん……」

朔絆は目を伏せ俯いた。その顔には寂しげな笑みがあった。

「続けるが。そう言ったことで、タルラークさん達はティルナノイへと行ったがもうその道は使えないだろう。それに、ラビダンジョンにはサキユバス達が……」

そこでコウサカは唐突に言葉を途切らせる。思案顔になって無意識的に自分の顎に手をやる。コウサカの何かを考える時の癖である。(ダンジョンの封印……魔族の本拠地へと通じる……来れるとはまたその逆も然り?)

コウサカの目は知らず知らずの内に鋭く細まっていく。

「……どしたの？ 怖い顔して」

「朔絆、剣に戻ってくれ。少し出る」

「……わかった」

コウサカの顔付きを見て朔絆は他に何も言わずにクレイモアへと戻った。コウサカはベッドから立ち上がると、装備を付けてダンバートンから出て北西へと向かった。

コウサカはラビダンジョンへと来ていた。今回は私用なので馬はない。ただ、コウサカの足を以つてすれば馬並みの速度で疾走することが可能である。二、三kmは離れているがすぐに辿り着いた。

今回はコウサカを阻む敵は現れなかった。というよりは、出しても無駄なのが分かってしているのか。ただ一度しか通らなかつた道をコウサカはすべて完璧に覚えていて、すぐにサキユバス達の「家」に辿り着いた。「家」の前にはやはり何らかの方法で侵入者を察知することが出来るのか、ミレイナと何故かエレナが立って待っていた。

ダンバートンからラビダンジョン、それに複雑怪奇なダンジョンを完全装備のまま全力で走り抜けて来たというのに、コウサカは息一つ乱していなかった。

「・・・何のご用でしょうか」

緊張した面持ちのミレイナがコウサカにそう問いかける。コウサカが答えようとしたところ、エレナがコウサカに食って掛かった。

「そうよっ、何しに来たのよっ！」

「ちよっ・・・エレナっ!? 黙っててっ! どうか何であなたまで出てきているのよっ！」

「何で、って・・・お、お姉ちゃんだけじゃ危ないと思ったからっ!」

「この人が何かするわけがないでしょうっ! いい加減にしないとネルとリリとアルを呼んでっ・・・あっ」

一度会ったきりだというのにすごい信用のされようだが、コウサカが二人の言い合いを特に気にした風もなく終わるのを待っていることにミレイナが気付いた。

ちなみに、ネルとリリとアルとはエレナの姉である。ミレイナが長女、ネルが次女、リリが三女、アルが四女、エレナが末妹である。「終わったか？」

コウサカは表情一つ変えずに真っ直ぐに言うので、ミレイナは気恥ずかしくなつて顔を赤らめた。

「す、すみませんっ・・・。エレナ、次は許さないわよ?」

「君も大概、懲りないな」

「な、何よ・・・お姉ちゃんまで・・・」

ミレイナとコウサカ両方から睨まれてエレナはたじろいだ。そして今度こそ静かになった。それを確認すると、ミレイナは嘆息しながら再度コウサカに向き直った。

「それで、どんなご用でしょうか?」

「君らが魔族の世界からここに来るために使った「道」があると思っが、どうだ?」

「ええ、確かにあります。それがどうかしたのですか?」

「来れるとはその逆もまた然り」

「・・・え?」

コウサカの言った言葉の意味が分からずミレイナは目を瞬いた。
「ポウオールが進入してくる可能性はあるか？」

「い、いえ。「道」自体はすでに封印してあるのでまず有り得ない
ですが……」

「そうか」

コウサカがそれっきり何も言わなくなったので、ミレイナは恐る
恐る聞く。

「あ……もしかして、ご用とはそれを聞きに來ただけですか？」

「ああ」

「うっわ、こいつ馬鹿だ……」

「エレナっ……!!」

キツ、とミレイナが睨むとエレナは気圧されて視線を逸らして黙
り込んだ。馬鹿にされた当人は全く関心を示さず、コウサカはせつ
かく來たのだから他に何か聞くことはないかと思案していた。

『……ずいぶん、お優しいじゃん』

姿は現さなかったが朔絆が声を発した。そのすごく険悪そうな。

「黒魔族通行証を素直に渡してくれた恩があるからな」

『思いつきり妨害して來ていた気がするんだけど？』

姿は見えど、朔絆から発されている何かがミレイナ達に向いた。

その妙な気迫にミレイナ達は後ずさりした。

「ふむ……。まあ、俺の推論すいろんでしかないが」

『……？』『……』

コウサカが唐突に言った言葉の意味が分からず、三人共が疑問に
首を傾げた。朔絆は剣の中で。

「恐らくは、君らは一般民くらいではないか？ 魔族内では」

『……？』『……』

また一同、首を傾げる。

「軍にも所属せず人も、この場合魔族の人だな。それを殺したこと
もない。どうだ？」

「は、はい……。その通りですが、何故そんなことを……？」

ミレイナが首肯して、聞いた。コウサカは答えず、ひとつ首肯した。

「例えばだ、朔絆。普通の少女の家に、人殺しも必要なら無慈悲に行なえるような者が向かっているとする」

「は……？」

「そんな時、逃げることも出来ないならどうすると思っ？」

「な、なんでそんなことを……」

「お前の疑問を解消するためだ」

コウサカがよく分からないのはいつものことだが、それでも無駄なことをせず考えがあつて行動することを朔絆はよく知っている。

だから、真面目に答えることにした。

『殺られる前に殺る』

「……物騒極まりないがそういうことだ。俺達が囲まれた時の殺気……」

コウサカはミレイナへと視線を向ける。

「あれは結局、脅しでしかなかったのだろう？ 殺すをいう「振り」をすることで、俺の行動を止めることが目的で」

「そこまで、分かるものなんですか……？」

ミレイナは信じられないと言った顔をしていた。

「俺は殺気を嗅ぎ分けられる。殺し慣れているならあんなに「必死」にはならない。そして、俺の殺気を受けて膝を着いたりもしないだろう」

そう言ったコウサカの表情はいつも通りだったが、どこか自嘲めいたものが混じっていた。

「まあ、何故分かるかは知らないがな。納得したか、朔絆？」

『……フンッ』

それつきり朔絆は黙り込んだ。コウサカはそれにひとつ小さく溜息を吐くと、何か聞くことはないかと考えたいたことを思い出した。だが、まあいいかとさっさと考えを放棄した。

「では、用件も終わった。戻るとする」

それだけ言うと、コウサカはさっさと踵かかとを返した。それにミレイナは慌てて引き止めた。

「何か用か？」

「い、いえ……。ひとつだけ……。心配して下さってありがとうございます」

「通行証の恩がある。それに……」

「それに……？」

「……いや、こっちは違う。気にするな」

無闇にポウオールのことを話しても不安がらせるだけか、とコウサカはここへやって来た最初の理由を隠した。そこでまたエレナがコウサカに噛み付いた。

「はつきり言いなさいよ！ 本当に変なヤツ」

「君はその喧嘩腰けんかこしが直らないのか？ 変に相手を挑発すると、逆上して何をされるか分からないが」

「あなたには関係ないでしょうがっ！」

エレナはミレイナが止める間もなくコウサカに詰め寄った。

「だいたい何なのよっ、何様っ！？ 助けてやったって感じっ？

あたし達はあんた何かに助けられるほど、落ちぶれてないっ！」

「エ〜レ〜ナ〜……っ！」

エレナの物言いにミレイナの我慢が限界になるうかと言うところで、コウサカは意外なことをした。

「そうか。それは、すまなかつたな」

コウサカがエレナに向けて頭を下げた。

「え……。ち、ちよつと……」

「馬鹿にするつもりも、哀れむつもりもなかったが俺が来ること自体がそれに等しかったか。すまなかつた」

頭を下げたままのコウサカに、ミレイナは気の毒なくらいにあたふたとしていた。

「あ、頭を上げてくださいっ……。！ ほら、エレナもっ……」

「何なの……」

コウサカが顔を上げると、エレナが俯いていた。そして、キツと顔を上げた。

「何なのよっ、あんたはっ……!」

それだけ叫ぶと、「家」の中へと消えてしまった。

「すみません……あの子は、その……」

「いや、いい。聞くつもりはない。それに、たまにああやって爆発した方が精神的にいい」

罵られた当人だというのに、エレナへの気遣いを見せるコウサカにミレイナは恐縮おそじやくしてしまった。

「ひとつ聞いてもいいですか……?」

「ああ」

ミレイナは意を決したような表情を覗かせていた。

「あなたにとつて、種族とは何ですか……?」

「種族?」

「……」

ミレイナは多くを語る気はないようで、それ以降は口を閉ざして緊張した面持ちを浮かべていた。コウサカは特に気負った風もなく、自然な口調で答えた。

「どうでもいい」

「え……?」

コウサカの言葉に、ミレイナは呆氣に取れた。

「そもそもが俺には記憶がない。故に、それを判断する基準を持ち合わせていない。その質問は無意味だ」

「なら、何故どうでもいいと……?」

「いま現在、俺がそう思っているからだ。ただ記憶が戻った場合は当てにならない」

「そ、そうですね……」

そう言ったミレイナの表情は、ほっとした様な、少しがっかりしたようなものだった。

「聞きたいことはそれだけか?」

「あ、はい」

「何の役に立つかは分からないが、俺はダンバートのアリアンロッドという宿屋に滞在している。もし万が一、その時は力を貸そう」
それだけ言うと、コウサカは踵かかとを返して元来た道を帰って行った。
「アリアンロッド・・・」

一人残ったミレイナはその名前を口に出して反芻はんすうしていた。その表情は窺うかがい知れない。

ダンバートの学校では、魔法と戦闘についても学ぶことが出来る。勿論、それだけではなく文字の読み書きなどを教える一般学科もある。一般学科の方は子供が小さいうちから通わせられ、戦闘と魔法学科については希望者が申し込んで別枠で受けることになっている。

ナユキはそんな魔法学科の方を受けていた。受講者には、ナユキのような年頃も居れば、大人から子供まで様々がいた。

「では、ナユキさん。実際に詠唱を行なって魔法を発現してみてください」

「はっ、はい。・・・え、えーと・・・」

その中でナユキは最優秀生だった。普通は瞑想めいそうから入り、エリンに存在する全ての物質の源とされるエルグや、その生物が生まれ持つて内在するマナを感じることから始めるのだが、ナユキはマナを感じるどころかいきなりそれを簡単に操り、ただ一日だけでアイスボルトの基礎、空気中の水分の集約を可能とした。さらにそれを氷結させてアイスボルトを形成してしまった。またコウサカの苦手とするファイアボルトすら簡単に発現させてしまった。

いまはライトニングボルトの最終試験を受けていた。

(ま、まずマナの変換を・・・)

ライトニングボルトはマナの素粒子を電子という素粒子へと変換して発現される。実際に敵にぶつかる電撃はマイナス電子、その道

となるプラス電子をマナから変換させることでライティングボルトという魔法を発現するのである。電子の流れはマイナスからプラス方向へ流れる（実際に「陰極線」と呼ばれるもので実証されている）。マナにより空気中の絶縁（電気を一切流さないモノ）をなくし上記したように発現させるのである。ただ、エリンには電気という概念がまだまだ浸透（しんとう）しておらず、雷でようやく何となく分かるという程度であることから、ライティングボルトは高難易度の魔法と位置づけられている。ボルト系の中で最も高速で放たれるため威力以外は使い勝手が良く強い。

（行かせたい方向を・・・）

ナユキは腕を伸ばして、その先にライティングボルトの軌道がはしるようにイメージする。そのイメージ通りにマナの操作によって道ができる。そして最後に発現させる言葉を口にする。

「・・・Gofynnaf am taranau（我は稲妻を求め）・・・」

その言葉と同時に、屋外に設置された練習用的にライティングボルトが半秒も掛からず着弾する。

「はあ・・・すごいですね。本当に昨日まで魔法について何も知らなかったのですか？」

「知らなかったというより、記憶喪失なので・・・よく、分かりません・・・」

黄唐茶色きやうぢやいろのソフトミディアムの髪に、紫色の瞳をした目には眼鏡をかけ、細い身体をした男性かんとんが感嘆かんとんの声をあげた。魔法学科を担当する、ダンバートンで最も魔導学けんいの権威であるスチュアート先生である。

スチュアート。魔法学科の先生だが高度な魔法について研究もしている。いろいろと難題を吹っ掛けてくることもあるが彼は実験で目の怪我を負い、視力を弱めてしまった過去がありそんな人を二度と出さないために厳しい課題を言い渡しているらしい。ちなみに、

体力が無い。

「ああ、すみません……。ですが、全く驚異的ですよ。この物覚えの早さは。あなたをここ通わせたという方の目は、すごいですね」
「そういえば……」

確か、前にコウサカが自分には魔法の心得があるのだろう、と言っていたのをナユキは思い出した。そう思いながらナユキは首から下げている青み掛かったアミュレットを手に取る。

「？　どうかしたのですか？」

「あ、いえ。何でもありません……」

ナユキは我に返ってスチュアートに謝った。確かコウサカは魔法が苦手と言っていたが、苦手な人間が素質など見抜けるものだろうか。ナユキはそんな疑問を抱いた。

「さて、あなたはボルト系魔法については問題ないですね。では、次の人……」

次の試験者の名前を呼ぼうとしたところ、フイイイイイ……。と言う音がスチュアートの声を遮った。次いでドドンッ！　という音が響く。

「この音はっ……。！　授業中止っ、全員早く家に戻るか官庁へ避難をっ……。早くっ！」

学校前に設けられた屋外練習場、また学校内からも慌しい足音が響き渡ってきた。一人状況が分からず、ナユキが残っているとその肩にスチュアートは手を置いた。その表情には焦燥感しょうそうかんがにじみ出ている。

「あなたも早く官庁か自分の宿へ」

「あの一体、何が……？」

「ああ、あなたはこの街に来てから日が浅いのでしたね……。いいですか？　落ち着いてよく聞いてください。今の警笛けいしやくの音は、敵と遭遇した時にハンターが上げる警戒音ですが、問題はその後です。ドドン、という音がしましたよね？　あれは花火のようなものを打

ち上げて緊急非常事態にのみ鳴らされるものです。つまり、何かそこまでの事態が起こったということですよ・・・」

早く避難を、とナユキに言い置くとスチュアート自身も学校で習っている小さな子供達の避難のために、その場を急いで後にした。

「・・・」

一人残されたナユキは、バルドラスが何かあったら来いと言っていたのを思い出します官庁へ行こうと思いつく。練習場を後にして学校前の大通りに出た。

「民間人は道の脇わきによれっ！ 迎撃に向かうの部隊の邪魔だっ！！」
北通りの道を大勢の武装したハンター達が移動をしていた。緊張している顔もあれば、戦の匂いを感じ舌なめずりしながら走っている者、ただ目だけを光らせている者、また迎撃に向かうハンターを心配そうに見つめる民間人達。様々だった。

「・・・」

そんなハンター達の姿が、ナユキにはコウサカとだぶって見える。そして、いまの自分には力がある、何か役立てれば。そう思いナユキは官庁へと足を向けた。

「領主様っ・・・！！」

ダンバートンの観測班の隊長を務める一人が、領主執務室へ飛び込んできた。

「大声出さねえでも聞こえてるよ。どうせ、いつも通りマスからだろ？ 敵の規模はどんな感じだ？」

バルドラスはすでに自前の特注した黒を基調としたダスティンシルバーアーマーの鎧一式（バルドラスが身長二m超えと大きすぎるため普通の規格では着れないため特注品）に着替え終わっていた。肩には巨大な戦斧せんぷブロードアックスを担ぎ、腰にはバスタードソードが一本あった。

マスとは、ダンバートン北東にある古びたダンジョンの名前であ

る。ウルラ大陸において、二番目に魔族出現率の高いダンジョンのひとつである。

「そ、それが・・・目視からの数は三百ほどなのですが、ロックゴレムと思われる敵影が十数確認できましたっ・・・！」

「ほお、ちったあ本気出してきやがったか。くそつたれの魔族共が」
そう言うバルドラスの顔には不敵な笑みが浮かんでいた。そして、観測隊長を従わせて執務室を後にする。途中で戦闘時に副官を務める男とも合流する。

「確か、結構派遣しちまっているから残ってるのは六百つてところ？」

「ええ。更に悪いことにガーディアンナイツのほとんどは、タルテインに取られています。あのミレンシアも外出しているらしく連絡が着きません」

「残ってるのは、お前とガルドローの野郎くらいか？」

「私はあなたのお守りもと、全体の指揮に回らないとならないので実質ガルドロー一人です」

「へっ、言いやがる。しっかし・・・第二城壁もまだまだ出来てねえつてのに。面倒な時に攻めてきやがったもんだぜ、つたくよお」
「その言葉は、無理やり城壁の周りに居付いた連中に言えばいいかと」

副官、レザルドはそう吐き捨てる。バルドラスと同年代で戦友のこの男は、バルドラスのような強靱たくまな肉体を持っているわけではないが知略に長ける。

三人は官庁の外、表広場へ出ると各隊の隊長達が副官を従えて整列していた。レザルドが命令を発する。

「五、六はそれぞれ西門及び南東門へ向かい封鎖。以後、その方角よりの敵を発見した場合、全力を以もって迎撃。またダンバートン内すべての警護をせよ。一から四の各隊はマスダンジョンより出現したという敵軍団の迎撃へと向かう。敵は約三百。また、ロックゴレムと思われる姿を十数視認。コボルト、ゴブリンが多数の模様。」

以上。全部隊、行動開始っ！」

ダンブレテンでは、約千人のハンターを一から十の部隊にそれぞれ約百人ずつで分けている。それぞれの編成は個々に癖の強いハンターらしく安定していない。だが、だから接近戦に滅法強かったり、遠距離戦（弓矢や魔法）が強い部隊など偏っているのが強みである。レザルドの号令（こづれいっか）一下、各隊長達は弾かれたようにすでに城門の外へと向かっている自分の部隊、また待機している部隊へ行き、部隊を引き連れてそれぞれの城門を目指して行った。

「ハンターさん、頑張れよー！」

避難している一人の民間人からのそんな言葉が黙々と移動しているハンター達に投げかけられた。その後には、次々に声援が続き、その声に片腕をあげて答える者や声を上げて返すハンターもいた。その目は、守るべき人達を再確認して爛爛（らんらん）と光っていた。

「さあて、オレも行くとすつかない」

バルドラス自らもダステインシルバーナイトヘルムを被ると、目を光らせる。レザルドはそんなバルドラスを見て嘆息（たんそく）した。

「自分が領主だということを忘れていませんか？」

「へっ、馬鹿言え。領主どころか、元は泣く子も黙る武装キャラバンの頭（かしら）だぜ？」

バルドラスはニヤリと不敵な笑みを浮かべながらそう言い放った。

「ああ、そうでした……。そうでしたね……」

レザルドは頭痛でもするようにこめかみに手をやった。

「領主さんっ！」

官庁の前にいた二人に声がかかった。領主を「さん」付けなんかで呼ぶのは一人。ナユキである。

「あん？ 坊主といた嬢ちゃんじゃねえか。そっぴや、坊主どこ行つたか知らねえか？」

「え、コウサカさんですか？ わたしが学校に行く前は宿屋さんにいましたけど……」

「つてえこたあ、本当にどっか行ってまだ帰ってきてねえんだな・

。。つたく、本当に間が悪りいな」

「あの、領主さんっ。わたしも力になりたいです！」

バルドラスが嘆息していると、ナユキが声を上げた。その顔には自信が現れていた。

「いきなり、どうした？ 嬢ちゃんじゃ戦闘は無理だろ？ 坊主からはそう聞いているぜ」

「コウサカさんのおかげで魔法が使えるようになりましたっ」

そう言うとナユキは瞬く間にアイスボルトを完成させて浮かべた。それにバルドラスは少し目を見張る。

「一瞬でか。こりやすげえ」

だが、とバルドラスの目が細まる。

「連れていけねえな」

「ど、どうしてですか？」

「相手は魔族だが、人殺しが出来るのか？」

「え？」

ナユキはバルドラスの眼光に射竦いすくめられる。修羅場を掻い潜った者が持つそれである。

「嬢ちゃんじゃ無理だ。来られても味方を殺すことになる」

味方を殺すことになる。その厳しい言葉にナユキは言葉を失う。

「坊主がどんな顔をしてたかよく思い出してみやがれ」

それだけ言うと、ドカドカとバルドラスはレザルドと観測隊長を従えて北門へと向かって行った。身長二m超えで全身フルアーマーに完全装備、合計体重で百五十kgを超えるほど。初老の半ばという年齢であるにも関わらず、バルドラスは軽々と走って行った。

「コウサカさんの顔・・・？」

そうナユキは呟くと、思い返してみる。出会って一週間も経っていないコウサカを。

。。。。まあ、いま起こっている事態が落ち着いたら手を貸そう。

・・・俺は女神を探しに、いや多分助けに行こうと思っ
ている。

小競り合い？ 魔族が襲撃して来ているのか？

ちようど小物だし、何か買ってやる。

そんな何の脈絡みやくわくもない言葉がナユキの頭を過ぎって行く。よく考
えればコウサカは自分の知らないところで、命を懸けている。自分
の手を汚しながらもナユキを気遣う。

そして、もし戦うならコウサカが纏まとうような雰囲気ふんいきを身につけな
いといけないなら、自分にはまず不可能だと思っ。

「・・・よしっ」

まずはコウサカを探そう、いまの自分なら援護くらいなら出来る。
そう思いナユキは北門へと足を向けた。

マスダンジョンからダンバートンまでは数km離れている。故に、
ハンター達は敵の到着の前に態勢を整えることできる。だが、ダン
バートンの城郭じょうかくの外にも人々の家があるため、最も安全で確実な籠
城じょうという手は本当に最終手段としてしか使うことができない。勝手に
に居付いた者達なのだから別に破壊されても文句は言えないのだが、
浮浪者ぶろうしやではなく今では本当のダンバートンの住民であるため、これ
も危険を承知で守るといっレザルドの言葉に誰一人、異を唱える者
はいなかった。

レザルドからの作戦概要がいはうが終わると、バルドラスが大音声だいなんじょうを響か
せた。

「つてえわけだっ！ くそ面倒くせえぜ、全くよあつ！ だが、あ
れもひっくるめてオレ達の街だっ！ 久々に死ぬ気の戦いくみなだ！ やる

ぞ、てめえらっ！！！」

おおおおおおおおおおおっーッ！！

バルドラスの言葉に地響きにも似た蛮声ばんせいが上がる。手に手に自らの武器を、それを天に掲げていた。

眼前には、最前列には数mはあるロックゴーレムが横一列になり、その少し後ろには約三百からなるポウオールポウオールの軍勢が迫っていた。

ナユキは走っていた。

無人だった厩舎うまやからちよつと一頭の馬を「借りて」、ラビダンジョンへの道を走っていた。何故、自分が馬に乗れたのか、何故ラビダンジョンに当たりを付けたのか。全ては「何となく分かったから」である。

(コウサカさんっ・・・)

何故かと言う疑問はナユキの頭の中にはなかった。それは何かに導かれている様。

そうして走っていると古ぼけて所々が崩れたダンジョンの入り口が見えた。そして、コウサカがちよつと出てくるところだった。

「コウサカさんっ！」

馬に乗りながらナユキは大声を出す。それにコウサカの足が止まり、ナユキを見た。

「君、馬に乗れたのか」

コウサカの前で馬を止めると、そんな言葉がナユキに投げられた。その時、東の方角より地響きに似た蛮声ばんせいが流れてきた。その方角に顔を向けながらコウサカの目が細まる。何を悟ったようである。

「説明してくれ」

「マスダンジョンから魔族ですっ！ 領主さん達はそれを・・・」

「宿に戻って、安全にしていってくれ」

最後まで聞かずにコウサカは東へと駆け出そうとする。それをナユキは慌てて引き止める。その目には光があった。

「わ、わたしも戦います!」

「味方を殺すことになる。止めておけ。恐らくすでに門は閉ざされただろうから、味方の後方で大人しくしている。冷静になれ」

噛んで含めるようにコウサカはナユキに言うと言いつつ駆け出して行き、あつという間に姿が小さくなる。

「・・・味方を」

コウサカからまでもバルドラスと同じ言葉を言われ、ナユキは肩を落とす。そして、ふと我に返る。

「コウサカさんの言う通り・・・わたし、何を言って・・・」

ナユキは呆然としながらも、コウサカの言葉を思い出しダンバートンを目指した。

両軍はすでに衝突していた。距離が縮まるまではお互いに弓矢や魔法による応酬があったが、防盾ほっしゅんで、またはマジックシールドで互いに防ぎ合ってほとんど効果はなかった。

「おわつとつ!?!」

振り下ろされたゴーレムからの一撃を、横つ飛びして一人の青年が何とか避ける。

「うつひえっ・・・あつぶねー」

腕の力を使って一気に飛び起き、とりあえずロックゴーレムから距離を置く。

「隊長ーっ! いくら何でもキツイですってっ!」

ダンブレテン第一部隊、通称ガルドー隊に身を置くタクト・エリスは隊長でありガーディアンナイツの一人であるガルドーに向かって弱音を吐いた。

タクトは、百七十一cmの背に薄い朱色しゆいろの瞳、歳は十七と若い。武器も標準的なブロードソードを好んで使う、これと言って特徴の

ない男だった。タンクトップの上から胴体部だけレザーメイルで覆い、皮のグローブにコンバットブーツと言う格好で、シヨートの赤み掛かった髪を水色のバンダナでまとめた頭部から冷や汗がだらだらと流れていた。

「はっ！」

ガルドーが腕を振り下ろしたことにより出来た隙を逃さず、ロックゴーレムの横腹に両手で持った巨大な槌つちバトルハンマーによる一撃を加えて砕いた。重さ一トンはあるロックゴーレムがぐらりと傾くと横向きに倒れた。その隙に別のハンターがゴーレムの頭頂部に貼られた魔符を剥がす。魔符を剥がされたゴーレムはただの岩石へと戻った。

「やつと二体か」

ガルドーはふう、と一息吐くとバトルハンマーを肩に担いだ。

ガルドーはガーディアンナイツの中でも最古参で、バルドラスが武装キャラバンを率い始めた頃からの付き合いである。三十六歳。百九十九cmの背でバルドラスにも勝るとも劣らない強靱きょうじんな肉体に、刈上げた茶色の短髪をしている。兜はしておらず、所々プレートで覆われたレザーアーマー、灰色のガントレット、薄汚れた銀色のグローブに身を包んでいた。

「弱音を吐くな、馬鹿者が」

周りでは他の者達が魔族側と斬り合い、または矢の応酬をし合い、それがマジックシールドによって防がれたり、十数人でようやくゴーレムと渡り合ったりと。そんな中、ガルドーは平然とタクトに言葉を返した。その目はただ爛爛らんらんと光っていた。

「うおらおらおらおらあああああつー!!!」

別のところでは、バルドラスが巨大な戦斧を振り回しながら暴れ回っていた。頑強がんきやうな鎧により、放たれた矢を易々と弾き、突撃して行った。ちなみに、魔法が付加されて強度が上がっているためまさに鉄壁である。かなり値が張るが。

「次だ。いくぞ」

ガルドーがまた別のロックゴーレムに向かって行く。タクトも息が上がったわけではなく緊張のため、ぜえはあ言いながらガルドーに続いた。

ガルドー隊は十六のロックゴーレムの相手を任されていた。理由は他の部隊より打撃力が高いためである。タクトのような標準的な軽装備なのは逆に珍しく、多くはガルドーの持つようなハンマーや戦斧、刃渡り百四十cmほどのトゥハンドソードや刃渡り百五十cmほどのクレイモアと言った重量のある装備をしていた。

「うひええ・・・」

情けない声を上げながらもタクトはロックゴーレムの前へと出る。ガルドー達のような攻撃の遅い者のためのオトリである。案の定、ロックゴーレムはただ近い者に攻撃してくるだけのようで、タクトを踏み潰そうと足を上げた。

「せはあっ!」

ゴーレムが片足立ちになったところで、別のハンターが後ろから、地面に着いている片足に巨大なハンマーを叩き付けた。ゴーレムはそれでバランスを崩すと仰向けに倒れる。

「うおわっ!?!」

危うくゴーレムからの倒れついでかかとの踵落としを避けると、タクトはゴーレムから魔符を剥がしているハンターに抗議の声を上げた。

「てめえ、危ないだろがっ! もう少し避けるのが遅かったら、必殺確定踵落として昇天するところだったわっ!」

言葉を向けられたハンターはニヤリと笑って、片手を上げるとまた別のゴーレムへと向かって行った。

「ったく・・・」

頭を掻きながらタクトが立ち上がると、一角から悲鳴が上がった。ゴーレムと連携れんけいされないように他の部隊が分断していた魔族が、いつの間にかゴーレムの足元を固めていた。そこから弓矢を放つてきていた。

「うおっとうっ・・・!?! こりゃ、まずいな・・・。他の奴等は何

やってんだ……」

放たれてきた矢を避けると、タクトは小さく愚痴ぐちった。よく見ると、他のゴーレムの周りにも魔族が集まっていた。それは突破されたのではなく、ただ単に敵の第二波が合流しただけであった。バルドラスと共に戦っている他隊は善戦してはいるが、ガルドー隊は徐々に押され始めて負傷する者も増えてきた。小回りの利く、または盾として使える武器を持っているものが少ないためである。そして孤立させられていた。残りのゴーレムは十一体。その周りを固める魔族の数は六十と言ったところ。

「隊長、どうすんですか？」

「どうするも何も戦え」

「いや、いやいやいや……」

そんなことを言いながらタクトは一体のゴーレムに接近すると、周りの魔族が矢を放ってきた。予め予想あらかじしていたタクトは横っ飛びで避けると、その後ろからガルドーがバトルハンマーを横薙ぎにするが、ロックゴーレムがそれに合わせて上から叩きつけるように腕を振り下ろした一撃で攻撃は無力化される。

「うりゃっ！」

ガルドーに取り巻きの魔族の注意が向いたのを見計らって、タクトは魔族に斬りかかった。だが弓をわざと盾として斬らせ、斬撃の威力を半減させられ深手を負わせることなくタクトは引いた。

「うわ……マジでやばい……」

見れば他のガルドー隊の面々もじりじりと後退して来ていた。バルドラス達も気付いてはいるが、邪魔をされて来られなかった。

「って、何だありゃ？」

ロックゴーレムと魔族の包囲網の外、西の方角から何か人らしきモノが疾走しつそくして来ていた。それも常人離れた速度で。背中から金色に光輝くクレイモアと《おぼ》しき剣を抜いたかと思うと、四mはあるロックゴーレムより高く跳躍へびりゅうした。

「なんだそりゃあ……？」

そのままロックゴーレムを真つ二つに叩き割った。そして、着地と同時にクレイモアを瞬く間に一周させ十の魔族を一撃で切り裂くと、再び飛び上がりその飛び上がった勢いそのままに、別のロックゴーレムを下からまた真つ二つに砕いた。砕いたロックゴーレムを踏み台に飛び上がると、また別のロックゴーレムを横から切り捨てる。空中で全身のバネを使って回転して体勢を整えると、着地しながらクレイモアを地面に叩きつける。その衝撃波で二十の魔族が吹き飛んで行った。

「た、隊長。なんすか、あのびつくり超人さんは……」

冷や汗だらだらの方トは啞然あぜんとしながらも、ガルドーに聞いた。ガルドー自身も珍しく茫然ぼうぜんとしていた。

「お、恐らく、総隊長が言っていた精霊剣を持つミレンシアだろう……」

総隊長とは、武装キャラバン時代のバルドラスのことである。

十秒も掛からず三のロックゴーレムを倒された魔族側は、バルドラス達と戦っている自軍と合流するためじりじりと後退して行った。それだけの動きをしながらも息一つ乱していないその男は、下がる魔族を追いもせず剣を肩に担ぐとガルドー達に向き直った。

「さて、無事か？」

何の緊張感もなくコウサカはそう言った。

第九章 ダンバートン北東平原攻防戦（後書き）

【お詫び】

本章内で説明されているライトニングボルトの発現原理ですが、筆者の知識に若干あやしいところがあるため間違っているかもしれない。申し訳ない。

第十章 新たな出会い

「隊長、ミレンシアって全部が全部あんなすか・・・？」

「・・・知るわけないだろう」

タクト、ガルドーも含めゴーレムと戦っていた者全てが茫然ぼうぜんとしていた。

戦場の、殺し合いの只中ただなかで平然と敵に背を向け、何の気負いもしていないかの声。その身に纏まとう気配は、何百の人間魔族が入り混じるこの場においてなお強烈。バルドラスも歴戦の戦士ゆえに、相対した時には威圧感を感じる。その男はそれ以上の威圧感を放ちながら、だが恐怖感を抱かせない不思議な雰囲気きふきを纏っていた。殺気は希薄で、ロックゴーレムを倒した時にも何の気負いもなくただ斬ったという感じだった。透明に、気負いもなく、淡々と敵を圧倒したその姿に誰もが言葉を失った。この男に敵意を向けられたとしたら心中は如何いかほどか。

ガルドー隊の無事を確認するとコウサカは追撃に向かった。バルドラス並みの重装備に関わらず、恐ろしく速い速度で。更に、魔法や飛んでくる矢は全て剣で切り裂くか弾くか避け切りながら。噂に聞くタラ王立騎士団の最精鋭も大層ふざけた強さだと聞くが、この男ほどではないだろう。

半ば啞然あぜんと、半ば憧憬とっけいの念を抱いていたタクトは、軽く頭を叩かれて我に返った。

「いくぞ。あれにはかりやられてはいいい恥さらしだ」

バトルハンマーを肩に担いだガルドーが立っていた。他の者も、体に矢の刺さったまま、魔法に身体を焼かれたの者も居るが致命傷はそれぞれの防具で防いでいたのか、皆手に手に武器を持って立ち上がった。

「う、うすっ！」

タクトも立ち上がり後に続く。だが、その目はコウサカに釘付け

だった。

疾走しながら、驚異的な動体視力と反射神経によってわずかに動くだけで紙一重に、最低限の動きだけで攻撃を避けるか弾き飛ばす。敵にとつては悪夢でも見ているようだろう。それは半ばパニック状態なり一部から全体に伝染していき、明らかに魔族側は及び腰になりマスダンジョンへと全体が下がり始めていた。残った八体のロツクゴーレムを無策に時間稼ぎとして突撃させてきた。

「朔絆」

コウサカがそう呟くように言うと、クレイモアからの光がさらに膨れ上がった。そして横に振り抜く。

「ぜああつ！」

一閃。それだけで無策に固まったまま突撃して来た八体のロツクゴーレムが、クレイモアから放たれた光の波に飲まれて溶け去った。

「・・・」

人間側も魔族側も、すでに誰一人戦っている者はいなかった。ただコウサカを茫然と見ていた。コウサカは幾分光の弱まったクレイモアを背中に戻し、バスタードソードとカイトシールドを構えた。

「・・・」

そして、ただ無言に魔族側に向かい始めた。今度は凄まじい殺気をその身に纏いながら。それと同時に、西の方角から大量の蹄の音が響き渡ってきた。その旗印に魔族側は勿論、人間側の誰もが驚愕した。

「タラ王立騎士団つ・・・!?」

銀光煌くフルアーマー騎士団の掲げる旗印は確かに王都タラのもの。新たに迫るその神々しいまでの威容に、いよいよ魔族側は撤退を開始した。

「深追いすんじゃないやねえっ！ 怪我人の手当てしやがれ、馬鹿どもがああつ！！」

追撃しようとしたハンター達はバルドラスの怒声に身を縮ませると、怪我人の下へと走って行った。

タクトは何事もなかったかのように剣と盾を引っ込め、歩いてくるコウサカに駆け寄った。

「あ、あんた何モンすか・・・？」

するとコウサカはフェイスガードの中から、感情の読み取れない瞳をタクトに向けて言った。

「それは名前を聞いているのか？」

「え、あ、そ、そうすね・・・」

「コウサカだ」

「・・・」

タクトのコウサカへの第一印象は、凄まじく強くて格好良いが何か変な人、だった。

戦闘が、すぐに敵全てが逃げるといふ事態になったため、双方の被害は微々たるものだった。人間側には重傷者はいるが死人すらいなかった。

そこから少し離れた場所、バルドラスは怪我人の手当てに走り回るハンター達を見ながら、新たに現れた騎士団の下へと向かう途上、副官のレザルドに声をかけた。

「ありや、お前の差し金か？」

「魔族の行なつて来ていたのは威力偵察でしたから。そのうち来るのは予想していました。なので、独断ですがタラに要請しておきました」

威力偵察とは、部隊を展開して小規模な攻撃を行うことによつて敵情を知る偵察行動のことである。レザルドは襲撃の規模、撤退に移るまでのタイミング、そこから得られる情報だけで威力偵察だと断定してタラへと要請を送つたのである。さらに越権行為えっけんの独断であるからバルドラスにも迷惑が掛からない。さすがと言える観察眼である。

「間違つていやがったらどうする気だった？」

「全責任を取って、如何様にも」

その言葉に嘘偽りは微塵みじんも感じられない。間違っていた場合、自分の首だとしても本当に差し出すだろう。

「おいおい・・・お前がいなくなつとオレのやる仕事が増えるじゃねえか」

「そこですか」

「へっ」

「ふっ」

二人は互いに笑みを浮かべると、いまはマスダンジョンに向かつて展開している騎士団の下へと着いた。隊長格だろう者達が兜を脇に抱えながら立っていた。全員が銀色のクラウスナイトアーマーというプレート鎧よろい一式に身を包み、隊長格ゆえか紺色こんいろのマントをその背に羽織っていた。

一人だけ黒いマントを羽織った騎士が進み出る。バルドラスよりも年上だろうその顔にはしわが刻まれていて結構な歳であることはわかるが、その肉体はがっしりと引き締まっている。眼光、雰囲気から騎士団長かとバルドラスが声をかける。と、ふと鎧よろいに描かれているエンブレムを見て、目を細めた。

「オグマ騎士団か。てめえが団長か？」

「レオナルド・フュードです」

無愛想にそう言うレオナルドは敬礼をした。

オグマ騎士団は、十数万を数えるタラ王立騎士団の中でも最強と呼ばれる騎士団である。一人ひとりが体格の恵まれ精強せいきょうな肉体を持ち、剣だけではなく弓矢に簡単な魔法までも使いこなす。中でも接近戦に無類の強さを誇る。

エリンの現代戦は接近戦が主流である。それは遠距離から放たれた魔法や弓矢がマジックシールドにより威力のほとんどが殺がれる為である。万が一、マジックシールドが突破できたとしても威力の半減した魔法や弓矢では鎧よろいを貫くことは出来ない。また速度も落ちているので避けられる可能性の方が高いのである。少し値が張るこ

とになるが装備に魔法を付加させ物理耐性・魔法耐性を上げること
でさらに頑強にすることが出来、遠距離からの攻撃があまり意味を
成さなくなったことも接近戦が主流となった要因のひとつであるが、
何故か剣や戦斧、メイス、短剣とそう言った直接手に持つて攻撃す
る物は魔法耐性を無視することが出来るのが最大の要因であろう。
直接持つてそれにより攻撃するため、持ち手の霊力だとか魔力だと
か、そんなものがより強く乗るためらしい。

「二、三百ぼつちしかいねえが。これで全部か？」

「より腕利きの者だけを引き抜いて連れてきました。数などそれほ
ど問題にはなりません」

最強の中で更に最強というわけか、とバルドラスは挑戦的な笑み
を浮かべた。

「大した自信だなあ、おい。ひとまず副官連れて官庁へ来な。詰め
るとこ詰めようぜ」

「了解しました」

レオナルドは副官らしき男を呼ぶと、残った隊長達に指示を下し
た。それを見たバルドラスは北門の方向に顎をしゃくると、歩き出
す。レオナルドもその後が続いて行った。

一方その頃。

コウサカは未だ戦場となっていた北東の平原でタクトに捕まっ
ていた。

「こ、コウサカ・・・さん・・・やっ・・・やっ・・・と見つけ・・・」

そんな時、コウサカの下には何故か息を切らしたナユキが走っ
て来た。北東の平原には数百人が展開しているため探し回っていたの
だろう。

「宿に帰ればそのうち会えたと思うが。それとも、今どうしても伝
えておきたい用件でもあるのか？」

「・・・あ」

ナユキがポカンしたかと思うと、恥ずかしそうな表情を浮かべた。
「そ、そういえば……。あはは……。」

そして、コウサカと一緒にいるタクトに気付いた。

「そちらの方は？」

「……。っ！」

タクトは何故か雷に打たれたような表情をしていた。ナユキを凝視したまま瞬きすらしない。

「……。っ？」

「どうかしたのか？」

以下、タクトの心中。

「こ、これはっ……。っ！ やばい……。やばいぞ……。これは、やばいっ！ か……。っかわ……。っ可愛すぎるうううううううううううううううううううう……。っ！ ああ……。っサラサラしていて触り心地の良さそうな絹糸きぬいとのような金色の髪っ！ 露出している華奢きやしゃな白い肌っ！ ほわっとしたような表情っ！ 綺麗な翡翠色ひすいいろの瞳っ！ ああ……。っああ……。っ天使っ！？ 天使なのか！ オレは天使と会っているのかっ……。っ！？ この子、ストライクだぜっ！ どストライク過ぎるぜえええええーっ……。っ！！ これはも以下略。

「あ、あの……。大丈夫、ですか？」

目を血ばらせてすごい顔になっているタクトを心配してナユキが声をかけた。身長差があるため上目遣い気味に、しかもタクトの様子が怖いため少しビクビクしながら。トドメである。タクトから阿呆な意味でヤバい気配が溢れ出てきた。

「天使様っ！」

「ひゃっ……。っ！」

「お、オレを……。っオレをおおおおおおーっ……。っ！」

今にも掴み掛かりそうな、襲い掛かりそうなそんな気迫。コウサカは一瞬で腰を落とすと、腰に戻したバスタードソードの柄に一秒掛からず手をかけた。だが、その時。

「死ねっ！！」

「げぶはあつ!?!」

いきなり真横から、ものすごい勢いの付いた飛び蹴りを喰らってタクトがぶっ飛んだ。遠くまで転がっていくと倒れたままピクリともしなくなつた。

「・・・」

「あ、あうわうわう・・・」

コウサカは状況がさっぱり分からず珍しく呆気に取られたような表情で、ナユキはすっかり怯えて泣きそうな顔をしながらコウサカにしがみ付いていた。と、タクトに必殺の蹴りを見舞つた少女がコウサカに目を向けた。

「・・・物騒だから手を退けてくれる?」

「あ、ああ・・・すまない」

思い出してコウサカは剣の柄から手を離した。この少女が飛び込んで来なかつたら、もしかしたらタクトは打撲よりもっと酷いことになっていかもしれない。コウサカは条件反射のような速度で動いていたからである。

「君は?」

「・・・カゲヤ。カゲヤ・エアリス。あそこの馬鹿と同じガルドー隊所属」

「エアリス・・・?」

ついさつきタクトからも聞いた。そこで思い至る。

「タクトの妹か?」

「すつつつごく不愉快だけど、そう」

本当に心底嫌そうにカゲヤは吐き捨てた。

カゲヤは解けば背中に掛かるだろう蜂蜜色の髪をツインテールにして、つり目気味な黄赤色の瞳きあかいろをしている。十六歳で百六十二cmの身体を空色を基調としたノースリーブ・半ズボンのトークハンタースーツという服に、青いグローブ、薄い水色のブーツに身を包んでいた。

スリーサイズはB79・W58・H80くらい。

「・・・っ！」

その時、タクトがガバアツと起き上がった。それにナユキがビクリとしてコウサカの背に隠れた。

「カアグヤっ！ てめえ、もう少してホンモノの天使が迎えに来るところだったわっ！！」

数mはぶっ飛んだという割には、平然とタクトは起き上がって来た。ズンズンと肩を怒らせながら歩いて来るとカグヤに喰って掛かった。

「うっさい、死ねっ！」

「兄に向かって死ねとは何だっ！？」

「このヘタレナンパバカっ！」

「ヘタレなのは認めるが、バカじゃねえっ！」

論点そこですか。とりあえず、コウサカは面倒事に巻き込まれるだろうから、ナユキを促してその場を離れることにした。

「あ、あっ！ 待った、待ったコウサカさんっ！」

「・・・」

ナユキだけは帰してやろうとコウサカはナユキの背を押した。それにナユキは心配そうにコウサカとタクトを交互に見た。

「いいから」

「は、はい・・・すみません」

ナユキは小走りで北門へと向かって行った。コウサカはタクトへと向き直る。タクトが何か言う前にコウサカが先に口を開いた。

「その子に礼を言っておけ」

「え、はい？ な、なんですか？」

ポン、とコウサカは腰のバスタードソードの柄に手を置く。

「もう少しその子が飛び込んで来るのが遅かったら、斬っていたかもしれない」

「・・・っ！」

何を冗談を、とタクトは言おうとしたがコウサカが表情ひとつ変えずに言っていることに、あと先ほどの戦闘の凄まじさを思い出し

て真っ青になった。

「ま、マジか……。サンキュ、カグヤ……。」

「そんなヤバい状況だったんだ……。」

タクト、カグヤは言葉を失った。それぞれ青い顔でいると、コウサカの声で我に返った。

「ところで。なかなかの蹴りだったが、大丈夫なのか？」

「……。あ」

それで痛みに気付いてしまったのか、タクトは蹴られたわき腹を押さえて地面を転がり身悶え始めた。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い！ し、死ぬっ！？

死ぬ死ぬっ！！ 痛ってええええええーっ！！」

本気で痛がりゴロゴロその辺を転げ回っていた。そんなタクトを見て、コウサカはカグヤに目を向けた。

「やり過ぎだと思うが」

「……。ふんっ。いいのよ、こんな奴」

何か朔絆に似ているな、と思いつながらコウサカは思う。ふと、とあることを思い付いてタクトに声をかけた。

「一瞬で終わる激痛と、じわじわずっと続くそれなりの激痛。どちらがマシだ？」

「一瞬の方がマシに決まって……。痛ててててててっ！」

「そうか」

そう言うと、コウサカは目にも留まらない速さで転げ回っているタクトの首の後ろ、延髄えんすいに狙い済ました手刀で無慈悲な一撃を叩き込んだ。タクトはゼンマイの切れた人形のようにガクリとした。

「……。」

ぐったりして静かになったタクトを片腕だけで軽々持ち上げると、コウサカは肩に担いだ。

「君は怪我は？」

「な、ないないっ！」

あると答えたらタクトのようになると勘違いしたカグヤは、ブン

ブン首を振って否定した。ツインテールが頭を振るたびに、前後に振れた。

「そうか」

それだけ言うと、コウサカはダンバートの病院を目指して歩いて行った。

「何なの、あの人・・・」

実はカグヤも先ほどのコウサカの働きは見ていた。タクトと同じようにコウサカの下へ行ったら、タクトが暴走していたので必殺蹴りをかましただけである。

カグヤのコウサカへの第一印象は、凄まじく強くて格好良いが何か怖い人、だった。

官庁、領主執務室。

バルドラスとレザルドの前には、レオナルド団長とその副官が立っていた。

「・・・はあ？ 随分ずいぶんと気前良く出しやがると思ったが、そんなことかよ」

「バンホールは、ある意味このダンバートンよりも重要なのです」
レオナルドは顔色一つ変えずにそう言い切った。その意味は分かっているが、バルドラスは苦虫を噛み潰したような顔になった。

鉱山都市バンホール。ウルラ大陸で取れる鉱石の実に六割がそこで取れる大鉱山である。だが、地質はとても乾燥しているため植物が育たず、さらに飲み水すら足りないほど水が不足しており、鉱山の坑道からくみ上げた水を再利用して鉄の製錬に使っているほどである。昔に火事があり、学校や教会などが焼失した。

また、この大鉱山はバリダンジョンとも呼ばれている。ウルラ大陸で一番、魔族出現率が高いダンジョンである。それは昔から無数に坑道が掘られ、一度は過去の大戦で地下要塞ラフとして使用されたことに関係がある。無数の坑道はもはや全体の把握が不可能なほ

ど広がっており魔族達の恰好の隠れ家、または拠点とされてしまっている。だが、バンホールの鉱山が使えなくなると王国全体が傾く事態に成りかねない為、王都タラから二個騎士団、約二千人以上の騎士が派遣され常駐している。鉱山労働者と共に鉱山に入り護衛をし、または入り口を監視している。

元々バンホールには鉱石とそれから作られる装備以外は何も無い。だが無くなっては困る。それゆえに、騎士団の他に物資援助の輸送隊を編成して定期的に援助をしているが、ウルラ大陸の南東端という位置にあるせいもあって難しく、手間暇も掛かる。エイリフ王国にとって城塞都市タルティーンと同レベルの重要度と頭痛の種である。

「ダンバートンもバンホールからの鉱石や装備の輸送で、一部利益を上げていますからね」

レザルドは事実を端的に言う。バンホールは鉱石だけではなく装備もすごいのである。バンホールにいるウルラ大陸随一の名工が鍛えた剣や鎧は取引価格が高く、だが需要が高いためその輸送を担っているダンバートンの収入源のひとつとなっている。

「言わねえでもわかつてるよ・・・たく」

バルドラスは兜を外した頭を掻いた。そして、目を細める。

「だが、しばらくはここにいてもらうぞ。うちの奴等をタルティーンに持って行ったのはタラだからな」

「承知しています」

「とりあえず、詰め終わったからもういいぞ」

レオナルドと副官は、膝を着いて最敬礼をすると退出して行った。「・・・はあ、やれやれだぜ」

溜息を吐くとバルドラスは鎧を脱ぎ捨ててアンバーウェア姿になると、領主用の特別製の椅子にドカリと座った。

「そっぴい、あの坊主。やっぱりこっちに引き入れねえてえな。お前、何か良い案でもねえか？」

「顔見知りのハンターを見つけて、当たってみましょう」

「おう、頼むわ」

一礼するとレザルドは退出していく。

「まさかあんなに強えたあなあ・・・」

残ったバルドラスは改めてコウサカの実力に感服すると、深々と溜息を吐いた。

その日の夜。

アリアンロッドの酒場。コウサカは相変わらず、上半身だけ鎧を脱いで酒場の卓のひとつに着いて夕食を食べていた。装備は朔絆のクレイモアだけを卓に立て掛けてある。

「うおっ!？　そ、それを一気飲みすか・・・」

「ホント、キミってよく分からないわね・・・」

「・・・」

何故かタクトとカグヤ、おまけにアルシアがいた。いまコウサカはアルコール度数四十〜五十%と言われる透明な茶色のウィスキーをストレートのままショットグラスを傾け一息で飲み干した。タクトとアルシアはわざと勧めたのだが、平気な顔をして飲むため度肝を抜かれたようである。

コウサカはそれぞれの顔を見渡すと。

「何故ここにいる」

当然の質問をした。

コウサカがいつものように宿に戻って夕食を取っていると、三人が何故か現れたのである。結局、そのまま一緒に食事をする事になった。

「・・・領主様から頼まれたからだよ」

一人面白くも無さそうに料理を食べていたカグヤが、面倒くさそうに答えた。

「ふむ。ところで、君。食べ終わったら帰ると良い」

「え?」

コウサカが唐突とつとつに何の脈絡みやくらくもない言葉を言ったため、カグヤを含めタクトもアルシアも目を瞬ひらいた。

「恐らくは、その二人だけで話は事足りるだろう。領主様の命令でここに来たのなら経費で食事代も落ちるだろう。好きなだけ飲み食いして仕事など兄に押し付けてしまえ」

「えっ、ちよっ!」

タクトが慌てて割り込んできた。アルシアは何となく話の流れに気付いて、面白そうな顔になった。

「そりゃないっすよっ! オレだって遊びたいっ!」

「思うに。君らは仲が悪いのだろう? しかも主に兄が妹に苦労を掛けている」

「そ、それは・・・」 「そうなのっ!」

タクトが言葉を詰まらせたところで、カグヤが目を輝かせて身を乗り出した。

「こいつ、いっつも怠なまけてばかりでっ! 家事とか全部あたしがやってんのっ! 話が分かるうっ!」

誰もそんな話は最初からしていないが、積もりに積もっていたのだろう。理解してくれそうなコウサカにカグヤの留め金が外れた。

「ハンターとしては隊長もなかなかっ言っているけど、そうやって甘やかすから付け上がっ! 戦闘頑張るから日常はだらけることにした、ってこの馬鹿っ!」

「ち、ちよっと待て・・・待てカグヤ」

びしりとカグヤから指を突きつけられたタクトは、止めに入る。

「うっさい、この役立たずっ! あたしの苦労も知らないでっ!」

「ちよっ、ならお前もオレの苦労知ってるのか!? 今日だって一番前でオトリやってたんだぞっ!」

「なら、いっぺん毎日苦労してみろっ!」

ぎゃーすか、ぎゃーすか。そんな二人の兄妹喧嘩を周りの客もニヤニヤしながら見物していた。

「ところで、アルシアさん。来た理由はなんですか?」

コウサカはと言うと、表情すら変えずにアルシアに声をかけていた。二人の相手は諦めたようである。

「キミって、ホントに色々すごいわね・・・」

アルシアは頬杖ほおすえを着きながら呆れ顔でコウサカを見た。片手には麦酒ビールの入ったジョッキを持っていた。

「ところで、なんでカグちゃんの肩持ったの？」

「さあ、それがよく分からないのです。何故かあの子の肩を持つと思うたで」

「あ、もしかして。カグちゃん気に入っちゃったかしら？ ふふふ・・・」

意地悪な笑みを浮かべながらアルシアはコウサカに言う。

「？ 気に入るとは？」

「ああ、ごめん・・・。キミ、全然興味出さなかったよね」

「？」

首を捻って思案顔になったコウサカに、アルシアは溜息を吐いた。そして、隣ではまだ口喧嘩くちげんかをしている兄弟を見てまた溜息を吐いた。その後、コウサカの問いに答えた。

「領主様に、キミをギルドに引き入れてくれて頼まれたの。まあ、あんな動きを見れば気持ちも分かるけど・・・」

昼のことを思い出し、他人事だがアルシアは少し嬉しそうに言った。

「それに関しては、今のところNOです。とりあえず今回の件が終わるまでは、俺はどこにも付きません」

「今回の件・・・？ それって、どういう・・・」

コウサカの言葉に疑問を浮かべたアルシアが何か言おうとしたところで、タクトとカグヤがコウサカの方をものすごい勢いで振り向いた。

「どつちが悪いっ!?!」

アルシアが引くほどの形相うんげんだったが、コウサカは平然と視線を受け止めた。

「タクトだ」

「よっし！」

コウサカがそう言うのとカグヤがガッツポーズを取った。コウサカは肩を落としてしているタクトに声をかけた。

「この子は良い子だ」

「……？」

アルシアも含め、三人とも頭の上に？が浮かんだ。コウサカの顔には珍しく感情が浮かび上がっていた。

「何が不満だ？」

「え、いや……」

強い視線をタクトへとコウサカは向けた。

「甘えているだけだ。その子はお前を心底嫌っているわけではないだろう。むしろ、好きだと思う」

「ちよっ！？」

カグヤがコウサカを止めようとするが、強い視線で睨まれて黙った。

「馬鹿をやり合える兄を想っているからこそ、文句は言っても家事をやってくれるのだろう」

「す、ストップ、ストップっ！」

今度こそカグヤがコウサカを止めると、唐突にコウサカがカグヤの頭に手を置いて優しく撫でた。

「へぁ……え、ちよ……」

カグヤは顔を赤くして、しかし気持ち良さそうに目を細めた。

「お前は気付かずに、こんな良い子を悲しませるつもりか？ だとしたら」

次の言葉に、酒場にいた全員が怖気おそけに身を震わせた。

「殺す」

「……っ！」

コウサカの全身から殺気が溢れ出て来て、その場を支配した。そして、ゆっくりと立ち上がる。

「答えられないなら殺す」

「っ……！ いや何にっ……？」

殺気をモロに向けられたタクトは、その場から動けなくなっていた。その時。

『こんの、バカっ！！！！』

実体化した朔絆は、コウサカにもすごい勢いで、人体急所のひとつである眉間に滑空ドロップキックを見舞った。

「……っ！？ ……っ！」

コウサカが眉間を押さえて動きが止まると、殺気も消えた。朔絆は完全実体化して腰に手を当ててコウサカの前に仁王立ちした。

『……目え覚めた？』

朔絆の声を底冷えするほど冷たかった。またその視線も。

「え、まさか……酔ってたの？ ……あ」

アルシアはそう言うとおの物を見て固まった。ウイスキーのボルトがいつの間にか空になっていたのである。

「痛うー、つつつ……何をす朔絆」

『バーカっ！ バーカ、バーカっ！！』

軽く頭を振りながらコウサカは朔絆を見ると、ものすごく怒っていた。

「？ 何で怒っているんだ？」

その言葉を聞いたその場にいた全員が思ったことはこうである。

（（こいつ覚えてねえっ！！））

とりあえず、コウサカに酒は飲ませないようにしようとアルシア達三人は強く決意した。朔絆から自分が酔っていたことを聞くとコウサカは、なるほど、という顔をした。

「タクト」

「は、はひっ！」

コウサカがタクトに声をかけると、ビクリとタクトが飛び上がった。

「だいぶ途切れ途切れではあるが、一応は覚えている。妹を大事に

してやれ」

いつも通りの感じに戻っているが、それでもコウサカの声には感情がこもっていた。

「は、はいっ・・・！」

タクトは思わずそう答えると、はっとしてカグヤを見た。カグヤは少し恥ずかしそうに俯いていた。

「な、なに言ってるの。・・・ば、馬鹿じゃない」

それを見て、タクトの表情が真剣味を帯びた。

「コウサカさんの言う通りっす。オレ甘えてたんすね・・・」

タクトは一度目を伏せると、カグヤを見た。

「悪かった。オレも意地になってた」

「え、えっと・・・」

カグヤは目を右往左往させると、赤くなって俯いた。それに笑みを浮かべると、タクトはコウサカに目を向けた。

『あんたはバカ！ バカすぎっ！ このバカっ！！』

その場に正座させられ、ものすごいバカバカ言われていた。そこで、あれとタクトは思う。

「あの子誰？」

剣の精霊など一般人が知る由よしもない。その疑問に、小さな女の子に正座させられ説教されているという、果てしなく情けないコウサカの姿を笑っていたアルシアが答えた。

「あそこの剣に宿っている精霊。名前は朔絆ちゃん」

「精霊・・・？」

タクトは朔絆をまじまじと見つめた。その視線に気付いた、殺気すらこもってそうな目で朔絆に睨まれたためすぐに目を逸らしたが、「精霊って、あんなに生き生きしてるんすね・・・」

「他に見たことが無いから知らないけど。朔絆ちゃんの場合、理由があるからかしらね・・・」

「え、なんすかそれ？」

「ひ・み・っ」

悪戯っぽい笑みを浮かべると、アルシアはウィンクをした。それにタクトは顔を赤らめて目を逸らす。それを見て、アルシアは溜息を吐いた。

「はぁ・・・」

「どうしたんすか？」

「まあ、ちよつとね・・・。ミレンシア君、私を見ても何の反応もしなかったことを思い出して」

「？ 反応って？」

「例えば、これのチラ見とか」

そう言っただけでアルシアは自分の豊かな胸を示す。タクトはその胸に釘付けとなった。

「痛ててっ！」

すぐにカグヤがタクトの耳を引っ張って視線を逸らしたが。それにアルシアは小さく笑う。

「くす・・・。まあ、普通はそういう反応よね」

「何の話ですか？」

声がして振り向くと、コウサカがいつの間にか立っていた。隣にはむすつ、とした顔の朔絆が並んでいた。

「あら、もうお説教は終わったのかしら？」

アルシアがからかうようにそう言っただけ。

「・・・こいつバカだから」

朔絆が不満な顔で返した。バカというか、無意識的にやっているせいで自覚がないため言っても無駄だということだろう。そこでアルシアは何か思いついて朔絆に声をかけた。

「ね、朔絆ちゃん。ちよつとミレンシア君を試していいかしら？」

「何する気？」

アルシアは朔絆を招き寄せると、何かを耳打ちした。それに朔絆は少し呆れたような顔になった。

「別にいいけど・・・」

「そ。ならよかった」

そう言つとアルシアはコウサカに声をかける。

「ねえ、ミレンシア君。正直に答えてくれる？」

「何ですか？」

「私のこと、どう思う？」

「良い人です」

少し甘えたような声で言ったはずが、コウサカは全く気付かなかつた。それにアルシアは肩透かしを喰らつた様な顔になった。朔絆がやっぱり、という表情を浮かべている。

「えーと、そうじゃなくて・・・異性としてどう思っているかしら？」

『ちよつ・・・！』

朔絆に言つたこととは違うことを言つたのだらう。途中で朔絆が止めようとしたが、間に合わなかつた。

「とても綺麗な女性ひとです」

コウサカはコウサカで表情も変えずに大真面目に言う。コウサカの馬鹿正直な性格を知っているアルシアは、本気で言われていると気付くと赤くなつた。

「あ、あら・・・えつと、ありがと」

「いえ」

「・・・」

「・・・」

何となく気まずく（コウサカを除く）、誰も声を出せなかつた。

そこで朔絆がアルシアに噛み付いた。

『ちよつとつ！　なんてこと聞いてんのっ！！』

「あら、そろそろ帰らないと。じゃ、またねっ」

アルシアは素早く酒場を出て行った。それを追おうとする朔絆をコウサカが止めた。

『待てえいつ！』

「何をしている朔絆」

『あんたもあんたっ！　何言っちゃつてんのっ！？』

「？ 何のことだ？」

『がーっ！』

そう叫ぶと朔絆はコウサカの胸部と腹部の中間あたりをポカポカと殴り始めた。背が百四十四cm程度しかないと、そこまでしか届かないのである。

「よく見ると可愛い……」

タクトは険が消えて悔しそうな顔の朔絆を見て、そう呟いた。そこでカグヤが耳打ちした。

「手を出したらコウサカさんに殺されるかもよ？」

「……っ！」

ついさっきの殺気を思い出して、タクトはガタガタ震え始めた。カグヤはそれに苦笑すると、ふとコウサカが手を置いた自分の頭を触った。

「……」

「そういえば、コウサカさん」

タクトが姿勢を正してコウサカに声をかけた。

「どうした？」

コウサカは朔絆をなだめながら、顔だけでタクトを振り返った。

「領主様からギルドの勧誘を……」

「さっきアルシアさんに伝えた。今のところはNOだ」

タクトの言葉の途中でコウサカは答えを言った。タクトは、あれという顔になる。

「いつの間？」

「君らが兄妹喧嘩をしている時に」

「あ、あ……」

タクトは気まずそうに目を逸らした。コウサカはカグヤを見た。

「さて、あとは適当に飲み食いして帰るといい」

「あ、う、うん……」

何故か口ごもるカグヤは気にも留めず、コウサカは朔絆の頭に手を置くとクレイモアを手にとって二階の自室へ向かおうとした。そ

れをタクトが引き止めた。

「あ、ところで。天使・・・じゃなかった、コウサカさんと一緒にいた女の子の名前はなんて言うんすか？」

「ナユキのことか？」

「ナユキ・・・ああ、名前もいい・・・。会えないですかね？」

期待に目を輝かせるタクトだったが。

「怖がられるだけだろうから、止めておけ」

その場にガツクリと崩れ落ちた。

第十章 新たな出会い（後書き）

【補足】

本章内で登場する『オグマ』騎士団の由来は、ケルト神話の戦いの神、または言語、靈感の神とされるオグマ（Oggma）からです。

第十一章 落ち着けた日常

タクトがガツクリと崩れ落ちて白くなつた翌日の朝。

「ナユキ、起きているか？」

コウサカはいつものアンダーウェアのまま装備は何も持たずにナユキの部屋の扉をノックした。朔絆すくははベッドで寝るのが気に入ってしまったのか、いまも大の字でベッドを占領している。迷惑この上ない。ゆえに、クレイモアは持って来られなかった。

「ナユキ？」

もう一度、少し強めにノックする。女神のペンダントを渡し忘れていたのを思い出して、コウサカはナユキに渡しに来たのである。

まだ朝六時頃とかなり早い時間だが。ちなみにナユキの行く学校は九時から。

「ふあゝい……」

コウサカが出直すかと思つた時、部屋の中から半分寝てそうな声が返ってきた。そして、丸衿まるえりに長袖でピンクがかつたレディースパジャマを着たナユキが、袖口そでぐちで目元を擦りながら出てきた。

「はにやゝ……」

「……」

意味の分からない擬音ぎおんらしいことを口にしながら、半分寝ているようにほわほわしているナユキにコウサカは、どうしたものか、と珍しく言葉を失つて困つた。

「……ナユキ起きろ」

コウサカはとりあえず、ナユキの肩を軽く揺すつてみた。

「せかいがぐらぐらゝ……」

「……」

こんな子だったか……？ とコウサカは本気で困つた。朔絆を連れて来なかつたことを後悔した。こういう場合の対処法がさっぱり分からないのである。

そういえば、とコウサカは思い出す。昨日、酒に酔った自分は朔
絆の蹴りで意識が戻った。ある程度の衝撃、または痛みを与えれば
完全に覚醒するのでは？ と考え至った。

「ナユキ、すまん……」

「あにやつ……」

コウサカはナユキにデコピンした。少し強めに。バチン、という
音とともにナユキが自分の額を両手で押さえた。

「痛ったあ……。あ、あれ？ あ、コウサカさん」

「……はああ」

どうにかこうにか完全に起きてくれたナユキに、コウサカは久し
ぶりに心の底から溜息を吐いた。

「え、なんでコウサカさんが？ あれ、なんでおでこ痛いのか？ あ
れ、あれ……」

ナユキは混乱しているようだった。起きていきなり目の前に知っ
た顔があれば、それは誰でも驚くだろう。

「いや、いい……。気にするな……別に悪いことがあったわけ
ではない」

「？」

しきりに頭の上に？マークを浮かばせているナユキを見て、コウ
サカは片手で顔を掴むように覆うとまた溜息を吐いた。

「いや、気にしなくていい……。はあ、とりあえずだ。手を出し
てくれ」

「？　こうですか？」

両手を横に並べるようにナユキは手を前に出す。コウサカはその
上にペンダントを置いてやる。

「これは？」

「俺もよくわからない。女神から君に渡すように頼まれた」

「っ！？　会ったんですかつ、女神様と！？」

目を丸くして驚いたナユキは、コウサカに詰め寄った。

「夢でだがな。君が見るにはかなり辛い内容だったから、わざわざ

俺に見せたのだと思う」

「辛い内容、ですか・・・？」

「・・・すまない。聞かないでおいてくれ」

珍しく、コウサカが苦渋くじゅうを浮かべていることを見て取ると、ナユキは申し訳無さそうな表情を浮かべた。

「すみません・・・、行きたいって言ったのはわたしなのに・・・」

「君は気にしなくて良い。それに恐らくは・・・」

「・・・？」

ナユキには一瞬だが、コウサカが自嘲じちやうしたように見えた。

「いや。それよりも、君は朝弱いのか？」

「え、何でわかるんですか？」

「・・・やっぱりか」

「？」

コウサカが珍しく疲れたような溜息を吐いたことに、ナユキは首を傾げた。知らぬが仏という言葉もある。この場合、少し意味が違ちがうが。

「いや、何でも無い。とりあえず、遅れないようにな」

「あ、はい」

「邪魔した」

そう言っつてコウサカは自室へと帰って行った。少しだけ疲れた様子で。

「？」

それにもうひとつ首を傾げると、ナユキはペンダントに目を移す。

「・・・」

そして、それを大事そうに両手のひらに包んだ。

その後、自分が薄手のパジャマでコウサカとずっと話していたことに気付いて赤くなった。

「おはようございますっ！」

『帰れ』

「ひどっ!？」

ナユキが学校へ行つて少し経った頃、コウサカの自室の扉がノックされた。開いている、とコウサカが言つたとタクトが現れた。コウサカが何か言つ前に、朔絆が冷たく言い放つ。

「本当に来たか」

いつものように壁に背を預けたままコウサカがそう言う。朔絆は相変わらずベッドを占領していた。その光景にタクトが目丸くして驚いた。

「・・・え? い、一緒の部屋で寝てるんすか・・・?」

「? そうだが」

「へ、へー・・・」

客観的に見ると。一、若い男と女の子が同じ部屋で寝泊りしている。二、乱れたベッドの上で女の子がとんび座りしている。三、コウサカは腕を組んで壁に背を預けているという格好良い体勢。四、朔絆の視線が明らかに邪魔者が来たという容赦ないものである。五、コウサカは格好良い。

「う、羨ま・・・」

『あ・・・?』

ビキッ、と音が聞こえて来そうなほど朔絆の顔が変わった。虎どころかドラゴンすら射殺すほどのそんな形相。ウツク

「朔絆、お前なんて顔をしている・・・」

「思わずコウサカすら引くほどの。」

「こ、コウサカさん、ちよつと・・・」

朔絆が怖すぎて動けなくなったタクトがコウサカを呼んだ。コウサカはひとつ溜息を吐くと、わざわざタクトと朔絆の間に入ってやった。

「・・・なんだ?」

「ち、ちよつとお耳を・・・」

珍しく。本当に珍しく面倒くさいという雰囲気を出しているコウ

・・・

何かそんなことをボソボソ朔絆は言っていた。呆然ぼうぜんとしたような表情になったコウサカは、朔絆を抱えたままタクトを振り返った。

「な、何が起こった・・・」

「いや、いやいやいや・・・むしろ理解できない方がおかしいです・・・」

タクトがものすごい顔で呆れていた。そして、どこか羨ましそうにしていた。

「？ どういうことだ？」

「天は二物ふたものを与えず、つてことつすね・・・」

どこか自嘲じよちよするように、何か悟ったようにタクトは笑った。そして。

「イケメンの馬鹿野郎おおおおおおおっ!!」

「うっさいっ!」

「へぶっ!?!」

後ろから見事な延髄蹴えんすいけりを喰らったタクトは、白目を剥いて割とヤバい顔をしながら倒れた。

「ったく・・・」

「カグヤか？ 君は来るとは言っていないなかったはずだが」

「その馬鹿だけじゃ心配だから・・・。その、おはよう・・・。コウ」

「ああ、おはよう」

カグヤが何故コウサカを「コウ」と呼んでいるかと言つと。昨日、コウサカの名前を言い辛そうにしていたため好きに呼べば良いと言つた所、カグヤはそう呼ぶようにしたからである。ちなみにタメ口なのは元からの性格もあつて最初からである。

ふと、カグヤはコウサカに抱えられている朔絆に気付く。

「・・・何したの？」

「いや、それが俺もさっぱりだな・・・」

コウサカは有りのままに出来事をカグヤに話した。聞いたカグヤ

は、心底馬鹿らしいという表情を浮かべた。

「その馬鹿も大概たいがいだけど……。コウはそれ以上だね……。」「
うつ伏せに倒れているタクトを一瞥いちめつすると、コウサカを見てカグ
ヤは溜息を吐いた。

『……。ん……。あ、あれ？ あたし、どうして……。』
「起きたか？」

目を覚ました朔絆をコウサカは上から覗き込む。

『っ！……。あ、あう……。わうわう……。』

コウサカを見た途端、朔絆はボンという音が聞こえるほど真っ赤
になると剣の中へと戻った。コウサカは呆気を取れたような表情に
なると、ベッドに立て掛けてあるクレイモアを見た。剣の光は慌て
ているように不規則に光っていた。

「何なんだ今日は……」

そんなコウサカを見てカグヤは呆れると小さく声を漏らした。

「やっぱり気のせいだったのかなあ……」

「？ どうかしたか？」

「あ、あ……。うん。なんでもない」

「？」

カグヤはコウサカから目を逸らすと、足元に転がっているタクト
に蹴りを入れた。

「起きろ、この馬鹿」

「兄妹と言うモノがどんなものか分からないが、……。やり過ぎで
はないか？」

コウサカの言葉を受けて、「多少」手荒くタクトを起こしていた
カグヤの動きが止まった。

「？ わからないって、どういうこと？」

「俺には記憶がない。何故かは知らないがな」

「……。ごめん」

「？ 何を謝る」

「何を、って……」

カグヤはコウサカを見る。その顔は昨日、初めて戦場で会った時のように泰然^{たいぜん}としていた。

「他人がどうかは知らないが、俺に限れば記憶などどうでもいい」「
「どうでもって・・・」

「戻るなら戻ればいい。戻らないなら、それはそれで問題はない」
「・・・」

カグヤが表情を曇らせたことにコウサカは気付く。

「すまない。つまらないことを口にした」

コウサカがひとつ詫びる頃、タクトが目を覚ました。

「し、しぬ・・・いい加減、死ぬから・・・」

首を手で押さえながら、ひいひい言いながら起き上がった。

「では、行くとするか」

「う、うん・・・」

「心配なしっすかっ!？」

そこでコウサカの目の色が少し変わる。見た者が悪寒を感じるほどに。

「何がどうなったかは分からないが、朔絆が軽くだが倒れたのはタクト、お前のせいだろう。次は許さん」

「ひっ・・・」

睨まれたわけではないにせよ、その目を見たカグヤも悪寒を覚えた。

「ま、待ったっ!」

コウサカの放つ気配が部屋を支配した。そんな時、朔絆が剣からは出ずに声を上げた。

「朔絆、大丈夫なのか？」

「ふえ、え・・・え、うん・・・」

コウサカが声をかけると、朔絆がものすごく狼狽^{うつた}えた声を出した。

「あ、ああんたはちよつと黙っててっ・・・!」

「・・・む」

そう言われて、不承不承^{ふしょうぶしょう}コウサカは黙った。

『タクトとかいうのっ!』

「は、はいっ」

タクトは覚悟を決めて目を瞑る。

『グッジョブと言うしかないっ!』

「は、え、ええーっ!?!」

てつきり殺とられると思っていたタクトは、目を丸くして驚きすぎて固まった。カグヤも同じく。

『でも、ああいうのは本心から言われたいものなの! 次やったら許さないかねっ!?!』

「は、はいっ!」

タクトは思わず直立不動で敬礼した。話の内容がさっぱり分からず、コウサカはこめかみに手をやりながら朔絆に聞く。

「朔絆、つまりは・・・どういうことだ?」

『あ・・・しっ、ししし知るかつ!?!』

それつきり朔絆は黙ってしまった。コウサカは頭痛でもするよう
に手の平で顔を覆った。

「・・・タクト」

「は、はいっ!」

「朔絆が何を言っていたのかはさっぱり分からなかったが・・・す
まない」

「え、い、いえ・・・。オレの方こそ、騒いで申し訳なかったす・

・・・

「・・・」

「・・・」

「と、とにかくっ!」

気まずい空気に耐えかねたようにカグヤが声を上げた。

「そろそろ行こっ」

「ああ」

一瞬で表情が切り替わったコウサカは装備を付け始めた。付ける
と言っても、上半身の鎧を着て剣やカバンを持つただけだが。

「・・・」
そんなコウサカを見て、また先ほどのコウサカを思い出してカグヤは溜息を吐いた。内心、やっぱり変な人だと思いつながら。

コウサカ、タクト、カグヤはダンバートンから出て東へ来ていた。タクトとカグヤの巡回任務に、昨日酒場で暇だからとコウサカも付き合うことになったのである。

ダンバートン東側には森が広がっている。マスダンジョンもその森の中の北に位置する。魔族が隠れるにも、何か仕掛けを施すにも絶好の場所である。そのため、コウサカ達以外にもいくつかのパルティーが監視の目を光らしている。

「・・・」
コウサカはただぼんやりとしていた。朔絆は朔絆でコウサカが呼んでも、クレイモアからの光が不安定になるだけで返事もしない。

「コウサカさん、ずいぶん余裕そうっすね・・・」
タクトは剣を構えてビクビクしながら森の中を進んでいた。カグヤも油断無く姿勢を低くしバトルショートソードを一本はそのままに、片方は逆手に構えていた。コウサカは何も構えもせずただ適当に先頭を歩いていった。

「敵意や殺意は微塵みじんも感じない。感じるのは動物の気配だけだ」

「え、まさか・・・気配が感じ取れる達人とかそんな特殊能力が？」
タクトが目丸くして、コウサカには理解し辛い言い方をした。
「よく分からないが・・・気配は感じ取れる」

「ほんと・・・変な人」
カグヤが小さくそう零こぼした。その時、草むらが鳴った。タクトもカグヤもそちらを振り向き、緊張した面持ちで己おのが武器を向ける。
そして、現れたのは。

「・・・く」
全身毛むくじゃらの三mを軽々超える巨体に四足でのしのしと。

「く、くくくクマだああああああつ！」

森のクマさんならぬ、凶暴な黒ヒグマだった。

タクトが叫んだことよって強く注意を引いてしまったようで、黒ヒグマはタクトに目を向けてぐるぐると唸った。

「ば、馬鹿っ！」

カグヤがタクトを咎める。だが、すでに黒ヒグマは二本足で立って臨戦態勢に入っていた。

「・・・」

仕方がない、とコウサカは溜息を吐くと前に進み出た。そして、素手のまま黒ヒグマを睨みつける。

「あ、あれ・・・？」

何故か黒ヒグマの全身がビクリとしたかと思うと、クマであるが脱兎の如く逃げていった。

「・・・？」

コウサカ本人は下より、タクトもカグヤも首を捻った。

「な、なにをしたの・・・？」

「いや、何も。強いて言うなら睨んだ」

「・・・」

「・・・」

二人とも無言になった。そして、幽霊でも見たかのような表情を浮かべる。

「動物には本能的にわかったみたいですね・・・。コウサカさんに手を出したらどうなるか」

「ふむ」

コウサカはそう唸ると首を捻った。

「・・・というか」

カグヤが非難がましい視線をコウサカに向けた。

「・・・気配分かるんじゃないかった？」

「いや、別に散歩しているだけのようない配だったのにな。言わなくても大丈夫と」

「「言つてっ！」」

タクトとカグヤから、ズビシと音が聞こえてきそうなツツコミが入った。

「向こうから襲ってくる気配がなくてもか。だが、クマ程度でそれほど・・・」

「「まず、基準がおかしいからっ！」」

息がぴったり合うところは、兄妹ゆえに成せる技かとコウサカは思った。

「はあ・・・もお、寿命が縮んだかと思つたよ」

カグヤはコウサカが変な人だと再認識した。

「まあ、でも・・・コウサカさんがいれば、まったく危険なしっすね」

タクトはポジティブだった。

とりあえず、三人はそのまま東の森の探索をした。だが、魔族らしき影も、それが施した仕掛けすら何もなかった。

ちなみに、出てくる出てくる森の動物達はコウサカを見た途端、すべて脱兎の如く逃げ去った。あまりにも動物達が露骨ろこつに怯おびえて逃げ行ったせいも、コウサカがちよっぴりショックを受けているように見えたのは、タクトとカグヤの気のせいだろうか。

正午。

交代のパーティーと入れ替わり、コウサカ達はダンバートンへと戻って来ていた。収穫はコウサカを連れていけば、野生動物が襲つてこないということだけだった。

南東門から入った三人は、中央区へ向かう大通りを歩いていた。相変わらず、露天が多く人通りが絶えない。

「では、俺は宿へ戻るとする」

「あ、コウサカさんっ！」

宿へと向かおうとしたコウサカを、タクトが引き止めた。

「昼メシ、うちで食べないっすか？」

「ちよっ!？」

「いいなら、行こう」

「よっしゃ、こっちっす」

「ま、待った、待ってよっ!」

勝手に話がまとまったことに、カグヤが抗議の声を上げた。

「嫌なら仕方がない」

そう言っつてコウサカは踵かかとを返して、人混みに消えようとした。

「まっ、ちよっ!？　だ、誰もイヤなんて言っつてないっ!」

「違うのか」

「早合点すぎっ!　ったく、もぉ・・・ほんと変な人」

カグヤは頭痛でもするようにこめかみに手をやった。

「では、世話になる」

「あーもう、はいはい・・・。あっちの馬鹿に付いていっつて」

カグヤはタクトを指差した。

「君は？」

「ちよっつと材料足りないから、買ってくる」

「荷物持ちくらいなら出来るが」

「ん、いいよ。じゃ」

そう言っつとカグヤはツインテールを揺らしながら、人混みの中に消えた。

「コウサカさーんっ、まだっすかー?」

あの様子から昼食を作るのはカグヤだろう、と思いながらコウサカは駄目兄タクトのあとに続いた。

タクト達の家は、ダンバートンの南東門近くの城壁内にあり、少し古い感じのする二階建ての木造家屋だった。ちなみに自宅を持たないハンターはハンター宿舎と呼ばれる官舎かんしゃに住むことが出来る。コウサカとタクトは、ダイニングキッチンキッチンの食卓に着いていた。

上半身の鎧と兜、装備は適当に置かせてもらって朔絆のクレイモアだけ食卓に立て掛けてある。

コウサカは何となく室内を見回していた。一階にはダイニングキッチンと四畳程度のリビングがあるだけだった。装飾は特になし。窓に物入れ、引き出しがいくつか。二階はタクトとカグヤの部屋と、もうひとつ小さな部屋があり倉庫となっている。

「え、なら何で昨日はあんな風になってたんすか？」

「酒が飲めないわけではない。恐らくはあの酒が強すぎたからだろう」

タクトからの言葉にコウサカは昨日飲んだウイスキーを思い出す。ティルコネイルでも付き合いで酒は飲むことはあったが、あの酒は別格過ぎた。

ちなみにウイスキーのアルコール度数は四十〜五十%、麦酒ビールのアルコール度数は五%程度であるから、どれだけ強い酒なのか分かると思う。しかも、それをストレートで一気飲みしたのである。付き合い程度でしか飲まないコウサカが酔払ったのも無理はない。

「まあ、オレもあんなの飲んだら倒れるっすね・・・」

「何故、俺に飲ませた。それなら」

「あ、いや〜・・・。出来心いたずらというか悪戯心いたずらというか・・・」

「何があつたかは覚えていないが、そのせいで自分の身に火の粉が降り掛かったそうだな」

「はい、深く反省しています・・・」

そう言つてタクトは食卓の上に頭を着いた。そのままぐでえ〜、と伸びた。

「おい、その馬鹿！ テーブル汚すんじゃないっ！」

カグヤが野菜と肉のスープの入った皿を両手に持って、キッチンから出てきた。薄い水色のエプロンに今はツインテールではなく、ポニーテールにしていた。料理の時、髪が入ってしまうっせいだろう。

「手伝おう」

「いいよ、座つてて。その馬鹿は手伝え！」

「へいへい……」

コウサカが立とうをするのを静止して皿を置くと、カグヤはタクトの頭を叩いた。タクトは嫌々立ち上がる。

「ふむ」

コウサカは椅子に掛け直す。カグヤとタクトは両手に皿やパンを持って戻って来て、テーブルには魚のムニエル、ポトフのようなスープ、サラダにオムレツなどが並べられていく。

「これを作ってくれるのが、カノジョだったら最高なのになあ……」

「

「文句あるならあんたの分は今度から作らない」

「はい、すみません……」

平伏するタクトを一瞥すると、カグヤ自身もエプロンを外して食卓に着く。タクトもそれに続く。カグヤとタクトは手を合わせる。

コウサカも同じようにする。

「いただきます」

「いったただきま〜す！」

「頂きます」

タクトは言うが早いか、ガツガツとものすごい勢いで食べ始めた。それにカグヤがもつと綺麗に食べるだの、ガミガミと。

「朔絆、剣の周りに置いておくから適当に食べる」

コウサカは立て掛けてあるクレイモアのすぐ近くに、傍らに置いたカバンの中から適当な雑貨類を置いてやる。

「バカあ……」

朔絆は小さく拗ねたような声を返した。コウサカはそれに少しだけ肩をすくめるとスプーンを取って、スープに差し入れる。抄すくったそれを口も含む。

「……」

「ん？」

そこでカグヤがこちらを凝視ぎょうししていることにコウサカは気付く。コウサカが顔を向けると、カグヤがどことなく緊張している表情を

浮かべていた。

「ど、どう・・・？」

「？ どう、とは？」

「・・・あ、味」

「ああ」

コウサカは野菜や肉と一緒にスープを口に含んで、咀嚼する。

「美味い」

「そ、そう・・・」

カグヤは安堵した表情を浮かべる。やはり、身内はともかく他人に食べさせる時は緊張するものか、とコウサカは思う。

「ほうえあ、ほうはははん（そういや、コウサカさん）」

口に食べ物を入れたままタクトが声をかける。カグヤに睨まれてすぐに水で流し込んだが。

「確か旅をしているって、言ってたつすよね？」

「ああ」

そういえば昨日酒場で話したな、とコウサカは首肯した。

「なんの旅つすか？」

「め・・・いや、俺はナユキの付き添いだ。行き先はナユキが知っている」

女神のことを言いそうになって、コウサカは口を嚙む。いくら正直馬鹿なコウサカとて、こんな話を二人にしても混乱を招くだけと理解している。

「今、言い直・・・」

「そ、そういえばっ！」

カグヤが何かに気付いて問おうとしたところ、タクトが遮った。何か興奮しながら。

「コウサカさんと、ナユキちゃんはどんな関係なんすか!？」

「ぶっ・・・!」

カグヤが食べ物を喉に詰まらせてむせた。

「言っただろう。付き添いだ」

「ただの、っすか？」

「？ どういう意味だ？」

「ああ、結構っす。その反応で分かったす」

「？」

コウサカは頭の上に？を浮かべながら、パンを噛み千切る。

「っ、つまり・・・ナユキちゃんはフリーってことっすか？」

何故だか、ゴクリとしながらタクトはコウサカに聞く。

「フリーとはなんだ？」

「誰とも恋人関係じゃない、ってことっす」

「俺の知る限りではないいな」

「よおっしゃ！」

何故か片手にパンを持ちながら、タクトはガッツポーズを取った。

「カグヤ。タクトはいつもこんな感じなのか？」

「ウザったくしてしょうがないけど、そう」

カグヤは不快そうにタクトを見る。ふと、カグヤが何かを思いつ

いたのかコウサカを見る。

「朔絆ちゃんとはどんな関係？」

「大事な相棒だ」

「ふうーん・・・」

カグヤはコップの水を一口飲む。そんな様子にタクトが何かを悟ったように捲まくし立てた。

「おっ、もしかしてカグヤ。コウサカさんに惚れたなあっ！」

「ほ、れ・・・？」

カグヤは目をパチクリさせながら、キョトンとして動きが止まった。

「・・・っ!？」

次の瞬間、カグヤの顔が真っ赤になった。カグヤは持っていたコップの中身をタクトにぶっつけた。

「し、死ねっ!！」

「？」

コウサカだけは状況がよく分かっておらず、何となくカグヤを見た。

「あ、う……ち、違っつ！　いまのはその馬鹿が勝手にっ……！」

「？」

ところが残念。コウサカは好きだとか惚れたとか、そういつたこととは何一つ分かっていないため首を捻った。それをどう受け取ったのか、カグヤは余計に慌てて席を立つと二階へ走っていった。

「？」

コウサカはしきりに首を捻っていた。顔をずぶ濡れにされたままタクトは冗談で言ったのに、大慌てしたカグヤを見て大笑いしていた。その後ろにはいつの間にか朔絆が完全実体化をして立っていた。そら恐ろしい顔で。

『あんた……』

肩に手を置かれたタクトは、さーつと血の気が引いて青くなった。

「朔絆、だからお前なんて顔を……」

朔絆の形相を見てコウサカが呆れた。

「こ、ここコウサカさーんっ……！」

情けない声をタクトが出すとコウサカは溜息を吐いて席を立つ。

「とりあえず、落ち着け」

コウサカは朔絆の頭に手を置くと、撫で始める。すると、朔絆の険がどんどん薄れていった。落ち着いたようだ。

『むうー……でも、こいつ』

「何のことは分からないが、そんな顔は止めておけ」

そこで朔絆がピクリと反応した。

『か、お……？』

「？　顔がどうかしたのか？」

コウサカが朔絆の顔を上から覗き込むように見ると。

『っ！……っ！……っ！……っ！……』

朔絆の顔が一瞬で真っ赤になった。

「今日はよく赤くなるが、もしや・・・精霊も風邪を引くのか？」
「ば、バカあーっ！」

朔絆はコウサカの腹部あたりを殴ると、消えた。

「罪な人っすね・・・ふ」

何かタクトがムカつく顔をしていた。コウサカは何のことか分からず首を捻っていたが。

「ちよつとカグヤ見に行つて来るっす」

そう言つて咀嚼していた物を飲み下すと、タクトは二階へ上がった。
ていった。

「・・・っ！・・・っ！！」

何か二階がうるさかった。

「・・・」

コウサカは自分が食べかけたオムレツを食べる。

そして、ふと思う。

「久しぶりだな・・・」

今までは領主の前だったり、顔も知らない大勢が食べる酒場だったり、聖堂だったり、大通りの露天だったり。親しい（？）顔見知り同士だけで賑やかにするは、ティルコネイルを出て以来初めてのことだった。

「ぎゃあああああっ！」

タクトが二階へ上がる階段から転げ落ちてきた。その後からカグヤが肩を怒らせて降りて来る。

「・・・」

本当に。

「・・・ふっ、はは」

たった数日であるが、本当に久しぶりにコウサカは小さく楽しんで笑った。

ちなみに。

「カグヤ様、お許しをっ・・・！」

「死ねっ！ 氏ねっ！ 知るかつ！」
勿論、タクトの夕食は抜きにされた。

第十一章 落ち着けた日常（後書き）

【お知らせとお詫び】

活動報告にも書かせて頂きましたが、プロットより書き上げてあるものはここまでとなりませす。

ここからは早くて一、二週間に、遅くて三、四週間に一度のペースで投稿を行なわせて頂きます。リアルのことと同時平行だとこんな速度になってしまいます。

お目を通して頂いている方々、申し訳ありません。

また、読んで頂けている方々に少しでも楽しい時間を過ごさせていることを祈ります。

第十二章 タクトとカグヤ

タクトが夕食抜きにされたその日の夜。

コウサカは酒場でいつものように夕食を食べていたが、朝鮮^{さき}は部屋に居る。何でも少し一人にしる、だとか。コウサカはそれに首を捻って、しかしまあいいかと置いてきた。そう言ったら睨^{にら}まれたが、「つか……。ったく、冗談^{じやんげん}がわかんないやつすよ……」

コウサカが食べている時にまたタクトがやって来ていた。いまは不貞腐^{ふてくさ}れて麦酒^{ビール}を搔^かつ喰^くらっている。

「……」

コウサカはコウサカでただ黙々と自分の料理を食べていた。一応、コウサカも付き合って麦酒を飲んでいる。ウイスキーで殺気と放つという暴走をしたコウサカだが、この程度のものなら何の問題もなく飲んでいた。

「まったく妹つてもんは……。コウサカさんの方はどうつすか？」

「俺に妹はいないが」

「あゝ、そうつすね。朝鮮^{さき}ちゃんは妹じゃないつすもんねえ……」

「

「？ ああ、相棒だからな」

それを聞いたタクトは白けたような表情になった。

「コウサカさんて、本当によくわかんないつすねえ……」

そう言いながらタクトはジョッキに口をつけるが、空になっていることに気付く。

「その可愛い子っ、おかわりっ！」

そう言っつてタクトは空になったジョッキを勢い良く掲げた。ちなみに、可愛い子とはカリンのことである。

「はいは〜いっ！」

こういふ客には慣れているのか、カリンは元気良く返す。すぐにジョッキの回収に来た。

「キミ可愛いねえ、なんて名前？」

「ん？ カリンだよ」

鼻の下を伸ばしながら聞くタクトに、しかしカリンは笑いながら答える。こういう客にも慣れてきているのだろう。

「今度一緒に……」

「イ・ヤ」

「けっ……いいつすよ、いいつすよ……。どうせ、オレは中の下っす……。う、う……。」

良い笑顔で断られたタクトは、卓の上につ伏して泣き始めた。

どうやら、タクトは酔うと泣き上戸じょうごになるらしい。大変面倒くさい。

カリンはそういうのにも慣れてきているのか一瞥いちべつしただけで、中の下は普通だと思いが、とタクトに言っているコウサカに視線を向けた。

「コウサカは？」

「見ての通りだ」

コウサカは一度食事の手を止め視線すら向けずに、まだ半分以上残っている麦酒を示す。

「……むう」

コウサカがカリンを見ずもせずに言ったのが気に障ったのか、カリンは不満そうに目を細めた。

「相変わらず、愛想あいそないなあ」

「ああ」

これまた、にべもなく認めるから面白みが無い。

「つままないの……」

カリンはタクトのジョッキを受け取ると来た時より幾分いくぶん、肩を落として厨房くわふに向かって行った。

「ひっく……。駄目っすよ、あんな言い方しちゃあ」

「なんのことだ？」

酒が回ったタクトは、若干赤い顔でコウサカに言う。泣くのに飽きたのか、すでに何事もなかったかのように料理を突っついている。「コウサカさんは女の子のことを全然わかってないっすねえ……」

ういつく。顔くらい見てあげないと」

「そういうものか？」

「そういうもんっす。・・・ひっく」

そんな時、カリンが戻ってきた。酔っ払いの言うことであるが、とりあえず信じてしまるのがコウサカが損な性分。

「はい、お待ちどー」

どん、と卓の上にジョッキを置く。少し零れるがそんなことは気にしない。タクトはそれを受け取ると、ぐびぐび勢いよく喉のどに流し込んだ。

「カリン、俺も頼む。すまない」

今度は真っ直ぐにカリンの目を見ながらコウサカは言う。何のこともないが珍しく（カリンとしては）コウサカが、ただの酒場の娘としてではなくカリンという個人にしっかりと言葉をかけてきたことに、カリンは少し目を見張ると少しだけ笑みを浮かべた。

「も、さっき言うてよ。二度手間じゃんかー」

「すまない」

コウサカが謝ると、笑いながらカリンはジョッキを取って再び厨房へと向かった。

「ふむ」

コウサカには何故カリンが少し嬉しそうにしていたのか、それはわからないがそれでもタクトの言う通りにやってみたら良い方向になったことに、コウサカはタクトに感心した。

「よく分からなかったが、なかなかに大したものだな」

「・・・」

見ると、タクトは酔い潰れて卓に伏せていた。しかし、ジョッキの中身と料理はしっかりと空になっていた。

時間にして二十時過ぎ頃。

コウサカはタクトに肩を貸して、いや一方的に引きずって家まで

運んでいた。カリンは、そんな客はよくいるから放っておきなよ、と言ったがそれでも送ろうとするコウサカは案外お人良しである。

この時間になると、すでに人通りは絶えていた。夜間巡回のハンター数人が時折ちらほらと見える程度である。巡回のハンターがコウサカを見掛けると、何をしているかと声をかけたがタクトを見ると、呆れたような苦笑を浮かべてコウサカの肩を叩いていた。タクトとカグヤはよく、人通りの多い大通りでも喧嘩をしているためダンバートンでも有名なのである。不名誉な意味だが、そんな中、コウサカはアリアンロードのある西区から、タクトとカグヤの家のある東区を目指して路地裏を歩いていた。ちなみに路地裏なのはアリアンロードから家までの近道である。昼間、タクトからコウサカは教えられた。

この時間に人がまったくいないのは農作業に従事する者は朝が早いから、単に遅くまで起きている理由がないからだけではない。

「おい、にいちゃん。ちよつと顔貸せや？」

夜陰に紛れるよう暗い色の服に身を包んだ柄の悪そうな男が数人、コウサカと酔っ払い一名の前に現れた。夜目が利くのかハンターに見つかる危険性を減らすためか、薄い月明かりしかないというのに男達は灯りの一つすら持つていなかった。

「何か用か？」

コウサカは何の緊張感もなく相手に尋ねる。普段の、完全武装した格好のコウサカだったら相手もまず声などかけないだろうが、今は鎧は下半身だけで、上半身は灰色のアンダーウェア、それにナイフの一本すら持つていなかった。宿の自室にまとめて置いてある。

「命が惜しけりや有り金すべて置いていきな」

「ああ、物取りか」

コウサカは見知らぬ男に呼び止められた理由が分かり納得した。その全く気にしていない態度と口調が癪に障ったのか、相手から敵意が溢れ出てきた。

「てめえ……、舐めてんじゃねえぞ!？」

口調こそ荒いがその声は控えられていた。巡回のハンターに気付
かねないためだろう。

「ロクでもないことなど止めておけ。この街でなら、まともな職に
も就けるだろう」

コウサカはタクトを壁にもたれかけさせながら言う。

「素直に金出す気はねえんだな？」

「ああ」

その言葉を聞くと男達はナイフを抜く。

「殺せ」

リーダー格らしい男の号令に周りに男達がコウサカに迫る。狭い
路地裏なの二人ずつしかコウサカの前には出られない。

「死つ……！」

コウサカは突き出されてきたナイフを、相手の手ごと掴むと軽く
捻る。その痛みひねに一人がナイフを取り落として、手を押さえた。

「てめえつ……！」

それを見た隣の男がコウサカにナイフを振りかざす。

「また、素人か……」

コウサカはそう言いながら、思い切り下ろされたナイフを相手の
手首を易々と掴んで無力化する。そして、右足で相手の腹に蹴りを入
れる。そして、手を押さえている男の顎あごを左の拳こぶしで打つ。蹴りを
入れられた男はその場で腹を押さえて声も出せないほど悶絶もんぜつし、顎
を打たれた男は気を失った。

「て、てめえつ……」

リーダー格の男が悔しげな表情を浮かべる。その時、男達の後ろ
側から声が響く。

「おい、そこで何をしている！」

「チツ、ハンターかつ……！」

残った三人の男は慌てて逃げようとする。しかし、前にはコウサ
カが後ろからはハンターが。逃げ場を失ったリーダー格の男は、数
人の武装したハンターより素手のコウサカの方が突破し易いと考え

たのか向かってきた。

「どけええええーっ……!!」

そう言いながら自らが先頭に、リーダー格の男が短剣をコウサカに振りかざす。

「素直に捕まって、更生しろ」

振りかざされた短剣の刀身に左手の甲を当て軌道をずらすと、相手の胸部に踏む込んだ重い一撃を右手で喰らわせる。

「がはあっ……!？」

リーダー格の男の身体が浮き、後方に二、三mほど飛んだ。それほど衝撃を受けたというのに、リーダー格の男は気を失わず苦痛を浮かべながらも、身体を起こした。

「く、そが、あっ……!」

リーダー格の男がやられたことに、残った二人はハンター達の来る反対側へ逃げて行って、簡単に捕まった。

「動くな!」

ランプに照らされた、ただ一人立っているコウサカを見て、ハンター達は警告の声を上げる。

「俺は被害者側だ」

「なにを……で、あ。あなたは」

よく見ると先ほどコウサカの肩を叩いていったハンター達だった。あんだ……一人でのしちまったのか？」

先頭のハンターがコウサカの周りに崩れ落ちている三人の男を見て、目を見張る。

「ああ」

壁にもたれ掛からせたタクトに肩を入れて起こしながら、コウサカはどうでも良さそうに言う。

「はー、すげえな。あんだ、名前は？」

「コウサカだ」

それを聞いた途端、ハンター達の動きがピタリと止まる。

「コウ、サカ……?」

な男達が現れた。ただ、今回は状況が違った。

男達の後ろから女のものと思われる声が聞こえた。

「・・・んぐっ・・・は、はなっ・・・むぐ、離せっ・・・！」

その声はよく聞き覚えのある声だった。現在の状況と、声から読み取れる感情をコウサカは一瞬で理解する。

コウサカの気配が一変する。殺気こそ発していないが、コウサカと相対する男達は見えない手に首を絞められたような錯覚と共に息苦しさを感ずる。

「・・・」

コウサカはそっ、と路地の壁にタクトを寄りかからせる。そして、ただ無言に、しかしその目には冷たい光を宿して立ち上がる。

「退け」

その声だけで男達はひどい寒気に襲われる。だが、やはり数に利があるせいか激しい敵意を向ける。

「ふざけっ・・・」

「そっか」

先頭にいた男は気付くことも出来ずにコウサカに殴られていた。だが、コウサカはこんな状況でも相手の一番頑丈な腹に打ち込んでいた。殴られた男は軽々と宙を飛び、壁に激突すると白目を剥いて気絶した。

「・・・次の者は殺す」

「ひっ・・・に、逃げろっ！！」

言葉と同時に、コウサカの纏（《と》）う気配に殺気が混じる。本能的に感じてはいけない度合いの恐怖を感じ取った男達は、奥の男達共々気絶した仲間を抱えて逃げ去った。殺気を消すと、コウサカは足を進める。

「・・・っ・・・うっ・・・」

カグヤが腕を交差させ肩を抱くようにして地面に座り込んで、目を伏せて声を殺して泣いていた。コウサカはその前に膝を着く。

「カグヤ」

「・・・っ！」

ビクリとしてカグヤが顔を上げる。暗いせいか、コウサカと認識し切れていないようだった。

「俺だ。コウサカ。まだ何もなかったようだな」

「こ、う・・・？　・・・っ！」

一瞬、カグヤが呆けたような表情になる。そして、コウサカに抱き着いた。

「・・・うあ・・・怖かった・・・怖かった・・・うう・・・うあ・・・つく・・・」

「・・・ふむ」

とりあえず、コウサカはカグヤの頭を優しく撫でた。カグヤが落ち着くまで何度も、何度も。コウサカは慰め方など分からないため、それ以外何も出来なかった。

「・・・うつく・・・うん、ありがと・・・」

そう言っただけでカグヤが離れた。今の今まで泣いていたというのに、その表情は穏やかなものだった。コウサカは手を退ける。

「あ・・・」

「？　どうかしたか？」

一転してカグヤは、残念そうな不安そうな表情を覗かせた。

「あ、えっと・・・その・・・やっぱり気のせいじゃなかったな、って・・・」

「？」

「その・・・」

チラリとコウサカを見て、カグヤは恥ずかしそうに目を逸らした。
「・・・撫でてもらうと、何かすごく安心するっていうか・・・守られているっていうか・・・」

「？」

コウサカは自分の手を見て、首を捻った。だが、まあいいかとカグヤに目を向けた。

「何故、こんな時間に、こんな所に一人でいた」

「・・・」

カグヤは目を逸らすと、黙り込んだ。コウサカは一息吐くと、思
い出したようにカグヤの頭をぼん、と一撫ですると立ち上がった。

「言いたくないと言わなくていい」

コウサカがタクトを回収しに行こうと、踵かかとを返すとカグヤがコウ
サカの手を握った。

「？」

「その・・・」

コウサカが半身を捻ひねってカグヤを見ると、言い難いづそうに頬を赤め
ていた。

「・・・腰抜けて立てない」

「・・・はあ？」

珍めづしくコウサカが素すつ頓狂とんきやうな感じの声を上げた。

「へ、変なとこ触ふつたら許さないんだから・・・」

「？」

「・・・はあ」

カグヤは言葉を向けた相手には、あまりにも無意味すぎることを
言ったため、自分に呆あはれて溜息ため息を吐いた。

「お、重くない・・・？」

「二人も抱えていれば、さすがに少しはな」

結局。

カグヤは腰を抜かして、タクトも酔い潰れたまま起きないため、
コウサカは二人を運ぶことになった。タクトは寝ているせいで背中
に背負うしかなくそれを片手で支え、カグヤはコウサカの首に手を
回してそれをコウサカが残った片手だけで支えながら歩いていた。

「あの、ね・・・」

カグヤが遠慮がちだが、口を開いた。そして、何の脈絡みやくわくもない話
を。

「あたし達、両親がもういないんだ……」

「……」

コウサカはただ黙って足を進める。

「お父さんはハンターの仕事で結構前に……、お母さんは元々病弱だったからあたしが小さい頃に……」

その光景を思い出してしまったのか、カグヤがコウサカの首に回した片腕を外して目元を拭った。

「あたし、泣いてばかりだった……。部屋に閉じこもってばかりで、お父さんとお母さんのこと呼んで泣いてた……。そんなあたしを見て、お兄ちゃんも泣きたいはずなのに、いつも強がって……。気にしてくれて……。でも、小さいあたしが寝付いた後、一人で部屋で泣いていた……。」

一旦、カグヤは言葉を切ってコウサカを見た。表情一つ変えずに、ただ歩みを進めるコウサカにカグヤは小さく微笑んだ。

「そのうち、ね……。あたし笑えるようになったんだ。お兄ちゃんがいつも笑わせようとして色々してくれて……。そしたらお兄ちゃん、あたしのことなのに大喜びして……。二人して笑ったなあ……。」

思い出したのか、カグヤは小さく声を出して笑った。懐かしそうに、嬉しそうに、幸せそうに……。

「だから、帰りの遅いタクトを心配して迎えに行った。というわけか」

「……うん」

気恥ずかしそうに、カグヤはコウサカに捕まりながら俯むくいた。

「……ふむ」

初めてカグヤの口から出た「お兄ちゃん」という言葉からも兄妹としてどれほど信頼しているのか、それも分かるうというもの。素直ではないが、良い兄妹だ。

そこでコウサカは気付く。自分が心中で言った言葉の異常さに。

（待て……「兄妹として」、だと……？ 記憶のない俺に何故

そんなことが分かる？ 俺は、兄妹というものが分からないと自分で言ったはずだ・・・)

何か、何かがコウサカの記憶の奥底で蠢く。兄弟、兄妹、兄、妹・・・。

妹・・・？

「っ・・・！？・・・が、あっ」

瞬間、コウサカは激しい頭痛に襲われ膝を着いた。それでもタクトとカグヤを落とさないのは、さすがと言っしかないだろう。

(城・・・?)

何かコウサカの頭を過ぎる。そして王座には・・・。

「・・・ウ・・・コウっ！」

カグヤの声で、はっとコウサカは我に返る。同時、頭痛も消え去る。

「・・・大丈夫だ」

息を吐くと、身体に力を込め人間二人を抱えながら軽々とコウサカは立ち上がる。ふと目を向けると、抱えているせいで自分の顔のすぐにはカグヤの顔があった。その顔は心配そうにしていた。

「ほんとに大丈夫・・・？」

「恐らく。頭痛も消え去った」

すでにコウサカの表情は、いつものものへと戻っていた。初めて見せた苦悶の表情が嘘だったように。ふと、何かを思いついたようにコウサカはカグヤに顔を向ける。

「カグヤ」

「な、なに・・・？」

顔が近いカグヤは視線を逸らす。コウサカは表情そのままに言う。

「兄妹喧嘩もほどほどにな」

「あ、え・・・わ、わかつてる」

何か良い事でも言うのかと思ったたら、どうでもいいことをコウサカが言うためカグヤは力が抜けた。
それから、カグヤはちよつとだけ声は出さずに笑った。

翌日。

「し、しぬ・・・頭が・・・割れる・・・」
タクトは二日酔いでゾンビのようになっていた。
「・・・はい」

そんなタクトの前に、頭痛薬とコップに入った水が差し出された。
カグヤである。

「お、おう。サンキュ」

タクトは頭痛も忘れ、目を白黒させながら受け取って飲む。

「ど、どうしたよ？ やけに気が利くけど」

「・・・何でもない」

ぷいっ、とカグヤはそっぽを向く。

「熱でもあんのか？ あ、もしかして明日は大雨か？」

背中を向けたカグヤがピクリと反応した。

「お前が優しいなんて、何か怖いぞ。おい」

しだいに、カグヤの肩がふるふると震えてきた。

「・・・無理」

「・・・？」

タクトが首を傾げる。そして、カグヤが振り向く。その表情は。

「だあああああっ！ 無理っ！ やっぱり無理っ！！ せつかく優しくしてあげてんに、なにその態度っ！？」

「え、ちよ」

「あんだなんか、そのままぶっ倒れて死ねっ！」

「ちよ、何なんだよっ！？ いきなり気味悪いなほど優しいと思ったら、急にキレやがってっ！？」

「気味悪い、だつてえ・・・！！？ 言うに・・・言うに事欠いて・

「もつ、しねえええええつ!!」

「ちよ、頭止めてっ!?! 二日酔いで・・・」

「知るかああああああっ!!」

「ぎゃああああああっ!!」

案外、カグヤの表情は本気で怒っていなかった。コウサカに聞いてもらい、言ってもらったことにより前よりもずつと日常が心地良さそうだった。

攻撃はすべて本気だが。主に頭痛で痛む頭部狙いで。

朔絳がベッドの上で大の字で寝ているのを眺めながら、コウサカはいつものように壁に背を預けながら考えていた。

(記憶の無い俺が、無意識に言葉にした「妹」という単語・・・。
俺には妹という存在がいたのか?)

不思議と、そのことを思い出してもコウサカを頭痛が襲うことはなかった。

(そして、城の情景・・・。俺の身体能力から察するに・・・騎士でもやっていた? そして、王座・・・王に直々に目通りが利くほどの階級だった・・・?)

ふと、ハンター達と共にダンバートン北東から北西にかけて展開している騎士団を思い出す。

「騎士団長・・・」

呟いて、コウサカは目を細める。何か違和感を感じる。

(いや、これは違うか。「妹」についてはティルコネイルにも兄弟や兄妹の者達はいた。何故、今になって兄妹に反応する? カグヤなような子も特に珍しいというわけでもない・・・)

コウサカは自分の顎に手をやる。酒場でカグヤの肩を持ったのは、この記憶が奥底にあったせいかもしれない。

「ふん・・・」

まあいいか、とコウサカは小さく息を吐く。所詮、しよせんどうでもいい

ことだ。

(何かが起こるかもしれないな・・・)

それはただの予感である。ただ、コウサカの予感は悪い意味だけで良く当たる。しかも、どこかの誰かではなく確実に自分に近い者がそれに連なる者、関わった者に降り掛かるのである。

「・・・反吐へどが出る」

そうコウサカは、顔を苦々しげに歪めながら低く吐き捨てる。降り掛かるなら自分の身に掛かれというものだ。

「・・・ふうう」

コウサカは一度目を伏せると、深く息を吐き出した。そして、チラリと気持ち良さそうに寝ている朔絆を見る。

「・・・まあいいか」

そう呟くと、コウサカは装備を付け、朔絆だけを持たずに部屋を後にした。

第十三章 されど世界は進みゆく

「朔絆^{shokkan}、起きろ。出るから剣に戻ってくれ」

「ん、んんん……ふあ。わかつたあ……」

半分寝ぼけている朔絆が、ふらふらしながら姿を消す。

結局。

黙って置いて行くと朔絆が烈火^{れつか}の如く怒^{こど}ると考え直して、コウサカは一度部屋に戻って朔絆を起こしていた。

「おやふみい……」

まだ朝六時前と早いせいか、朔絆は剣の中でまた眠ってしまった。
「……」

コウサカはただ黙って宿屋を後にした。

(また嫌な予感がする……)

アリアンロッドを出て、中央区を歩いていたコウサカは何度目になるか分からない予感を感じる。

(何だこれは)

コウサカは軽く頭を振る。必ず何か「ただ何となく」分かる。それを予感する能力がコウサカ自身のものなのか、それとも別の何かの介入によって知らされるのかはわからない。だが、コウサカが動かなければ確実に誰かが死ぬ。少なくともコウサカの知り合いの誰かが。

それはまるで、ぶっきらぼうだが優しいコウサカの心を見透かしているかのように、ただ悲劇を知らせる。ただ殺戮^{さつりく}を知らせる。ただ誰かが泣くことを知らせる。

だからコウサカは動く。それが何なのか探ろうともせずただ動こうとする。間違いで、徒勞^{じゆらう}であればそれでいいと。

「え……な、なぜですか？」

「伝えましたから」

それだけ言つてコウサカは踵かかとを返して、出て行ってしまった。

「……」

官庁一階の受付の席に座りながら、エヴァンはただコウサカの背を見送つた。呆然ぼうぜんとしながらも、その背に感じ入るものがあった。それは彼女にとって懐かしく、辛い記憶。

「……さん」

それは擦かすれて、ほとんど眩くらきにすらなっていない声だった。

「……」

いつも感情を表情に出さないでいるエヴァンの瞳に、強い意思が宿る。それはコウサカが「ある人」に投影されていたのか、それとも別の何かのせいなのかは分からない。

エヴァンは領主バルドラスの下へと伝えに席を立つ。本当に珍しく血相けっそうを変えたエヴァンに同僚達に驚きの視線を送られても気にはしない。

ラビダンジョンから、魔族の侵攻があるかもしれないということ伝えるために。

ラビダンジョン最奥部にあるサキュバス達の「家」。

その更に奥に「道」が存在する。それは呪術的に、魔術的に魔符で封印してある。元々サキュバスの一族は呪術・魔術に長け、内在するマナ量（魔力）も並外れていて多く、また生まれたその瞬間から魔法を扱うことが出来るほど魔法に特化した種族である。

そのサキュバスの施した封印となれば、「普通」は破ることを諦める。またサキュバス一族だけが分かる魔術文字も用いられているため、まずそれを知らないと解読すらできないのである。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん？」

「あ、あら・・・何かしら？」

腕を組み、足を組みながらソファに座りどこか、ぼーっとした表情をしていたミレイナはエレナの声で我に返る。弾かれたように顔を向けたせいで、絹糸のような腰に届くほどの金色のロングストレートの髪が金と銀のオッドアイの目にかかって顔をしかめた。

「まさか、・・・あの変な人間のこと考えた？」

「えっ！？ ま、まさかっ。そんなわけないわよ、うふふふ」

その分かり易すぎる様子に、エレナはひとつ嘆息たんそくすると、ミレイナの対面に座った。

「あんなのどこがいいのさ・・・」

「だ、だから私は・・・」

「バレバレだから隠しても無駄。お姉ちゃん」

そう言われてミレイナは顔を赤らめた。そんなに？ と言ったような顔である。

「え、えっと・・・い、言わなきゃ、だめ・・・？」

「駄目」

はつきり言われてミレイナは肩を落とした。そして、観念かんねんしたように顔を上げた。

「はあ・・・分かったわよ。え、っと・・・何て言うのかしらね」

ミレイナは難しそうな表情を浮かべた。

「あの人なら、本当に守ってくれそうだから・・・」

その言葉にエレナは、はっとしたような表情を浮かべる。

「お姉ちゃんも、あの時のこと、まだ・・・」

「・・・うん」

ミレイナが悲しげな笑みを浮かべた。

「きつと・・・そう、きつと・・・。あの人なら、ただいつも隣に居て守ってくれて、ただ何食わない顔で帰ってきてくれそうだから・・・」

「お姉ちゃん・・・」

エレナが苦しげな顔をする。それを見て、ミレイナは優しく微笑

んだ。

「・・・でも。こうして妹達と、ただ退屈な日常を送れるなら、十分幸せかしらね・・・」

ミレイナはどこか儂はかなげな笑みを見せる。

「こんな時間がずっと続けばいいわね・・・。それに・・・」

「それに・・・？」

「ううん。何でも・・・」

ミレイナはエレナに、寂しげな笑みを向けた。エレナはそれがどんな意味を持つているのか分からなかったが、ただ切実な想いがこみ上げて来て自分の胸を押さえた。

そこで、次女のネルが慌てた様子で部屋に駆け込んできた。

姉妹の中で一番背が高く、剣の扱いが上手い子だった。そして、どこか意地っ張り。ふと、ミレイナの中でそんな言葉が浮かんだ。

「どうしたのかしら・・・？」

「封印が・・・、「道」の封印が何か変なんだっ！」

その言葉でミレイナとエレナの顔色が変わる。ひどく危機感を抱いたそんな顔。

「なんですってっ・・・！？ そんなことあるはずが・・・」

「でも、何か変なんだってっ・・・！ ああ、もっっ！ とにかく来てくれっ！！」

「わ、わかつたわ」

どこか嫌な予感を覚えながら、ミレイナとエレナは立ち上がった。

ミレイナ、ネル、エレナ。それに、三女リリ、四女アルも血相を変えた三人を見て、一緒に出てきていた。

ラビダンジョン最奥部、そこに「道」と呼ばれる高さ4mほどの門が存在する。それは女神がダンジョンに隠した、エリンと魔族の世界を繋ぐ異界の門である。ただ、ラビダンジョンの門はサキユバス達が使われている魔術形式を変えてしまったため、もはや門とは

呼べないものではあるが。

しかし。

「な、何なのこれ・・・」

その門から、闇色の電光が迸ほとばっていた。

それは徐々に、封印に使われているサキユバス達を作り出した強力な魔符を焼いていく。

「そんなっ・・・あの魔符にはどれだけの魔力が込められて・・・っ！」

ミレイナは気付く。だが、それは違う。気付きたくなかっただけであつた。

「隊長っ！」

「ここに」

ミレイナの叫びに、鎧を身に纏まとったメタルスケルトン、メタルスケルトンアーマーが十体、姿を現す。

このスケルトンは死体の骨を操っているわけではなく、「本物の」スケルトンである。個々に意思を持ち、古くからのミレイナ達の家令れいである。この世界へ逃げて来てからも護衛として在る。

ちなみに、コウサカの時に出てこなかったのは、ただ単に転移魔法が使えないことと、すでにコウサカに敵意がなかったこと、それに一番古参の隊長はコウサカとの格が違いすぎることを本能的に察し下手に刺激しないようにするためである。

隊長が進み出る。

「お嬢様、兵達を出してください」

隊長が一切の油断を感じさせない声色で言う。スケルトンに発声器官など当然無いが、マナの操作により発声を補っている。

「・・・ええ、わかつたわ。みんな」

それに4人とも頷き、手を前に出し意識を集中させ始める。全員の身体を淡い青い光が包み始める。

「・・・Dilynwh fi(我に従つ)・・・Was(しもべ)・・・Ffyddion(忠実な)・・・Was(しもべ)・・・」

・ Y m d d a n g o s i a d (出でよ)っ・・・ D i o g e l u
f i (我を守護せよ)っ・・・!

呪文を唱え終わると同時、巨大な魔法陣が「家」を中心に現れそこから光が溢れ出す。そして、その中から五十を軽く超すほどのメタルスケルトンが現れ、メタルスケルトンアーマー達の前に整然と整列する。

このスケルトン達はただの元死体であるが、メタルスケルトンアーマー達の動きがフィードバックされており、またメタルスケルトンアーマー達の命令にも従うように魔法が込められている。

「みんな、いつでも戦える準備を」

ミレイナ自身、凄まじい量のマナを全身から迸ほととせながら言う。

「・・・わかった」

エレナもマナを両手に集め、いつでも魔法を放てるように意識を集中させる。ネルは女性でも扱いやすいショートソードを片手にもう片方にはアイスボルトを発現させ、リリとアルはスケルトン達の前でマジックシールドをいつでも展開できるように手を前に。

バリバリ、という音と共に最後の魔符が燃え尽きる。そして、ゆつくりと「道」である門が開き始める。

そして、そこから現れたのは、人影。

「やはり、あなたね・・・」

現れたのは、魔族の紋章が描かれた赤黒いローブに身を包み、深く被ったフードで顔を隠した男。

「久しぶりだなあ・・・小娘。今度は逃さん」

テイルコネイルを襲った男と、同じ男。それはニタリと下卑げびたる笑みを浮かべる。

「・・・ディーファ」

ディーファ (D i f f a)。ウェールズ語で、「破壊」を意味する言葉を名にする男。主に、魔族の実動部隊は率いず、暗殺や破壊活動、誘拐など単身で動く。子供すら笑って殺すほどの男である。

魔族の世界に居た頃のサキュバス達をポウオールで使えるからと、

その目は、生き物を狩ることが何よりも愉しいという狂った目。

「その金髪を残して他は殺せ」

ディーファの言葉と同時に、門からゴーストアーマー達が続々と出てくる。ただ、それは一切の生気を感じさせない、本当に動くだけの動力として魂だけが宿った操り人形だった。

「放てえっ！」

メタルスケルトンアーマーの隊長の号令が響き、五十以上のスケルトン達は一斉に矢を放つ。

だが、ディーファはマジックシールドをして軽々と防ぎ、ゴーストアーマー達には元々生身など無いためほとんど効果がなかった。空しく、赤錆びた鎧にいくつかの穴を開けただけだった。

「お嬢様。時間は稼ぎますので、お逃げください」

隊長自らも、剣を構えながらミレイナ達に言う。

ディーファが出てきた以上、勝ち目はないことを察したのである。ミレイナ達よりも強大な力を誇った、その両親ですら敵わなかった男ゆえに。

「……ごめんなさい」

「なに。我等は元よりそのために旦那様より今一度、生きることを赦された者。生き恥を晒して来た我が身が、ようやく背負わされた使命を果たせる時。お気になさいますな」

ミレイナが謝ると、隊長は静かに闘気を膨れ上がらせながら言う。「だめっ……！ ミハエル、一緒にっ……！！！」

隊長、ミハエルの覚悟を聞きエレナが怒りからではなく、恐らく永遠の別れとなることを察し、顔を青くした。

駆け寄ろうとするエレナを、ミレイナただ黙っては抱いたまま止める。

「イヤっ……！ いやだっ……やだよっ！ もうお別れだよっ……！！」

「エレナ様……」

エレナの懇願に、ミハエルの気配が優しげなものに変わった。す

でにゴーストアーマーとメタルスケルトンが斬り合っている中で。

「我等は生前、戦場にて数多の命を殺戮してきた罪人。そんな我等が一期でも、お嬢様達のお世話役として平穩を与えられた。これ以上の幸せはありません」

最後に、ミハエルは優しげに言う。

「どうかご無事で」

「やだっ……離してっ……！ ミハエルっ……！」

「……行きなさい」

ミレイナがそう言うと、ネリを先頭にリリとアルがエレナを抱えて地上へと向かう通路に向かった。

「やだっ……やだっ……！！ いやだあああああああああ
っ……！！！」

剣と剣、剣と鎧がぶつかり合う金属音の中で、エレナの声はよく響き、そして遠ざかって行った。

「お嬢様、あの青年の下へ。彼なら、魔族であるお嬢様達を匿ってくれるでしょう」

一人残ったミレイナに、ミハエルは言う。

「あなたは話したことはないでしょう……？」

「はい。ですが、見て、聞いてはありました。またその身に纏う気配も……」

ミハエルは思い出して、身震いをした。

「彼は……例えるなれば我等がお仕えしていた「王」に似た雰囲気纏っておりました。また、あの言動も全て心よりでしょう」

それは生前、数千の部下を率いた騎士団長の言葉。ゆえに、人の本心を見抜く能力も並外れている。

「彼の元へ。我等はそのための礎となりましょうぞっ！」

ミハエルは、前列を抜いてきた一体のゴーストアーマーを、鎧ごと手に持った刃渡り百四十cmほどのトウハンドソードで易々と切り裂いた。

「……出来ることなら、生き残ってね。武運を祈るわ」

「姉さんっ、早くっ……！」

ネルの切迫した叫び声がミレイナの耳へと届く。

「……また、会いましょう」

寂しげな笑みを浮かべながら、ミレイナはそう言った。別れの言葉ではなく、再会のための言葉を。

「御意」

ミハエルのその言葉を聞くと、ミレイナは一度も振り向かずニエル達の下へと走って行った。そこには泣きじゃくって暴れるエレナの姿が見えた。

「ふん、つまらん。三文芝居でももつとマシだろっ」

ディーファは、エレナの涙を、ミハエル達の覚悟すら嘲弄する。

「では、お相手願おうか。死に損ない共」

「外道風情と話す口など持たん」

改めてミハエルは剣を構え直して、魂だけの人形と化したゴーストアーマー達の後ろにいる男を殺すために、感覚を研ぎ澄ませた。

官庁、領主執務室。

「はぁ？ なんだそりゃ。落ち着けてエヴァンちゃん」

「落ち着いています」

言葉とは裏腹に、その目は必死だった。バルドラスは、珍しく感情をあらわにしているエヴァンに困惑していた。

「つまり……何だ？ 坊主から聞いたから伝えに来たのはわかった」

「ですから、すぐに部隊を」

「待った、待った……」

バルドラスは困ったようにこめかみに手をやる。そこで、ふと思に至る。

「もしかして……昔のあれかい？」

「……」

ピタリとエヴァンの動きが止まった。それにバルドラスは嘆息した。

「あの坊主なら問題ねえって。知ってんだろ？ あの坊主の噂。それだけの実力は持つてんよ」

「・・・はい」

もう一度、バルドラスは嘆息する。そして、確かに似ていると思う。お人好しで、優しかったエヴァンの父親に。

一度、バルドラスは目を伏せる。そして、大きく溜息を吐いた。

「はああ・・・。エヴァンちゃん、ガルドーをエントランスに呼んどいてくれ」

「で、ではっ」

「ああ。ただし、そんなに数は出せねえからな」

「ありがとうございますっ！」

その頭を下げながら見せたエヴァンの笑顔は、とても魅惑的で可愛らしかった。

「どういたしまして、だ」

バルドラスは顔を背けて、禿頭の頭を掻いた。

思わずイチコロになりそうな笑顔に、まあこんな笑顔見れんなら安いもんか、と思いつつながら。

「くっそっ・・・！ こいつら一体どこからっ!？」

ネルは目の前のゴーストアーマーにアイスボルトを喰らわせ倒すと、魂の宿っている胸部を思い切り剣で串刺しにした。

「たぶん、私達が使っていた転送陣が見つかったからでしょうね・・・。何故、使えるかはわからないけど」

ミレイナは、心中ではそれが意味することを悟って、しかしあえて気付かない振りをして、沈痛な面持ちを浮かべながらファイアーボルトをゴーストアーマーに放ち、粉々にする。

ただ、何故かミレイナ達は使えなかった。自分達の作ったモノの

はずが。恐らくはデューファの仕業だろう、とミレイナは必死ながらも考えていた。

「・・・みはえる・・・みはえ、るう・・・うっ・・・うう・・・」
エレナは泣きっぱなしだった。

思えば、エレナにとってミハエル達は親代わりだった。デューファの襲撃で失ってしまった、大切な両親に代わってよくお世話役として相手をしていた。

「エレちゃん・・・」

リリはマジックシールドを展開させ、周りのゴーストアーマーからの斬撃を止める。

「あたし達の分は、エレナが泣いてくれる・・・。はっ！」

アルは五つの鋭く尖ったアイスボルトをゴーストアーマー達に浴びせ、串刺しにしていく。

「しぶといな。くく、そうでなくてはな」

気付くと、後ろ側の通路からデューファが悠々と歩いてきていた。デューファが軽く腕を上げると、ゴーストアーマー達の動きが止まる。

「あの死に損ない共のせいで、無駄な時間を食ってしまった。まさか、たった六十程度で四百もやられるとは思ってもいなかったぞ。前もそうだったが、護衛は優秀だな」

ダンジョンの中は狭い。ゆえに、展開できる数も限度がある。一度に戦える数に限りがあるなら、少数でもその者の腕によって、有利不利は逆転する。

だが、ゴーストアーマーは魂が込められただけの人形。換えなどいくらでもある。

「くくく、あの死に損ない共に敬意を称し、もう一度だけチャンスをやろう。捕まれば他の奴等も命だけは助けてやろう」

そんなことはどうせ嘘だと言っるのは、全員考えるまでもなく理解した。

だから。

「リリ、アル」

ネルは剣を収めながら言う。

「そう、ね……。それがいいと思う」

リリは寂しげな表情を覗かせながら言う。

「ごめんね、ミレ姉」

ネルとリリ、アルはゆっくりとミレイナとエレナを振り返る。デ
イーファは何かの余興かと、傲然と腕を組んで待っている。

「おねえ、ちゃん……？」

「まさかっ……！」

ネル、リリ、アルの全身から凄まじい量のマナが溢れ出し、エレ
ナとミレイナを包む。それはどう考えても、それぞれが持つマナ量
を遥かに超えているものだった。

「っ！？ 貴様ら、何をっ……！」

異変に気付いたデイーファが、慌てて何かをしようとするが遅か
った。

「待つ」

ミレイナが、三人が何をしようとしているか理解して叫ぼうとす
る。だが、それも遅い。三人は寂しげな笑みを浮かべて、最後に一
言口にする。

「……Pontio（転移）……」

そして、ミレイナとエレナの姿は消える。それと同時に、三人から
溢れ出るマナはさらに増大した。やはり、絶対に足りないほどのマ
ナ量だった。それは混ざり合い、激しく電光を迸らせる。

三人は光の中からデイーファを睨む。

「……絶対に赦さない」

「きさっ」

そして、大爆発が起こった。狭い通路ゆえに、青い爆炎は凄まじ
い勢いでダンジョンの中を、後続のゴーストアーマーを消し去りな

がら奔^{はし}つて行く。

三人がマナを補うために使っていたモノは、自分の命だった。

地面が揺れた。地震のように定期的な揺れではなく、一瞬だけでも大きく。そして、強い魔力の気配が感じられる。

『ねえ……』

「恐らくな」

コウサカがそう答えると、朔絆は黙り込んだ。心なしか背中の中から漏^もれる光も小さくなつた。

マナ、魔力とは人、魔族すべてが生まれてより内在している力のことである。扱^{あつか}いには、例えば無意識的に動かしている手足を意識的に動かすように、まず無意識の中で使っている意識を認識することから始まる。しかし、扱^{あつか}いこなせれば万能足り得る力である。

そして、マナは「命」とも言える。すべて使い果たせば動けなくなることもあり、最悪体内の魔力喪失^{そくしつ}でショック死する場合もある。そんな力であるが、すべてを自由自在に操ることが出来れば、自らの「命」すら力として変換が可能である。そして、それを暴走させれば……。

そこで、コウサカは疾走^{しつそう}しながら気付く。

(何故、俺にわかる?)

大地の揺れをその身に感じながら、コウサカは不自然に感覚が冴^さえ渡^{わた}っていくことを感じる。

(……そうか。だが、今は好都合だ)

コウサカは鋭く目を細める。

「今度こそ……」

『コウ、サカ……?』

そのコウサカの発した声色に、朔絆は背筋が冷たくなることを感じた。それは恐怖ではなく、自分の知らないコウサカを感じたゆえに。

「行くぞ。朔絆」

『……うんっ……!』

だが、朔絆はただ信じる。

再びこの世界に生まれ出でた自分が唯一、心から信頼するただ一人の……だから。

爆音にダンジョン全体が揺れ、女神像の安置されているダンジョンの入り口にもそれは激しく届いた。

「ネル、リリ、アル……」

ミレイナは泣きじゃくるエレナの肩に手を置きながら、胸の上に手を当てせめて三人が安らかに眠れることを祈る。

ただ移動させるだけなら、三人が命を掛ける必要などない。だが、ここは女神が魔族を封印したダンジョンである。魔族であるミレイナとエレナが外に出るためには、その封印を破壊せねばならない。

そこで、三人が命まで燃やして捻り出した、驚異的な量のマナの暴走である。封印が破壊された証拠に、いつも泰然自若とある女神像は無残に砕けて、破片が地面に散らばっていた。

「……おねえ、ちゃあん……ネリ姉達が……ミハエルも……
……いな……いなっ……うっく……」

エレナは、ミレイナにしがみ付いて泣き続ける。ただ悲しみを吐き続ける。

「……」

そつと、ミレイナはエレナを抱き締めようとする。
そつと。

「チッ、コマのほとんどを道連れにしゃがって……。さすがに少し焦ったな」

ローブに焦げ目を残したディーファが、無慈悲に奥の通路から歩いて来ていた。

「ひっ……!?!?」

エレナはディーファを見た途端、ペタリと尻餅しつぺちを着いて立ち上がれなくなった。大事な、大切なモノを全て奪い去っていくディーファに対して、憎しみよりも恐怖が勝ってしまったようだ。

「エレナっ……?! くっ……」

ミレイナはエレナを背に隠すように立ち上がる。その目には明らかに勝ち目はないが、それでも反抗しようとする意思があった。

「くくくっ……、いいぞ。その方が狩り甲斐かいもあると」

そこで、ディーファの言葉が止まる。

ミレイナとエレナの後ろを凝視して固まったディーファは、久しく感じていなかった感覚に総毛そつげだった。今ダンジョンに入ってきた男を見て。

それは、生命の危機から発せられる正しく本当の「恐怖」だった。

ラビダンジョンに到着したコウサカは、ミレイナとエレナ、それに見覚えのある男を見て頭の中が完全に切り替わったことを感じる。その目的は、ただひとつ。

殺さねば。

「なっ!?! き、貴様はっ……!!」

男が何か言うが、コウサカには何の意味も成さない。

コウサカの全身から凄まじい勢いで殺気が吹き出し、それと同じくして人間が持ち得るはずがない量のマナが迸はちる。

「ひっ……!」

男が顔を引きつらせる。それは無理もない。

「……殺す」

本来、不可視であるはずの殺気が、迸り、立ち上のぼるマナに混じり合うことのできたのである。

それはゆらゆらと、まるで炎のようにコウサカの全身から立ち上っていた。それは意思でも持っているかのようにディーファだけに向き、じわりじわりとその足元に伸びていく。

ゆつくりと、コウサカは腰のバスタードソードを引き抜く。その刀身にすら、殺気の混じったマナがじわじわと宿っていく。

「あ……あ……」

異常な殺気に完全に吞まれまともに声すら出せなく、そして動けなくなったディーファに向け、コウサカはゆつくりと剣を握った手を上げていく。

その顔は。

「死ね」

到底、人とは呼べなかった。もはや、コウサカという人間の片鱗へんりんすら残っておらず。

それは人というよりは、まるで……。

「ダメっ!!!」

突然、朔絆が完全実体化をして、コウサカに正面から抱き付いた。コウサカの動きも止まる。

「で、Dychweilyd（帰還）っ！」

動きが止まると同時、殺気も霧散し呪縛から脱したディーファは、すぐに脱出の魔法を唱え姿を消した。

「ダメっ……！ダメ、だよっ……そんな顔……ダ……メ……」

・だか、らっ……」

「朔絆……」

我に返ったコウサカは、剣を手放すとゆつくりと朔絆を見下ろす。『いつも、みたいにつ……いつもみたいにつ……！いつもみたいにバカでいてよ……。そっちにいつちやダメ……ダメえっ……!!』

そっち、とはどんなことなのかコウサカには分からない。ただ、失っているはず記憶の何かが反応して、何となく理解する。

「俺はここにいる。もう二度と無いから安心しろ」

泣きながら止めてくれた朔絆を、コウサカはしゃがみそっと抱き

締めてやる。普段ならまずやらないことであるが、ただ何となく、コウサカはそうしてやった方がいいような気がしたのである。

『うん・・・うん・・・だいじょうぶ、だから・・・』

朔絆は心底安堵したような顔で、ただ泣きながら何度も何度も頷いた。

「・・・」

啞然とするミレイナとエレナを気にせず、コウサカは目を鋭くする。

（今の感覚・・・やはり、そうか。だが、「覚えた」・・・もう二度とやらせん）

ナユキもそうであるがやはり自分もそうだったか、とコウサカは考え至る。

『・・・コウ、サカ・・・』

泣きながら腕の中にいる朔絆の頭を優しく撫でながら、コウサカは虚空を睨む。

そして、思った。

（女神・・・やはり、敵なのかもしれないな）

第十四章 護るという意思

場所はアリアンロッドのコウサカの自室前。

「食事は？」

「いえ・・・大丈夫です。私達サキュバスは、大気中のエルグやマナを取り込んで身体機能のエネルギー源を補っていますから。ですけど、ここは「家」の場所よりも魔力濃度が低いですから・・・」

その分腹は空く、というわけかとコウサカは受け取る。

「わかった。その時は言ってくれ」

「ごめんなさい・・・。ご迷惑かけて」

ミレイナは申し訳無さそうに、コウサカから目を逸らすと下を向いた。

「万が一の時は。そう言ったのは俺だ。気にしなくて良い」

「は、はい・・・あの」

視線を戻したミレイナは、言い辛そうにしながら顔を赤らめた。

「お、おやすみなさい」

「ああ。見張りはしておく。安心しろ」

「・・・はい」

ミレイナは安心したのか少し微笑んだかと思うと、静かに扉を閉めた。

「さて」

コウサカはその扉の対面の壁に、灰色のアンダーウェアに、下半身の鎧のみという身軽な格好のまま背を預けながら座る。

その傍らにはカイトシールド、胡坐あぐらをかいた足の上にはバスタードソードが置いてある。

ふとコウサカは、ミレイナとエレナのいる隣の部屋、ナユキの部屋を見る。

「・・・問題を起こさないといいが」

ナユキの部屋に相部屋させた朔^ひ絆のことを考えて、コウサカは少し不安を覚える。

「まあいいか」

そうさつさと考えを放棄して、コウサカは感覚を研ぎ澄ませる。ネズミの走る音すら感じ取れるほどに。

そして。

(・・・二度と、俺の中へ侵入させん)

その目は、断固として、鉄壁なまでの光を湛^たえていた。

ミレイナ、それにエレナが何故、アリアンロッドにいるかと言うと、時は戻る。

ラビダンジョンで朔絆が安心して剣の中に戻り、コウサカが立ち上がった頃。

「あ、あなたは・・・なんで・・・」

ミレイナが、信じられないという表情を浮かべながら、コウサカを見た。エレナはミレイナに抱きついていていた。

「すまない。間に合わなかった」

コウサカは、ダンジョンへ潜っていく方の通路を警戒しながら、振り返らずに詫^わびる。

「そんな、あ、えっと・・・」

そんなことはない。

そう言おうとして、ミレイナは言葉を途切らせる。確かにコウサカが間に合っ^あてていれば、ネリ達も、ミハエル達も助かったであろうから。

「何で・・・、何で来なかったっ・・・!!」

ミレイナに抱き付いていたエレナが、唐^と突^つに顔を上げたかと思うと、コウサカをキツと睨^にみ付けながら、そう言い放った。

「すまない」

だが、それが八つ当たりでしかないと分かっている、コウサカ

は詫びる。

「・・・おねえちゃん・・・みはえるう・・・」

しかし、エレナはすぐに顔をくしゃっと崩れさすと、またミレイナの胸に顔を埋もれさせて泣き始めた。

「すまない」

やはり、振り返らず警戒しながら、コウサカは詫びる。

「いえ、気にしないで・・・ください・・・。あなたが来てくれなかつたら、私達も・・・」

ミレイナは静かに目を伏せる。

そして、ふと思い出す。先ほどのコウサカを。ディーファすらも恐れ慄か^{その}せた、異常なまでの存在感を。

「あなたは、一体・・・」

その時、外からガシャガシャと、金属が擦れ合う音が響いてくる。

「っ・・・!」

そして、ぬつと現れた相手に、ミレイナは声にならない悲鳴を上げた。

二mを超えるほどの身体を黒い鎧で身を包み、^{かぶと}冑のひさしの間から見える瞳は爛爛^{らんらん}と光っていた。

その目が、ミレイナとエレナを向く。しかし、驚いたように少し見開いた。

「おい、坊主。こりゃあ、どういうことだ?」

その声に、コウサカはようやく振り返る。そして、兜を脱いで脇に抱える。その顔は、いつも通り冷静そのものだった。

「保護したサキュバス達です」

「んなこたあ、見りゃ分かる。保護たあ、どういうこった? 魔族の侵攻だの何だのってのは、どうなった?」

黒い鎧の男、バルドラスは呆れたようにコウサカに言う。

「それなら、もう心配はないでしょう。それより、領主様。お願いしたいことがあります」

「はあ? まあ、いいがよ。何だ?」

「その二人の保護を認めて頂きたい。また、ダンバートンへ入ることを許可して頂きたい」

その言葉に、バルドラスの目の色が変わる。

「てめえ……、意味分かって言ってるのか？」

コウサカは黙って頷く。

「ふざけんじゃねえぞ。魔族を街に入れろだど？」

だが、とバルドラスは一旦、言葉を切る。

「理由を聞かせてみる。てめえのことだ。操られているとか、そんな才ちはねえだろ」

しかし、バルドラスは油断無く腰を低くした。そして、全身から威圧するような気配を発する。

「……」

チラリと、コウサカはミレイナとエレナを見る。そして、今からする話は二人には辛いだろうと思う。

「領主様、申し訳ないですが外でお話願いたい」

「はぁ……？」

コウサカは、ミレイナに近づくとその肩に軽く手を置く。

「少し、待っている」

「……はい」

小さく、しかし強くミレイナはエレナを抱き締めながら頷く。

それを確認すると、コウサカは領主と、その護衛達と共に地上へと上がって行った。

「……エレナ」

上がって行く様を見ていたミレイナは、静かにエレナを優しく抱き締めた。

「で、どういうわけだ？」

地上へ上がると、百近い人数が整列していた。先頭にはガルドーの姿も見える。

「・・・申し訳ない。人払いを」

「・・・わかったよ」

兜を外し脇に抱えたバルドラスが手を振ると、それだけで伝わったのか部隊は離れて行った。

「ありがとうございます」

コウサカは頭を下げる。そして、上げると今度こそ話し始める。

「俺もまだ詳しく聞いたわけではありません。なので、彼女らより聞いたことを統合してお話します。まず、二日前の戦闘、いやそれ以前のモイトウラ戦争。それを仕掛けて来たのは、ポウオールという勢力で魔族そのものというわけではありません。先ほどのサキュバス達はポウオールへの従属（せいりゅう）を嫌い、逃げて来てラビダンジョンに潜んでおりました」

コウサカは自分の知り得る限りの情報を、バルドラスへと話す。

魔族の中にあるポウオールというモノ、その神、同族に何をしてきたか、そしてたった今ラビダンジョンで何があったか。

「・・・くそ共だとは思ってたが、まさかそこまでたあな。ちっ・・・胸くそ悪い・・・」

バルドラス自身、第二次モイトウラ戦争の当事者ゆえに、忌々しそうな表情を浮かべた。

「で、女神像が破壊されたってのに、もう大丈夫とはどういうことか？」

バルドラスはサキュバス達のことを保留して、領主として最大の懸念事項（けんねん）を口にする。

「・・・まだ視認して来たわけではありませんが、マナの暴走によるものと思われる魔力波を感じ取りました。地中深い位置より。そして、サキュバス達は五人おりました。魔族であるサキュバスが入り口まで出て来られていること、そこに二人しか姿がないこと。また、あの泣き続けている子から察するに・・・」

「ああ、もういい、もういい・・・。つたく、敵はただの敵であれば簡単だったのによお・・・」

バルドラスの脳裏に、地面に座り込んでいた二人のサキユバスの姿が浮かぶ。そして、ギリリと歯を噛み締めたかと思うと、

「だあああああっ！ くそったれがああああああっ……！！」
バルドラスは近くにあった、ダンジョン入り口にある石柱を指甲をはめた手で思い切り殴りつける。バキヤリ、という音と共に老朽していた石柱の半分ほどが粉々になる。

「……坊主、最後に聞くぞ。あのサキユバス達が人間に害をなさねえって保障はあるか？」

そう問うてくるバルドラスの顔は、数万の民の命と生活を背負う領主の顔をしていた。

「もし、暴れたとしたら俺が全て責任を取って処理します」

「坊主、てめえ……」

コウサカの目には、バルドラス以上の断固とした意思が宿っていた。初めて会った時の目は、まるで感情を押し殺して、ただ冷徹だったというのに。

「魔族とは言え、女を殺せんのか？」

「それしか手が無いと言うなら」

バルドラスは試しの意味を含めて言ってみたのだが、なんの逡巡しゆじゆんもなくコウサカは是非ぜひを問わずただ行なうと答えた。また、その目も真っ直ぐに。

「……本当に、何モンだよ。てめえは」

バルドラスはそう小さく呟いて、溜息を吐く。

「……わかった。許可してやるよ」

「ありがとうございます」

コウサカは膝を着いて最敬礼をバルドラスへ送る。

ふと、コウサカは気付いた。

「領主様、もうひとつお願いしたのですが」

「今度はなんだ？」

「彼女らの衣服を工面くめんして頂きたいのです。あの格好ではサキユバスとすぐに分かりますから」

「ああ、なるほどな・・・」

バルドラスは、コウサカの頼みに溜息を吐く。今、最悪殺すとまで言ったサキユバス達のことをすっかり忘れていないことに。

「わかった。ちょっと待つとけ。その間・・・」

「では、私はダンジョンの奥を見てきておきます。その間の警戒はお願いします」

「・・・ああ、行ってこい」

バルドラスが言おうとしたことを、自分からコウサカは言った。

そのあまりにも自分から苦勞を背負う姿勢に、バルドラスは呆れて溜息を吐いた。

公平で怖いくらいに。

アルシアの言葉の意味が、バルドラスにもよく分かった。

ミレイナ達はバルドラス達の持ってきた仕切りの中で、ワンピースとロングカーデイガンという格好に着替え終わり、ダンジョンの奥を調べに行っていたコウサカも戻って来ていた。

バルドラスがコウサカに聞く。

「どうだったよ？」

「完全に塞がれていると思います。二階層より下は壁の破損がひどく、亀裂が無数に走り、危険過ぎて進めませんでした。恐らく、あれより下の階層は崩落しているでしょう」

「ふうむ・・・わかった。ご苦勞さん」

気難しげな表情を浮かべながら、バルドラスはコウサカは勞った。そして、チラリとミレイナとエレナを見た。

「そっちは任せたぞ」

「了解しました」

コウサカが最敬礼で答えるとバルドラスは一度頷き、地上への階段を上がって行った。そして、ダンバートンへ戻ることを告げる大声が響き、大群の足音が遠ざかって行った。

コウサカは二人に目を向ける。

「さて、行こうか」

泣き腫らしたエレナを抱え起こしているミレイナが、その言葉に少し目を見開いた。

「あの、どこへ・・・？」

「領主様が君らが街へ入ることを許してくれた。とりあえず、俺の泊まっている宿屋へ行く。しばらくはそこへ居てもらおうことになるだろう」

「・・・」

そう伝えると、ミレイナとエレナは不安そうな表情になる。

「安心しろ。俺が守ろう」

「まもれ・・・」

エレナの顔に、怒りが浮かぶ。

「お姉ちゃん達を守れなかつたくせにつ・・・！！」

「エレナっ・・・」

「いや、いい」

ミレイナがエレナを、弱々しくも叱ろうとすると、コウサカがそれを止めた。

「実際、その通りだ。俺はただ、あの男を殺し損ねただけだ」

「でも、私達を守るなんて約束は一度も・・・。それに・・・様子見にも来てもらいましたし」

「ああ、そうだな」

何の迷うも無く、コウサカはただ認める。

「いや、だからこそ俺は君らを守るう」

コウサカは強い瞳を見せる。そして、その全身からも二人を包み込むような気配が溢れ出す。それは例えるなら、父親の腕に抱かれているような、そんな心強い気配。

「ほん、とう・・・？」

その気配に、さっきの威勢いせいは完全に霧散させたエレナが、弱々しく言う。

「お姉ちゃんど、ずっと一緒にいられる・・・？ もう、お別れしなくてもいい・・・？」

その精神的に弱り切ったエレナは、希望に縋りつくように言う。

「ああ、いられる。別れることもない」

虚勢でも、見栄でもなく、コウサカはただそう断言する。まるで、それが当たり前であるかのように。

最後にコウサカは、朔絆にそうするようにエレナの頭の上に優しく手を置く。

「だから、今は俺と一緒にいこう」

「・・・うん・・・わか、った・・・」

エレナがゆっくりと目を閉じたかと思うと、気を失い前屈みに倒れそうになった。それをミレイナが慌てて抱えて止めた。

「・・・エレナ」

険が取れ、安らかな顔になり気を失ったエレナを、ミレイナは優しく抱き締める。

「その子は、引き受けよう」

そう行つてコウサカは、膝を着いて背を示す。

「いえ、この子は私が・・・」

そう言つてミレイナは、エレナを自分の背に背負つ。

「そうか。では、行くとしよう」

コウサカは立ち上がると、地上への階段を示す。

アリアンロッドにコウサカがミレイナとエレナと連れて帰つてくると、カリンが目を丸くして固まった。

「こ・・・」

「こ？」

下を向いてふるふると震え始めたカリンが言ったことを、コウサカは繰り返した。

「ここは女連れ込む宿じゃないぞおおおおおおおーっ・

「……!!」

カリンが突然、大爆発した。

「連れ込む宿？ いや、それはいいか。この二人には俺の部屋に泊まってもらうが、俺はその部屋からは出て休む」

「はぁ……？ なにそれ？」

カリンが怪訝けげんな表情を浮かべる。

「事情があつてな。悪いが話すことはできない。迷惑と思うなら出て行くから安心しろ」

「だ、誰も出てけ、なんて……」

急速にカリンの声が小さくなる。

「すまない。迷惑をかけるつもりはないから、このまま泊まらせてくれると幸いだ」

「だ、だから、別に出てけ、なんて誰も……」

視線を泳がせ、何故かあたふたと慌てながらカリンは言い繕つくろうように言う。

「そつか。感謝だ、カリン」

「え、う、うん……」

軽く頭を下げるコウサカから、カリンは視線を外した。

「行こうか」

コウサカは、エレナを背負ったミレイナを促つながして二階への階段を上がっていく。

「……」

カリンはそれを、どこか呆気に取られたような表情で見つめる。

人は勿論、動物も殺したことの無い、完全な素人のカリンにも分かった。コウサカの雰囲ふんいき気が変わっていることに。

そして、その原因は恐らくあの二人。だが、その二人をコウサカは自分の部屋を空けてまで泊めるといふ。

「本当に変な奴……」

まだ数日の付き合いであるが、厄介やっかいごと事を抱え込んで来たことは、カリンにも分かった。

「この部屋を使え。寝床ねどこはあとからもうひとつ用意する」
そう言いながらコウサカは自分の荷物を手に取る。荷物と言っても、カバンひとつに全て収まっているため何の手間もないが。

コウサカが目を向けると、ミレイナがエレナをベッドの上に横たえているところだった。

(・・・目を覚ましたら、辛いだらうな)

そんなことを考えていると、ミレイナがコウサカに振り返った。その顔には、ようやく一息吐けた安堵感が浮かんでいた。

「・・・あの・・・もしかして、このお部屋は」

「ああ、俺の泊まっている部屋だ」

先ほどの話を聞いていればそれは気付くだろう、とコウサカは思いながらミレイナを見る。

何故かその頬は、ほんのり赤かった。

「どうかしたのか？」

「あ、いえ・・・その、何でもありません。・・・あら？」

すん、とミレイナが匂いをかぐ。その中に、明らかに女の匂いが混じっていることに気付いた。それも、ちよつと入って出て行ったくらいのもではなく、最低でも一晩くらい居たくらいの度合い。

「ひとつ聞いてもいいですか・・・？」

「ああ」

ミレイナの表情は、どこか硬かった。

「誰か・・・女性と一緒に泊まっています？」

「ナユキか？ あの子の部屋なら隣だが」

「あ、いえ・・・そうではなく、この部屋と一緒に、という意味で・・・」

そこで朔絆が完全実体化して出てきた。ものすごく凶悪な顔をしながら。

「ああ、朔絆と一緒にだな」

『何か文句、ある？』

朔絆がギロリとミレイナを睨む。明らかにそうであるミレイナの様子に、朔絆の目はメラメラと燃えていた。サキュバスであるミレイナが、絶世の美女と呼べるほどの容姿ゆえに。

しかし、朔絆はすぐ隣にいるため、その眼光にコウサカは気付かない。

「まあ、ベッドはこいつが占領しているから、俺は床で寝ているがな」

コウサカが少し苦笑を浮かべながら、傍らにいるの朔絆の頭の上にポンと手を置く。それだけで朔絆の表情が緩んだ。

コウサカの言葉に、ミレイナがどこか、ほっとした表情を浮かべた。

「い、一緒に寝ているわけではないのですね・・・」

そんなミレイナの言葉に、朔絆の全ての動きがピクリと止まった。

『い、つしよに・・・？』

朔絆は、よくよくその意味を反芻する。

『つ・・・！？』

瞬間、その顔は真っ赤になった。

『な、ななななに言っちゃてんのっ・・・?! ねっ、ねるってっ・・・!!』

「急にどうした・・・？」

コウサカが不審そうに、朔絆を見下ろした。その声に朔絆はコウサカに見上げてしまう。さらに真っ赤になった。

『え、なっ、何もなくてっ・・・!』

微妙に言葉がおかしくなった朔絆は、目を逸らすとエレナの寝かされているベッドを見てしまった。

『あ、ああ・・・、じ、じゃっ!』

ものすごく慌てて朔絆は姿を消した。

「・・・ふう。まあ、とにかく」

自分の言葉に、自分で顔を赤らめているミレイナをコウサカが見

る。

「窓は、恐らくそちらで防御魔法でも掛ければ、俺が気付いて入ってくるより先に侵入されるということはないだろう。入り口側は俺が見張っておくから、安心して休むといい」

それだけ伝えると、コウサカは荷物を持って部屋を出ようとする。

「あ、待ってくださいっ」

それを慌ててミレイナが、コウサカを引き止める。

「どうした？」

「ありがとうございます。あと、ごめんなさい、その・・・お部屋を使わせて頂いて」

それに、ああ、とコウサカと頷く。

「気にしなくて良い。それに、俺は元々床で寝ているからな。背中
の娘には、ナユキの部屋で相部屋させて我慢してもらおう」

不思議と、朔絆は何も言っただけだった。

しかし、その理由がコウサカに分かるわけは無く、変だなと首を
微かに傾げた。

「何にせよ。最低でも後、三日は動けない。その間、俺は君らを守
ろう」

「三日・・・？」

「ああ。君らから譲ってもらった黒魔族通行証がな」

コウサカはミレイナに、クリステルのことは伏せて通行証を作り
変えていることを話した。当然、あの通行証のことをよく知ってい
るミレイナは同族の存在に勘付いたが。

「そう、だったんですか・・・。すみません、私が渡す時に気付い
ていれば・・・」

「俺も知らなかった。それに、魔族である君に人間のことを分かれ
というのが無理な話だ」

コウサカは一度目を伏せると、再び顔を上げる。

「君らは・・・、今は自分のことを考える。それだけの時間は俺が
作るっ」

コウサカの見せた目は、かっこ確固たる光が宿っていた。そしてその身にまと纏う気配も。

「……はい。ありがとうございます……」

その全身で守るといふことを現すコウサカに、ミレイナは少し涙目になって礼を言う。

「ああ」

そう一言だけ言うと、コウサカは部屋を出て行った。出て行ったと言っても、扉を開ければすぐそこにいるが。

「……」

少しの間、ミレイナはコウサカの出た行った扉を見つめていたが、ふうと一息吐くとエレナの寝ているベッドに腰掛けた。

「……エレナ」

そして、優しくエレナの髪を撫なでた。

(やはり、変わったな……)

コウサカは廊下の壁に背を預け、自分の手を見つめながら考えていた。

(より意思が強くなった……とでも言えるか。そして、相手を殺そうとする時も……)

ぐつとコウサカは手を握り締める。

(あれは俺か……？ それとも……やはり俺はそのために？ ……いや、現状では断定するには無理があるか。そうだ、今の俺は考えるよりもやらねばならないことがある)

自然と、それは口に出た。

「守らねば……今度こそ」

そこで気付く。

(「今度こそ」、だと……？ ラビへ行く際にも口に出た言葉……)

ピリッ、とコウサカは自分の頭の中で、電流でも走ったかのよう

な痛みを覚える。何か記憶の中で蠢いた。

(守る・・・護る・・・衛まもる・・・)

そう、心中で繰り返していると、無意識的にコウサカの口が動いた。

「・・・イ」

「なに・・・しているんですか？ そんなところで・・・」

その声に、コウサカは我に返る。

コウサカが目を向けると、ナユキが階段を登り切ったところで立っていた。学校から帰ってきたのだろう。

「ああ、おかえり」

「あ、はい。ただいまです」

自分の部屋の前で、荷物を傍らに置きながら考え事をしていれば、それは不自然だと思われて当然だろう。

「どうしたんですか？ こんなところで」

トタトタと、ナユキは階段のところからコウサカに近づく。

「ふむ。説明すると長いから、結果だけを言おう。俺の部屋はサキユバス達に貸している。荷物と朔絆を君の部屋に置かせてもらえないか？」

「・・・え？」

ナユキは話の内容が全く理解できず、キョトンとしながらコウサカを見た。何の冗談か、という顔である。

「・・・えつと・・・本当ですか？」

「ああ」

何の逡巡しゆんすんもなく、コウサカは答える。

「ええと・・・」

ナユキもコウサカの正直な性格は知っているが、事が事だけに俄にわかには信じられない。

「危険はない。それは断言する」

「あ、あの、それはいいんですけど・・・」

ナユキの顔には、危険とかそういうことではなく何故いるのか、

と書かれていた。

「ラビで知り合っつてな。魔族の侵攻だの何だのと物騒だからと、特別にダンバートンに入れてもらった。俺、個人的には恩もあるためな」

コウサカは事実の半分以上を隠して話した。とてもではないが、辛すぎるだろう。

(この子は、俺のように汚れてはいけない・・・)

それは直感的なものであった。だが、コウサカはそれを何の躊躇ちゅうちゅうもなくそれを是ぜとした。

こんな子が狂ってはいけない。

「・・・さん・・・コウサカさん・・・?」

はっとして、コウサカは我に返る。

いつの間にか外を見ていた視線を戻すと、ナユキが心配そうにしていた。

「あ、ああ。すまない」

「いえ、いいんですけど・・・大丈夫、ですか? なにか、すごく遠くに感じましたけど・・・」

心配そうに見るナユキの言葉に、コウサカはひとつ首を傾げる。

だが、まあいいかとさっさと考えを放棄した。

「いや、物思いに深く耽ふけり過ぎた。気にするな。それより、荷物を置くために部屋を貸してほしいのだが」

「え、あ、はい。いいですよ、それくらい」

それにもうひとつ、こちらの方がより問題のことをコウサカは話す。

「朔絆も頼めるか? 最近、剣から出て寝ることを気に入ったようだな」

「精霊さん、ですか? はい、大丈夫です。ただ床で寝てもらっつことになっつちゃいますけど・・・」

ナユキの快諾かいだくに、コウサカは一息吐く。

「寢床は後で用意する。問題ない。では、荷物を置かせてもらえる

か？」

「はい、どうぞ」

コウサカはナユキの部屋へと入り、カバンを置く。

そんな時、落ち着いたのか朔絆が声を響かせた。

『ちよつと！ わたしのベッドはどうすんのよっ！！』

「だから、それは今から用意すると・・・」

『さつさと用意しなさいっ！！』

朔絆が突然完全実体化をして出てきて、勝手なことを捲くし立てた。

勿論、それはコウサカがミレイナ達に優しくしていることや、朔絆がナユキの部屋に寝させられることになったことへの不満ためであるが、コウサカは相変わらず気付かない。

「・・・ふう」

カバンを置いたコウサカは溜息を吐くと、ナユキにひとつ礼を言いながら退出する。クレイモアを置こうとしたら何故か朔絆がうるさかったため、剣は背負ったまま。

コウサカはそのまま一階へ降り、カリンの親父さんに寝具を二つ借りに行った。

それがミレイナとエレナがコウサカの部屋に泊まっている経緯。

壁に背を預けて警戒していたコウサカは、ふと廊下にある窓の外を見る。すでに辺りは暗くなっていた。

（・・・意思だけではなく、感情も強くなってきたな。汚れてはいけない、とは・・・）

一度、コウサカは目を伏せる。

（・・・やはり、きっかけはあれか。そして、殺す時・・・）

ラビダンジョンで、コウサカは他人のように自分を感じていた。

あの時の自分の顔は・・・。

（修羅、か・・・）

どう考えても自分の記憶は戻りかけている。だが、その記憶は、まず間違はなく自分のものである。

しかし、そこには桁外れの狂気が入り乱れている。

だが、とコウサカは思う。

(妹、城、玉座……………)

その時だけは、心に温かなモノが流れた。

「俺は、どちらだ……………」

自然とそんな言葉をコウサカは呟いた。

……あの時のコウサカの顔は、命を奪う事に何も感じていない能面のようにだった。それはまるで、操られている人形のように。

だが、ナユキを汚れさせたくない、サキユバス達を助けられなかった時に抱いた後悔の念も、全て本心からだった。

最も破壊神に最も近くて遠く、最も救世主に最も近くて遠い存在である。

窓の外を、どこか茫然^{ぼうぜん}を眺める^{なが}コウサカの頭の中には、前に自分で言ったそんな言葉が再生されていた。

第十四章 護るといふ意思（後書き）

【おまけ】

ミレイナの外見は何となくしか書き表していなかったため、こちらに書かせて頂きます。ついでにエレナも。

ミレイナ

百六十一ほどの背に、金と銀のオッドアイの瞳、腰の届くほど長い金色のロングストレートの髪の女性で、サキュバス姉妹の長女。

性格は厳しくも優しく、姉妹の中心として慕われていた。

過去の事件を長女としてよく受け止め表に出さないが、内心では不安が募っていた。ただ公平で、力をよく理解しているコウサカに惹かれた理由は、そういう部分から来ている。

エレナ

一五三cmほどの背に、金色の瞳、背を越すほどのストレートの銀髪の少女で、サキュバス姉妹の末妹。まっまい

性格は生意気で、勝手に行動したり、変なことに首を突っ込んだりして、よくミレイナからお説教を喰らっている。

ただ、それは過去にあった悲惨な記憶を少しでも薄めるために新しい記憶を入れようとしていたための行動であった。ミレイナも気付けていたが、あえて普段通りに叱っていた。

第十五章 騎士

宿屋アリアンロッド。

「あの 廊下なんかで寝れるんですか？」

「ああ」

朝の八時頃になりナユキが朝食をとり部屋から出てくると、コウサカが胡坐をかきながら廊下に座っている光景が目飛び込んできた。

「早く食事を済ましてくるといい。学校に遅れてしまうぞ」

「あ はい」

ナユキはそう言うと、チラチラとコウサカを振り返りながら階段を下りていった。

何かが、今までと変わってしまったことに不安を抱かせながら。

西端区にある宿屋から、東端区にあるダンバートンの学校への道をナユキは歩いていった。

さすがにプレート部分は外してあるが、らふティオズアーマーにその身を包んでいた。他の服くらいコウサカに言えば二つ返事で買ってくれるだろうが、ナユキはこれ以上迷惑を掛けられないからと頼めないのが性分だった。

「お、ナユキちゃん！」

自分の名前を呼ぶ声が見ると、タクトが小走りに近寄ってきていた。

「あ タクト、さん」

若干ビクつきながらナユキはタクトの名前を呼んだ。

「いや、そんなマジに引かれるとシヨックで泣いちゃいそうなんですけど」

しかし、以前にやらかしたことがあるため、タクトはそれしか言

えない。

「あ その、すみません」

「あ あゝ いや、気にしないで、ね？」

謝られてしまったタクトは決まり悪げに視線を外すと、頭を掻いた。

「すみません 、あ、ところで、今日は珍しい格好ですね」

「ん？ ああ、これ？」

タクトは意味もなく軽く片手を上げた。

今のタクトはいつもと比べれば重装備だった。所々がプレートで保護されたレザーアーマーに、手甲付きのグローブ、丈夫そうなコンバットブーツという姿だった。武器もいつもの愛用のバスタードソードの他に、いくつかの短剣が腰のベルトに差してあった。

ただ、頭にはいつもと変わらず少し色の落ちた水色のバンダナをしていた。

「 ? 頭は守らなくていいんですか？」

「ああ、これね。このままでいいんだよ」

「？」

ナユキは小首を傾げる。それにタクトは苦笑を浮かべた。

「まあ、今度話してあげるよ。前のお詫びに何か奢るからさ」

タクトにしては珍しく、「それじゃ」と言つと話をさっさと切り上げて人混みの中に消えて行った。

(やっぱり、ピリピリしてる)

宿を出て大通りを歩いているうちに、ナユキもそれには気付いていた。

道行く道には必ずどこかに完全武装したハンター。そして、その目も、纏う雰囲気も切羽詰ったようにピリピリとしていた。

実際に切羽詰っているのだろう、とどこか不安そうにナユキは思う。

よく見れば、街を行き交う人々の表情もどこか硬さが混じっていた。

先日の戦闘は圧勝だったとは言え、あそこまでの大規模な戦闘は恐らくダンバートンが出来て以来始めてのこと。

これで不安にならない人間などいないだろう。少なくとも普通の人なら。

「あ、遅れちゃう」

いつの間にか立ち止まり考え込んでしまったことに気付き、ナユキは再び歩き出した。

ダンバートン北東マスダンジョン地上入り口近く、オグマ騎士団展開地点。

「斉射あつー!!」

レオナルド団長の号令が響くと同時、約百人がアイスボルトを強行突破しようとするロックゴーレムに浴びせ粉碎する。

「ふん、さすがに出て来なくなったか」

もはや剣すら抜いていないレオナルド団長は、腕を組みながらマスダンジョンの入り口を睨みつけた。

その入り口の周りには強行突破のための捨て駒とされたロックゴーレムの残骸と、ゴーストアーマーだった空の鎧が空しくその姿を晒していた。

オグマ騎士団は、約二百名の騎士を半数ずつに分け、休息させながら最前線に展開していた。

「団長。やはり、突入して殲滅した方が良いと進言しますが」

まだ二十代の副官が進言する。それに対しレオナルド団長は首を横に振る。

「却下する。領主殿も言っていたが、マスダンジョンは危険すぎて調査の手が全く入っていない。もし突入して仕掛けられた大規模魔法でも起動すれば、目も当てられん」

その顔は実に忌々しそうだった。

レオナルド団長自身も第二次モイトウラ戦争に参加し、またその

影響で家族はおろか血縁者のほとんどを失った過去を持つ。

魔族に対しての憎悪は、騎士団の中でも最も大きいはずの人物である。

しかし、私情ではまず動かない人物でもあった。

「とにかく我々はここに陣取り、ダンバートン防衛を務めていればよい。騎士とは」

「騎士とは人々の剣であり盾である、ですね。分かっています」
つまり、個人的な感情など無用。ただ斬り防ぐのが騎士である。
レイナルド団長が揮下の騎士団に口癖のように言っていることである。

「ふん、私は一度領主殿と会い、今後のことを決めて来るとする」

「敬礼えっ！」

副官の大声が響くと、条件反射のように総勢約二百名の騎士達がレイナルド団長に敬礼した。

コウサカは空になったナユキの部屋から朔絆の宿っているクレイモアを出して、廊下の壁に立てかけると、貸した部屋の扉をノックした。

「ミレイナ、話せるか？」

すると、扉が開きミレイナが顔を覗かせた。

「なんででしょう？」

「今後のことを話しておこうと思ってな」

コウサカの言葉に、ミレイナは意味が分からないという表情を浮かべた。

「黒魔族通行証の処理が完了すれば、俺達はこの街を出る」

「っ！？ そんなん」

その言葉に、ミレイナは愕然とした。

「最後まで聞け。君らが狙われる可能性だが、恐らくはないと思う」

「なぜ　　ですか？」

不安げに聞いてくるミレイナを一瞥いちへつすると、コウサカはほんの少し目を瞑つむり息を吐いた。

「狙ねらって来るとすれば、十中八九俺だからだ。昨日のこともあり、確実に俺を殺そうとしてくるだろう」

ティルコネイルの時は半殺しにして連れて帰ろうとしていたが、それが無理なら邪魔者として排除の選択をするだろう。

コウサカが、明らかに最大の脅威きょういと成り得るゆえに。

「俺達と一緒にいる方が、まず間違まちがいなく危険だろう。それに、その格好でこの街に紛まぎれていれば、見つかることもないだろう」

「あなたは、どこへ行こうと　　？」

ミレイナが、どこか茫然ぼうぜんした風に聞いた。

「どこかにあると言う魔族の本拠地を潰し、ついでに女神を救う」

「まさか　　アルベイ、ですか　　？　　そんなん　　自殺行

為ですっ

「！」

どこか悲痛そうな顔でミレイナは言い募もつった。

「そうだろうな。だが、それが‘ミレンシア’なのだろう。それならば、俺はそれを利用させてもらう」

「　　なにを、いって　　」

コウサカの目は、何かに気付いて、何かを知っている目をしていた。そして、ただ真っ直ぐに目的に向かおうとしている、そんな目。ミレイナはただただ、そんなコウサカの言葉が理解できなかった。そもそも、そんな余裕など彼女らにはなかった。

「それと、先に詫わづびておく。すまない」

コウサカが頭を下げた。意味が分ならず目を白黒させているミレイナに構わず、コウサカは頭を上げると続ける。

「俺は今から領主様の元へ行き、伝えておかなければならないことがある。だから、少しの間ここを離れることを許してほしい」

「 え ゆ、ゆるすも何も 」

そもそも自分達は何も言っていない、だから好きにしてい。そうミレイナの顔には書いてあった。

「すまない。それと、朔絆。頼みがひとつあるんだが」

『どーせ、離れている間この二人を護ってくれ、とか言っんでしょ？ まったくもお 』

音も無く朔絆は完全実体化をして、コウサカの傍らに立った。その顔は心底しようがない、そんな呆れた表情をしていた。

「すまない」

『 ふん バーカ 』

それだけ言うと、朔絆はさっさと姿を消してしまった。

コウサカはクレイモアを手に取る。

「これを持ってみてくれ」

「え、あ、はい 」

ミレイナは、柄まで含めると自分の背丈と同じほどもある長さのクレイモアを恐る恐る手に取った。

クレイモアの光が強くなった。

「え な、なんですか、これ ？」

ミレイナが驚いた様子でコウサカを見た。

柄まで含めると、百六十cmほどもあるクレイモアを「片手」だけで持ちながら。

「朔絆の力だ。剣の重さをほとんど無くしている」

それに、ミレイナは目を見張って更に驚く。

「精霊にそんな力が 」

「俺は滅多に使わないがな」

ということ、コウサカは素でこんな大剣を自由自在に振り回していることになる。

『 ホントはすっごくイヤなんだからね。あんた以外に使われるの 』

朔絆が剣の中から不機嫌に言う。

「すまない」

コウサカはただ詫びる。朔絆の気持ちには気が付かず、嫌がっているということだけは理解しながら。

『ふん　。ほら、とつと行つて来なさいよ』

「ああ」

コウサカは軽くミレイナに目礼をすると、廊下に置いた装備を付け階段を下りていった。

「あの　すみません」

『あのバカの頼みなんだから、しょうがないじゃんか。いい？　無駄にベタベタ触ったりしたら許さないから』

朔絆の声には、ひどい苛立ちが感じられた。

「は、はい」

クレイモアを持ち直すと、ミレイナは静かに扉を閉めた。

官庁、領主執務室。

「黒魔族通行証だああ　？」

コウサカが首肯すると、バルドラスは頭を掻いた。

「んなもん、どつから持つてきやがった？」

「彼女ら、から譲ってもらいました」

「彼女ら」とそれだけで、バルドラスはサキユバスの事と気付く。

「つたあく　、てめえは本気で訳分からねえ奴だな。んで、それがどうした？」

「魔族の本拠地、アルベイダンジョンと呼ばれる場所に行けるそうです」

瞬間、バルドラスの目の色が変わった。

「ほう　。そりや確かか？」

「はい。確実に」

その確信は、コウサカを感じ取る、予感、と同じ感覚がそう教えていた。

「で、それをてめえはどうする気だ？」

「潰しにいきます」

そうコウサカが逡巡しゆんしゆんもなく言うと、バルドラスが哄笑こうせうを響かせた。
「ガハハハハハ、言うと思っただぜ！」

そして一転、バルドラスの表情を消して問うてくる。

「んで、潰しに行くから人数貸してくれ、とでも頼みに来たのか？」

「いえ、ただ伝えておこうと。私が一人で行きます」

それにバルドラスは驚愕きやうがくする。

「ば、馬鹿かてめえはっ　！？　本気で　　言っただろう

な、てめえなら」

バルドラスは呆れたような表情を浮かべた。

「だったら、何で来やがった？　本当に伝えに来ただけだってんのか？」

「いえ、それと彼女らのことをお願いしようと思ひまして」

それにバルドラスは、気難しそうな表情を浮かべた。

「お願い、って言やがるがなあ　。とっとと帰って来て自分で何とかしやがれ」

その時、執務室の扉が開いた。

「その通行証、渡してもらおう」

「ふう　　」

タクトは、中央区広場のベンチのひとつに腰掛けて一息吐いた。

（こりゃ、精神的に来るわ　　）

街中、特に大門警護のハンター達は殺気立っていた。魔族が人間に化けるなんて話は聞いたことが無いが、それでも監視の目はより厳しくなっていた。

（ま、当然か　　）

携帯用水筒から水を一口飲む。タクトはその性格もあってか、上手く気を抜く方法を知っていた。

「
」
タクトは先日あった戦闘の光景を思い出す。そして、己の手を見る。

（ やっている時より、時間が経った頃がキツイか）

その手で、タクトは敵を斬った。コウサカのおかげで殺すに至る前に終わったが、それでも肉を切り裂いた感触は生々しく残っていた。

（ やっぱ、すげえや。顔色ひとつ変えずに、その日の夜にはオレ達に付き合ってくれていたしな）

あれは殺すことに慣れて何も感じなくなった顔ではなく、自分を完璧に制御していた顔だ、とタクトは思う。

（カグヤは 後方支援組だから多分大丈夫だろ。あの時も、無邪気だったし）

普段のタクトがまず見せないような、真剣な顔をしながら思案する。

タクトは、本当はただの馬鹿ではない。常に妹を想っている優しいお兄ちゃんなのである。女好きなのは素だが。

無意識に、昔カグヤからもらった水色のバンダナを手をやる。

「こらー！」

頭に軽い衝撃を受けたタクトは、いつの間にか下を向いていた顔を上げた。

「なにサボってんのさ」

いつも通りの軽装のカグヤがいた。

「サボってんじゃなくて休憩。一時休憩中」

「うっさい、とっとと立つ」

「ヘイヘイ」

えっこらしよ、と実際にオヤジ臭いかけ声と共にタクトはベンチから立ち上がった。

「ん、あれ？」

ふと、カグヤがタクトから視線を外すと、どこかを凝視ぎょうしした。

「どした？」

タクトもそちら側を見ると、コウサカと外に展開している騎士団の団長とその副官、それにバルドラスが官庁から出てきて、どこかに向かうところだった。

「？ なんだ？」

その時、タクトに好奇心「うきしん」が生まれる。

「付いてっってみよっ」と

「ちょ、あんた今仕事でしようが！」

すかさず、カグヤからのお叱り言葉がタクトに飛んだ。

「なんだよ、お前は気になんないの？」

その言葉にカグヤが怯む「ひるむ」。

「う た、確かに気になるけど」

「まあいいや。オレ一人で行ってくる」

背を向けたタクトに、カグヤは慌てて言う。

「だ、誰も行かないなんて言っていないでしょうが！」

「おやおやあ？ カグヤさんもオシゴト中じゃないんですかあ？」

振り向いたタクトの顔は、非常にムカつく顔をしていた。

「う、うるさい馬鹿！」

赤くなつたカグヤを満足そうにニヤニヤしながら見ると、タクトは三人を追って歩き出した。

「あ、ちよつと待ちなさいよ！」

官庁裏、訓練場。

「始めえ！」

バルドラスの大声が響くと、コウサカと騎士団の副官クラウゼンが互いに鎧は脱いで、木刀を構えて対峙「たいじ」した。

「たく、面倒なことにしやがって」

「その割には領主殿。面白そうにはおりませんか？」

「たりめえだろっが」

何故、コウサカとクラウゼンが模擬戦などを行なっているかと言
うと、ちょうどレイナルド団長がバルドラスの元を来て、通行証に
ついての会話を耳にしたのである。

軍人として、魔族を殲滅し世界の平穩を守ることに至上命題であ
る。当然、黙っていることなど出来なかつたのだらう。

「どこの誰とも分からない者に、この世界のことなど任せられるは
ずがありません。我々が向かい、この命に代えても殲滅します」

レオナルド団長はそう言い放ち、コウサカに通行証を渡すよう求
めた。当然コウサカは断り、自分が行くことを伝えると力を示すよ
うに求められた。通行証が、イタチごっこにすらなっていない現状
を打破する切り札と成り得るほどに有用がために。

また、下手に一人で行かれ失敗すれば、本拠地の場所を変えられ
る可能性も高い。そういう意味でも任せられないという言い分だっ
た。

「言っておくが、あの坊主はメチャクチャ強えぞ？ あの若いので
相手になんのか？」

「クラウゼンは、我が騎士団の中でも最も腕が立ちます。あれがも
し負ける様ならば、認めましょう」

「ほお、そりゃ楽しみだ」

約一万を数える最大の騎士団の中での最強の一人か、とバルドラ
スは心中で面白そうに思った。

(この男、とてつもなく強い)

オグマ騎士団の副官クラウゼンが、コウサカと対峙してまず思っ
たことはそれだった。

それは、コウサカが何も構えをしていないことから察せられた。

隙だらけであるが、コウサカの纏い見え隠れしている気配は間違い

なく一切の油断を許さないものだった。

だからこそ、クラウゼンは木刀を正眼せいがんに構えたまま動けなくなっていた。

クラウゼンは歳こそ二十四と若いが、常に最前線に出て、決して少なくない魔族を切り捨ててきた。剣の腕も天性のものがあり、経験としても十分なものを経験してきていた。それでもコウサカと対峙するには不十分であると、騎士としての本能的なものが告げていた。

だが、騎士には沈黙は許されなかった。下を向いて、そして悪戯いたづらに時間を費やせば費やすほど、護るべき人々の命は消えていくからだ。

「はあっ！」

クラウゼンは一度上段にし、そこから一気に木刀を振り下ろす。

常人であれば、気が付いた時には首が落ちていっているほどに研ぎ澄まされた一撃である。

「

ガシッ！、と音と共にコウサカがまともに受けた。

軌道を逸らすわけでもなく、それを不可としてコウサカが受けたのは、レイナルド先生以来初めてである。

矢でも魔法でもはつきり目視し弾き飛ばすほどのコウサカでも、逸らすのは危険と判断したほどクラウゼンという男は強かった。常人の基準を軽く四つ、五つほど飛ばしているほどに。

しかし、コウサカは更に常人を超越ちようえいし、超人と呼べるほどに異常だった。

鏑せがし迫り合いの様相ようそうだったのは、ほんのわずかな時間だけだった。

コウサカはすぐに力加減を絶妙ぜつみょうなものに変え、押すことも引くことも出来なくした。クラウゼンが下がるうとすれば、まるで何の負荷もかかっていないような力加減のまま木刀を合わせたまま下がる。

押そうとすれば同じだけの、本当に全く同じ力加減で押され、無理に押そうとすればクラウゼンが体勢を崩す状況にした。

「くっ 貴様っ」

コウサカは「片手」だけで、クラウゼンが両手で持った木刀を悠々と完封かんげうしていた。どう考えてもクラウゼンが不利であり、一度距離を広げなければ勝機は見出せない状況だった。

だから、危険は百も承知しょうちでクラウゼンは後ろへ下がる。それ以外手がないために。

「」

だが、今度はコウサカは追わずにその場に留とどまった。

そして、また構えもせず棒立ちをした。侮あなごっているわけでも、馬鹿にしているわけでもなく、ただそれが自然体であるかのように。

「くそっ ！」

クラウゼンは小さく毒づいた。このまま居てもただ時間を浪費ろうひするだけ、しかし攻めても不利になる。

コウサカの構えが守り一点である以上、どちらの集中力が切れる時まで待つしかない。そうクラウゼンが考えをまとめていると、コウサカが静かに言った。

「来ないなら、こちらから行こう」

「なっ ！？」

コウサカは何の緊張感もなく、静かに踏み出した。

「くっ」

クラウゼンは焦る。

たった今、守り一点であると結論付けたことを見抜いていたかのような、突然のコウサカの攻勢宣言。彼我ひがの距離はたった三mほど。コウサカの言葉は真まことか偽いつはりか。焦って攻めても先ほどのように簡単に止められてしまわないか。また片手だけで止められ、空いた手で強烈なカウンターは来ないか。

圧倒的だが油断も無く、緊張感も無く、必殺の一撃すら楽々止めるコウサカに、歴戦の騎士であるクラウゼンが混乱させられている。

（どつするっ　！？　どつすれば勝てる！？　どつすれば勝つ
ことが　）

そこで、クラウゼンは冷静を取り戻した。

騎士とは人々の剣であり盾である。

その通りである。

個人の勝利など意味がなかったことをクラウゼンは思い出した。

勝利とは‘全体’での勝利でなければ意味が無く、守るべき人々が
無事でさえあればそれでよいのである。

だから。

「我が身命しんめいは守るべき人々のために　！　我らが身命を持って
絶対的脅威きょういたるものを打倒し、人々の未来の礎いしずえとならんっ　！」

どんなに強いものでも、一人ひとりの命を掛けた一撃で少しずつ
弱らせ最終的に斃たおすことができればいい。

それは、自らの身命を賭して国を護る騎士の心の叫びだった。

「はあああああああああ　！！　！」

全身全霊を賭した必殺の一撃を、クラウゼンはコウサカに繰り出
す。

「　っ　」

ここで、コウサカは初めて木刀を両手で持った。そして、その目
も相手を射殺すほどに鋭く。

ガンッ！　と音がしてコウサカの手に持つ木刀がいつの間にか、
クラウゼンが振り下ろした木刀の横腹に叩きつけられていた。

それは強すぎず、弱すぎず、一切無駄な力は入っておらずただ軌
道を逸そらした。

それは完璧すぎて、クラウゼンは逸そらされたことに一瞬気付かな
かった。

「が、はあっ　　！」

ズドン、と言う重い音と共に衝撃がクラウゼンの体を突き抜ける。

いつの間にか、コウサカは木刀を片手持ちにしていて、左拳で強烈な一撃をクラウゼンの腹に見舞みまっていた。クラウゼンは耐え切れず、後方へ吹っ飛ぶと壁に激突した。

「俺は世界の敵か？」

珍しく、コウサカは少しだけ笑みを浮かべながら冗談がましく、激しく咳き込んでいるクラウゼンに言った。

一方、訓練場の物陰ものかげ。

「
」
「
」
タクトもカグヤも絶句していた。

「み、見えたか？」

「う、ううん 全然」

ひそひそ。

「あ、あれってオレ達だったら間違いなく、気付いたら気絶しているよな？」

「と、というか あんなの当たったら死んじゃうんじゃない？」

クラウゼンが最期さいご（死んでいないが）の放った一撃は、少なくとも目にも、映らないほどの速さだった。

それを見切って軌道を逸らし、また一瞬で人ひとりが吹き飛ばすほどの力をクラウゼンに叩き付けたコウサカのすごさだけは、二人は茫然ぼうぜんとしながらもよくわかった。

と、その時。

「タクト、カグヤ出て来い」

絶対に見えない位置にいるはずの二人のことを、コウサカが呼んだ。

「
」
「
」
「っ!？」

二人とも、ビビクっ！として嫌な汗を掻いた。

「別に何もしないから出て来い」

タクトとカグヤは顔を見合わせると、しびしび物陰から姿を現した。

「てめえら、何してやがる？」

バルドラスが、出てきた二人を呆れたように眺めた。

「えつとおー　その、ですね　何というか　」

タクトが必死になって言い訳の言葉を捜していた。

タクトが視線を上げると、バルドラスの眉間みけんあたりがピクピクしていた。

「とつとと仕事に戻りやがれえええええええええつ！！」

「はいいいいいいいいいいいいいっ！！」

タクトとカグヤは二人揃って逃げて行った。

「大丈夫か？」

レオナルド団長が、クラウゼンを助け起こしてやっていた。まだ足がガクガクして立てない様子だった。

「申し訳　ありません　」

クラウゼンは息も荒いまま、レオナルド団長に詫びた。

「いや、いい。あれは違いすぎる」

レオナルド団長は、のんびり装備を付け直しているコウサカに目を向けた。

（　文献ぶんけんではあったが、これがミレンシアというものか）

知らず、レオナルド団長の眼光は鋭くなっていた。

（女神に導かれ、‘星’より来たる絶対的存在　なるほどな）

外見こそ人間であるが、その秘めたる力はもはや人という種を大きく超えすぎていた。

「なにか？」

いつの間にか装備を付け終わったコウサカが、レオナルド団長に声をかけた。

「いや。それより魔族の本拠地に向かう時は我々にも声をかけてくれ。この世界の護り手の一人として、看過かんができることではない」

それは高圧的でも、命令口調でもなく、私的な頼み事をするような口ぶりだった。

コウサカの実力が計り知れないと分かったことで、レオナルド団長はコウサカにある程度の礼節を払うことにしたようだ。

「恐らく、死ぬことになりましたが」

それは比喩ひゆでも何でもなく、ただ事実を言っているだけのようない口調だった。

「クラウゼンの言葉を聞いただろう。そういうことだ」

あの言葉はクラウゼンの魂の叫びであった。そして、それは騎士団すべての想いでもある。レオナルド団長は言葉少なく、コウサカに伝えた。

「分かりました。二日後には恐らく出立します」

「分かった。その時までには準備を整えて置こう。領主殿の下で会おう」

コウサカは静かに首肯した。

ただ、この時のコウサカは不思議な感覚を覚えていた。初めて会ったというのに、決死の覚悟の騎士団にどこか既視感きしかんを覚えていた。個人個人に会ったことがないのは確実であるが、「騎士団」というものに対して。

第十六章 みちしるべ

それは、クラウゼンとの決闘と呼べるほどの鬼気攻まる模擬戦をした夜。

「こ、こここウサカさんっ　　！」

時刻は二十三時頃。

つい一時間ほど前、ナユキはおやすみの挨拶をして部屋に入って寝たはずが、水玉のパジャマのままとても慌てた様子で部屋から飛び出てきた。

「わ、わわっ!?!」

慌てすぎたせい、上半身が先行し過ぎて下半身が付いていかず、前のめりにナユキは倒れこんだ。

「つと」

コウサカは無造作に腕を伸ばすとナユキの首あたり、細かく言えば左右の肩甲骨の真ん中に手を置くと、徐々に力を込めながら柔らかく止めてやった。

勿論、この時に間違えて胸を触ってしまうということなど、そんなへまをコウサカがするわけがない。

「今回はどうした？」

ナユキがすっかり体勢を整えて床を踏んだことを確認すると、手を離しながらコウサカは聞いた。

「そ、それが、ペンダントで夢が、女神様が！」

この子はたまに変なことになるな、とコウサカは思った。

「落ち着いて頭の中を整理。それと、まずは深呼吸するといい」

「は、はい。すうーはあー　　すうーはあー　　」

「知らず、コウサカは頭痛でもするかのように頭に手をやっていた。それで、どうかしたか？」

ナユキが落ち着いたと見て、コウサカは再び聞いた。

「あ！　そ、そうなんです！」

コウサカは何も言っていない。

「女神様のペンダントが、みちしるべ、なんです！」
とりあえず、他にも泊り客が寝ているはずであるから、コウサカはナユキを抑えながら聞く。

「静かにしろ。つまり、何だ？　ダンバートンからどこへ向かえばいいか、分かったと言う事か？」

「そう、むぐ！」

女神が自分に接触してきてくれたことが嬉しいのか、だいぶテンションが上がりすぎているナユキがまた大声で何か言う前に、コウサカは素早く口を塞いだ。

「分かった。それで、場所はどこだ？」

「ふは。すみません　バンホールのバリダンジョンの奥だそうです。行けば、ダンジョンの中をどう行けばいいか、また教えてくれるそうです」

コウサカの呆れ顔を見て我に戻ったか、ナユキは恥ずかしそうに口を手で覆いながら小声で言った。

（ペンダント、か。なるほど。そういう仕掛けというわけか）
コウサカは一瞬だけ、ナユキが両掌で包んでいるペンダントを睨め付けた。

「さて、用が済んだのなら寝ると良い。明日も学校だろう」

「あ、は、はい。その、お邪魔しました」
今更恥ずかしがりながら、ナユキは自分の部屋の中へと戻って行った。

コウサカがペンダントを睨んだことは、気付いていない様子だった。

ナユキが部屋に戻って一時間ほど経った頃、コウサカは静かに黙考していたことにある程度の結論を出していた。

（明日、明後日という時になり、明確な次の目的地が分かつ

た。やはり、そういうことならば、騎士団の方もそうだったか？

思えば、あのタイムリングも出来すぎていた。いや、そう考えればテイルコネイルのこともそうか　　)

コウサカは静かに、長く細く息を吐いた。

(　　) そのためのミレンシア。そのためのナユキという少女の存在。そのための　　圧倒的な強さを持つ俺、か。ここまで来ると、いつそ笑えてくるな　　)

少しだけ、コウサカは自嘲気味に笑った。

(　　) となるとあの子も、か　　。だが、そこまではさせん)

顔を上げたコウサカの顔は、強い意思が表れていた。

と、目の前の扉が静かに開いた。

「　　あの」

ミレイナが顔を覗かせた。

「　　こんな時間にどうかしたのか？」

「　　少し、お話でもと　　」

意味が分からず、コウサカは少し首を捻るが、断る理由もないため首肯する。

ミレイナは、コウサカの隣に三角座りをして壁に背を預けた。

「　　どうかしたのか？」

ミレイナはコウサカの方は見ずに、静かに話す。

「　　あなたのおかげで、最近のエレナは落ち着いています。本当にありがとうございます」

「　　？　　いや、俺は何かした覚えはないが」

コウサカは首を再び捻った。

自分のやっていたことなど、ただ部屋の前にいるか、たまにミレイナに頼まれ話相手になっていくくらいだと。

「　　ふふ、やっぱりそうでしょうね」

ミレイナは、まだほんの二日程度の付き合いであるが、コウサカ
の性格がわかっていようだった。

「　　ただそこにくれてくれるのって、本当はすごくかけがいのな

「いものなんですよ？ いつも当たり前前のようにあっても」

「ふ、とミレイナは寂しげな表情を浮かべた。

「本当に」

「ミレイナもエレナも、そのかけがいのなかったものを一瞬で失ってしまった。その言葉には重みがあった。

「なるほどな」

「その言葉には、コウサカも何か感じ入るものがあった。失われて
いる記憶の何かが。」

「すまないな」

「え？」

「唐突に詫びたコウサカを、ミレイナは見た。」

「だとしても、俺はアルベイへ行かねばならない。グラスギブネン
という化け物を斃すためのな」

「それにミレイナは違和感を覚えた。斃すため「に」ではなく、「
の」とコウサカが表現したゆえに。」

「いや、気にしないでくれ。関係のないことだったな」

「ミレイナの疑問に気が付いたのか、コウサカはただ目を伏せなが
らそう言った。」

「ミレイナの言葉は待たず、コウサカが顔を上げる。」

「さあ、もう休むといい。あの子も、君が部屋にいないと不安がる
だろう」

「あの」

「話すことはできない。巻き込むことになりかねん」

「ミレイナが言葉を続ける前に、コウサカは切った。」

「今はただ、自分達のことだけを考えるといい」

「はい」

「ミレイナは、これ以上聞こうとしても迷惑になるだけかと判断し
て、立ち上がった。」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

コウサカはただ目を瞑り、いつもと同じように座っていた。

次の日の朝。

黒魔族通行証が出来るまで、あと一日となった。

コウサカがただ座して待っている間、ナユキはまた同じように学校へと通っていた。

「え？ もう、ヒーリングによる治癒と応急手当まで覚えたんですか？」

ダンバートンの学校の魔法学科の先生、スチュアート先生は眼鏡がズレ落ちるほど驚いていた。

「はい」

ナユキは驚かれている理由が分からず、首を傾げながら首肯した。

「この医学書だけでも、軽く七百頁もあるんですよ？」 それに、他に渡した魔導学書だって二、三冊あつたはずですよね？」

治癒魔法であるヒーリングはただ魔法を使えるだけでは駄目で、人の身体の構造や機能など本当の医師に近い知識量がないと効果的な治癒は出来ず、また細胞の活性化も出来ず、使えるようになるには医学、魔導学の両方を習得しなければならず、それゆえに高等魔法に位置づけられているのである。

スチュアート先生がナユキに渡したのは、平均項六百項の魔導学書二冊、平均項六百五十項の医学専門書三冊である。

「そ、それを たった二日で暗記したとっ！？」
スチュアート先生は驚愕しながら言った。

普通、ヒーリングの魔法を使うのならまず医師となることを目指し、一定期間の医療活動に従事しその経験と知識を持って、その次に魔法を覚え始めて、まず早くても半年は使えるまでに掛かるはずが、ナユキはたった二日で使えるようになったのである。

「し、出血時に活性化させる細胞は？」

「えと、血小板けっしょうばんです」

「せ、正解。その血小板は血液中の何%ありますか？」

「1%です」

「正解。毒など外部から体内に侵入した有毒物質への対処は？」

「血清けっせいがあるならそれを打ち、安静にさせること。ない場合は、ウイルス・毒を排除する血液中の白血球はっけつきゅうを活性化。少ない場合はそれだけで済み、毒の量が多い場合は容態ようたいが安定したとしても、必ず後で医療設備の揃った病院に連れて行くこと。で、合っていますか？」

「正解。で、では」

それから十分ほどスチュアートからの問答もんたうは続き、ナユキはほんの一瞬の逡巡しゆんじゆんは見せたが、全てに完璧かんぺきに答えた。

「か、完璧です。あなたは一体何者なんですか？」

「その、自分でもよくわからないんです。でも、覚えたいと思ったことはすぐに覚えてしまっただけです。」

そのナユキの言葉にスチュアート先生は、はっとした表情を浮かべた。

「すみません、記憶喪失だったので。何度も申し訳ありません」

「いえ、いいんです」

少し二人は居心地の悪そうに、互いに視線を逸そらしていたが、スチュアート先生が何かを思いついたようにナユキを見た。

「そうだ！ 少し待っててください」

「？ はい、わかりました」

スチュアート先生が、教室の奥にある自分の研究室に走って行ったかと思うと、すぐに何かを手に戻ってきた。

「これを」

「？ これは？」

ナユキは差し出されたものを手に取る。

それは木で出来た杖だった。杖の先には、石のようなものが詰め込んであった。

「それはマジックワンドと呼ばれるものです。詰め込んであるのは魔石です。使用者の魔力を増幅し、より効果を強いものにしてくれます」

「あの、どうしてこれを？」

スチュアート先生は、小さく笑みを見せた。

「あなたが卒業だからですよ」

「え？ ええっ！？」

今度はナユキが驚く番だった。

「ほ、本当なんですかつ？」

「ええ、本当ですとも。いや、ははは。まさかたった数日で卒業するとは、思ってもみなかったですよ」

そう笑うスチュアート先生は、さきほどの表情など消え失せ、素直に優秀な教え子の卒業を喜んでいた。

「ところで、何故突然ヒーリングを覚えたいなどと言い出したのか、聞かせてはもらえないでしょうか？ あの時のあなたは、必死な表情をしていたので」

教室には、ナユキとスチュアート先生の二人しか居なかった。他の生徒は、屋外練習場で魔法の試し打ちをしている。

ナユキは、その言葉に俯いた。

「わたしは、だから」

「？」

ナユキの声は小さくてスチュアート先生には届かなかった。

「わたしは」

そして、顔を上げたナユキの顔は、今にも泣き出しそうだった。

「わたしはっ、わたしはお荷物なんです！ コウサカ

さんは命懸けでっ！ でも、いつも平然としていて

気にするなって言うんです。わたしのことなのに、

わたしは何も出来ないんです。でも、力では何も出来ない

いから、せめて他のことで、お役に立てれば うつく

最後の方は涙声なみだこえになっていて、スチュアート先生は聞き取れなかったが、それでもナユキの胸の内を理解した。

泣きながら手の甲で涙を拭ぬぐっているナユキの肩に、優しく手が置かれハンカチが差し出された。

「なるほど そういうことだったんですか」

スチュアート先生は、心中で得心していた。

コウサカの噂うわさは、すでにダンバートンの誰もが知っていることである。そして、ナユキを見れば、噂通りの人物であろうということも。

そういう人物であるからナユキをここに通わせ、そしてナユキという少女はこうなのだろうと。

「人と言うのはですね」

「え？」

唐突どうつとに、スチュアート先生が話し始めた。

「人には、向き不向きというものがあります。もしそれがどんなに納得できないことだとしても、人は人である限り、向かないことがあります。わかりますね？」

「ぐす ふあい」

涙声のまま、ナユキは頷うなづいた。

「コウサカさんは、恐らく、そういったこと、はあなたには向かないとよく理解しているのでしょう。あなたは、何か行動をしようとしてコウサカさんにきっぱり拒否きへいされたことはないですか？」

「ありまむ」

ナユキの脳裏には、ラビダンジョンに馬を飛ばして行った時のことが再生されていた。

「後からよく考えて、その行動は間違っていたと思ったことはないですか？」

「はい」

ミレイナが、昼食を作りに一階の厨房を借りに行っている間、コウサカはいつもと同じようにエレナの相手をしてやっていた。ちなみに、朔絆はナユキの部屋で昼寝をしている。

(これが、幼児退行というものか?)
始めて会った時とは違い、今のエレナはひどく素直で無邪気だった。

「その煙は、どんな色をしていた?」

「んー、紫色かな?」

「それは、まずい色だな」

少し苦笑いを浮かべながらコウサカは、「だよ」と頷いているエレナを見る。

(この子が、俺が出て行くことを知ればどうなるだろうな)
コウサカがそう思っていると、扉が開いて食事を盆に載せて手に持ったミレイナが戻ってきた。

「あら、何を話しているの?」

「お姉ちゃんが調査失敗しちゃった時の話」

「ち、ちよつと! もう何て話をコウサカさんにつ

ミレイナは、慌てた様子で顔を赤らめた。

恥ずかしそうな顔のまま、ミレイナはコウサカを見た。

「こ、コホン、コウサカさんもどうですか?」

ミレイナは、視線で盆の載った食事を示した。

「ああ、頂くとしよう」

いつものように、コウサカは昼食と一緒に食べるようになった。

昼食を食べ終わり、ミレイナが食器を下に持って行った頃、エレナが静かに口を開いた。

「明日、行っちゃうんだね」

「ああ」

ミレイナが話したか、と思いつながらコウサカは首肯する。

「何をしに？」

「魔族の本拠地を潰しに行く」

エレナの質問に、少し疑問を感じながらもコウサカは言う。

「そう　あいつらを」

そこで、エレナの気配が一変した。

「あたしも、あいつらを殺したい」

それは、素直で無邪気さがあるゆえに、異様な気配だった。例えるなら小さな子供が面白がって、小虫の足を一本ずつ千切りながら残酷に殺す時のような、そんな気配。

コウサカは、首を横に振る。

「殺すことが目的ではない。それは手段のひとつであって、それ自体がそうではない」

「同じだよ」

「確かに客観的に見ればそうだろう、とコウサカは一度沈思する。

「復讐がしたいのか？」

「復讐」

コウサカの言葉に、エレナは笑みを浮かべる。

「そう　お姉ちゃん達がされたこと、同じことしてやるんだ。

あいつらも」

そこで何かエレナの頭の中でスイッチが入ったようだった。

それは狂気。

「殺してやる　殺してやるっ　！　許さない　絶対に

許さないっ　。　あたしは、あいつらを　」

「コウサカは静かに、エレナの顔の上半分を軽く掴むようにして視界を覆った。

「死人のために死んで、それで君を生かすために死んで逝った者が喜ぶのか？　君の姉妹達は、そう願うような者だったのか？」

コウサカは、ミレイナから聞いた事の顛末での、エレナの姉妹の

散り際のことを言う。

エレナの狂気が薄れた。

「でも　でも、やっぱり悔しいっ

エレナの目から涙が頬を伝った。

「あたし達何もやってないのにつ　何もしてないのに一方的に

されて　悲しいよっ　悔しいよっ　！　何でやり返す

のがダメなのっ　？！」

エレナの当然の物言いに、コウサカは一度小さく息を吐いた。

「憎しみから生まれるものは憎しみだ。憎しみが積もってくれば、

その者は汚れていく。狂気に支配され、殺すことの意味すら失う。

特に、君のような純粹な憎しみは余計にな」

目的がただの「復讐」で終わるなら、それでいい。しかし、目的が「殺す」ことに成り代わってしまった時、その人間は壊れるのである。

それを言ったコウサカは、頭の中に鋭い痛みを覚えていた。

それを知っているということは、自分はそう人間か、それともそういう人間を相手にしたことがあると思いつながら。

「だから、俺が殺す」

「え　？」

コウサカが、エレナの顔から手を外しながら言う。

「その穢れのない手を汚すな。その汚れ役は俺が引き受ける。君らは、ただ普通の少女に戻るように頑張るといい」

ティルコネイルのアルビダンジョンで、コウサカは初めて命を奪うことをしたはずだった。ただ、その時は魔物相手だからと、それで割り切っていたのだと思っていた。

しかし、隊商の馬車がオオカミの大群に襲われて来た時、一瞬の躊躇はあったが、それでも何の迷いもなくオオカミ達を絶命させ続けた。それでコウサカは自分自身に気付いたのである。

自分は殺し慣れている。そして、それを割り切れるだけの場数を

踏み、理解するほどの存在であるということ。

「君は知っているのか？ 生き物の殺した時の感触。断末魔^{だんまつま}。飛び散るその生き物だったものの一部。その光景。殺した相手の目。そして、目の前で消えかけた命の灯火^{ともしび}が無造作^{むぞうさく}に、無慈悲^{むじひ}に、残酷に消えていく姿。それを消した己の姿を」

失った記憶の中で、確かにそうであった自分と同じにならせてはならないと、コウサカはエレナを止める。

「っ」

そう言ってくるコウサカ言葉に、目に、態度に、纏^{まと}う雰囲気^{ふんいき}にエレナは慄然^{りっぜん}とした。

「全く分らないというなら、知ろうとするな。踏み込もうともするな」

「あ う」

エレナは小さく震えながら、言葉を失った。
そんなエレナの頭に、コウサカは優しく手を置く。

「だから、ここから先は俺がやる」

その言葉は力強く、そして優しくかった。

「でも でもっ ! それじゃあんたがっ」

「何も問題はない。どの道、ミレンシアである俺はそういうものだ」
その言葉に、エレナは何か違和感を覚えた。

「？」

「いや。ディーファは俺が必ず殺す。だから、復讐^{ふしゅう}など考えず普通の少女として生きる道を考える」

違和感の正体は分からなかったが、心から自分達を案じ、優しく頭を撫でてくれるコウサカに、エレナは自分の心が温かくなったことを感じた。

そして、その口調、性格までもが戻る。

「あんたは あんたは本当に何なわけ ? あたしに
は死ぬなって言って、自分は死ぬ気なの ? わけわかんない」

いよっ 「！」

頭に手を置かれたまま、エレナはコウサカを見上げる。
その目からは、また涙が零れ落ちていた。

「死ぬ気などない。それしか手がないというのなら、そうするがな」
自分の命ですら、目的達成のための手段のひとつだと、コウサカは言い切った。

「俺は、'本当の意味'でのミレンシアだからな」

「？ どういう、こと？」

コウサカは、エレナの頭から手を離れた。

「世界の いや、やはり知ろうとするな。もう君らは、ちなま血生臭い世界にいる必要はない」

「なに、それ。 はっきりしてよっ !?」

コウサカは目を伏せる。

「すまない」

それは、はっきりとした拒絶の意思表示だった。

「っ」

「すまない」

同じ言葉を、コウサカは繰り返す。

「謝るなっ ! あやまる んじゃ ない

う うう 何で 何で泣いてんの、あたし うあ

うああああっ 「

自分でも、その理由も分からずエレナは涙する。

「 なんて なんて 「

そのエレナを、コウサカは静かに佇たたずんだまま見つめた。

「 やっぱり 「

ミレイナは、身体を両手で抱くようにしながら扉に背を預け、部屋の中から聞こえる話を聞いていた。

「コウサカさん」

すでに、コウサカからダンバートンを発つことは聞かされていたが、その覚悟が思っていたものと段違いだった。

「自分達のやらなければならぬことは、復讐などではないことをミレイナはよくわかっている。コウサカの作ってくれた時間の意味も、よく理解していた。」

ただ、ミレイナは不安で仕方がなかった。

本能的な何かが、コウサカという青年との別れに対して、何かを発信している。

それはまるで、ネル達がいなくなる時に感じた、嫌悪感にも似た強い不安だった。

第十七章 キスと朴念仁

黒魔族通行証が完成する日の朝。

装備を全て付けたコウサカは、聖堂にクリステル司祭の下を訪れていた。

「『門』？」

「はい。その通行証を、『門』に当ててください。それで道が開きます」

二人は最初と同じく、聖堂の中で鍵が掛かる部屋の中で話していた。クリステル司祭以外は、朝の清掃活動や屋外での祈りといったことでいなかった。

コウサカは、手渡された通行証に目を向ける。

「その『門』というのは、ダンバートンにもあるような、あのような感じの門ですか？」

「はい。二対の石柱が両脇に立っているので、一目見れば分かると思います」

コウサカの言葉に、クリステル司祭は頷く。

「感謝します、クリステル司祭。こんなことに労力を使わせてしまい、申し訳ない」

コウサカは、頭を下げる。

「こんなことだなんて。元々は私達魔族が」

コウサカは、黙ってクリステル司祭の顔の前に指を立て、言葉を途切れさせる。

「今の貴女は、クリステル司祭です。魔族など何の関係もない」

「そう、でしたね。ありがとうございます。本当に何を言っているのかしら」

クリステル司祭は、柔らかく微笑んだ。

そんなクリステル司祭に視線を向けながら、コウサカは訪れたもうひとつの用件を切り出した。

「俺がここを発つに当たって、もうひとつお願いしたいことがあります」

コウサカは、口調こそはいつもよりは丁寧であるが、一人称は変えずまるで友人に話すような口ぶりになっていた。

「なんででしょうか？」

「俺は、二人のサキユバスを匿っています」

「っ！？」

クリステル司祭が、息を呑んだ。

「それは、本当に？」

「恐らく、耳に入っているでしょう。件のラビダンジョンに住んでいた二人です」

ラビダンジョンの崩落は、街の中でもハンター達の話から噂となつて知られていた。

クリステル司祭が、真剣な表情を浮かべた。

「なるほど。あなたは、通行証の一件でその二人と知り合っていましたね。だからですか？」

「ええ」

本当は五人だったのですがね、などと余計なことはコウサカは口にしないで首肯する。

「その二人のことを、お願いしたいのです。金銭面のことならば、俺が何とかします」

「いえ、それはいいのですけど　その二人のことは、あと誰が？」

「領主様と、その近しい者だけです」

クリステル司祭は、気難しげにコウサカから視線を逸らした。

「無理は承知で言っています。だが、もしもの場合、領主様ではあの二人のことは手に余ってしまう」

コウサカは、クリステル司祭の立場と心中も理解している。しかし、他に二人を任せられる相手がいないのだ。

「 わかりました。その二人は ？」
「連れて来ます」

覚悟を決めたような表情のクリステル司祭を部屋に残し、コウサカは出て行った。

数分後、ミレイナとエレナに事情を話し、聖堂へと連れて来ていた。

「 微かに洩れる、しかしコウサカくらいにしか聞こえないほどの声量を耳にしながら、コウサカは三人がいる部屋の外で扉の横で壁に背を預けていた。」

どの道、コウサカは発つ。だから話を聞いても仕方がないため、外で見張りをすると言ったのである。

「 なんて、そんなに構うのさ」

朔絆が、コウサカの肩に実体化をして座った。

「 恩がある」

「 それがなかったら ？」

コウサカは一度目を瞑り、少しだけ黙考した。

「 だとしても、恐らく手を出していたと思う」

「 だよな」

そう言う朔絆の声は、嬉しげでもあり、どこか切なげでもあった。

朔絆は俯いているため、コウサカにはその表情は見えない。

「 どうした？」

「 なんでもないよ、バーカ」

「 むう」

コウサカは、意味が分からず小さく唸った。

「 ねえ」

「 今度はどうした？」

一転、朔絆は不安そうに言った。

「大丈夫なのかな」

「何がだ？」

主語を付ける、と心中で言いながらコウサカは聞いた。

「この先、今までよりもずっとヒドイことになるよね」

「だろうな」

コウサカは、何も気にしてない風に言った。

「だろうなって　　今度のは本当に危ないかもなんだよ？」

「？」

「危ないだろうな」

同じような口ぶりで、同じようなことをコウサカは言った。

「死ぬかも　　しれないんだよ　　？」

朔絆は、それを心底信じたくないという表情を浮かべて、コウサカを見上げた。

「かもしれないな。だが、俺はミレンシアである以上行かねばなら

ん」

「いやだよ」

また朔絆は俯きながら言う。

「あたしは、あんたが死ぬのいやだよ　　ずっと一緒にいたい

よっ　　！」

朔絆は肩から消え、コウサカの目の前に完全実体化をして立った。

その目には、大粒の涙を浮かべながら。

「　　」

一度、コウサカは目を瞑り、静かに息を吐いた。

そして、その口から出た言葉は何とも気楽そうなものだった。

「そうか。なら、死なないとする」

「ふえ　　？」

涙を浮かべながら、朔絆は意味が分からずキョトンとした。

「俺が死ぬのが嫌だと言うのなら、死なないようにするとする。それでもいいか？」

いつものように、コウサカは朔絆の頭の上に手を、ポンと置きな

がら言っ。

朔絆は涙など引つ込み、思わず笑ってしまった。

『ふ、あはははっ、な、何それ？ バツカじゃないの？』

「馬鹿とは何だ。真面目に答えてやったものを」

『だから、バカだっって言ってんのっ！ あはは、もうっ、真剣に悩んじやった自分がバカみたいじゃないのさ』

それに、コウサカは少し不満げな顔をした。

「何故お前が悩むと、俺が馬鹿呼ばわりされなければならぬ」

『ふん、知るかっ！』

コウサカは頭痛でもするのか、額に手をやった。

ただ朔絆の表情は、とても楽しげで生き活きとじていた。

宿屋アリアンロッド。

「はあっ！？ 明日出てくうっ？！」

ミレイナとエレナの二人は、聖堂に居を移すことになった。

聖堂近くにはハンター宿舎があり、またクリステル司祭は人気なため人気も多いため、安全性はコウサカがいなくなった宿屋にいるよりは高いからである。

ちよっとした事件があり、朔絆が非常に不機嫌になってしまったが、コウサカはとりあえず世話になった、いや逆に世話を焼いたのだが、カリンに発つことを伝えるに宿屋へと戻ってきていた。

「ああ」

カリンは素っ頓狂な声を上げながら驚いたが、コウサカは何故そこまで驚いているのか分からず、素っ気無く頷いた。

「何でそんな急っ！？」

「いや、急というわけではない。一週間前には決まっていたことだ」

「言えよっ！」

うがー、とカリンは両手を振りながら怒った。

「？ だから、こうして言いに来ているだろっ？」

「一週間前に言えつて言つてんのっ!」

コウサカは首を捻る。

「何故、言つ必要がある? 君は旅には同行しないだろう」

「う　　そ、そうだけど!」

至極当然なことを言われて、カリンが怯む。

「でも、せつかく仲良くなったのに　　寂しいじゃんか」

「　　俺の覚えが確かなら、買出しの荷物持ちに山菜取りの護衛にと、散々使われた覚えがほとんどなのだが」

「う　　」

これまた、カリンが怯む。

それを見て、ふうとコウサカは軽く息を吐く。

「すまなかつた」

「え、え?」

唐突に詫びられ、カリンは目を白黒させる。

「そこまで気にすることだったか。次からは、言つとしよう」

「え、あ、その　　えと、ね?」

言葉が見つからず、カリンはあたふたとした。

「まあ、そういうわけで明日発つ。世話になった」

言葉を搜しているカリンに構わず、コウサカはさっさと背を向けて階段を上がるうとした。

「あ!」

何か思いついたのか、カリンが大声を出した。

それにコウサカは振り返った。

「どうかしたか?」

「あ、そのっ」

言ってしまったてから後悔したのか、カリンを頬を染めながら、しかし意を決したようにコウサカを見た。

「へ、部屋空けとくから、また来なよっ!」

それにコウサカは、少しだけ驚いたような顔をした。

「ああ、またダンバートンに来れば寄るとしよう」

カリンには、完全武装をしていて兜のせいで顔の半分も見えないが、コウサカが少しだけ笑みを浮かべていたような気がした。

「まあ、何にせよ」

階段に向き直ったコウサカが言う。

「それは、出て行く際に使う言葉だと思いがな。発つのは明日だ」

「あ　　~~~~っ！」

カリンは顔を真っ赤に染めながら、その場で意味もなくバタバタしていた。

今度は振り返らず、コウサカは階段を上がって行った。

コウサカは久しぶりに自室に入り、いつも通り壁に背を預けて休んでいた。

ただ朔絆がものすごく不機嫌なのを通り越し、けんあく 険悪そうな顔でコウサカのことをずっとベッドの上で座りながらにら 睨んでいた。

「一体、急にどうした？　まさかさっきの「あれ」のせいかな？」

「あれ」はミレイナもお守りと言っていたから大したことでは、とコウサカは首を捻る。コウサカには、何故したのかは全く分かっていないが。

と、廊下の方からドタドタと慌てたような足音が聞こえた。

「コウサカさ　　へぶあっ!?!？」

扉が開いてタクトが顔を出したかと思ったら、いきなりぶっ飛びながら前に倒れた。

「邪魔！　コウ、明日行くってホントっ!?!？」

カグヤがタクトの後頭部に、必殺蹴りを炸裂さくれつさせたようだった。

「おい、タクトが動かなくなったが」

後頭部に必殺蹴り、顔面を床に激突させたタクトは、ピクリともしなくなっていた。

「そんなこと、どうでもいいから!！」

いいのか、と心中でコウサカ。

「い」
コウサカが目を向けると、タクトがプルプルしながら起き上がっていた。

「いつてえええなつ、てめえ!! マジで殺す気か?!」

「急いでんのに、あたしの前にいるからでしょうが!」

「は!? お前メチャクチャだぞ!」

やいのやいの、ぎゃーすかぎゃーすか。

コウサカがふと見ると、険悪だった朔絆がより凶悪な顔付きになっていた。

そして、そら恐ろしい無表情で一言ポツリと呟いた。

「ぶち殺されたい?」

それは殺気が濃縮されたような、恐ろしい一言だった。

種類と度合いは桁違いだが、以前コウサカがディーファを圧倒した時に出したような殺気に似ていた。

「ヒイッ! (ガタガタガタガタツ)」

一瞬で二人は真つ青になって、ガタガタ震え始めた。

「おい、朔絆」

朔絆を見たコウサカが、ふと何かに気付いたように動きを止めた。

「タクト、カグヤ。外で話すぞ」

一人だけケロリと、平気な顔をしているコウサカは、頭痛にでも耐えているように手の平で目元を覆った。

「は、はいっ!」

それは二人のためでもあった。

しかし、朔絆のためでもあった。

「コウサカがチラリと、部屋を後にする時見た朔絆の顔は、まるで大好きな玩具おもちゃを取り上げられた子供が拗ねたような、それでいて。

「ひっう バカあ」

切なそうだった。

一同は、宿屋を出て表通りに来ていた。

「ま、マジで走馬燈が見えた」
部屋を出たタクトの第一声は、それだった。

「う、ううううう (こくこくこくこくこく)」
まだ顔が青いカグヤも、何度も頷いていた。

「やれやれ」
一人コウサカだけが、呆れたように溜息を吐いていた。

(またやったか)
そう胸裏で呟きながら。

「はあ。あ、そうだった。コウサカさん明日出て行くって本当すかつ!？」

気を取り直したタクトが、コウサカに掴み掛かる勢いで聞いた。

「ああ」
コウサカは、にべもなく答えた。

「何で教えてくれなかったんすかつ!？」
カリンと同じ質問をされ、コウサカはまた首を捻った。

「明日、出て行く時に一声かけるつもりだったが」
「それじゃ遅いんすよつ!」

「ふむ、とコウサカは顎に手をやる。
「だが、君らは旅に同行はしないだろう?」

だから言う必要はない。
それにタクトは顔をしかめた。

「いくら いくら何でも冷た過ぎるつすよ! 友達にも何にもないんすかつ?!」

「友達?」
それに、コウサカは首を捻った。

「友達とは何だ?」
「んなつ!」

タクトが絶句した。

そして、固まったタクトに代わって、今度はカグヤがコウサカに喰いついた。

「コウツ！ 今のはいくら何でも酷すぎるよ！！」

「？ 俺は『友達とはどういう意味』か、と聞いたただけだが」
ピタリとカグヤの動きが止まった。

「え、まさか 友達って、言葉の意味が分からないってこと？」

コウサカが頷く。

「うそおつ？！」

今度はカグヤが喫驚した。

「え、うそ、あれ、え、ええええっ？ ほ、本気で言っ て、

コウは冗談言うタイプじゃない、よね」
カグヤが溜息を付いた。

「コウのことだから、友達がいないんじゃないで、気付いてないだけだと思うけど ああ、もう！ こんな話しに来たんじゃないのっー！」

と、絶句していたタクトが、はたと何かを思いついた。

「コウサカさん！」

「どうした」

コウサカはタクトの方に目を向ける。

「その旅、コウサカさん達『だけ』しか行っちゃいけないんすか！？」

「ふむ？ いや、レオナルド団長揮下の騎士団も共に行くから、俺達だけで、ということは無いな」

それを聞いたタクトは、目を輝かせた。

「わっかかりましたー、どもっす！ 行くぞカグヤ！」

「は、え、ち、ちよっと引っ張らないでよー！」

タクトはいきなりにカグヤの腕を掴むと、そのまま一方的に走り出した。

走り遠ざかりながら、タクトはコウサカを見た。

「また明日っすー！」

「ふむ」

何故タクトが急にあんな行動をしたのか分からず、コウサカは首を捻るが分からず、早々に考えを放棄した。

コウサカが部屋に戻ると、朔絆がベッドの上で不貞腐れた様子で、しかし涙の跡が残った顔で寝息を立てていた。

「俺が何をした」

コウサカは溜息を吐きながら、朔絆の傍らに腰を下ろす。そして、優しく髪を撫でてやった。

「ん ふぁ んん ばか あ うん 』

夢の中でまで、コウサカは罵られているようだった。

（やはり、「あれ」か？ それほどの行為だったのか？）

コウサカは、ミレイナとエレナの残っていた残り香を鼻に感じながら、回想した。

コウサカは、ミレイナからキスをされたのである。

時は戻る。

ミレイナとエレナ、クリステル司祭の話し合いが終わり三人が部屋から出てきた。

「終わったのか？」

コウサカは壁から背を離しながら、一番最初に出てきたミレイナに聞いた。

「はい」

コウサカを見たミレイナの顔は、どこか寂しげだった。

そして、寂しげな笑みを浮かべながら言う。

「本当に　　ありがとうございました」

「ああ」

コウサカはそれを鼻にかけるでも、恩を押し付けようとする様子もなく、ただ興味も無さそうに頷いた。

「　　ふふ、あなたは本当にそうなのですね」

「何のことだ？」

コウサカは意味が分からず、首を傾げる。

「いえ、何でも。あの　　」

突然、ミレイナは恥ずかしそうに頬を染めた。

そして、何故かチラリとエレナとクリステル司祭を見た。

「　　はあ、もう。好きにしなよ」

「　　」

エレナは呆れたように溜息を吐き、クリステル司祭は微笑を浮かべながら黙って頷いた。

「？」

アイコンタクトの意味がさっぱり分かっていないコウサカは、首を傾げた。

「　　うゝ」

同じく意味はわからなかったが、何かを察した朔絆は警戒するよ
うに唸った。

「　　」

一瞬、ミレイナは朔絆を見たが、意を決したようにコウサカを見
た。

「あの　　、少しお話しませんか？」

「い、いい風が吹いていますね」

「そうだな」

コウサカとミレイナは、聖堂の裏から行くことの出来る城郭の上
に来ていた。

ダンバートンを囲む城郭の上には道が作られ、見張りや敵頭上からの迎撃が出来るようになっていた。

そして、見晴らしもよかった。城郭よりも高い建物は官庁くらいなため、視界を遮るものが一切無く、街や景色が一望できる。

ちなみに、今のコウサカは朔絆を持っていない。

ミレイナが大事な話だからと、真剣にコウサカに懇願こんがんしたためである。しかし、どうしても朔絆はコウサカから離れようとせず、クリステル司祭に預けるもの断固拒否したため、仕方なくコウサカは離れた位置の聖堂の壁にクレイモアを立て掛けてきたのである。

(バカバカバカバカバカバカバカッ　！)

その胸裏きょうりに何を想うか、コウサカが気付くはずはなかった。

「
」

コウサカとミレイナは、ミレイナの願うとおりに二人きりである。

だが、しかし。

「あ
」

「どうした」

「えと、その　な、何でもっ」

先ほどからずっとこれである。

ミレイナは真っ赤な顔でもじもじして、コウサカを見ようともしない。

だが、その理由をコウサカが気付くわけが無い。

「？　大事な話があると言っていないかったか？」

「え、あ　その　あります」

コウサカが隣に並ぶと、ミレイナは俯うつむいてしまった。

「話したくないことなら、無理に話す必要は無い」

「は、ひ、必要あります！」

急に、バツとコウサカをミレイナが見上げた。

「なら、何故話さない？」

「え、あ、そ、それは、その　はっ　」

また真つ赤な顔で、ミレイナはコウサカから視線を外すと俯いた。

「そんなに深刻なことなのか」

その様子に、コウサカは見事に勘違いをした。

「まさか魔族には、空間移動の魔法が存在するのか？」

「はい　？」

ミレイナが、目を瞬かせながら顔を上げた。

「それなら確かに深刻だな　。ダンバートンがいくら防備を固めてあるとしても意味が無くなる」

コウサカは顎に手をやりながら、真剣に考え始めてしまった。

「君は、その魔法のことは何か知っているか？　いや、魔法ではないのかもしれないが、何か危惧することがあるのだろうか？」

しばしミレイナはポカンとしていた。

「ふ、ふふ　　あは、あはははっ」

そして、急にこれ以上可笑しいことはない、という感じに笑い出した。

「？　どうした」

「あはははっ　　ふ、ふふつ　　ご、ごめんなさい。」

ふふつ　　だ、だつてつ　　んふふふ　　」

ミレイナは、目に涙まで浮かべて笑い続けた。

「クスクス　　はあっ、もう久しぶりですよっ？　こんなに笑わされたの」

浮かべた涙を手で拭いながら、ミレイナは実にすっきりした表情を浮かべていた。

「？」

ただ、コウサカだけは何のことか分からず、始終首を捻っていた。

「あはは、分かりませんよね。それでいいんです」

「？　ふむ、わかった」

ミレイナは清々しく穏やかな笑みを浮かべながら、後ろで腕を組みながらコウサカに身体ごと向き直る。

そして、一陣の風が吹き抜けた。

ミレイナの腰に届くほどの長い髪が、風に流されなびいた。金色の髪が宙を舞うその光景は、美しかった。

ミレイナは舞う髪が顔に掛からない様に片手を耳の当たりに持つていき、髪を押さえながらコウサカを真っ直ぐに見る。

「お願いがあります」

「ふむ？ ああ、何だ」

コウサカは先ほどのことがまだ分からず、首を傾げながら頷く。

「兜を取って、目を瞑って少し屈んでもらえないですか？」

「？ ああ」

コウサカは言われた通りに兜を脱ぐと、目を瞑って屈んだ。

それは、ちょうどミレイナと同じくらいの顔の高さだった。

「」

ミレイナは、今からしようとしている自分の行為を考えて、また顔を真っ赤に染めた。

目の前にはコウサカの顔。

その顔は今していることの意味が分からず、少し怪訝そうな顔をしていた。

「」

覚悟を決めて、ミレイナは少しずつコウサカに顔を近づける。

横一文字に引き締められている、コウサカの唇が近づく。

桜色の唇を小さく震わせながら、ミレイナは目を細めながら近づく。

ゆっくりと。

静かに。

互いの唇が触れ合うまで、あとほんの僅か。

あと、五cm。

あと、四cm。

ミレイナは目を閉じる。

あと、三cm。

あと

『あああああああああああああーっ?!』

ビクリと、ミレイナは動きを止めた。

それと同時に、コウサカは目を開けるよりも速く顔を声の方に向けた。

「どうした!？」

コウサカは屈んだまま、腰の剣の柄を掴みながら声を発する。

『なっ、ななっ、なななななななっ』

『!』

その視線の先には、真っ赤な顔で聖堂の隅から顔を出している朔絆が、口をわななかせながら立っていた。

「? 一体どうした」

コウサカはその姿と、周りに何の異常もないことを確認すると、柄から手を離しながら拍子^{ひょうし}抜けしたような表情を浮かべた。

「クス」

少しの間、ミレイナは呆気^{あっけ}に取られていたが、口に手を当てて小さく笑った。

そして。

「チュ」

静かにコウサカの横顔に顔を近づけると、ミレイナはその頬に軽くキスをした。

『ああああああああっ』

『!』

「?」

朔絆は目を見張りながら大声を出し、コウサカは意味が分からずミレイナに顔を向けた。

「お、お守りです。あなたが、無事にまたここに戻って来れるようにするための お守り」

ミレイナは赤い顔のまま、コウサカの瞳を真っ直ぐに見ながら言

った。

「あ、ああ。そうなのか」

「コウサカはそれで納得してしまった。」

「クス　　はい、そうなんです」

その時浮かべていたミレイナの笑みは、とても魅惑的みわくてきで、
轟惑的こわくてきで。

そして、切なく寂しげだった。

コウサカが回想を終えた頃、朔絆が目を覚ました。

「起きたか」

「バカ　　」

朔絆が起きて第一声が、それだった。

「まだ機嫌が直らないか」

「バカツ、バカツ　　バカあ　　」

朔絆は、装備を外してアンバーウェア姿のコウサカの背中をポカポカと、しかし力無く殴った。

「ふむ」

コウサカは顎に手をやる。

「あの行為については、ミレイナはお守りと言っていたただが、違うのか？」

そのあまりにも馬鹿過ぎるコウサカの問いに、朔絆は勢いよく顔を上げた。

「はあっ！？　そんな理由だけでキスするわけないでしょっ！！」

「キス？」

それに、何故かコウサカは首を傾げた。

「それがあの行為の名称めいしょうか？」

そのコウサカの言葉に、朔絆が目をまんまるにして驚いた。

「　　は、はあっ！？　え、ちょ、うそ　　え　　？　　ほ、ホント、なの　　？　キスって、ホントにわかんないの　　？」

「そう言っているだろう」

そういう言うコウサカの顔は、嘘を言っているようにはとても思えなかった。第一、付き合いの長い朔絆は、コウサカが嘘を言うタイプではないことをよく分かっている。

それでも、あまりの異常さに聞き返せずにはいれなかったのだ。

『いくらなんでも 記憶喪失っただけじゃ、説明つかないよ』

「ふむ」

コウサカは最初から、自分の身体能力を最大限生かす動き方は知っていた。また、この世界の言語、文字、魔法体系と言ったものも知っていた。

『普通、身体というか 感覚でわかんない？』

「いや」

ただ、普通の人間としての感覚と言うものが欠落し過ぎていた。

その中でも、好意というものが無さ過ぎた。

誰しもに優しく、強く泰然たいぜんとしたその姿に、羨望せんぼうと好感を抱く者は多かった。

しかし、その全てに気付かず、ただいつも同じように立ち続けていたのがコウサカという青年である。

と、コウサカがいきなり話を変えた。

「お前が怒っているのは、その、キス、というもののせいかな？」

『え、あ、うん』

「それは何故だ？」

『そ、それは、』

あんたが好きだから、何て朔絆が言えるわけが無く。

『 なんでもない』

しゅん、と気落ちしたようにベッドの上で朔絆は俯いた。

「よくはわからないが」

朔絆の胸裏は分からなくとも、落ち込んだことは分かったコウサカは、朔絆の頭をベッドに腰掛けながらくしゃっと撫でた。

そして、少し涙目になった。

(ホントに、バカあ)

果てしなく鈍いくせに、真っ直ぐ過ぎだよ このバカは。

言いたくても 言えない事だってあんのっ、気付けバカっ。

ホントに どこをどうやれば、こんなヘンテコな人間になん
のさ。

『 じゃあ 』

心の中で散々悪態をつきながら、赤い顔で朔絆はコウサカの瞳を
見つめ返す。

『 そのまま目、閉じて 』

「 ? 何だそれは? 」

『 いいからっ、閉じろ! 』

「 ふうむ 」

少し前にも同じ事を言われているくせに、また意味が分からない
という顔のままコウサカは目を閉じた。

(よ、よしっ)

朔絆はコウサカとは身長差があり過ぎる為、ベッドの上で膝立ち
になる。

『 ~~~~~ 』

益々顔を赤くさせながら、朔絆はコウサカの肩に手を置く。

コウサカと朔絆の身長差は、約四十cm。座っているコウサカと
は、ようやく膝立ちで同じ高さだった。

普段とは違う高さにあるコウサカの顔に、朔絆は顔を近づけてい
く。

それでもようやく同じ高さなため、身体を預けるようにして密着
させながら近づけていく。

赤い顔で、とろんと陶醉したような表情のまま、朔絆は目を細め
ていく。

朔絆の心臓は、コウサカにすら聞こえるのではないかというほど
大きく脈打ち続ける。

ふと朔絆が気付いた。

『あ、あれ　？　こ、コウサカ？』

顎に強烈なものを喰らって、ベッドに倒れたままのコウサカに。

『えっ、あっ、や、やり過ぎたっ　　！　　ちょ、コウサカツ、コ

ウサカツ！』

朔絆が強く揺すっても、コウサカはピクリともしなかった。

『あ、う　　や、ヤバイっ！　これはマジヤバイって！　ちょ、

起きてっ、起きてよコウサカツ！！』

全て朔絆のせいなのだが、涙目で必死な様子でコウサカをずっと揺すっていた。

ミレンシアであり、恐らくウルラ大陸最強の力を有する青年、その名はコウサカ。

エリンに来てから初めての戦闘不能。

原因。

相棒からのほぼ八つ当たりに近い見事なアップーカット。

。

出発はとうとう明日の朝となった。

第十八章 発ち往く（前書き）

一ヶ月ぶりとなります。

お目を通して下さっている方々、遅れに遅れ誠に申し訳ございません。

また、もし暇つぶしの楽しみ程度で待っていてくれる方がおられましたら、そちらも本当に申し訳ございませんでした。

まだ読んで頂けるのなら、お目を通した方々に少しでも快い時間を過ごされることを祈ります。

第十八章 発ち行く

起伏が激しく山道と見間違える街道を、銀光眩い物々しい集団が黙々と進んでいた。

彼らの進んでいるそこは、ガイレフと呼ばれていた。

過去にセンマイ平原と呼ばれる平原　　しかし今では大戦の影響で巨大なクレーターと廃墟しかない　　で起きた大戦時、人間の軍隊が駐屯した広大な地である。

ダンバートンに近い北側には起伏激しく、緑豊かな森と背の低い草むらの広がるそこは動物やモンスターの蔓延る山々であった。

しかし、そこから南に進むと景色は一変する。

日差しが強く乾燥した気候のせいで乾いた赤い地面が続ぎ、枯れ草、枯れ木、剥き出しとなった岩石しかない。

そして、数十mはあるうかという巨大なドラゴンの石像のようなもしくは遺跡と思われるものが発掘されている。

それが一体何なのか、何故あるのか。その全てが謎のまま、ただ発掘だけが続けられていた。

縦列で進む馬車の周りを、騎兵達が松明を片手に進んでいた。

その馬車の御者台で手綱を握りながら、コウサカは静かに目を伏せていた。

コウサカ達は、まだ北側に入ったばかりのところを進んでいた。ダンバートンから出立し、ガイレフの山間に入るだけですっかり日が暮れてしまった。

いい加減馬達も疲れているだろうから、そのうち夜営の準備を始めよう。

オグマ騎士団は、五十の騎士をダンバートンに残し百五十でバン

ホールを目指していた。

騎兵は六十五。他は全て歩兵として二頭立ての馬車に乗っていたが、全ての者は騎兵にも、弓兵にも、魔術兵にも、応急処置おうきょしょじの出来る衛生兵にも、どんな兵科へいかにもなることが可能であった。

「コウサカは目を開け、幌馬車の中を見る。

「すうー すうー」

ナユキがあどけない表情で、毛布くもに包まり眠っていた。そして、その隣を見て小さく溜息を吐く。

「すう すうん」

「すかー すぴー」

カグヤと、タクトが寝息ねいきを立てていた。

時刻は早朝の六時前。

天候は、雲ひとつなく快晴也かいせいなり。

ダンバートン南門の外には、騎兵と馬車が隊列を組んでいた。

「領主様。これはどういうことですか？」

「あ？ 見りゃわかんだろ」

「見て理解できないから、聞いているのです」

目の前にはバルドラストと、何故か面白そうな顔のアルシアがいた。ルミルはアルシアの抜けた分の仕事を担になって、忙しいそうだった。

しかし、コウサカが呆れ顔で目を向けた方かたにいる二人が問題だった。

「よろしくっすー！」

「」

何やら遠出用の荷物を持ってやる気満々のタクトと、微妙な感じの表情を浮かべたカグヤが居た。

「何だよ、だったら来なきゃいいだろ？」

「そ、それじゃあたしだけ心配してないヒドい奴みたいじゃない！」

やいのやいの、ぎゃーぎゃー。

しかし、コウサカはそんなにことにツツコミをする人間ではない。バルドラスに率直そうちよくに言った。

「この二人を、死なすつもりですか？」

その抑揚よくようの無い言葉に、さすがに二人も口を閉じた。

「なんで、オレがこいつらを行かせるのか分かんねえのか？」

「だから、聞いているのです」

バルドラスの目の色が変わった。

「お前が、それを分からねえからだ。それにな、行きたいと言ったのはこいつらだ。だから、オレは命令を出した」

その目は鋭く、人の上に立つ責務せきむを覚悟した者の光を宿していた。「これはダンバートン領主バルドラスの名において執行しゅっこうされる。貴様さまが嫌かどうか何一つ関係ない」

それが恐らくは領主の貌かお。

「ダンバートンギルドダンブレテンよりタクト、カグヤ兩名をバンホール援軍として、また事態把握のための斥候しやくこうとして派遣するものなり也」

と、そこまで言っただけでバルドラスが表情を崩しニヤリと笑った。

「てえことだ。お前が居る居ないは関係ねえよ。ま、暇があったら面倒見てやってくれや」

それに、タクトとカグヤが続く。

「邪魔にはなりませんから、お願いしまっす！」

「その、お願い」

タクトは深々と頭を下げ、カグヤは視線を逸らしながらも同じく頭を下げる。

「ひとつだけ徹底てつていしろ」

コウサカは、二人に頭を上げさせながら言う。

「戦闘時、絶対に前には出るな。それが出来ないのなら、強硬手段じやうごうしゅだんを用いる」

ゴキゴキッ、と珍しくコウサカは脅すように片手の指の関節かんせつを鳴

らした。

「っ　　っ!? (ガクブルガクブルッ)」「

タクトは、手刀で気絶させられた時のことを。

カグヤは、表情一つ変えずにタクトに手刀を叩き込んだコウサカを思い出して、青い顔で頷いた。

まず間違いなくやるからである。

「なんだ? まあ、いいか」

バルドラスは首を捻っていたが、ひどく真顔になってコウサカに視線を向けた。

「それじゃあな、坊主。　死ぬんじゃねえぞ」

バルドラスはそれだけ言うつと背を向け、手をヒラヒラさせながらレオナルド団長の下へと歩いて行った。

「君らも挨拶を済まして来るといい。団長にはこれから世話になるだろう」

「あ、はいっす!」

タクトはカグヤを促すと、バルドラスの後を追っていった。

そして、アルシアが残っていた。

「アルシアさんも黙っていないで、説得をお願いしたかったです
が」

「　ふう。ねえ?　本当にあの二人が行く理由わからない?」

「分かりません」

そのコウサカの表情を見て、アルシアは珍しく溜息を吐いた。

「ラビダンジョンで、自分がどんなことをしたか思い出してみなさい」

「?」

コウサカは、一人でスケルトンを破碎して、サキユバス達を追い詰めたことしか思い出せない。

「その顔だと、全然分かってないわね　あのね、ミレンシア君

結果としては勿論大成功だったけど、君のとった手段が問題だったの。　まあ、私達が君の力量と違いすぎたのも原因でしょうけ

「はい。わかり、ました」

コウサカの申し訳無さそうな顔を見て、ナユキは心配そうな顔のまま引き下がった。

ふと、コウサカは南門に目を向けて、何かに気付く。

「ナユキ、先に乗っていてくれ」

「え？ あ、はい」

コウサカが乗車する馬車を指で示して促すと、ナユキは首を捻りながらも歩いて行った。

「あら、君も隅に置けないわね」

一転して、すごく面白そうな顔でアルシアがニヤニヤし出した。

「何のことですか？」

「んー、なんでも。まったく心配して損しちゃったわよ」

「？」

何のことやら。コウサカが首を捻っていると、アルシアはコウサカの肩をひとつ叩くと、バルドラスの下へと走って行った。

「ふむ」

まあいいかと、それを見送ると、コウサカは南門にいる人物の下へと歩み寄った。

「見送りか？」

「」

ミレイナとエレナ、それにクリステル司祭がいた。

ただ、ミレイナの表情だけは晴れていない。

「ほら、お姉ちゃん」

「えう、その」

エレナが背を押してミレイナを前に出すが、コウサカと目が合った途端真つ赤とたんになって視線を地面に落とす。

クリステル司祭は、そんな光景を微笑みながら見ていた。だが、話が進まないと思ったのだらう。コウサカに話しかけた。

「ふう　仕方ないですね。コウサカさん、旅のご無事を祈っています」

「感謝です、クリステル司祭。わざわざこんな早朝に」

コウサカが頭を下げると、クリステル司祭は微笑んだ。

「いえ、こちらこそ色々ありがとうございます」

クリステル司祭が時間稼ぎをしたため、エレナが何とかミレイナを前に押し出した。

「もいい加減にしなよ　まったく」

「え、エレナが先に言いなさいっ」

「えー」

いつもと違い頼りなさ過ぎる姉に心底呆れたという顔をしながら、エレナはコウサカに視線を向ける。

「えーと　その、さ」

だが、いざ言おうとするとエレナも気恥ずかしそうだった。

「色々ありがとう。感謝してるよ」

「そうか。これから頑張れよ」

「その、うん」

頬ほおを染めながら、しかし頬を指で掻きながらエレナは目を逸らした。

「はいつ、次はお姉ちゃんっ！」

「え、エレナっ、ちよ、ま、待ってっ」

多少強引ながら、エレナはミレイナをコウサカの真ん前に無理やり突き出した。

「　　っ！　　っ！　　っ！」

そして、コウサカを見た途端また真っ赤になった。

「？」

その意味が分からず首を傾げていたコウサカだったが、何かを思い付いて腰のベルトからひとつだけ刃が鞘さやに収まっている短剣をミレイナの眼前に差し出す。

ミレイナは瞬き一つ、コウサカに聞いた。

「これは　？」

「武器のひとつくらいは、持っておいた方がいいだろう」

「そう ですね」

ミレイナの表情には、落胆らくたんの色が見て取れた。
予想していた通り、昨日のことを全く気にすらしてない。

「気をつけて」

「ああ」

それだけ言うと、ミレイナは俯うつむいてしまった。

「どうした？」

いくらコウサカでも、様子がおかしいことに気付く。

「いえ」

それに、ミレイナは寂しげに笑みを浮かべるだけだった。

「あー、もうっ！」

そんな様子に業しょうを煮にやしたのは、エレナだった。

「こんの朴念仁ぼくねんじん！ いい？ お姉ちゃんはねっ！」

「エレナ！ いいの」

「でもっ」

「いいの」

エレナはまだ何か言おうとしたが、ミレイナの浮かべている笑みを見て口を噤つぶんだ。

その様子を見ていたコウサカは、

「すまない」

ただいつものように謝った。自分が原因だということは理解して、しかし何故かは理解できずに。

そして、何の脈絡みやくもないことをいった。

「ミレイナ、もう俺を当てにするな」

「え？」

意味が分からずミレイナは目を瞬またたく。

「恐らくだが、俺はここには戻れない」

「それって」

その言葉に意味を悟さとって、ミレイナの表情が変わった時、

『何言ってるのっ！』

朔絆がコウサカ目の前に実体化して出てきた。

「あんたは死なないことにしたんでしようが！ 何バカなこと言っ
てんのさっ！ ていうか、さっきからイライラすんだけど！」

「もしもの場合だ。何も言わずに行くより、そういう事態になるか
もしれないことを伝えて行った方がいいだろう」

イライラする理由は知らん、と言った顔をしながらコウサカは朔
絆に答える。

『むうー、そうかもしんないけどさー』

朔絆の表情を見て、コウサカは溜息を吐いた。

「はあ 分かった、分かった。必ず生きてここに戻るとしよう。
これでいいか？」

『それならよしー！』

その言葉に満足したのか、チラリとミレイナを一睨みして朔絆の
姿は消えた。

コウサカはミレイナを見る。

「まあ、そういうことになった。帰って来るまで、自分のことは自
分で何とかしてくれ」

「
それに呆気あっけに取られたような表情を浮かべていたミレイナだった
が、

「くす」

小さく、口に手を当てながら笑った。楽しげに。

「はい。では、お待ちしていますよ？」

「ああ。事が終わるのはいつになるか分からないが」

何故ミレイナが笑みを浮かべたのか分からず、コウサカは首を傾
げながらも頷いた。

「ええ。いつまでもお待ちしています」

最後に見せたミレイナの笑みは、心から温かそうな微笑ほほえみだった。

一方、南門の陰^{かげ}。

(せっかく見送りに来てみたけど　　こんな状況で、出られるわけないでしょうがっ　　！)

カリンが苦惱^{くごう}していた。

カリンが朝起きると、すでにコウサカは宿を引き払った後だった。急いで追ってきたのだが、ちょうどコウサカとミレイナ達の別れの場に鉢合わせしてしまったのである。

お別れはしたい。しかし、出難い。しかし、しかし。

とうとうカリンが頭を抱えてしまった頃、唐突^{とつとつ}に声が飛んできた。「何をしている？」

バツとカリンが顔を上げると、不思議^{ふしぎ}そうな顔をしたコウサカが真横に居た。

「え、え？　な、何でいんの？　あれ、え？」

カリンの姿は絶対に見えない位置にあっただはずである。それなのに見つけられたのだから、混乱して当然だろう。

「変な気配を感じたのでな」

だから見に来てみた。ホント何者だよ、という顔でカリンは呆れた。

「こんなところで、頭などを抱えて何をしていた？」

「え、あ、えーと　　」

見つとも無いところを見られていたとわかって、カリンは顔を赤らめた。

「み、見送りに来たに決まってるじゃんか！」

顔を赤くしたまま、カリンは言う。

「なら、何故こんなところにいる？」

「ごもつとな意見にカリンは視線を泳がせる。

「あー、えーと、その　　と、とにかく！」

カリンは無理やり取り繕^{つくろ}うと、

「へ、部屋空けとくから、まひゃ　　」

思い切り噛^かんでいた。

「っ！　　っ！！」

「とりあえず、落ち着くと良い」

ひとつ溜息ためいきを吐くと、コウサカはカリンにそう言った。

「まあ」

少し呆れたような表情のまま、コウサカは続ける。

「戻って来た時には、また寄ろう」

「ん？」

前の言葉と微妙びみょうに、しかし意味はかなり変わっていることにカリンは気付く。

「終わったらこの街に戻って来んの？」

「そうらしい。ただ、事がいつ終わるかは分からないから、いつ戻ってくるかは分からないままだが」

ふう、とコウサカは一息吐く。

「まあ何にせよ。戻ってきた時にはまた世話になる」

「あ　　うん。ま、任せとけ！」

カリンは拳を握りながら意気込んだ。

「ああ。ではな」

後ろ髪を引かれるわけでもなく、コウサカは素っ気無く踵かかとを返す。

「え、あ、終わり　　？　　ち、ちよつといくら何でも素っ気無さ過ぎるって！」

慌ててカリンはコウサカを引き止めた。

「しばらく居なくなるだけなのだから、そこまで仰々おごごしいものなど不要だろう」

だが、とコウサカは内心ないしんで「確かにな」と思う。

「奇妙きみょうな巡り合わせではあったが、色々めくと世話になった。感謝している」

カリンに向き直ったコウサカは、軽く頭を下げた。

「あ、その　　いいって！　色々付き合わせたのはごっちだし

「

「それもそうだな」

コウサカは遠慮なく頭を上げた。

「お前ってさあ」

カリンは呆れ顔になった。

しかし、ひとつ溜息を吐くとすぐに笑顔を浮かべた。

「ほら、とつとと行きなよ。部屋は空けておいてあげるからさ」

「ああ」

もう一度軽く頭を下げるとコウサカは踵を返し、今度こそ去っていった。

「ふう」

その背を見送ると、カリンは南門の壁に背を預けた。

「ま、そのうち帰って来るよね」

一週間程度とは言え、いつも我侬を言ってコウサカを連れ回していた。たまに文句は言っても、それでもいつも付いて来てくれたコウサカは、カリンにとっては大事な「友人」になっていた。

珍しく、カリンの顔は寂しげだった。

コウサカ達に割り振られた止めた馬車の中で、コウサカは伝令に
来た騎士から話を聞くと、タクトを起こしに掛かっていた。

但し、コウサカ自身は揮下ではないため、命令というよりは頼み
事という感じだった。

「タクト。おい、タクト」

「ん ふああ はひ？」

タクトはコウサカに肩を揺すられ目を覚ました。

「レオナルド団長達が夜営を設ける。お前も手伝え」

「あ、はいっす」

タクトが身を起こすと、その物音にナユキとカグヤも目を覚ました。ナユキの方は、まだ半分寝ているのか、フラフラしているが。

「ん どうかした？」

カグヤは目を擦りながら聞いた。

「お前達はいい。力仕事だ」

一応タクトとカグヤも命令で来てはいるが、扱いとしてはコウサカと同じで、その命令権限はコウサカが持っていた。

騎士団側の本音ほんねとしては、実力的、技術的に比べるべくも無いタクトとカグヤなど組み込みたくないのだろう、とコウサカは推察すいさつしていた。

「よ、っと」

タクトもコウサカを追って馬車の後ろから降りた。

ドサリ、とコウサカが持っていた荷物にもつが地面に下ろされた。

「お前はこれで、仕掛けを適当に仕掛けておけ。俺は団長じゅんかと巡回しゅんかいについて話してくる」

荷物の中にはロープや罫類が入っており、木々が生い茂る森の中では有効だろう。

「了解す」

タクトは荷物を抱えると立ち上がり、コウサカが指示していった箇所に罫を仕掛けに行った。

兵員輸送に二頭立ての幌馬車ほろ十七、物資運搬つうばんに大型重種二頭立ての幌馬車十台がある騎士団の馬車は、御者台ぎやうだいを外に向け円形に固まり、一角だけ入り口として空け、馬は馬車から外し円陣の中に入れてあった。

それぞれの騎士は馬車それぞれの御者台に二人ずつ配置（片方は鎧を着たまま）に付き目視で警戒し、二人が休むというローテーションを組んでいた。三十mほど前にトラップを仕掛け、馬車の少し前には油を塗ぬったいくつかの薪まきが置かれている。

そして、もしトラップに何かが引つ掛かったら、魔法でも火矢でも使つてすぐに火をつけるのである。襲ってきたのが動物なら火に怯みひる、賊ぞくの類たぐいなら近づけば確実に見つかるためまず躊躇ためらう。それでも進んでくる者がいれば、いよいよ騎士が御者台から、場合によつ

ては降車して迎撃する。

また、警戒する騎士から三、四組は降車して歩哨として動いている。これはタラ王立騎士団の夜営時に設営する基本的陣形である。

「暇つすね〜」

「気を緩めるな」

コウサカ達もご多分に漏れず、御者台の上から周囲を警戒をしていた。ナユキとカグヤには騎士団の炊事班の方に回ってもらっている。カグヤは言わずもがな、ナユキも実は村にいた時に普通以上の料理の腕であったためである。

「りよかいつす」

タクトは肩をすくめると、コウサカと同じように前方を見据えた。しかし、やはり暇であったため余計なことが色々思い出されてくる。

()

その中のひとつに、タクトは顔をしかめた。

それは出立前、ダンバートン官庁の領主執務室に行った時に聞かされたことだった。

「領主様っ、コウサカさん達を行かせてください！」

タクトは土下座をしながら、領主バルドラスに懇願していた。

「ち、ちよっと、なに馬鹿なこと言ってるの！」

理由も聞かされずに連れて来られたカグヤは、困惑しながらもタクトを叱る。

「お前え等の方から来るとはな」

対してバルドラスは怒るわけでもなく、嘆息した。

「タクト。てめえは気付いてんのか？」

「？ なんのことですか？」

てつきり怒声が飛んでくると思っていたタクトは、土下座の姿勢のまま頭を上げ、首を捻った。

「なるほど。そういう理由で来たってえわけか」

意味が分かっている二人とは対照的に、バルドラスは理解し切った顔で溜息を吐く。

「実はな、お前等を呼ぼうとしてたところなんだよ」

「？ 任務ですか？」

タクトは首をかしげ、カグヤは聞いた。

「お前等二人を、あの坊主と一緒にバンホールに行かそうと思っ
ていたんだよ」

バルドラスの言葉に、二人は驚いた。

「え、そりゃ願ったり叶^{かな}ったりですが、またどうして？」

「お前等、あの坊主を見ていてどう思う？」

問いを問いで返されたが、相手は領主である。二人は一旦自身の疑問は置いて、考える。

「そりゃ、カツコイですよ。そして、羨ましい！」

タクトは、何故か「羨ましい」の部分だけが妙に強調^{強調}されていた。

「ど、どうって言われても その」

一方、カグヤは微^{かす}かに頬を赤く染めながら、言葉が出て来ないようだった。

「やっぱ、お前等じゃ若すぎるか」

バルドラスは予想していた通りだという顔をして、嘆息した。

そして、急に真顔になった。

「今回の命令だが、志願制だ。無理だと思ったら行かなくていい
それはつまり、それほど危険だと言う事。

「でも、コウサカさんは行くんですよね？」

「ああ。しかも、何があるかどうかもしかっ^っかり分かった上でな」

タクトは沈黙した。カグヤは付いていけずに、ずっと黙ったままである。

「オレは志願します」

「なっ、ちよつと！」

僅^{わず}かな逡巡^{しゅんじゆん}だけで決めたタクトに、カグヤは驚く。

「カグヤ、お前は来るな。領主様の言葉通りの危なさだ」

「タクト」

カグヤは、タクトの表情を見て言葉を無くす。ずつと昔に一度見た限きりのとても強い顔をしていた。それを見たカグヤは。

「あたしも行く」

とても落ち着いた、そして決意した表情をしていた。

「な、おい！」

今度はタクトが驚く番だった。

「なに？　なんか文句ある？」

「あ、あるに決まってんだろ！　死ぬかもしれないくらい危険なんだぞ！？」

「もつ、待つだけは嫌だよ」

カグヤの眩くらきに、タクトは言葉をなくした。過去、そうやって待っていたら両親の死が伝えられたからである。

当時、まだ小さかったカグヤにとって、トラウマとなるには十分だったのだろう。

「はあ、わかった。いいよ」

「は？　なに偉そうに言ってるのさ。夕食抜きにされたい？」

「はい、ごめんなさい」

妹に深々と頭を下げる兄。

そんないつもの情けない姿を見て、カグヤは小さく微笑んだ。

「じゃ、あたしは家に戻って旅支度たびしたくをやって来るから、細かいことはあんに任せた」

「おう、任せとけ」

カグヤは少し不安に思いながらも、仕方なくタクトに任せて部屋を出て行った。

「本当にいいのか？」

タクトの背にバルドラスの声がかかる。ひどく抑揚の無い、事実の重さをそのまま表したような声だった。

「ええ。コウサカさんには、借りがたくさんありますから。それに命令ですしね」

タクトは頼もしげに、苦笑しながら言った。

「いつもは不真面目な癖に、よく言うぜ」

それに、バルドラスも笑みを持って返す。

命令事項を伝え終わると、バルドラスが急に神妙な顔をした。

「ま、お前には教えておくか」

「ん？ まだ何か？」

次に発せられたバルドラスの言葉は、タクトを驚愕させるものだった。

「あの坊主は 死ぬ気だ」

タクトはコウサカの顔を見る。

「どうした？」

それにコウサカは振り返りもせず気付いた。

「いえ、なんでもないっす」

タクトは笑いながら、何でもないと返した。

コウサカの姿には、とても危うい気配など微塵も無かった。むしろ、御者台の上で真正面を見据えたまま座るその姿は、これ以上ないほど頼もしかった。

（領主様には、何が見えたんだろうな？ こんなにカツコイイのに）

カツコイイかどうかは問題ではないが、タクトだから仕方がない。

「ちゃんとやってる？」

その時、後ろから声が飛んできた。

「お、メシか？」

見ると、ナユキとカグヤが食事を持って、馬車の上に上がって来ていた。

「そ。ちゃんと手を合わせて食べなさいよね」

「へいへい」

カグヤから食事を受け取りながら、タクトはコウサカを見る。

「コウサカさん、お食事です」

「ああ。横に置いておいてくれ」

ナユキに食事を持って来てもらうコウサカを羨みながら、タクトはすごいと思った。

コウサカは微動だにしていけないのである。視線も真っ直ぐ正面を見据えたまま。

（ どうやったたら、あんな風になれるんだろうなあ ）

手を合わせながら、タクトは思った。

食事と聞いてタクトは気を抜き、迷わず後ろを振り返ってしまった。恐らく、それは普通の行為である。

しかし、コウサカは、食事という言葉と匂いに興味すら向けなかった。それだけ、油断もなく徹底しているということ。

常在戦場。まさにそれを体現している姿だった。

（ま、領主様の気のせいだよな。こっだけカツコイイんだから、大丈夫だろ）

この姿を見れば、誰でもそう思うだろう。とタクトは安心した。

「んじゃ、いっただつきまーす」

「いただきます」

「いただきます」

「頂きます」

コウサカだけは、前を見据えたまま皆で食べ始める。

「あ、こら！ もう少し綺麗に食べる！ ちなみに、おかわりなんて無いからね」

「ま、マジか!？」

街と違って物資には限りがあるため、当たり前である。

「くす」

その絶望したようなタクトが面白かったのか、ナユキが小さく笑った。

「か かわえええええっ！」

「黙れ」

「うえ、げくあっ」

カグヤが静かに、強烈な肘打ちをタクトの脇腹わきばらに見舞った。

「て、てめ」

「みぞおちに叩き込まなかっただけ、感謝してよね」

「いま喰らったら吐くわ、ボケ！」

やいのやいの、げしげしげしげし。

「あ、あの、その こ、コウサカさんっ」

ナユキは困ったようにコウサカは振り返るが、微動だにせずカバンから朔絆の食事に道具を出していた。視線は前を見据えたまま。その背にはこう書いてあった。

我かん閑せず。それはもう、きっぱりと。

「あ、あう」

その夜は、山に住む動物が罾に引っ掛かったくらいで何も起こらずに過ぎていった。

第十九章 山に住まう人喰い鬼

夜が明けると三、四十人が周囲を警戒しながら自らが仕掛けたト
ラップを回収し、残りは出立支度を行なった。

馬車は縦列隊形を組むと、騎兵が配置についたことを確認すると
バンホールへ向け動き出した。

視界確保のため、コウサカは胄は脱いだまま手綱を握っていた。

「やはり、来ないか」

御者台の上から、コウサカを周囲を見渡す。その目には、野生の
クマやオオカミなどの姿がちらほらと見受けられた。ただ、一切襲
つては来なかった。

しかし、それは当然である。

長い列の馬車の大群。

それを護衛する眼光鋭く、歴戦の騎兵達。

動物達には到底、恰好の餌食には見えなかっただろう。襲えば、
確実に返り討ちにされる。そんな雰囲気で包まれ、馬車群は進んで
いた。

そんな中、朔絆は不貞腐れたように実体化して、コウサカの肩の
上で足をブラブラとさせていた。

『ねえ、暇なんだけど』

「後ろに混じって来ればいい」

コウサカは手綱を握ったまま、片手で後ろを示す。

「はい、あがり〜」

「なにいつ!? カグヤつ、てめえイカサマしてるんじゃないだろ
うな!？」

「ふふーん、何? たった十連敗くらいでイカサマ呼ばわり? 情
けないな〜。ね、ナユキちゃん?」

「え、あ、その」

ちなみにカグヤが六勝。ナユキが四勝。タクト〇勝。

後ろの三人は、暇つぶしに持ってきたというカードゲームをやっていた。ただ、カードを使って数字をあわせたり、外れのカードを引かせたりと様々なゲーム方法が確立されているため、飽きもせずにかなり盛り上がっていた。

コウサカのそんな提案に朔絆は。

『ヤダ』

「
コウサカが呆れるほどの即答をした。

「
はあ。俺は手綱を握っていなければならん。出来るのはせいぜい、話し相手くらいだ」

『じゃ、話して』

「
早く』

コウサカは片手で顔の上半分を覆って、嘆息した。

「
何を、そんなに苛立っている？」

『
ふん』

肩に乗っているためコウサカから顔は見えないが、朔絆は顔を背けた。

「
未だにお前が分からない」

『
あんたがバカ過ぎるだけだよ』

それは呟くような小さい声であったが、近いためコウサカにだけは届く。

ふと、コウサカは思った。

「
お前の言う、その『バカ』の定義とは何だ？ 罵倒の言葉だと言う事は理解しているが、使う場所は合っているのか？」

『
知るかつー！』

この始末である。どうしろというのだ、とコウサカは溜息を吐く。朔絆はダンバートンを出てから、ずっとこの調子である。正直、ここまで機嫌が直らないのは初めてなため、コウサカは持て余していた。

勿論、コウサカがダンバートンを出るときにミレイナと、まるで愛する者の下へと帰るようなセリフを吐いたせいなのだが、この筋金入りの朴念仁が気付くわけも無く。

「やれやれ

また溜息を吐くと、コウサカは朔絆の相手を諦めて現状持つ情報の整理をすることにした。

レオナルド団長の話によると、バンホールに到着するのはまだ三、四日以上はかかるらしい。何も無くこのまま進めれば、という前提ではあるが。

ただ、そんな言い方をするには、やはりこの山には問題があった。

この山々のどこかに、オーガという人喰い鬼達がいるのである。いや、正確にはそれには語弊がある。オーガは、人間も含めて肉となるものなら全て喰うのである。但し、人間をよく好んで喰らうのは確かである。

バンホールへの物資運搬時よく襲撃されるため、騎士団やギルドから少なくない数の護衛が付かなければならないほど危険である。それでも、今までかなりの数の犠牲者が出ているという。タラ王国が一個騎士団（千人規模）で山狩りを行ないそれなりな成果は上げたが、それでも犠牲者を増やしただけで終わったという。

コウサカは、整理した情報に気難しげな顔をする。

こちらはたった百五十＋である。王立騎士団最強とは言え、千の騎士でも狩り切れなかった敵をたった百五十程度でどうにかなるものか。

急に黙ったと思ったら、なに辛気臭い顔してんのさ

いつの間にか、朔絆が完全実体化をして御者台の隣に座っていた。

「急に機嫌を悪くしたと思えば、今度は心配か」

「茶化すな、バカ」

珍しくコウサカが冗談めかして言えば、これである。

コウサカは一度目を瞑り、話す。

「お前も聞いていただろう。オーガのことだ」

「なにが問題？」

朔絆は何が問題なのか、本当に分かっている表情を浮かべていた。

「千の騎士でも倒しきれなかった敵だ。この程度の数で大丈夫なものか、とな」

「神妙な顔をしていたコウサカだったが。」

「バツカじゃない」

朔絆がバツサリを切り捨てた。

「いつものあんたららしくない。なに珍しく弱気になってんのさ」

朔絆に言われてコウサカは、はっとする。

(朔絆の言う通り。俺は何を)

騎士団。軍勢。

「 っ！？」

一瞬、コウサカの頭の中に何かが過ぎった。いつかに感じたような、それ。

「ち、ちよっと、どうしたの？」

いつの間にか、コウサカは俯むすいていた。それを朔絆が、コウサカの片腕を掴みながら心配そうにしていた。

「いや、お前の言葉で目が覚めただけだ。相棒」

そう言っつて、コウサカは掴まれている片腕をそのまま上げ、朔絆の頭の上に手を置いて優しく撫でた。

「 っ！ ま、まあねっ、まったく世話がっ、や、やけ、焼けるんだから！」

急に真っ赤になったかと思うと、朔絆が姿を消した。

「 っ！ 」
いつものことなので、コウサカはひとつ肩をすくめると、離して

いた片手も手綱を握った。

一方、そんな光景を見ていたタクト。

「いいな、オレも女の子と」

「世界が滅んで、誰もいなくなったら仕方なく、死ぬよりはマシとかいう顔で付き合ってくれるかもね」

「最近、お前のツッコミ酷過ぎやしませんか!? お兄ちゃんの心はズタズタだよ!」

「事実でしょ?」

「ぐっさあつ!」

そんな光景を見ていたナユキは。

「あはは」

困ったように笑うしかなかった。

ちなみにカグヤ十勝。ナユキ七勝。タクト〇勝。

オーガ。

赤とピンクの中間くらいこうばいいろの紅梅色の体色をして、酷く肥満体だが凄まじい怪力かいりきと生身であつても並みの魔法を弾くほどの頑丈さを誇る三、四mほどの背丈せたいの巨人である。元は魔族の世界の住まう化物であつたが、過去の大戦時に各地に放たれたのである。

何故、兵として使われなかつたのかというと、オーガの一族は一部を除いて食欲しか頭あたまにない非常に頭の悪い種族だからである。空腹が過ぎればオーガの同族以外、魔族であろうと喰らうのである。しかし、一個体としての戦闘能力は凄まじいすさまじいため、苦肉の策として野犬のように放たれたのである。

ただ、それが予想を裏切り成功したのである。人間の味を占め、積極的に人間側だけを襲うようになったからである。

山の中腹付近に、オーガ達の住処すまかはある。そこはオーガですら楽々と入れるような、巨大な洞穴どうくつであつた。

そこには、一際大きく、立ち上がれば六mは超えるであろうかと言
う巨大なオーガと人間と同じほどの背丈の人影があった。

「協力 意味ナイ 帰レ」

人影が伝えた内容を聞き、巨大なオーガはそれを無下に断った。

「くくくく　、ほお？　人間が喰い放題になるというのに、断るか？」

その言葉に、その場にいたオーガ達はピクリと反応した。

全員を代表するように、巨大なオーガが言う。

「本当 カ？」

ニヤリと人影は、ローブで隠している口の端を持ち上げる。

「ああ、そうだとも。魔族が勝てば、人間全ては奴隷だ。フツ、クク　、奴隷の生殺与奪など、どうなっても構うまい？」

ほぼ食欲しか頭がないオーガには、最も有効である口説き文句で人影は駒を手に入れに掛かっていた。

この男も魔族である。しかし、オーガは魔族すら喰らうのである。それが何故この場に居られるのかというと　。

洞窟の入り口に、黒焦げになったオーガの死体が一体あった。それがこの場に居られることの理由。野犬と表現した理由もそれである。

「ワカッタ　ドウスレバ　イイ？」

「今、この山の中を進んでいる人間共のことは知っているか？」

「アア　モウ少シ　近ク来タラ　食ベルツモリ　ダッタ」

それに、人影はまた残忍な笑みを浮かべる。

「それなら話が早い。人間共を正面から誘き出してやるから、私が合図をしたらお前達は山を駆け下り、人間共の後ろから襲撃をするだけでいい。これで挟撃になり、簡単に崩せる」

「ドウイウコトダ？」

人影は心中で舌打ちする。低能共が。

「私が合図をしたら、ただ人間共を襲えばいい」

「ワカッタ」

簡単な、本当に子供ですら理解できるほど簡略化した説明を終えると、人影は洞窟を出た。

（　　）　　フン、所詮は低族。この私がこうまで、面倒なことをせねばならないとは。　　だが）

人影は、一人の男を思い出して身震いする。思い出すだけでも、膝が笑うほどの。

（あの男は危険だ　　あれは人間ではない。あんなものがあれでは、まるで）

そこで考えを止め、準備をするために人影は魔法陣を起動させると、どこかへと消えた。

唐突に、警笛が鳴り響いた。

騎兵達は馬車からは距離を開け、しかし離れすぎず全体の目となるため展開する。

馬車は全て停止し、御者役の騎士も含め全ての騎士が降車して戒態勢をとった。

但し、ほとんど山道と呼べる狭い街道のせいで、車列が長く伸びてしまっているため非常に守り難い状況だった。

伝令役の騎士が、コウサカ達の馬車に駆け寄ってきた。

「我々は待機して、馬車を守ればいいのですね」

「あつ、え、はい、その通りです。馬車の護衛を頼みます」

驚いた顔のまま伝令役の騎士は、別の馬車にも伝えるため駆け去る。

「ナユキ、君は御者台に。周りを見回して、何かあれば知らせてくれ。タクト、カグヤは俺と共に降車。全周警戒をする」

ナユキ達は目を瞬きながらも、コウサカの言われた通りにする。

前後の馬車から指示を受けた騎士達が黙々と動き出す。

「あの、コウサカさん」

コウサカが横目でそれらを眺めていると、タクトが声をかけてき

た。

「どうした」

「さっき、何で伝令の内容わかったんすか？」

カグヤも同じく聞いたそうな顔をしていた。

「二人共、あの騎士団に混ざったとして、どう動けばいいか熟知しているか？」

「え？」

タクトもカグヤも、何の話だという顔をした。

「号令つうれい一下、整然せいぜんとした隊列を自由に組み替え、一人ひとりの性格得て不得手まで把握し切る程度のことは、あの騎士団なら完璧かんぺきだろう。個々の技量だけでは、最精鋭とは呼ばれはしない」

「？」

全く話が分からない、二人はそんな顔をしていた。

「噛み砕いて言えば、規格外を嫌うのが軍という組織だ。規格化された戦力であるからこそ、戦力の把握は容易よういであり、運用がし易いやす。俺達は騎士団からすれば、完全に規格外であり、ん？ 分かり難いか？ ふうむ。俺達がどの程度の強さか把握できていないため、どこを任せて良いのか分からない。だから、とりあえずは本当に切羽詰きりひせった状況の一步前まで、使いたくはないのだろう」

「えーと。扱い辛いから使いたくない、つてのはわかったんですけど。でも、下手に、えーと、戦力を あれ」

「なんで、戦力分散せんりょくぶんさんをしているのか、でしょ」

呆れ顔でカグヤは、タクトをフオーした。

「周りは馬車の最前列を目指して、しかし一定数の騎士は残して移動している。ということは、敵は前方から。しかし団長は後ろから敵の襲撃があるとした作戦を展開させた。これなら最悪の場合、つまり後ろから奇襲きしゅうがない限り俺達というイレギュラー要素を使わなくて済む。もし、主力隊だけで敵を壊滅できた場合でも、後ろには十分守れる程度の戦力は配置してあるから、後ろは気にせず主力隊は敵がどこから来たのか探ることも出来、消耗しょうじょうした戦力を後ろと交

代させることも出来る」

ふと、コウサカが気付くと、タクトがポカーンとしていることに気付いた。それで、説明が分かり辛かったことを理解した。

「簡単に言えば、主力隊は何も気にせずいつも通り全力で戦うことが出来て、最悪の場合にも対処が可能、さらに不安要素も使わずに済む。そういうことだ」

「は、はあ」

タクトは、何とも頼りない顔をしていた。

「いくら何でも分かるでしょ」

カグヤは、呆れたような顔してタクトを見ていた。

「あの、コウサカさん？」

声の方を見ると、ナユキが御者台の上から顔を覗かせていた。

「どうした？」

コウサカ達は、降りて早々にタクトが話しかけたため、御者台のすぐ横にいたままだった。

「あっちが、何か変なんです」

ナユキが指差した方向に三人が目を向けると、ただ森が広がっているだけだった。

「？」

タクトとカグヤは何のことか分からず首を捻るが、コウサカの目には見えた。

（動物が、逃げている？）

森の中で、動物達が何か^{おび}に怯える様に走り回っていた。

（何か、来るっ）

瞬間、コウサカは腰のベルトからバスタードソードを抜いていた。

馬車群の正面には、優^{ゆう}に四mはある魔符^{まふ}で操られた巨大な黒ヒグマと、その周りには百は下らないスケルトン兵士が囲み、進んできていた。

スケルトン兵士は、顔は出ている茶色い兜に、同じ色のグリーブを着け、赤錆びたロングソードと血の痕が残る直径五十ｃｍほどの円形の盾、スモールシールドを携えていた。

「全軍、抜刀オツ！」

レイナルド団長の号令が響くと、一斉に抜刀する音が響き渡る。

「我に続けえっ！」

騎乗したレイナルド団長は、ヴァンププレートと呼ばれる大きな笠状の鎧に細長い円錐の形をしたランスを構えると、真正面は歩兵隊に任せ、敵の真横から襲撃するため騎兵を伴って森の中を駆け抜けた。

オグマ騎士団は、騎兵六十五のうち五十五を、歩兵八十五のうち五十五の計百十を主力隊として、敵を向かい討つていた。

（何故、バンホール方面から敵が来るっ

！）

レイナルド団長は森の中を駆けながら、心中で毒づいた。

バンホールは、二千人の精強な騎士が警護しているはずである。

バリダンジョンと呼ばれる魔窟は、バンホールの鉾山として街中にあり騎士達が目を光らせている。まず、ここから来ることは不可能であった。出てきたところを魔法だの弓矢だので、四方八方から攻撃されるからである。それも二千人が交代、交代に絶え間なく。ラインアルトと呼ばれる、盗賊コボルト達の住処となつている場所はバンホール近くにはあるが、コボルト達の住処である。スケルトンや巨大クマがいるわけがなかった。

なら、こんな数の敵がどこから？

そこから考えられる結論はひとつ

（くっ

）
レイナルド団長は軽く頭を振る。今は目の前の敵を優先する時である。

「敵の最後尾を削る！ エルス、アジエンの隊は待機、次の瞬間を見逃すな！ 縦突陣形！ 続けえっ！」

二十五人を残し、レオナルド団長は三十人を一列、三隊に分けた。一気に下の街道へ駆け下りる。第一陣はレオナルド団長自らが率いて、ランスを構え突撃をかける。

すでに、歩兵隊と戦闘を開始していた巨大黒ヒグマとスケルトン兵士は、急に真横から現れた騎兵隊に反応できず、一気に二十のスケルトン兵士が使い物にならなくなった。

所詮は、骸と魔符で操られただけの烏合の衆である。的確な対処など出来ず、一撃離脱して往く団長達を追う者と、正面にいる歩兵隊と戦闘を続ける者で、バラバラになった。戦力の中核であろう巨大黒ヒグマは、歩兵隊の方を向いたままだった。

次の隊が突撃を開始する。第一陣を追う集団を狙う。

敵は間抜けに背を向けていた。第二陣は大胆にも、背を向けた敵集団の中央に突撃をした。馬の蹄が、ランスがスケルトン兵士を粉々にした。しかし、何故か少しの間粘つてから、離脱した。その答えは、すぐに分かった。

巨大黒ヒグマが、離脱する騎兵隊の方に向き直ったのである。

それで終わりだった。

最強と呼ばれる騎士団にスケルトン兵士程度が敵うはずが無く、次々にスケルトン兵士は粉碎されていく。

間抜けにも巨大黒ヒグマは追うでもなく、また歩兵隊の方へ向き直った。

そのタイミングで、残った騎兵隊が全て駆け下りてきた。縦の陣形ではなく、横に広がっている陣形を組んでいた。

「グルウワツ　　!？」

次々に、騎兵達はランスで巨大黒ヒグマを串刺しにしながら、ランスの回収はせずに離脱していく。二十本目のランスが突き刺さった時、巨大黒ヒグマは倒れ、もう起き上がってくることは無かった。離脱していった騎兵達はいつの間にか歩兵隊の後方に現れ、残りのスケルトン兵士を蹂躪していった。

静寂が戻った街道には、血塗れで倒れる巨大黒ヒグマと、骨の破

片が無数に散らばり、そして無傷の騎士団が泰然として立っていた。
「全隊、馬車へ戻るぞ！ 急げえっ！」

レオナルド団長は、圧倒的な勝利に勝どきを上げるわけでもなく、すぐに自らが一番最初に動き始める。

（簡単すぎる　こいつ等は、ただの捨て駒だっ　　）

レオナルド団長は、最初に突撃をかけた時にすでに気付いていた。敵が弱すぎることに。

しかし、団長は中途半端に残して不安要素を作ることが嫌った。だから、全力で、即効で敵を叩き潰したのである。

「続けえっ！」

主力隊の騎士達は、団長の言葉に疑問を浮かべること無く、すぐに転進した。

「副長、こいつ等は」

「オーガだ！ ミレンシアの」

クラウゼンはトウハンドソードを構えながら、叫ぶように言う。

最初に異変に気付いたのはナユキだったが、はつきりと目視して確認したのはコウサカである。

動物達が森の中から逃げて来るのと同じ、周期的な地響きのようなものが伝わってきたのである。それはだんだんと近づいて来て、姿を現したである。それと同時に、一台の馬車が粉々にされてしまっていたが、負傷者はいなかった。

クラウゼンは地響きの異変と同時に、騎兵を含め全ての者を集めていた。少数で当たってはいけないと、戦場で培ってきた直感が命じたのである。

「撃てえっ！」

歩兵三十人がアイスボルトを詠唱し放つ。

一体に集中させた氷塊を、オーガは避けるでもなく顔を隠すように腕を上げるとそのまま直撃させた。だが、少し表皮を破いただけ

で、目立った効果は上げられなかった。

現れたオーガは、全部で十三。

しかも、一撃で馬車を粉碎し、森の木々を軽々と薙ぎ倒すほどの怪力である。もし、その手に捕まりでもすれば、フルアーマーであろうと握り潰され即死するだろう。

「くそっ、化け物めっ　！」

クラウゼンも、その他の騎士も己の武器を、さらに強く握り締める。

「副長」

タクトもカグヤも、ナユキも青い顔をしている中、コウサカだけは何の緊張感もなく声を上げる。

「俺が五、そちらが八でどうだ」

「な　なにを」

言葉の意味することは理解したが、クラウゼンは信じられなかった。

「いくら何でも多すぎる。違うか？」

コウサカはいとも簡単そうに、クラウゼンの心中を当てた。

通常オーガの討伐には、オグマ騎士団の力量を持つても一体につき最低五人で相手をするのが義務付けられていた。並みの騎士なら一体を相手にするのに最低二、三十はいないと倒せないほどの化け物なのである。

コウサカは、それを知らないはずである。だが、正確にオーガという個体を分析した。

十三体ものオーガが、じわじわと近づいて来るこんな状況で。

「ふっ、いいだろう。ミレンシアの」

コウサカの落ち着き過ぎた姿を見て、慌てた自分が馬鹿らしくなりクラウゼンは笑みすら浮かべながら言った。

「その大口、信じさせてもらっぞ！」

「了解した」

オーガは騎士団から見て左に五、右に八と道でも悪かったのか少

し離れていた。

「続けえっ！」

クラウゼンは騎士団を奮い立たせるように叫ぶと、自らが先頭に立ちオーガの集団に突撃した。

「三人はここで待機。怪我人が出たら手当てを頼む」

コウサカがナユキとカグヤの頭の上に、タクトは肩に手をひとつポンと置くと三人は少し落ち着いたようだった。

「徹底して戦闘には参加するな。その分は、俺がやる」

三人が何かを言う前に、コウサカは駆けた。

「グヘヘ 人間ノ女ダア 女ノ肉ガ喰エル」

ナユキ達を見つけた、一番前にいるオーガにコウサカは近づく。

「邪魔ス」

そこでオーガは絶命した。

駆け寄ったコウサカは、驚異的な瞬発力を以って、一瞬でオーガの眼球をバスタードソードで串刺しにしたのである。

いくら体が頑丈と言っても、眼球までは硬くない。しかし、オーガの体長は最低でも四mはあるのである。その高さを、オーガが反応するより速く飛び上がり、尚且つ十cmほどの眼球を正確に串刺しにしたのである。もはや、人間業とは到底言えない。

仲間を一瞬にして殺されて、残りの四体のオーガが緊張したのが分かる。

「ナ 何ダア コイツハア!？」

「殺セエ 殺セエツ」

コウサカが心中で予想していた通り、オーガ達はただ横一列になり真っ直ぐに力任せに走ってきた。

コウサカは全身、特に脚に力を込める。

「ツブレロエ！」

オーガ達は振り上げた腕を、一斉に振り下ろす。その一撃は、地面に深さ三、四十cm、直径二、三mのクレーターを作るほどの力だった。

オーガ達が腕を上げると、クレーターの中心には肉片はおろか、鎧の欠片すらなかった。

「朔絆」

コウサカは上にいた。瞬時に六mほど飛び上がったのである。オーガ達は、声に釣られて顔を上げた。

「間抜けが」

いつの間にか抜いたクレイモアは、光り輝いていた。

「はっ！」

ゴオオ　ン、と音を立ててコウサカは、空中でクレイモア一周させた。

トン、と音をさせながらコウサカは降りると、すぐにその場を離れた。鎧が汚れるのを嫌ったためである。

ズリツ、と音がしたかと思うとオーガ達の首が落ち、盛大な血飛沫が上がり、血の雨が降った。

「　　」
コウサカは血で汚れた刀身を一振りし血を飛ばすと、拭い紙を取り出して刀身を拭った。

「うええ　　気持ち悪う〜」

朔絆が実体化をして、心底気持ち悪いという顔をして出てきた。「なんだ？」

コウサカはクレイモアを背中に戻し、クラウゼン達の方を見ながら聞く。

「あいつ等、アブラベつとりなの！　斬った時の感触は　　うええ」

「どうやら、オーガの脂肪分は凄まじいらしい。そういえば、拭いた刀身がやけにテカテカとしていた事をコウサカは思い出す。

「とつとと姿を消せ。クラウゼンの方へ行く」

「うっ　　、あとでちゃんとキレイにしてよねー」

不満そうな顔をしながら、朔絆は姿を消す。

改めて、コウサカはクラウゼン達を見た。

「ぜあああつ！」

クラウゼンが渾身の一撃を以って、オーガの頑丈な片足を斬り飛ばしているところだった。

どうやら、コウサカの人間離れし過ぎた強さを目の当たりにして、オーガ達が目の前の敵に集中し切れていないようだった。騎士団の方も、実はコウサカの動きを見ていて少しの間固まっていたのだが、「ギアアビャブア」

片足を飛ばされ、倒れた一体のオーガが止めを刺された。

いよいよ、オーガ達が戦意を喪失し掛けた時、最初の頃よりもずっと重い地響きが近づいていた。

「なっ、なんだこれは」

クラウゼン達は、目の前の敵も忘れ言葉を失い立ち尽くした。

「オ頭 オ頭ダア」

逆に、オーガ達は飛び上がるように歓喜した。

森の中から、巨人が来るのである。

歩いているだけで木々を薙ぎ倒し、森の中からでもその姿が分かるほどの巨人。

「生き残りが、いたのか」

それはジャアントオーガと呼ばれる化け物だった。

第二次モイトウラ戦争で放たれた、オーガを率いる者である。

大戦が終わり、王国が当時数少ない生き残りの騎士団のじつに七割を投入してまで討伐させたほどの、化け物。

過去の記録によれば、ジャイアントオーガ一体で一個騎士団（約千人）が壊滅したとの記述が残されている。

「騎士団の本隊がいれば」

クラウゼンは悄然としながらも、オグマ騎士団の本隊を連れて来なかったことを悔やむ。せめて、一個騎士団規模の人数は連れて来ればよかったと。

何より、大袈裟過ぎると、最精鋭ながらも少数での進軍を具申したのはクラウゼンである。だから、余計に後悔の念が強かった。い

くら最精鋭と言えど、たった百五十程度で敵うほどの相手ではないのである。

その時、ガシャリと金属の擦れ合う音がした。

次の瞬間、眼球を貫かれた一体のオーガが崩れ落ちた。

クラウゼン達は、オーガ達でさえその者を見た。

クラウゼン達の眼前に、トンと着地しながらコウサカは言う。

「何を呆けている。あれが来るまでには、まだ時間がある」

オーガ達は、はっとした。

あのジャイアントオーガよりも、この鬼人の方が自分達のすぐ傍に
いるということ。

「逃ゲロオ 逃ゲ」

一番最初に正気に戻ったオーガが、また一瞬で殺される。

「ウアアアアアアアアアアッ」

残った五体のオーガは、競うようにして逃げた。

その時、レオナルド団長が駆け寄ってきた。

「厄介な奇襲だな」

馬上から周りを見渡して、レオナルド団長は溜息を吐いた。そし

て、森の中から来る巨人を見て、コウサカを見た。

「任せられるか？」

「問題ありません」

そう言うと、コウサカは血に塗れた剣を振るい血を飛ばし、こびり付いた血を拭って剣を仕舞うとジャイアントオーガが来る方向に駆けて行った。

「だ、団長。そちらは終わったのですか？」

「ただの捨て駒だった。勝負にすらならん」

レオナルド団長は、さもくだらなさげに言う。

「負傷した者は、あっちのお嬢さん達に手当てしてもらえ。残りは逃げたオーガの討伐に向かう。各隊長は集まれ」

「だ、団長！ ミレンシアはよいのですか？」

クラウゼンの言葉にレオナルド団長は、何を馬鹿なと言う顔をし

ながら言う。

「恐らくは、間近まぢかで見ただろう。あの存在は、ジャイアントオーガ程度でどうにかなる存在ではない」

それに、とレオナルド団長は馬から降りてクラウゼンに向き直る。「実際に剣を交えたお前が、一番よく分かっただろう。ミレンシアというものを」

その言葉に、クラウゼンは言葉を無くした。

対峙たいじした時、あれは全く本気ではなかった。クラウゼンは遊ばれていたに過ぎない。

なら、あれが本気になったのなら？

クラウゼンは倒れているオーガ達を見る。

自分達は囲んで、苦戦の末すえにようやく一体仕留しとめたが、あのミレンシアはたった一人で、ほとんどのオーガを倒してしまった。それも、何一つ気負うことも無く、さも簡単そうに。

「なるほど」

クラウゼンは、心配していた自分が馬鹿馬鹿しくなってしまった。そんな存在が負ける相手が居るとすれば、それは神に他ならない。

「死傷なし。負傷は四名。残りは問題なく動けます」

クラウゼンは落ち着き払った表情に戻っていた。

「うむ。六十五の騎兵と、歩兵三十を以って残りのオーガを討伐する」

地響きは近づくにつれ、酷くなっていた。まるで地震である。

コウサカは、森の中で息を潜ひそめていた。

今から戦う相手は目視で六、七mあるほどの相手である。しかも、未知数な。出来るなら一撃で終わりにしたいとコウサカは思っていた。

「朔絆は予め静かに、^{あらかじ}と言いついておいてあるので静かだった。コウサカは木の上に登る。鎧の音などは地響きのせいで、全く問題にならなかった。」

木の弾性も用いれば、十分ジャイアントオーガの顔まで届く距離にきた。

ドンツ、という音と共にコウサカは飛び上がった。ジャイアントオーガの顔に向け一直線に。

腰のバスタードソードを抜くと、それを真っ直ぐに構える。直進するその先に切っ先を向けた。

そこで、相手が気付いた。だが、コウサカはそのまま飛ぶ。

「くっ」

しかし、意外にも相手は速かった。すぐに腕を上げて、顔を守ったのである。高速で飛んでいるコウサカに反応するとは、巨体に似合わない瞬発力である。

コウサカは剣を下げ、ジャイアントオーガの腕を蹴るようにして勢いを殺すと、一旦地面に降りる。

「速い」

だが、降下していくコウサカを薙ぎ払おうと、守った方とは別の腕を伸ばしてきた。

当たる瞬間、コウサカは空中で一回転をし、伸びてきた腕に踵を^{かかと}打突点として叩きつけ、踵を起点としてクルリと一回転して、巨大な腕をやり過ごした。

ザッ、とコウサカは地面に降りると、巨大な相手を見上げた。

「なるほど、強いな」

コウサカが体勢を整えていると、上から声が響いてきた。

「クンクン 臭ウ 臭ウゾオ」

次の瞬間、巨大な片腕を振り上げた。

「ヨク モ 同胞 ヲ 殺シタナアアア！」

山中に届き渡るほどの大音声だった。声と同時に、凄まじい速度

で腕が振り下ろされる。

コウサカはトンツ、と地面を蹴るように後方へ飛んだ。すぐ前までコウサカのいた所に巨大な拳こぶしが打ち付けられる。打ち付けた衝撃で山自体が大きくグラグラと揺れ、四体のオーガが穿うがったクレーターの倍ほどの広いクレーターが出来上がった。

「お前達も、人間を殺して喰うだろう。今回はお前達が殺される番というだけだ」

コウサカは本気を出すため、全身から殺気を噴出ふんしゅつされた。それは自分よりも四倍ほど巨大な相手の殺気よりも濃密のうみつで、しかし静かに立ち上のぼった。

「オマエラ エサダア 黙ッテ 喰ワレロオオオ」

また、腕が打ちつけられる。しかし、コウサカには当たらない。

「チヨコマカ トオオオ」

ジャイアントオーガはしゃがむような体勢と取ると、右腕を左腕の位置まで持って行き、一気に前方を薙なぎ払った。

「悪食あくじきが」

コウサカは飛び上がって避ける。避けるついでにバスタードソードで斬りつけてみるが、まるで堅固けんこな岩石でも斬りつけたような感触だった。

コウサカはバスタードソードから手を離すと、クレイモアを抜く。

「ソコ ダアアア」

空中では身動きが取れないと見たか、ジャイアントオーガは無理矢理な体勢で左腕を伸ばしてきた。

コウサカは空中で身体のパネと使って一回転すると、その遠心力を載せてクレイモアを伸びてきた腕に叩きつける。

ガギインツ！ と酷い音を立てて腕は弾き上げられるが、斬れていなかった。

「痛エエ エサ ノ 分際デエエ」

しかしひどい痛みはあったのか、ジャイアントオーガは弾かれた手をさすった。

「
」
コウサカはクレイモアを見ていたが、ひとつ息を吐いた。
「朔絆。全力だ」

『よっしゃ、まかせとけ！ 気持ち悪いけど
瞬間、クレイモアからの光が激しくなった。光が縦横無尽に迸り、
コウサカを中心に光の柱が立ち上った。』

「何スル 気ダアア」
ジャイアントオーガは構わず、コウサカに巨大な拳を向け殴りつけようとする。

「 Y r w y f a m i r i ? (我は氷塊を求める)

それを軽く飛んで避けると、コウサカは瞬時にアイスボルトを詠唱し五つ完成させると、ジャイアントオーガの顔に向け放つ。

ジャイアントオーガは、当然のように他のオーガと同じく片腕で氷塊から顔を守った。

それで終わりだった。

「戦いの最中に、敵から目を離すな」

地面を叩き付けたままのジャイアントオーガの拳を踏み台にして高く跳び上がると、コウサカはいつの間にか刀身に光が収斂されたクレイモアを空中で大上段に構えた。その隣に、朔絆が完全実体化をして手を前に出した。

「セアツ！」

『いつけええええええええつ！』

そのまま、振り下ろす。

クレイモア自体はジャイアントオーガの腕を切り落としただけだったが、振り下ろした軌道そのままの形に刀身から光の刃が飛んだ。
「ゲエアアア」

そのまま光の刃は進み、巨大で、恐ろしく堅固だったジャイアントオーガの体をいとも容易く切り裂いて、しかし光の刃は止まらず、そのまま後ろの地面を十mほど割って往き、消えた。

朔絆の精霊としての力を多分たぶんに消費し、予想被害も大きいために
コウサカが使つて来なかつた精霊武器本来の力だった。
「っと」

地面に降りたコウサカはその場にクレイモアを突き刺すと、フラ
フラと力が抜けて落ちて来た朔絆を抱えた。俗に言う、お姫様抱っ
この形で。

「やはり辛いか」

『え、えへへ　なんともないって』

疲れ果てて辛そうであつたが、しかし朔絆の表情はとても嬉しそ
うでもあつた。

「どうした？」

『本気で　あたしを使つてくれたなあ、って。えへへ』

「？　以前、そう言つただろう？」

コウサカの言葉に、朔絆は少し幸せそうな表情を浮かべた。

『くす　バーカ』

「？」

意味が分からず、コウサカは首を傾げる。

そんなコウサカを見て、朔絆はまたひとつ笑みを浮かべた。

『あつはは。ね？　疲れたから、このまま抱っこしてって』

「疲れたのなら、剣の中に戻ればいいだろう。回復する度合いは出
ていても、中に居ても同じなのだろう？」

朔絆は、言うと思つたという顔をした。

『今はこっちの方が疲れが取れ易いのつ、すべこべ言わずにゴー！』

「ふう、わかつた、わかつた」

ひとつ溜息を吐くと、コウサカは朔絆に首に手を回させ、右腕を
朔絆の膝裏に入れて固定すると、バスタードソードと、地面に刺し
たクレイモアを回収して、騎士団の下へと歩いて行つた。

第二十話 ミレンシアの伝承

時刻はもう深夜だった。

そんな中コウサカは月明かりの下、相変わらずの灰色のアンダーウェアに下半身だけは鎧のままという格好かつこうでいた。

「眠れないのか」

「えと はい」

コウサカが御者台に座りながら剣の刀身を磨みがいていると、後ろの幌ぼろ付きの荷台からナユキが起き出してきた。

ナユキは、らふティオズ・アーマーの下に着る白いノースリーブのアンダーウェアに、黒いショートパンツ、ニーハイブーツだけとラフ格好をしていた。もう夜間組以外は寝静まる時間帯ゆえに、当たり前であるが。

ナユキの大き過ぎるわけでも小さ過ぎるわけでもない胸の上では、女神のペンダントが月明かりを反射していた。

「隣 いいですか？」

「ああ」

コウサカは御者台の片側に寄る。

「お邪魔します」

その隣に、ナユキがちょこんと座った。

コウサカがジャイアントオーガを斃たおし戻ってくると、レオナルド団長やクラウゼンは討伐隊を率いてまだ戻ってきていなかった。

しかし、残っている警戒組の騎士の一人から団長から預かったという言伝ことづてを聞き、コウサカも協力して伸びすぎている馬車群を防御陣形にして固めた。どうやら今日は移動を諦め、徹底して周囲警戒をするようだった。オーガの残党狩りも含め。

「また お役に立てませんでした」

気落ちした顔で、ナユキはポツリと呟つぶやいた。

「負傷した騎士達の手当てをしただろう。君のヒーリングのおかげ

で、苦痛も少なく済んだ。小さなことではあるが、全体的に考えれば助かることだ」

実際それは事実だった。最低限の痛みと最低限の物資だけで手当てが出来たことは、たった数日ではあるが孤立した移動中ではとても助かることである。

「はい」

ナユキは知らず、首に下げた女神のペンダントを握っていた。

「」

コウサカは黙って、磨いた刀身を月明かりに照らした。

普段なら、こんな風に話していれば朔絆ひつきが出てくるのだが、昼間に力を使い過ぎたせいですと眠っている。だから、コウサカは朔絆の宿やどったクレイモアを荷台の方に置いてあった。

コウサカは、磨き終わったバスタードソードを腰のベルトに差しした。

「ナユキ」

「はい？」

コウサカは腰のベルトから短剣を抜くと、ナユキに柄えの方を向けて差し出した。

「？」

ナユキは意味が分からないまま、短剣を受け取った。

「それで、俺の腕を斬りつけてみる」

「えっ！」

コウサカの言葉の意味が分からず、ナユキは目を瞬またたいた。

「えっ、な、何で、ですか？」

「戦いで役立つということは、そういうことだからだ」

また、ナユキには意味が分からなかった。

「相手を傷つけるか、殺すか。君にはそれが出来ないだろう」

固まったナユキの手から、コウサカは短剣を取る。

「痛っ」

受け取った短剣で、コウサカは自分の左腕を軽く裂いた。

「っ！なにしてるんですかつ」
裂かれた傷口からは血が流れ出し、御者台の床を赤く濡らした。
「君が言う役に立つとは、こういうことだ」
「そんなのこのために、わざわざ自分の腕を　？」
呆気にとられたような表情だったナユキだったが、はっとした。
「と、とにかく手当てしますかつ」
慌ててコウサカに寄り掛かるようにして、ナユキは腕を伸ばしてきた。
「ああ」
コウサカはナユキに届くように、自分も腕を伸ばした。

「もう絶対にしないでくださいね」
「ああ」

コウサカは手当てされ、包帯の巻かれた自分の腕を見つめる。
(大したものだな)
それを見て、コウサカはそう思った。

ナユキは詠唱すらしでヒーリングの魔法を使い、発動までのタイムラグもなく、しかも自身が消耗した様子もなかった。ナユキのミレンシアとしての突出した能力は、これだろう。

「少しは、自分が何をしたいと言っているのか分かっただろう」
「はい」
むしろ、何で分からなかったんだろう、とナユキは思う。

「
またナユキが落ち込んでしまった。

「ふう」
コウサカは小さく息を吐くと、無造作に手を伸ばした。
「わう」

ナユキの頭を、前を見据えたままコウサカは少し乱暴にクシヤクシヤと撫でた。

「君が戦わねばならないなら、女神は君を非力な存在とはしなかつただろう」

「ひっ、ひり」

ガーン、とコウサカの何気ない一言にナユキはショックを受けた。コウサカは気付かずに続ける。

「しかし、俺にはどこへ行けばいいかは分からないが、君には分かる。何故、役割を分けたかは分からないが、理由はあるのだろう。それとも君は、女神の行ないを信じられないのか？」

コウサカ自身は全く信じないどころか、疑ってすらいるくせに抜け抜けと言っ。

「そっ、そんなことはありません！ わたしはっ

「しー」

コウサカは口に指を当てて、静かにしろというアクションを取る。後ろでは三人が寝ているのだ。

「あ す、すみません」

最後に、コウサカはクシャリと優しく一撫でして、ナユキの頭から手を離す。

「なら、戦いは俺の領分だ。俺の仕事まで取るな」

珍しくコウサカが冗談めかしく言った。ナユキとしては初めて見たため、少しの間ポカンとしていたが。

「くす。はい、すみません。わたしは、わたしが出来ることをします」

「そうか」

ふう、と一息吐くと、コウサカは自分で汚してしまった短剣を磨き始めた。

二人はもう少しの間話して、ナユキは再び眠った。

早朝。

ガンツガシツ、という木刀が打ち合う音でカグヤは目を覚ました。

「ん、ん　何の音　？」

起きて、伸びをしながらカグヤは呟く。

タクトもナユキもまだ寝ていた。朔絆の宿っているクレイモアもある。

「コウ　？」

しかし、コウサカの姿だけはなかった。

カグヤは、ノースリーブのブラウスにショートパンツという姿だった。ニーハイソックスとニーハイブーツを履くと、馬車の外へ出た。

どうやら音は、円形に固まった馬車群の外側の方から聞こえて来るようだった。

「あ　」

それを見たカグヤは、驚いて固まった。

「はっ！」

「うおっ！」

鎧を脱いだコウサカが、同じく鎧を脱いで身軽になった騎士団の騎士達と模擬戦をしていたのである。それも一対四で。

コウサカは木刀を二刀、騎士達は一刀流で構えていた。

「はあっ！」

一人の騎士が、恐らくは囷として斬りかかる。

「　」

コウサカは後ろの気配を探りながらも、それを軽々と受ける。

そこから次の騎士が真横から、まだ片方の木刀を握っている方から斬りつける。コウサカはそれも受けて、それで両手とも塞がった。

「はっ！」

そこで、真後ろから二人の騎士が、わざと微妙にタイミングをずらしながら斬りつける。二つを同時に受けることは出来ない。

そこでコウサカは。

「　！　？」

地面を足で蹴り付け、その力と腕の膂力だけで受けていた二人を

弾き飛ばしながら前に出る。

後ろの二人は、そのコウサカの動きについて行けず空振る。

右手の木刀を手を返して逆手に持ち返ると、コウサカは振り向きながら思い切り木刀を振り抜く。

ゴォン、と木刀を振った音とは思えない風切り音が鳴った。

木刀は、二人の騎士の顔面ギリギリ前を通り過ぎていた。

それはわざと外したのだ。直撃していたら、恐らく頭蓋骨すがいこつが割れるか、木刀の方が耐え切れずに砕けるか。それほどの威力いりよくだったからである。

勝負あった。

「立てるか？」

コウサカは、自分が弾き飛ばした二人に歩み寄る。

「四対一でこれとは、団長と副長が敬意を払えと言った理由が分かりました」

明らかにコウサカよりもずっと年上の騎士は、敬語を交まじえて言った。

その騎士は差し出されたコウサカの手を取ると、苦笑しながら起き上がった。

「」

一方カグヤは、ポカーンとしていた。

「起きたか、カグヤ」

コウサカがカグヤに気付いて、近づく。

「な、なにしてんの？」

「見ての通り、模擬戦だ」

カグヤは、それじゃないと首を振る。

「なんで、模擬戦なんてやってんの？」

「久しぶりに素振りをしていたら、頼まれた」

「？」

カグヤの顔には、「誰から？」と書かれていた。

「我々ですよ、お嬢さん」

声のした方を見ると、先ほどコウサカの手を取った年配ねんばいの騎士がコウサカの後ろにいた。

「身内ほ褒めはどうかと思いますが、副長は今まではほとんど負け無しかったほど強かったのですよ。何年か前に、団長に負けたのが最後でしたでしょうか」

その騎士はとても紳士的に、笑みまで浮かべながらカグヤに説明してくれた。

（うわ、すごい良い人だ）

カグヤは心中で申し訳ない気持ちになった。何故なら、カグヤはずっと騎士団のことを怖がっていたからである。王国最強だとか、ゴレムを瞬殺とか、昨日の出撃の時に全体を包んでいた鬼気迫る闘気だとか、そう言った要因からである。

しかし、炊事班と一緒に食事を作ったとき、そして今と、話してみるととても良い人ばかりである。

「ちようどいい。君も模擬戦をやってみないか？」

カグヤが感慨かんがいしく思っていると、コウサカがとんでもないことを言ってきた。

「え？」

カグヤは固まった。

「どうした？」

どうしたじゃないだろう、とそんな顔のカグヤ。

「出来るわけではないでしょうが　あたしやタクトじゃ、クマ相手も難しいんだから」

そのクマはコウサカが睨にらんだだけで、逃げて行った。

「ふむ、そうか」

別段べつだん気にするわけでもなく、コウサカは頷うなずいた。

「では、続けよう」

頷くとコウサカはカグヤに背を向け、他の騎士達に向き直った。

どうやら、体力の続く限り続けるようだった。

四人を圧倒したほどの動きをしたにも関わらず、コウサカは息を

乱してすらいなかった。

「はあ、はいはい。頑張つてね。あたしは朝食作りの手伝つて来るから」

太陽は東の低い山から頭を出したくらいだから、まだ朝の六時前後と言つたところ。タクトやナユキはともかく、ほとんどの騎士達は起き出して来て、警戒組は除いて面白そうに模擬戦なる見世物を見物している。各隊長達も注意するわけでもなく、混じつて見物している。

全体がまるで家族のような、そんな風に見えた。

「ほんの少し、カグヤにはその光景が羨ましげ見えた。」

「はあ」

一息吐くと、カグヤはタクトを叩き起こしに自分達の馬車へと向かう。

「ほら、タクト。朝だよ」

ぐーすか、ぴーすか言っているタクトの肩を揺するが、全く起きる気配がない。それどころか「うへへへ　　ナユキちゃん」と気持ち悪い寝言をほざいていた。

イラッ。

「起きろ！」

「ぎゃああああああああああつ！」

カグヤはブーツの先端で、寝ているタクトの頭を横からぶつ蹴つた。

「ひゃつ！　えつ、なんですつ、なんですかつ？」

タクトの絶叫にナユキが飛び起きた。当然だが。

「あ、ごめん。先にナユキちゃん起こせばよかったけど、この馬鹿が気持ち悪いこと言っていたから」

荷台の床をのたうち回っているタクトのことなど全く気にもかけず、カグヤはナユキを見ると謝つた。

「てつ」

いつも、いつもつ

「

「寢言でセクハラ発言しているから悪い」

ピタリとタクトの動きが止まった。

「え、マジで？」

「大マジ」

カグヤの心底侮蔑ぶべつしているような、生ゴミなまぐみでも見るような見下した視線が、それが真実だと語っている。

「えー　ちなみに、どんな？」

「自分の下心に聞いてみる」

「あー」

正直なところ何を言ったのかは分からないが、多分誰のことを言っていたかはすぐに判別はんべつできた。

「そのー　すまん」

「じゃ、食料の荷出し手伝え」

「　はい」

兄の威厳せいげん○。

「ふう。じゃ、ナユキちゃん朝食の用意しに行こうか？」

「はい。ちよっと待ってくださいね」

ナユキはショートパンツから伸びた、細いがしなやかな太腿ふとももを黒いニーハイソックスで包むと、脇わきに置いてあったニーハイブーツを履はいた。

勿論もちろんその間、タクトはカグヤによって馬車から叩き出されてその魅惑みわくてき的な光景を見る事はできなかった。

「ううむ　これほどとは」

レオナルド団長は、今度是一对八で模擬戦をやっているコウサカを見て、そう唸うなった。

レオナルド団長は、部下からオーガについてはもう報告を受けていた。オーガを瞬殺とは、恐れ入る。

「団長」

「レオナルド団長が腕を組んで黙考もくこうしていると、クラウゼンが来た。

「レオナルド団長は呆れ顔になった。クラウゼンの顔に、自分も混ぜりたいと書いてあったからである。

「好きにしる。偵察ていさつに向かわしている部隊が帰ってこなければ、どの道動けん」

「はっ」

普段は泰然たいぜんとしている癖くせに、クラウゼンは妙みょうに子供っぽいところがある。強い剣の使い手と知ると、すぐに勝負を申し込むのである。それを向上心じょうじょうしんと呼べば聞こえは良いが若い、というよりは幼い頃から剣の道へと進んだゆえに、模擬戦をゲームのように楽しむ癖がある。勿論、実戦となれば最強の名に相応ふさわしい凄まじい戦い振りを発揮するが。

「ふう」

レオナルド団長の目は、我が子を見るような目をしていて。そして、懐かしげに回想かいそうをした。

レオナルド団長には、血の繋がった子供はいない。もう亡くなつたという意味ではなく、生まれなかつたのである。妻の身体が病弱びじやくで、とても子供を儲もつけることなど出来なかつたのである。そこで、孤児こじを引き取るようになったのである。

クラウゼンも、レオナルド団長に引き取られた孤児の一人だった。元は捨て子で、教会の前に置かれていた。その後、孤児院けんにんを兼任けんじんしていた教会に引き取られ、レオナルド団長に引き取られたのである。クラウゼンが引き取られた頃にはすでに女の子が四人に、男の子が五人もいた。ただ、当時から最強の名を馳はせていたオグマ騎士団の団長という階級であつたから、それだけの子供を育てられるだけの余力があつたのである。

姉や兄と遊びながら笑っていた、幼い頃のクラウゼンは幸せそうだった。

そこまで回想して、レオナルド団長は知らず顔をしかめる。

まだクラウゼンが本当に幼い頃、三歳か四歳の頃に第二次モイトウラ戦争が始まった。その火の粉は王都タラにまで及び、そしてその時にレオナルド団長の家は焼け落ち、家族やその時に集まっていた親族は。

レオナルド団長の家族は優先的に避難馬車に乗れたが、それを蹴って子供や年寄りなど弱い者に乗せたのである。クラウゼンは最も幼かったため一番の馬車に、他の子達も比較的早い方の馬車に乗ったがその馬車も襲撃を受けてしまった。そして、クラウゼンは馬車の中で、その光景を見てしまっていた。

幼い日のクラウゼンは最初は分からなかったらしいが、剣の才能と同じく頭の良い子だったせいもあり、理解してしまった。

大戦が終わり、多くの部下を散らしたレオナルド団長が帰って来た時、幼き日のクラウゼンは言った。

魔族を殺したい。

以前よりはずっと狂気も落ち着いて、剣を握る楽しみを知ってくれたクラウゼンが、コウサカと木刀を交えている光景を見つめる。それを面白いものが始まったと、囁し立て始める騎士達を見る。

ここにいる者達のほとんどは、大戦で壊滅した騎士団の生き残りだったり、魔族に家族を殺された者達である。より直接的な行為を経験し、恐らくは各騎士団の中でも最も魔族を憎む者達が集まっている。

最強と呼ばれる所以は、その根本にある憎悪である。だから力に貪欲であり、冷徹になれる。

（だが）

レオナルド団長は、クラウゼンを圧倒しているコウサカを見る。

（あの存在は、何なのだ）

ミレンシアの伝承は、レオナルド団長も知っている。

その者、世界に危機迫りし時、守護者たる女神が呼びて、
現る者也。

その者、『星』より来たる者也。

その者、破壊神たる存在也。

その者、救世主たる存在也。

その者、災厄討ち滅ぼす存在也。

その者、ミレンシア也。

正直、レオナルド団長はその伝承を胡散臭く思っていた。破壊神で救世主という時点で、矛盾しているからである。

そして、そんな者がいたのなら何故過去の大戦に現れなかったのか。

しかし、伝承のように破壊神にも、救世主にも成り得るほどの存在が現れた。

(何故いまさら?)

その答えは、今向かっているバンホールにある。少なくともミレンシアが現れたということは、過去の大戦時よりも世界は危機的状況だと言う事。

「くあつ！」

クラウゼンがまた負けた。これで四敗である。

(なら、あの少女は?)

コウサカの話によると、あの少女もミレンシアであるとのこと。あの少女しか行き先は分からないのだと言う。

だから、余計にレオナルド団長は分からなくなる。コウサカはともかく、あのナユキという少女からは、コウサカに付いて来たあの兄妹よりも迫力がなく、弱々しい。

「団長」

先ほど、カグヤの相手をしていた騎士がレオナルド団長に声をかけた。

「エルスカ。どうした？」

その男は騎士団の次席副長であり、騎兵部隊の隊長を務める者である。

「偵察にやった者達が戻ってきました。問題ありません」

カグヤに見せたものとは違い、別人のように鋭い眼をしながらエルスは報告する。

「そうか。では、進軍を開始する。全隊に到達しろ」

「はっ」

レオナルド団長は、もう一度コウサカとクラウゼンを見る。

「ふ」

久しぶりに負けて勝とうとして必死になりながらも、しかしクラウゼンの表情は楽しそうだった。

レオナルド団長はひとつ笑うと指揮官の貌になり、予め決めておいた各隊長達の集合場所とした円陣を組む馬車群の中心へと向かった。

第二十一章 鉾山都市バンホール

バンホールが近づくとつれ、コウサカは自身の異変いへんに気付いた。コウサカは御者台ぎよしゃだいに座りながら、片手を強く握る。

(やはり、力が強くなっている)
握った手を開いて見る。すると、特に意識していないはずなのに、ガントレットを嵌めた手が薄っすらと青白く光っていた。

それはマナシールドと呼ばれる防御魔法の一種だった。魔導皮膜まどうひまくを身体からだの表面に展開し、内在する魔力量に応じて相手の攻撃を無力化できる。

肉体的ではなく、精神的にぐっと力を込めて魔力を押さえ込む。

(そして)
コウサカは、自分がより残忍ざんにんになったことを強く感じる。オーガ達を何の呵責かしやくもなく殺した。殺したというよりは、あれは虐殺じやくと言えるだろう。

戦意を失った敵を、わざわざ追ってまで殺したのだから。

ただ、どの道コウサカが殺さなくても、騎士団が殺すことになったのだから、結果は同じである。今まで何十、もしかしたら何百という人間を喰い殺してきたオーガゆえに。

感謝されることはあっても、まず恨まれることはないだろう。少なくとも人間からは。

コウサカは頭を振る。

(もはや、善悪ぜんあくで判断できる程度の問題ではない)
負ければ、世界が終わるのだ。そこに個人の感情などが、どこに入り込む余地よちなどあるものか。

コウサカは気付いて、考えを消す。そんなことを考えても、今は何の意味もない。

ただ、コウサカはもうひとつのことに気付けてはいなかった。最近さいきんは、力が増すにつれ、感情の起伏きふくが特に乏しくとほなっているこ

とに。

オーガの襲撃が遭ってから、すでに二日が経った。

あれからもスケルトンや、ガイレフの岩石から生成されたのである。赤いロックゴーレムなどの襲撃があり、進軍がいちいち止められたため、大幅に遅れてしまっていた。

「はあっ！」

跳躍したコウサカが、跳び上がった勢いそのままの凄まじい威力の跳び蹴りを以って、ロックゴーレムの片腕を破碎した。

コウサカの脚は、薄っすらと青白い光に包まれていた。マナを集中させ、破碎できるだけの威力とグリーブが壊れないように防護したのである。

腕が碎けた衝撃でゴーレムが横倒しになり、コウサカは素早く頭頂部に貼られた魔符を剥がして、ゴーレムをただの岩石に戻す。馬車群の方では、骸骨オオカミの処理が終わったようだった。

「ちよつと。なんで、あたしを使わないのさ」

終わったと同時に、朔絆が不満を言い実体化してきた。

「無駄に力を浪費させるのは、避けたい。あと、確認だな」

「なにそれ？」

ちよこんとコウサカの肩に座ると、朔絆は分からないという顔をしながら聞いた。

「コウサカは、たった今倒したゴーレムを見つめる。そこら辺の岩石を適当に集め、魔符で繋ぎ合わせただけの粗製乱造なゴーレムだった。」

「こんな捨て駒を、わざわざぶつけてくる相手のな」

「ふーん　ま、いいけど。ちゃんと使ってよね」

「危なくなったらな」

朔絆はどうでもよさそうにしていたが、コウサカが頭を撫でると

満足したのか、姿を消した。

(ディーファか)

今まで目の前に現れた敵は、全て魔符によって操られていた。こんな芸当をするのは、あの男だけだろう。

「 Rwy'n gobeithio y ffiam 我は 火炎を 求める」

コウサカは手に取った魔符をファイアボルトを軽く詠唱し燃やすと、馬車群へと戻って行った。

コウサカ達と騎士団はガイレフの北側、山と森を抜け、南側の乾き切った赤い地面と枯れ木が続く乾燥地帯へと入っていた。何のものなのか分からない骨が至る所に散らばり、さらに厄介な事もあった。

「南側に入るとアイスボルトが使えなくなるから、気をつける」

出発前に、レオナルド団長からコウサカはそう教えられた。使ってみると、水分の収束しようとしても、そもそも水が集まらなかった。乾燥した気候のせいで、空気中の水分がほとんどないのだ。

何故、南北でここまで環境の差があるか、原因は全く分かっていない。謎の巨大なドラゴンの遺跡のせいなのか、過去の大戦で人間の軍が駐屯した時に何かあったのか、そもそも過去の大戦のせいなのか。その調査すら手がついていない。

タラ王国には、ただの一辺境の調査を出すほどの余力は無いのである。約二十年前の大戦の傷痕は、それほど深い。国力はそれなりに回復しているが、過去に消失した軍事力は三分の二程度までしか回復していない。量はともかく質の点からすれば、半分以上か。さらに、無理矢理バンホールに補給線を伸ばして維持させているため、その負担も大きい。

確かに、外を見ても魔族は徘徊してないし、死体が転がっていることは無くなった。しかし、外見上は平穏を保っていても、今でも各地で散発的な戦闘はあるのである。ダンバートンでもあったよ

うに。

水面上は平和と言っても、この世界はまだ破滅の淵ふちが見える位置にあるのだ。

「タクト、ラインアルトについて何か知っているか？」

「へ？」

タクトは「オレっすか？」という顔をした。

「うーん、そっすねー。そこら中穴だらけで、今は盗賊コボルト達の住処すみかになっていることくらいしか」

コウサカがレオナルド団長から聞いた事と、ほとんど変わりは無かった。

「レオナルド団長はそこを構わず進むというが　　ふむ」

コウサカは手綱たづなを握りながらも、思索しあへんする。

「大丈夫じゃない？」

カグヤが特に気にしていない風に言う。

「どうしてだ？」

「コボルト達つてさ、昔は人と一緒に働いて、生活出来ていたくらいに頭良いんだよ。だから、勝てるかどうかも分からない、この集団相手に仕掛けて来るとは思えないんだよ。人を酷ひどく憎にくんではいるけど、さ　　」

そうなのである。コボルト達は、以前は人間と共に歩あゆんでいた種族だった。コボルト全体ではなく、人間の世界に来ていた一部ではあるが。

コボルト。

百三十cmほどの、人間の子供ほどの背に、胴体に比べて大きい頭、ギョロリと光る目、鉤かぎばな鼻に、細長い耳、自身の頭二つ分程度しかない小さい胴体に、胴体の一・五倍ほどの長さの脚、そして赤茶色の体色をした亜人種の魔族である。また四足歩行の動物の特徴を持った脚も名前の由来である。

以前は、主に鉱山などの労働力として働いていたが、過去にあっ

たとある事件のせいで人間を酷く憎むようになってしまった。
武器や防具など、道具の扱いにも長けている種族で、過去の名残
で人語も話すことが出来る。

「なるほど、厄介だな」

「え？」

「いや、独り言だ。気にしなくていい」

コウサカは話を切ると、御者台から周囲を見渡して警戒をした。

巨大なドラゴンの遺跡は、ぼつかり開いた巨大な穴に石化したの
か、それとも本当にただの石像なのか、巨大なドラゴンが埋もれて
いる形となっていた。発掘のため縦横無尽に足場は組まれていたが、
馬車を通れるほど頑丈な物などあるわけが無く、馬車群は穴に沿っ
て迂回せざるを得なかった。迂回と言っても、穴の直径は二百メー
トルほどしかないため、大した手間でもないが。

「不気味っすね」

タクトが御者台の脇に座って遺跡を眺めていたかと思うと、ポツ
リと呟いた。

「何か噂でもあるのか？」

手綱を握りながらも、コウサカは答える。

「ずっと昔なんすけど　　タラに現れたドラゴンに似てるらしい
んすよ。あれ」

それは今よりもずっと昔、第一次モイトウラ戦争の時代の話であ
る。もう神話のようなものであるが、王都タラにドラゴンが召喚さ
れ、破壊の限りを尽くしたという話がある。

ポウオール側の召喚したドラゴンの名はクロウクルアフ。神々で
すら手に負えない破壊神と畏れられるほどの存在である。その実力
は、グラスギブネンなど霞むほどであるという。

神すらも殺せる存在が、何故ポウオールに召喚できたのかは不明。

過去の大战は謎ばかりが多いのである。

「伝承にクロウクルアフ、って名前のドラゴンがいるね。前の戦争にも出て来たらしいけど」

カグヤも荷台の方から顔を出した。

「もし　こいつまでいるとしたら」

タクトは考えて、顔を青くしながら身振るいした。

「カグヤも同じ考えに至ったらしく、顔を青くした。

「だとしたら、それも斬るまでだ」

ただ、コウサカだけは泰然としたままだった。強がりでも何でもなく、間違いなくその時の最前線に立つその身でありながら。

「それがあまりにも、さも当たり前のように言うものだから二人は意味が分からず一瞬固まった。

「ふ」

「くす」

そして、お互いに顔を見合うと小さく笑った。同時に、二人とも一気に肩の力が抜けるのを感じた。

確かにこの人ならやりそうだと。

ガイレフ北側から抜けた馬車群は物資の積載された十台の馬車を縦一列に並べ、その最前列に指揮官であるレオナルド団長の馬車、左右を十六台の兵員輸送馬車と六十五の騎兵が固めた、三列縦隊で進んでいた。この遠征は、ついでにバンホールへの補給物資運搬も兼ねられていた。

一行が遺跡を抜け進んでいると、急に馬車群が止まった。

見ると、軽装の騎士が駆け寄って来ていた。

「守備隊の者か？」

レオナルド団長は御者台に出ると、そこから話しかける。

「お待ちしてりました！」

その騎士は、ひどく焦っているようだった。

「一体どうした？ 遅れる旨は、すでにフクロウ便で伝えておいたはずだが」

その騎士の焦りようが普通ではないことに、レオナルド団長は嫌な予感を覚えながらも聞いた。

「それが、バリダンジョンから多勢の魔族がつ　！」

「なに？」

六十五の騎兵と一人の男が駆けていた。

「全く呆れさせるな　」
切迫した状況ながらも、レオナルド団長は苦笑してしまった。

その目は、全力で飛ばしている騎兵に、完全装備のまま走って併走しているコウサカに向けられていた。

「団長。戦況としてはどうなっていますか？」

「こつちが優勢に決まっているだろう。相手は狭い入り口からしか出て来れず、こちらは二千からなる騎士が一斉攻撃をしている」

それは先ほどの騎士から聞いた、少し前までの戦況ではあるが。

（オーガ級の敵が大量に来たのなら、厳しいかもしれないがな　）

一般の騎士はオグマ騎士団のように魔法など使えない。一般兵が使えるのはせいぜい弓までで、魔法は魔術兵が担当している。普通のオーガでも魔法を弾くほど頑丈であるため、もしあれが群れを成して来たのなら危険だろう、とレオナルド団長は考察していた。

「とにかく急ぐぞ」

六十五の騎兵と一人は、全速力でバンホールへと向かっていた。

「全砲撃てえっ！」

号令が響くと同時、ドギユンと重い発射音を響かせながらバリスタ用の鉄製の極太の矢がそれぞれの砲台から放たれた。

その矢が、軽く五メートルを超える赤い色のゴーレムを粉碎した。ただ、貫通はせず一体を破壊しただけでほとんどの威力が殺がれ、地面に落ちた。それだけで、普通のゴーレムではないことが分かる。バリスタとは攻城兵器に部類される大型弩砲である。石や金属の弾、極太の矢、複数の小型の矢などを打ち出す。それは人力では不可能な飛距離、威力を誇る。

「絶対死守せよ！　ここを落とされては、王国の戦闘維持力が低下する！」

二つの騎士団の指揮を任されている騎士団長の声が響く。

「何なんだこれはっ　！？」

バリスタの砲兵指揮官が、眼下に広がる光景を目にして誰にともなく怒鳴る。

高さ約十メートル、横幅約四メートルほど鉾山の入り口、バリダンジョンから大量のゴーレムが溢れ出し来ていた。コウサ力達が戦って来たようなレベルではなく、魔符が用いられていない岩石自体に魔力を込めて作り上げられた上級のゴーレムだった。

他に設けられた陣地からも、カタパルト（投石機）が巨大な岩石の雨を降らしている。しかし、それでも敵は止まらなかった。

「くそっ、装填急げ！」

バンホールに設置されているバリスタは、構造的には弓と同じである。ただ弦ではなく、動物性繊維の太縄が用いられている。ゆえにバリスタ専用の大型矢以外を扱うことはできなく連射も利かないが、凄まじい威力の一撃を放つことが出来る。

ただ装填に、つまり太縄を引くのに最低でも屈強な騎士二人分以上の力がある。何度も撃つていけば、それだけ力も消費して連射力が落ちていくのである。

「撃てえ！」

再び重い音と共に、バリスタの矢が放たれてゴーレムを粉碎した。

バンホールは山を切り崩し、作った都市である。しかし、都市というよりは村や町と言った規模きぼでしかない。

古くから鉱山としてあり、その安定した産出量から、タラ王国が援助して今ではウルラ大陸一番の産出量を誇る大鉱山となった。

しかし、過去の、第一次モイトウラ戦争時に地下要塞ラフとしてその後はバリダンジョンとなつて、一時期は鉱山として使えなくなつていた。だが、良質の鉱石と産出量は捨てれず、要塞化までしたのである。

バリダンジョンの入り口を、山をさらに削つて作った陣地じんちにバリスタやカタパルトを設置し、扇状に展開している。もし敵が出てくれば、前方百二十度方面から一斉攻撃をされる。さらに、それを抜けても約二千からなる騎士が待ち構えている。

それほど防備を固められた都市が、バンホールというところである。

「これはまずいな」

レオナルド団長は、小さく呟つぶやいた。

バンホールに入るには、南北どちらかにある関所かんじょを通る必要がある。そこ以外は絶壁ぜつぺきで、進入が不可能だからである。その関所には検閲けんえつをするための一定数の騎士がいるはずだが、誰一人としていなかった。

つまりは、それほど事態。

バンホール北側から入ると、少し狭い悪路あくろを進んでから街に入ることになる。悪路を進むと、ちょうど鉱山の入り口の真上に着く。そこはまだ丘おかという高さで、左側にある坂道から下りて行って、そこから騎士団の陣地や兵舎へいしゃを抜けて、ようやく街に入ることが出来る。

恐らく砕けたゴーレムを盾に進んで来ていたのだらう、背に矢筒やじゅうを背負い弓を手にしたゴブリンが丘まで上がって来ていた。

ゴブリン。

緑色の体色に、少し長い耳、百四十cmほどの背をした魔族の下級兵士である。人間側でいう片手剣や盾、弓矢と言ったものを扱って来る亜人種で、一個体あたりの戦闘能力は低い^が、外見通り人間のようにズル賢い戦い方、つまり罠なども扱える厄介な相手である。

「っー！」

それは蹄の音にほとんど掻き消された声だった。だが、戦闘体勢をとって感覚を鋭くさせたコウサカには聞こえた。

一瞬だけ、隊列からコウサカは遅れる。そして、全力で地面を蹴る。

「なっ！」

コウサカは全力で走っている馬を追い抜いた。

「ふんっ！」

一瞬で腰からバスタードソードを抜くと、コウサカは思い切りそれをぶん投げた。

それは矢を番えていたゴブリン達の目の前、鉱山入り口を補強するために作られた丘にある建物の柱に突き刺さった。

「！」

有り得ない凄まじい速度で、また戦闘体勢をとったコウサカは鬼気迫る闘気を纏っているため、ゴブリン達は見ただけでたじろぎ、下がって行った。

ズザザ、と地面を浅く削りながら止まると、坂の方を見たままコウサカは突き刺さった剣を引き抜いた。

「ふう」

息を吐いて力を抜くと、コウサカは反対側を見る。

「あ ああ」

そこには、つば広帽子に、薄紅色をしたワンピースを着た十一、十二歳ほどの少女が怯えた顔でへたり込んでいた。

「コウサカは坂を警戒しながらも、少女に歩み寄る。」

「名前は？」

助かったことに少し安堵あんどを浮かべながらも、それでも揺れる瞳で少女はコウサカを捉とらえる。

「い、イビー」

小さく、呟くようにイビーという少女はコウサカを見上げる。

「事が終わるまで、ここで動くな」

コウサカはひとつ頷くと、追いついて来たレオナルド団長達を振り返った。

「俺は下を片付けます。ここは頼みます」

「下　？」

レオナルド団長は一瞬の間の後、言葉の意味を理解する。

「馬鹿な！　バリスタや投石が降っているんだぞ！？」

レオナルド団長は叫ぶが、しかしコウサカは静かに背中せなかのクレイモアを抜いた。

「朔絆。帯びるだけだ」

『りよ〜かい』

コウサカは構わずクレイモアを肩かたに担ぐと、十メートル以上はある丘から軽く飛び降りた。

そして、とりあえず新たに出てきたゴーレムの胴体部を真上から踏み砕き倒すと、そのまま特に何もなかったようにスタリと地面に下りた。

「！？」

その姿は戦っている騎士団からも見えたのか、バリスタによる砲撃やや長弓ちゆうきゆうの矢が止まった。

背後からヒュンという音がすると同時、コウサカは腰から短剣を抜く。そして、数メートル程度の距離から放たれた数本の矢を、易やす々と振り返りながら切り落とす。

（試してみるか　　）

自分の魔力を、クレイモアの刀身に乗せる。それも多量たうりやうに。

「えっ、え、なに？」

予告も何も無く行なったため、朔絆が戸惑ったような声を上げる。
「ふっ！」

小さく気合を入れながらコウサカは矢を放ってきたゴブリン達に向かつて、片手だけで軽々とクレイモアを振るう。

「！」
振った風圧に魔力が乗りそのまま衝撃波となって、たった二メートルほどであるが数体のゴブリンを吹き飛んだ。

「ふむ」

まあ、初めてにしては上々か。そう思いながらコウサカはウターンして来た赤いゴーレムを見もせず、振り返り際の光り輝くクレイモアの一撃で、横に真つ二つにする。

どうやら、ゴーレムはより近い人間を察知して攻撃するらしい。

急に敵陣の真ん中に現れたコウサカを狙ってきた。

その数は軽く十以上。四方八方から。

だが、唐突にゴーレム達がバラバラになって、崩れた。

「？」

意味が分からず、コウサカはその場で首を傾げた。

「気をつける！ ウインドミルだ！！」

「！」

瞬時に声に反応して、コウサカは後ろへと跳ぶ。すると、ほんの一瞬だけ遅れて、ゴーレムだった岩石が浮かび上がり円を描く様に空中を飛んだ。そして、周囲を薙ぎ払う。

ウインドミル。

簡単に言くと、回転することである。本来ならブレイクダンスの一種である。ただ、何故そんなもの名称が使われているかと言くと、ゴーレムなどが同じようなそれをするのである。ゴーレムは『中核』を中心に、纏った岩石を浮き上がらせ、周囲を回らせるのである。

ただそれだけであるが、想像してみてほしい。

数十キロ、物によっては百キロを超える岩石が飛んで、周囲を薙ぎ払ってくるのである。当たり所によっては即死も有り得る、厄介で危険な攻撃なのである。

「
」
瞬時に範囲を見切り、コウサカは射程ギリギリに立つ。
さてどうするか。いくらコウサカでも、何十と飛んでくる飛礫を

防ぎ切ることなど、さすがに出来ない。
「その男オツ！」

前方。ゴーレムが崩れた岩山の向こう側にある、高台の陣地のひとつからの声だった。

「こちらから『核』を狙う！ どうかしてそこから逃げろ！」
「『核』？」

コウサカにはそれが何を指すか分からなかったが、とりあえず自分がいては攻撃が出来ないということだけはわかった。

ドンッ、とコウサカは跳んだ。思わず守備隊が絶句するほどの高さまで。

そのまま、補強され巨大な門のようになっている鉾山の入り口の上部を片手で掴むと、足で門を蹴って門の上へと身軽に着地した。

とにかくコウサカが退避したため、守備隊が動き出した。それを門の上からコウサカは眺める。

（あれか？）

一斉にバリスタやカタパルト、手弓から矢が放たれ、岩山となっている中の赤い石が攻撃されていた。今更ながら組み直し始めたゴーレムは、赤い石が砕けると今度は本当に崩れたただの岩石となった。どうやら上級のゴーレムは、魔符の代わりに岩石の体を繋ぎ合わせる魔石を『核』としていているらしい。弱点となる『核』は岩石で出来た体の中にあるため、岩石の鎧を砕かなければ倒せない。

（妙だな）

コウサカはクレイモアを肩に担ぐと、眼下を見た。

せつかく前衛ぜんえいが集中砲火を受けているというのに、その隙すきに後続が全く出て来ない。

十数のゴーレムの掃討そうとうが終わって矢の雨が止むと、コウサカは再び下へと飛び降りる。

「クレイモアを両手で構えて備えたが、鉾山の中からは何もなかった。それどころか、何かがある気配すら消えていた。

不自然ふぜんすぎる。いや、不気味ふきみとでも言うのか。

守備隊と合流したレオナルド団長達が、コウサカに近づく。

「どう なった？」

レオナルド団長が剣を構えながら聞く。

「分かりませんが、一切の気配が消えました。少なくとも、もう近くには何もいません」

「う、む」

気難しげな表情を浮かべながらもレオナルド団長はすぐに頭を切り替え、次の襲撃があると仮定しそれに備えるために騎士団の司令部へと向かって行った。

『ブキミ』

剣の中から、朔絆は声を発する。

「ああ」

コウサカも首肯しゅけんする。

ただ、結局その日は、もう何も無かった。

何のための襲撃だったのか、また何故引いたのか。それ全てが謎のままバンホールの攻防は短時間で、そして人間側も魔族側も人的被害はほぼ皆無かいむのまま終わった。

世界はゆっくりと、しかし確実に破滅へと近づいてゆく。

第二十二章 決戦前夜

その少女は、つば広帽子に、その帽子の下には腰まで届く美しく長いブロンドの髪、襟元えりもとがレースに飾られた薄紅色うすへにいろの繊細せんさいに裁断さいだんされたワンピースに身を包んでいた。

触ると崩れてしまいそうな印象いんしょうを強く抱かせ、少ししかめたような瞳は深い緑色をしていた。

その白く透き通った優しく光る丸みを持った顔は、しかし儂はかなげだった。

「大丈夫か」

「イビーという少女は、コウサカを見上げながら小さくコクンと頷く。もうかなり落ちて着いていたようだった。いきなり下から門をよじ登って来たコウサカに驚いていたが。」

「コウサカは街へ入る坂の方を見て、どうするか考える。そこには丘まで上がってきて、逃げ遅れたゴブリン達の死体がそのまま残っていた。」

「どうやら騎士団の方もこの子はここに残した方が安全と判断し、坂の魔族を蹴散けちらして守備隊と合流したようだった。」

「わ
コウサカは背中と膝裏ひざうらに腕を入れると、異常いじょうに軽いイビーを抱え上げた。」

「目を閉じる」

「うん」

「イビーは言われた通りにする。それを確認するとコウサカは踵かかとを返し、歩き出す。」

「何故、こんな場所に」

「ランスに串刺しにされた死体のすぐ横を通る。」

「 お気に入りに、なの 」

「 イビーは落ち着いたというよりは、元々なのか。消え入りそうな声量で咳く。 」

「 その丘は、街を一望できるほどに見晴らしが良い場所だった。 」

「 そうか 」

「 馬の蹄に蹴られ、潰された死体を通り過ぎる。 」

「 名前 」

「 ふと腕の中のイビーが目を瞑りながら、咳くように声を発した。 」

「 あなたのお名前は ？ 」

「 コウサカだ 」

「 そう 」

「 そして、しばらく言葉を交わさずに坂を下りて、下りきると。 」

「 イビー！ 」

「 騎士の制止を振り切り、一人の男性が駆け寄ってきた。 」

「 パパ 」

「 その言葉を聞きコウサカは膝を折り地に着けると、丁寧にイビーを降ろした。 」

「 無事でよかったっ ！ 」

「 その男性はしゃがみ込むとイビーを抱き締めた。その目には、涙が浮かんでいた。 」

「 ありがとうございます！ ありがとうございますっ ！ 」

「 その男性はコウサカを見上げると、涙ながらに礼を述べた。 」

「 いえ 」

「 コウサカは無感情にひとつ言うと、踵を返し鉾山入り口へと向かおうとする。 」

「 ありがとう、とう 」

「 父親の腕の中で、イビーも小さく礼を言った。 」

「 」

「 コウサカは一瞬だけ止まるが、振り返らず歩いて行った。 」

「ダンバートンを出立する時に、援軍要請えんぐんようけいをしておいた。それを待ち、総力を以もつて決戦を挑む」

タクト達後続の部隊も着き、三つの騎士団の指揮を任されたレオナルド団長はそう言い放った。また、ウルラ大陸各地で魔族の出現報告が相次あいついでいるらしい。

つまりは、もうそこまで事態は悪化していた。

「
」
コウサカは補強された鉱山入り口の柱に、抜き身のクレイモアを肩にかけて背を預けて座っていた。

そこは危険だが、しかしレオナルド団長が許可したのである。下手に自分達に合わせさせても、コウサカの強さを殺してしまうことを理解しているために。

「
」
ねえ」

その隣には、完全実体化をした朔絆せつひが三角座りで座っていた。その表情は、不安そうだった。

「ねえ、大丈夫　？」

そつと、朔絆はコウサカの腕に触れる。

「ああ」

コウサカは抑揚よくやうのない、感情を押し殺した顔で首肯する。

「それって」

「そうらしい」

コウサカの全身が光っていた。より正確に言えば、内在された魔力が溢れ出ていた。

（　これは、どちらだ）

テイルコネイルでは、初めて殺気を以もつて殺した。

ダンバートンでは、殺気が溢れ、飲まれた。

バンホールへの途上では、もはや殺すことに戸惑とまじわなかった。

そして、そろそろ少し力不足だと思つた途端とたんにこの魔力。

コウサカは、自分が肉体的にも精神的にも尋常のモノでないことはよく理解している。だからこそ、分からない。その力は、その力が。

「ミレンシアとしての、コウサカという存在のモノなのか。忘却の中にある、この世界のモノではない存在の自分のモノなのか。」

貴様らあああああああああああ
！！

「ぐっ」
酷い頭痛がコウサカを襲う。それと同時に、急激に増大し押さえ込んでいた魔力が噴き出す。

「ぐ、があっ」

「コウサカツ！」

普通の人間であれば進む魔力に弾き飛ばされるのだが、朔絆も精霊の端くれである。自身も力を解放して、必死にコウサカにしがみ付く。

「コウ サカツ」

額をコウサカの右腕に押し当て、必死に朔絆はしがみ付く。

「あ ああ」

神より賜りし神剣の下に！

なんだこれは？

我に続けえ！

誰だあれは？

エーデルラムトのためにつ！

エーデル ?

何かがコウサカの頬ほおに触れる。

「ナユキ」

いつになく強い表情を浮かべ、その手には女神のペンダントが巻き付けられていた。

「よかった、です」

コウサカが落ち着いたことを確認すると、ナユキはその場にペタンと座り込んだ。

「何をした？」

コウサカは、まだ鈍痛どんつうのする頭を押さえながらもナユキに聞く。

「女神様が」

ナユキは光るペンダントを掲かげる。どうやら、押さえ切れなかった魔力を吸収してくれたようだった。

「そう、か」

コウサカは朔絆の頭を撫でながら言う。朔絆の目には涙が浮かんでいた。

「む、ぐう」

肉体的ではなく精神的に激しく疲労ひろうしたコウサカは、珍しく、というよりは朔絆もナユキ初めて見る歯を食いしばった苦しげな表情で立ち上がろうとする。

迸ほととつていた魔力は、すっかり消えていた。

「あ、肩を」

「背が足りないだろう」

コウサカの身長は百八十四センチ。ナユキは百五十二センチしかないため、全く肩の位置が違うのである。

「え、あの」

「いい。朔絆、お前は剣を軽くしてくれ」

「 わかった」

目に涙を溜めたままの朔絆はコウサカの言葉に頷くと、姿を消した。それと同時に、クレイモアの光が強まった。

いつもは軽々と振舞ふるまわしているクレイモアを杖代わりに立ち上がると、一度目を瞑つむり深く深く息を吸い込む。

「ふうふうふうふうー」

そして、少しずつ上を向きながら細く長く吐き出す。乱れた気を直しているのだ。

「 ふう」

最後は完全に上を向いたまま静かに、ゆっくりと目を開く。

「朔絆、もういい」

「ホントに ？？」

心配そうな朔絆の声だけが響く。

「ああ。もう大丈夫だ」

「うん」

クレイモアの光が弱くなる。そして、コウサカはナユキを見る。

「君に助けられたな」

「あ、いえ、わたしは 女神様のおかげです」

「ここには女神はいない。君がいければ、女神は間接的な接触も出来なかった。そういうものも含め、君のおかげだ」

「 はいっ」

そして、とコウサカは思う。

(原因は分からなかったが、おかげで敵の手の内が見えた)

片手で軽々とクレイモアをくるりと回すと、コウサカは背中の中の手の皮で出来た鞘さやに戻す。そして、司令部へ向かった。

助けてください。

破壊の怪物かいぶつ

グラスギブネンが

もうすぐ復活す

るでしょう。

復活に必要なアダマタイトを集めた始めたのは、ずっと昔のこと。

必要な材料もほぼ集められました。もう猶予ゆづりがありません。

破壊の巨人に生命が吹き込まれるときが、エリンの最後の日になります。

早くグラスギブネンを斃たおさないと。私を助けてください。ここから。

場所はイビーという少女がいた見晴らしの良い丘の隅すみ、時刻は十時前後と言った所。

最近はずっと同じ内容だった。

(女神様)

膝を抱えて三角座りをしているナユキは、首のペンダントを片手で握り締める。女神とは、もうすでにあちらから何かを一方的に伝えて来るだけで、こちらからの声は聞こえなくなってしまっていた。ナユキはペンダントを両手で握る。そして、違うことを考えた。

(コウサカさん 大丈夫かな)

あんなに苦しそうにしていた姿を見たのは、初めてだった。

いつも何事にも動じなく、苦も無く物事を解決し、そして優しい女神はナユキに言った。コウサカと言う青年を信じていれば大丈夫だと。

(でも)

コウサカは、ティルコネイルで幸せそうだったとナユキは思う。ナユキが目覚めた後もお世話をしてくれたエンデリオン司祭は、

コウサカのことを話す時は楽しげで、温かそうだった。

生活環境などを整えてくれたダンカン村長は、コウサカを誇らしげに、信頼し切っていた。

他の村人達もそう。

老若男女、全員がコウサカを慕って信頼して 一緒にいて楽

しげで 幸せそうで。

一時期でも、その中にいたからこそナユキは思ってしまう。

「わたしは」

ああ、奪ってしまったのかもしれない。

「わたし、は」

抱えた膝の上に、ナユキは額を乗せる。

と、そんなことを考えて目に涙が溜まって来た頃、下の方から何か音がしていた。

「？」

ガシヤガチャ。

「ひゃっ！」

いきなり、ぬっと手が出てきた。十メートルはある崖下から。

そして。

「何をしている」

コウサカがひよっこりと顔を覗かした。下からよじ登ってきたのだ。その背中には、朔絆が宿るクレイモアはなかった。

「」

何をしている、はナユキのセリフである。

「あの」

「何だ」

登り切り眼下を眺めるコウサカに、とっくに涙が引込んだナユキが聞く。

「 何で、わざわざ登ってくるんですか？」

「 向こうの道は長い」

言われてナユキは、丘から下へ降りる唯一の月明かりに照らされ

た道を見る。

その道はゆつたりとした傾斜けいせきで作られているため二、三百メートルはある。

対して崖下から登ってくれば、十メートル程度。

「
確かに近い。近いが、普通やらない。というか、馬鹿である。」

「ここは危ない。戻るとしよう」

ポカーンとしていたナユキは、その言葉で我に帰る。

「ごめん なさい」

そして、また涙が溢あふれてくる。

「何を謝あやまる」

コウサカは月を見上げる。

「わたしがいなければ
コウサカさんはあの村で幸せ、でした」

「幸せだと？」

コウサカはナユキに目を向ける。

「わたしが女神様のことを言い出さなければ
コウサカさんはずっとあの村で」

そのナユキの言葉を、遮かきこるようにコウサカが言う。

「有り得ないな」

「え？」

涙を浮かべたまま、ナユキはコウサカを見上げる。

「俺には力がある」

片腕を上げると、コウサカは拳を強く握った。

「それに女神も俺に、君ほど感受性は高くないが接触は出来た。だから、遅かれ早かれ俺はここへ来ていた」

コウサカは、来ていたはずだ、ではなく来ていたと言った。

「だが、君がいなければ。俺は、ここまで来ることにより時間を掛けてしまっていたはずだ」

だから、とコウサカは続ける。

「ありがとう、ナユキ。君のおかげで俺は、犠牲がほとんどないうちここに來ることが出来た」

コウサカは珍しく、少し微笑みながら言っていた。そんな思ってみなかつた真摯な言葉にナユキは。

「あ　わた、わたしは　　わたしは、あ　　うくつ

引つ込みかけた涙が前以上に溢れ出し、後はもう言葉にならなかつた。

『おつそおおおーい！』

コウサカが受け取りにやって來ると、朔絆がその姿を見た途端叫んだ。

「すまない」

コウサカはとりあえず謝りながら、武具類を預けた鍛冶士に歩み寄る。

「やかましくてかなわん。とつとと持っていけ」

そう言う男の名前は、アイデルン。

首を超えるほどまで伸びた白い髪、同じ色の口元に蓄えられた髭、力強い光を湛える赤い瞳をした、ウルラ大陸随一の名工である。

かなりの高齢のはずが、筋骨隆々した百八十センチを超えるほどの長身に、上半身は裸、下半身は鍛冶用のズボンという格好だった。

「だが、まあ　　貴様は、随分な人格者らしいな」

アイデルンは、コウサカにベツタリとくっつく朔絆を見る。

そして、ふつと笑う。

「貴様が見えなくなつてからと言うもの、不安そうな子供のように落ち着きなく絶えず周りを気にしていたぞ？」

『なつ　　、おいこらジジイ！』

朔絆が真っ赤になつて、アイデルンに食つて掛かる。

「失礼だ」

コウサカは朔絆の頭を押さえ付けて、口を塞ぐ。

『むー、むー！ むがー！！』

余計うるさかった。

「申し訳ない」

朔絆を押さえながら、コウサカは頭を下げる。

「ふはははっ、構わん。俺も、久々に精霊武器などと珍しい物を見れたからな」

アイデルンは豪快じょうかいにひとつ笑うと、コウサカの預けた武具類の中からクレイモアを手取る。

そうなのである。コウサカはレオナルド団長たんちやうに助言すけいされ、大陸一と名高い名工に剣を鍛え直してもらっていたのである。

コウサカがナユキの所に行った時に朔絆がいなかったのは、そういう理由である。散々ごねられたが。

「まだ、こんなものを使える者がいるとはな」

アイデルンはクレイモアの刀身を見つめる。

『ぷはっ！ こんなものって、なんだこのジジイっ！』

「朔絆、黙っている」

とつとつコウサカが頭痛でもするように、こめかみに手をやる始末。

「ははははははっ。すまん」

しかし、アイデルンは気を悪くした様子もなく。

「もう長いこと、精霊と心を通わせられる者など皆無かいつだったのでな」

そのアイデルンの言葉については、何となくコウサカと朔絆を見ていれば分かるだろう。精霊武器とはそれほどの信頼関係、もしくはそれ以上であらねば使えない。

例えば、落ち込んだり、ストレスが溜まっていると仕事の効率が下がったり、やる気が無くなったりすると思う。

精霊もそれと同じなのである。精神状態だけで力が百になる時もある。○ゼロになってしまいう時もある。

「いや、通わせるではなく、真っ直ぐな馬鹿と言った方がいいか」

アイデルンは笑みを一つ浮かべながら言う。

朔絆が純情なもの、実はパートナーであるコウサカの影響である。精霊石から目を覚ました精霊は言うなら、『白紙の紙』。知識などは自然と吸収していくが、心がどう染まるかはパートナー次第というのが精霊武器というものである。無論、精霊には個々とした意思があるから悪事などを行なおうとすれば、全く反応しなくなるが。

「俺は、二つのものを同時に見れるほど、器用ではないですから」
コウサカはアイデルンの言葉に怒るわけでも、否定もしなかった。
「ふっ、そうか。武器の修理は終わっている。持っていけ」

コウサカは朔絆を押さえながら、装備を受け取る。
受け取り終わり、コウサカはアイデルンに頭を下げる。
それを見てアイデルンは真顔になると、言った。

「この世界を、頼むぞ」

場所は移り、ナユキが座っていた見晴らしの良い丘の上。そこは月明かりに照らされているだけで、下は松明が焚かれ明るかった。

『ギョツとして』

「ああ」
冑と上半身の鎧は外してあるコウサカは片膝を着くと、手を広げている朔絆の小さい身体を抱き締めた。

それだけ、朔絆の目にはじわりと涙が滲んだ。

「もういいか？」

『いいって言うまで』

「ああ」

何故こんなことになっているかというと。

装備を受け取った後、コウサカが唐突に言ったのである。

「何か、俺にしてほしいことはあるか？」

だから、朔絆は言ったのである。場所を変えるから付いて来いと。

そして、今コウサカが朔絆を抱き締めているということになっている。

「ねえ」

だがそれは、どう考えても普段の^{ふだん}コウサカの行動ではなく。

「やっぱり あんたって、死んじやうの？」

未練^{みれん}を残さないように、自分が出ることはやっておきたいと。そんな死へ向かう者のようで。

「ああ」

膝を着いて背を合わせているため顔の位置が同じ高さで、コウサカの声は朔絆の顔のすぐ隣から聞こえてくる。

「死なないって、約束したじゃんか」

朔絆は、抱き締める力を少し強める。

「あたしは あんただけいれば、それでいいのに」

小さく、朔絆は^{しづか}呟く。

「でも そう、なんだよね」

朔絆も、コウサカのパートナーである。それだけにその想いは、強く^{つな}繋がっている。

「あんたは、この世界を護るためにあたしと契約したんだよね」

朔絆の目には、大粒の涙が溜^たまっていた。

「うん あたしは、武器 だから あんたが、思

いっきり 使ってくれれば」

「それは違う」

コウサカが^{かく}遮った。

「え？」

「俺は、お前にも幸せであってほしい」
ビクリとして、朔絆の目から涙が溢^{あふ}れ、滴^{したた}り落ちる。

「本当なら、俺はお前を最後まで使う気はなかった。確かに、最初

コウサカに背を預けながら朔絆は聞く。

『あたしの幸せ、って言ったよね』

「ああ」

朔絆は素直で、真っ直ぐな気持ちで言う。

『あたしは あんたがいれば、それだけで幸せだよ』

それは消え入りそうなほどの小さい声。

『ねえ、ホントに無理なの？』

朔絆は身体を反転させると、コウサカの胸に手を置きながらすぐ間近からその顔を見上げる。

すると、コウサカがとんでもないことをほざいた。

「分かん。まあ、前にした約束通り出来るだけ死なないことにする」

『えっ』

朔絆は目を見張る。

「何が出てくるかは、グラスギブネンすらその力量はあやふやだ。

どれだけ長く、どれほど広大で。だから可能性としては、死ぬ方が高いというだけで」

『ざっけんなあああああああああつー！！』

「がふっ」

久々に見事なアッパーカットがコウサカの顎あごに、クリーンヒットした。

『だったら！ な・ん・で！ 絶対死ぬような風に言いやがったあ

あああああああ！』

ギリギリギリギリッ。

そのままコウサカの首を絞めにかかる。

「待て待て」

絞められている割には、平然へいぜんとしながらコウサカは言う。

「確かに死なないかもしれないが、だが死ぬかもしれない。それなら、最悪の事態を想定するだろう」

最悪の事態を想定をするのはいいが、本当にそれが起こると思わせるほどの振る舞いをしていたことが問題であって。

『だったら、絶対に死ぬなっ!!!』

「いや、それが無理か出来るか分からないからであって」

『やつかましいいいいいいいいいいいーっ!!!』

ギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリ。

朔絆はもう最後だからと想いを告白してしまったことで、真っ赤になり、恥ずかし過ぎて訳が分からなくなり錯乱さくらんしていることなど、コウサカが気付くわけがなく。

「おい、そろそろ苦しいんだが」

『や・か・ま・し・いいいいいいいいいいーっ!!!』

ギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリ。

「明日は、少し無理をさせるかもしれないが。頼むぞ」

首を絞められながら、コウサカは目を伏せると真摯しんじに朔絆に言った。

「相棒」

コウサカは頭ではなく、朔絆の頬を優しく撫でた。

朔絆はより真っ赤になると、頭が混乱し過ぎてショートしてきた。

『はうわうああ』

そして、また目を回して倒れてしまった。

「お、おい!」

当然、この馬鹿が何でか気付くわけがなく。

『あうあ』

ただ、朔絆は心の中でひとつだけ安心していた。

コウサカは、別に死ぬ気はないのだ。本人としては死ぬ方の確率が強いと考えているだけで。

だから、朔絆はとても安心して。

そのまま、コウサカの腕の中で眠りに落ちた。

もう日は昇り、正午だった。

「我々は、これより魔族の本拠地アルベイへと向かう！」

一段高く木の箱で作られた壇上から、レオナルド団長は腹の底から出した大音声を響かせる。

その眼前には人、人、人。

オグマ騎士団とバンホール守備隊を合わせた、二千余名。

増援としてきたオグマ騎士団本隊の半数以上、五千余名。

合わせて約八千人の大部隊。

そして、それを家々の中、または外に出て見つめるバンホールの人々。

「本来なら、増援組は一日休ませてやりたかったが時間がない！」

それはナユキが言ったことである。女神の力も弱まり、伝えてくる内容も逼迫していることから、もう時間がないことを。

「知つての通り、また魔族共が大陸中で動き出している！これが何を意味するのか、分かるだろう！」

レオナルド団長の声を聞く騎士達は、一言一句聞き逃さないように真剣に耳を傾ける。

「だが、我々は幸運である！」

レオナルド団長は、壇上の隣に立つ二人を手で示す。

「伝承のミレンシアがここにいる！」

何千人という視線が、二人に注がれる。

「その男の名は、コウサカ！ オーガですら束になっても勝てないほどの存在である！」

それに、ほとんどの者が目を見張る。レオナルド団長は誇張して何かを言う事はない。なら、その口にすることが本当であることを騎士団の者は知っているからである。

「その少女の名はナユキ！ 女神の声を聞き、我々を導いてくれる存在である！」

コウサカはともかく、ナユキは恥ずかしそうにモジモジと下を向

いていた。

それに、ほとんどの者が失笑する。

だが。

「コウサカはナユキを背に隠すように前に出る。そして、その眼に
気迫を込めて失笑した者達を睨みつけた。」

それを見た者全て、背筋が寒くなる。実際見たわけではないが、
すぐ隣にいたレオナルド団長ですら軽く寒気を覚えたほどである。
それだけの気配。存在感。畏怖を抱かずにはいられないほどの。

「先陣はこの二人が行き、道案内をしてくれる！」

レオナルド団長の声にコウサカに吞まれていた者達は、はっとす
る。

「我々の世界は、残念ながら我々の力だけでは護り切れないっ
！」

それを言うレオナルド団長が悔しげに見えたのは、見間違いでは
ないだろう。

「だがっ！ 第一次モイトウラ戦争では、女神様その御方が！ 第
二次モイトウラ戦争では女神の祝福を受けた光の騎士ルーと大魔導
師マウラスが現れ、この世界を護る力を貸してくれた！」

そして、とレオナルド団長は二人をまた示す。

「今度はミレンシアという存在が現れてくれた！ さらに囚われの
身である女神様は、それでも尚ナユキ君を通して世界を救おうとし
てくれている！」

すう、とレオナルド団長は深く息をする。

「これが幸運と言わずして何と言うものかつ！ 我々はこの世界
を救うための、より直接的に救うための礎と成れる機会に巡り会っ
ている！」

レオナルド団長を見つめる騎士達の顔が、より強い力を帯びてい
く。

「この世界を救う者達よ！ 剣を掲げろっ！」

幾千と抜刀する音が響き渡る。

そして、幾千の剣が掲げられる。

「これより世界を救うための決戦を挑むっ！」

レオナルド団長自身も剣を掲げる。

「我等が屍が上に、我等が子、孫達が恒久な平和な世で生きられるためにっ！」

一番強く、大きくレオナルド団長は叫ぶ。

「我々は世界を護る剣となるっ！！！」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおっ！

地響きのような大音声がそれに答える。

そうして。

最初の関門となるバリダンジョンへ向け。

約八千人の兵達が足を踏む出す。

人間と魔族の、三度目の決戦が開始される。

第二十三章 コウサカの過去

第二次モイトウラ戦争と呼ばれた、人間と魔族の戦争があった。

その大戦が終わったのが、約二十年前。

当時、騎士総数二十四万以上を誇っていたタラ王立騎士団は、その時点での生き残りはたったの六万と少し。

数々の英雄達のおかげで得た紙一重の勝利で、僅かに生き残った騎士団は魔族の残党を狩るために傷付いた身体に鞭を打ち、剣を手にとって戦った。

そして、その戦いで四万まで擦り減って行った。

大戦と数年も続いた残党狩りの傷が原因で、一年経つと三万まで減っていた。

二十四万が、たったの三万である。それほど凄惨な戦いだった。その中で民間人の犠牲者数については、正確な数は一切分かっていない。

それは正確な数など、戦場跡になど入りたくも、思い出したくもなかったからである。

愛する者の亡骸を葬ってやることも、戦場から回収することも許されず。

無数の死体が転がるその場で。

死体を踏みつけながら。

さらに死体を重ねながら。

そんな地獄のような大戦が終わり、やっと出られたというのに。

誰も彼も。誰がそんな場所へ戻ろうと、近づこうと思うだろうか。

あれは決して、人の世ではなかった。

現在のエイリフ王国タラ王立騎士団の戦力は、十数万の騎士達である。正確に言えば、十六万と四千七百三十一名。

過去の大戦で消失した戦力の、やっと回復した三分の二がこれである。

そう数の上では。

新たに入団した約十三万の者達は若かく気力に満ちていたが、やはり素人ばかりであった。

クラウゼンのように才能がある者も少なからず居たが、しかし最盛期の王立騎士団と比べれば全体的に弱体化しているのは明らかだった。

量も。

質も。

そして、覚悟さえも。

過去の地獄を見た、クラウゼンのような者は少なく。しかし、過去を身近に知っている故に正義感は強く。

それゆえに、死に易く。見つとも無く足掻いて、生き残る術も何一つ知らず。

腕の一本や二本程度。

眼球の一つ程度。

それでも生き残って帰って来る意味も、まだ知らず。

そんな多くは、未来を担う若者達ばかりであった。

夢があり。

恋をし。

それを掴むのに必死になって、当たり前　　タクトやカグヤ
ほどの年頃の少年少女。

護らねばならない子供達の力すら、命すら借りなければならぬ。

それがエイリフ王国の、ウルラ大陸に住む人間達の現状だった。

だから、タラ王立騎士団の切り札というべきオグマ騎士団の半数を出したのである。

時が来て、魔族が攻めて来た時。そんな時にただ消耗戦に使うよりは、こちらに賭けたのである。

女神により導かれた少女が導く、コウサカという青年に。その背負った運命に。

だが、見たことも会った事もない軍令本部と国王が、いくらレオナルド団長の手紙だとしても、そんなものを簡単に信じるはずがなかった。

だから、レオナルド団長は持てる物を全て掛けて、要請を出したのである。

レオナルド・フユードという男は本来なら軍令本部で將軍の一人として、もしくは一方面軍の司令官の席に就いていてもおかしくないほどの人物である。

その持てる全ての発言力、責任。自分の命まで掛けて。

「次は 右です」

だから、レオナルド団長は焦る。

「もつと急ぐことはできないか？」

自分の命が掛かっているからではない。

子供達が、無駄死にする前に終わらせなければと。

「すみません。わたしでは、分かれ道に来てから集中しないと分からないんです」

ナユキが申し訳無さそうに、レオナルド団長を振り返る。

「どの道」

ナユキを護るように、すぐ隣にいるコウサカが言う。

「足止めはされます。下手をすれば、そこで全滅する可能性もあるのです。慎重に行くに越したはないでしょう」

「うむ」

事実。コウサカが報せて来なくとも、この先に罠が仕掛けられているのは明らかだった。

何故なら、鉾山に突入してから何の襲撃もないからである。そして、前日にあった魔族の異常なまでの引きの良さ。

「本当に、大規模魔法など仕掛けられているのか？」

それはコウサカが伝えてきたことである。唐突に司令部に来て、そう言ったのである。

「確信を持ってそうです」

何の逡巡もなく、コウサカは頷く。

「しかし、恐らくは魔法陣を敷設して発動するものです。なので、それを俺が破壊します」

「何故わかる？」

コウサカは振り返らずに言う。

「多数の魔術師が発動するものならともかく。ただバンホールに近づいただけの俺が、それに反応しました」

コウサカは、昨日の魔力の暴走を思い出す。あれは魔力ではなく、記憶に関係した暴走だったかもしれないが。

「それなら敷設されているものから漏れ出している魔力に反応したとしか、考えられません」

「う、む」

レオナルド団長も魔法は使えるが、やはり普通の人間である。ミレンシアであるコウサカには、自分には分からないことも感じ取れるのだから無理やり納得した。

大人二人が並ぶのがやつとの狭い坑道を進み地下へと潜っていくと、広く開けた部屋に着いた。

太い材木が組まれ壁が補強されたそこは、地下だと言つのに天井は十メートルほどもあった。左右を見渡すと百メートルほど幅があった。

そして、部屋の中央には赤黒いローブに身を包んだ一人の男が居た。

「その男が、先頭のコウサカを捉える。」

「朔絆、切っ先に溜める」

「りょーかい！」

だが、コウサカは構わず、跳躍して深々とクレイモアを地面に突き立てた。

直後、地面が轟爆した。

そして、ガシャンというガラスが割れるような音と共に、部屋全体から紫色の魔導力子が散った。

それを確認した後続の騎士達が、続々と部屋に入ってきてコウサカの左右に並ぶ。

「ふん、気付いていたか」

ローブの男、ディーファは傲然と腕を組む。

「貴様はっ

ディーファの姿を捉えたレオナルド団長が、驚愕する。

他の第二次モイトウラ戦争時代からの古参の騎士達も反応する。

「貴様はあの時のっ

全体から激しい憎悪が噴出する。

「くくく

「だが、部屋に入れた何百という人間の憎悪をディーファは軽く受け流して晒う。」

それは、大規模魔法陣を破壊されたことなど、全く気にしていないようで。

「ッ

直感的に察したコウサカが、ディーファへ迫ろうとする。その表情には珍しく、焦燥感が滲み出ていた。

「ふん、話くらいは聞け。化け物が」

組んでいた腕を解き、ディーファは左右に大きく広げた。

「 Maewynfydyfarwlaethgy
da(死を伴う至福のうち)」

「ッ!?!」

突如、コウサカがガクリと膝を着いた。

「ちょ、どうしたの?!」

慌てて朔絆が出てくるが、しかし朔絆も何か中^あてられたのか、コウサカに寄り掛かって動けなくなった。

そして、地面と天井、壁の全てに巨大な魔法陣が浮かび上がり光を放った。

「ぐっ」

それは部屋の中に留まらず、地下へ降りてきていた約五千人全てに作用した。

「策とは、二重三重に張り巡^{めぐ}らせるものだ」

さも面白そうに、ディーファは喉^{のど}を鳴らしてクツクツと晒う。

「ぐ、くっ」

地面に両手まで着いたコウサカが、ディーファを睨^{にら}み上げる。

「私は、そこまで馬鹿ではないぞ?」

それを見下しながら、ディーファはさらに晒う。

つまりは、わざと魔力を洩^もらしていたのである。ミレンシアである、コウサカにしか感じ取れない程度に。

そのために、敷^{ふせつ}設に数十日も掛かる大規模魔法陣を囷^{おとこ}として余分に作らせていたのである。

「うん?」

全ての者が倒れている状況で、一人でだけ状況が呑^のみ込^こみ込めずに才口オロしている少女が居た。

「み、皆さん、どうしたんですか?」

ナユキは平然^{へいぜん}と立ち、周りの者達を気遣^{きづか}っている。

「そうか、お前は」

ずっと面白そうに晒っていたディーファが、一転して凄まじい真顔になって手を前に出し、詠唱も何もなしにライティングボルトをナユキに放つ。

「ひゃっ！」

ナユキは驚いて両腕で顔を隠す。

するとナユキに向かっていていたライティングボルトが、触れる直前で掻き消えた。

「あ、あれ　？」

意味が分からず、ナユキはポカンとした。

「チツ　やはりそうか」

ディーファは白けた様に、腕を下げる。

「まあいい。その様子では、今はただの小娘だろうからな」

「　？」

意味が分からず首を傾げたナユキには構わず、ディーファはコウサカを見下ろす。

「まずは、当面の最大の障害を潰すとするか」

ゆっくりと、ディーファは腕を上げる。

「せめてもの情けだ。至福のうちに逝け」

パチン、とディーファは指を鳴らす。

ナユキを除いた、コウサカ達の意識はぶつりと途切れた。

「う　何だここは？」

レオナルド団長が起き上がると、辺りは一面真っ白だった。だが、地面を踏んでいる感覚は確かにあった。

「確か、急に意識が遠退いたと思ったら　私はどうしたのだ？」
頭を振りながら周りを見渡すが、やはり白い光景が広がっているだけだった。

だが、急に人影が現れた。

「何者だッ！」

腰の剣を抜きながら、レオナルド団長は構える。

しかし、その姿をはつきりと目視した時、レオナルド団長は剣を取り落としてしまった。

「馬鹿な。何故お前が」

それは三十代前半くらいの女性であった。

「レオ」

その女性は、第二次モイトウラ戦争で死んだはずのレオナルド団長の妻であった。

よく見ると、馬車に乗っていて襲撃され死んだ子供達の姿まであった。幼き日のクラウゼンの姿まで。

「何だ 何なんだこれは」

呆然と立ち尽くすレオナルド団長の目は、駆け寄って来る家族の姿を見つめているだけだった。

「うへへへ」

「起きろッ！」

「ぐぶおっ!?!」

頭に走った激痛げきつうに、飛び起きた。

「てめえ、いい加減にしやがれ! 死ぬぞ!? お兄ちゃん、そろ

そろ死んじやうぞ!?!」

案の定、起きてみるとカグヤがいた。

「うっさい! こんな状況で暢のんき気に寝てるな!」

「何がこんな状況だよ! オレはただいつも通りに」

よく周りを見渡す。白い世界。というか、寝た記憶もない。

「あれ、ここどこ?」

「はああ」

カグヤにメチャクチャ重い溜息を吐かれた。その表情が心底「こいつ馬鹿だ」と言っていて傷付く。

「え、えーと。なんだろうね、ここ」

「あたしが知るわけないでしょ」

「ですよー、ととりあえず笑っておく。」

と、二つの人影を見つけた。

「お、すみませーん。ここどこですかー？」

「は？」

「ちよつと、何勝手に　え？」

意味が分からなかった。何で、確かにあの時。

何で、何で。

「何で親父とお袋が」

「お父さん、お母さんっ　！」

カグヤが駆け寄って行って、お袋の胸の中に飛び込んだ。その目には、いっぱい涙を溜めて。

「な、え　なんだこれ」

「何で生きてんだよ。何でこんなところにいるんだよ。」

「そんなことを考えていると、二人が優しげに見つめてきた。」

「な」

それはまるで、お前も妹を見習って素直に来说いと言っている様で。

「なにが、何だったんだ　　これどうなってんだよ　　」

しかし、動けなかった。

「あ、れ　？」

朔絆が起き上がると、そこは一面白い世界だった。

「なに、ここ」

ふと、朔絆は自身の異変に気付いた。

「あれ、あたし実体化してないのに」
「だが、明らかにおかしかった。実体化以上に、自分という命が現存ぞんしている。」

言うなら、そう。まるで人間の身体のような。

「朔絆」

ビクリとして朔絆が見上げると、アンダーウェア姿のコウサカが隣に立っていた。

「あ、ちょうどよかった。ここな」

突然、コウサカが朔絆を抱き締めた。

「な、なななななっ　！」

一気に朔絆の全身が真っ赤になる。

「何を驚く？」

間近からコウサカが朔絆の顔を覗く。

「なあ、なないあうあ！」

「何を言っている」

「と、とにかく離れる！」

「ふむ」

不思議そうにしながらも、コウサカは言われ通りにする。

「なっ、なな、何してんのあんた！？」

心臓の上に両手の平を重ねて置きながら、朔絆は真っ赤なまま言う。

「何を言っている。今日は記念日だろう」

「え、記念　？」

意味が分からず、朔絆は目を白黒させる。

コウサカは「本当に分からないのか？」という顔をしながら言った。

「お前が、人間と同じ身体を手に入れ、本当の生を得て」

次に、コウサカはとんでもないことを言った。

「俺とお前が、恋仲こいなかになった日に決まっているだろうが」

「くくくく　くくくくくく　」

「　あ、来ないで　　来ない、で　　」
初めて相対する本物の死の感覚というものに、ナユキはただへたり込み、涙を流しながら後ずさりしていく。

「くく　　貴重なミレンシアの実験体が入るとはな　　や
はり、我々こそが」

ディーファが晒いながら、ナユキに歩み寄って行くと倒れている
コウサカに異変が起こった。

「え？」
「なっ！」

コウサカから数メートルは離れていたディーファが、突如として
吹き飛んだ。

「ぐっ　　何だ！？」

吹き飛ばされながらも、空中で身軽に体勢を立て直し地面を滑り
ながら着地すると、ディーファは毒付く。
そして、コウサカを見て言葉を失った。

コウサカから膨大な量の魔力が立ち上り、倒れこんでいるその地
面をひび割れさせて行きながら揺らめいていた。

コウサカがいるその場は、漆黒の闇だった。

何が起こったかは分かっていた。大規模魔法陣を破壊して気を抜
いたところに、二重に作られていたものを発動されたのだ。

無念すぎる失敗だった。甘すぎたのだ。

コウサカの意識は、そのまま深淵へと沈んでいく。

そして、コウサカも他の者と同じく封印された記憶の鍵を開けら
れ、それが広がって行った。

一人の青年が王城の訓練場の真ん中で、刃渡り百六十センチはある大剣を軽々と振るっていた。

「ブオン、ブオンとまるで木刀でも振るっているかの如く、軽々とそして凄まじい速度で振るっているというのに、息一つ乱さず、汗のひとつも掻いていなかった。」

「王！」

そこに儀礼用の鎧に身を包んだ、一人の騎士が駆け寄って来た。

「またここですか 執務をしてください」

ブオン、と一振りすると剣を下ろし、青年を振り返る。

「俺がやるよりは、あいつの方が確実だろう」

そして、また剣を振ろうと腕を上げる。

「いや、あなたがこの国の国王だろうが」

「気に入らないなら民主化しろ」

騎士は呆れたように、頭に手をやった。丁寧口調など一瞬で止めた。

「何を先代みたいなことを」

「その先代が、父親だからな」

とうとう騎士、アーノルド・ノージエスは溜息を吐いた。

「まったく、親子二代揃って」

前王の時代から仕え、もう四十を超えたアーノルドはまた深い溜息を付く。

「まあ、民があんたが良いと言っているのだから、民主化など出来るわけがないでしょう」

この不遜な態度がアーノルドの素だった。

「二代目エーデル王」

青年の名前は、コウサカ・レム・エーデル。

小国『エーデルラムト』王国を治める、十八歳の王である。

最も、それは先代エーデル王が逝去したため世襲制で継がれた

だけであつたのだが、前王時代から幼くして無欲で人格者であつたため国民はコウサカを王と認めていた。

気付けば幼い頃から剣を握っていて、剣王と謳われた父ヴァンゼインとわずか十四の頃には互角に渡り会えたほどの腕だった。その人格も然り。剣のようにただ真つ直ぐに正しいことを行なっていた。

「俺しか男が生まれなかつたのだ。仕方がないだろう」

「いや　だからよ。あんた、自分の国に関心無さ過ぎだろ
ブオン、とまた素振りを始めたコウサカが言う。

「俺が出来るのは、剣を振ることだけだ」

「あゝ　、面倒くせえガキだなあ　。ヴァンゼインの旦那
の時の方が楽だったなあ　」

こういうことを素で言うから表裏なく、信頼できる男なのである。
アーノルドは。

ヴァンゼインとは、コウサカの父親で前王のことである。

ヴァンゼイン・レムラント・エーデル。

剣王と謳われた卓越した剣の腕と、莫大な魔力を誇つた男である。
度量が広く大胆で、小さな事には拘らない。まさに豪放磊落を体
現したような性格で、戦場では常に最前列で一番に斬り込んで行く
人だった。

王となつてからの国政も常に民のための善政を布き、むしろ民が
心配するほど無欲に、自己犠牲など厭わず最前線で戦い続けたほど
の人格者だった。

よく豪快に笑いながら、こう言っていた。

「こんな美人で最高の嫁いんに、他にどんな贅沢があるってんだ
よ？」

ただ、二年前にあつた大きな戦で、エーデルラムトのために敵
方との圧倒的戦力差を命と引き換えに引つ繰り返し、最期にはいつ
ものように不敵に笑って死んで逝つた。

「親父は、誰からも慕われていたからな」

コウサカは興味も無さげに言う。

「いや、あんたも慕われてんだけどなあ」

この国は二十数年ほど前まで、私腹を肥やすために国民を食い物にしてきた王やその側近、その私兵団が牛耳っていた。私兵の暗殺者を使って家族を人質として一般の兵の動きを封じ操り、有力で協力する気のない権力者は暗殺し、不満を持つ民は弾圧、時には見せしめとして処刑。

そんな腐った国だった。

ある時、後のヴァンゼインの妃、コウサカの母親となるフィミルという少女が両親が命を捨てて腐敗した国から脱出させてくれた。

そして、偶然近くを通り掛かった放浪者、ヴァンゼインと出会った。

フィミルはそれが無理な願いだと分かってはいても、ヴァンゼインに助けを乞うた。だが、年端も行かぬ少女で、両親が殺されているだろう時にそんなことを氣に出来る者などいるものだろうか。

いきなりそんなことを捲し立てられ、しばらく目を丸くしながら聞いていたヴァンゼインだったが、ニヤリと笑うと一言こう言った。

「おう、いいぜ？ あんたみたいな可愛い子の願いなら、何でも聞いてやるぜ。ははははっ！」

そして、あまりにもあつさり了承したヴァンゼインを、呆気にとられたような表情で見ていたフィミルにここで待つように言い置くと、ヴァンゼインは真正面から向かって行った。

当然、守備兵が行く手を遮るが、その全てにこう言った。

「お前らの国の女の子がな、助けてくれって来たんだよ。だから、腐った王様とか言うのを殺してやるから道を開けやがれ」

だが、私兵団に家族の命を握られている兵達が開けられるわけがない。だから続けてこう言った。

「まあ、お前らの事情は分かっつからよ。今から斬るから死んだフリしろや。それが本当に死んでいるかどうか知らされる前に、終わらせてやる」

そうニヤリと笑うその顔は凄まじい迫力を感じるもので、それを見た者全てが心の底から怖気おそけを覚え、とても勝てる気どころか、傷一つ付けられないと思わせるほどに。

そして、だからこそ一縷いちろうの望みを託してみようと思わせしめた。

そうして、ヴァンゼインは全ての普通の兵達を突破していき、他人を踏みつけた上での将来と既得權益きとくけん《既得けんえき》が約束された私兵四百人が固めた城に突入。秒の間に複数人を斬り倒しながら、わずか十分程度で王のいる最上階まで到達し、そしてすでに逃げ出していた側近数名を除き、その場の者を皆殺しにした。

「コウサカは無心で大剣を一振りする。

「やはり、あれ共は殺す以外の道はなかったのか」

「だから甘いつてんだよ、あんたは。人を平気で喰うような連中を生かしておけるわけねえだろ」

アーノルドの言葉は、当然である。

この世界は、国名以外は大陸の名前、世界の名前すらまだない。戦乱えいこが永劫のように続き、人の命が安い時代なのである。誰かがどこかで殺し合い、大地を血で赤く染めるのが日常で、そういう世界力が無ければ食い物になるか、死ぬだけの。

コウサカの父親、ヴァンゼインもアーノルドと同じ考えだった。人の命を踏みつける様な奴に、生きる価値は無い。

それが証拠に、当時の国王と側近を殺したヴァンゼインは、国民

達から英雄と讃えられ、強い心と力を持つ者として新しく王となった。

「そうか」

コウサカは素振りを止める。

だが、ヴァンゼインはコウサカにこう諭していた。

「慣れすぎた俺はもう手遅れだが、出来るなら殺さないことにしたことはねえ。こんな時代だ。世界の流れて奴に身を委ねたら狂っちまうのが当たり前。お前はお前の考えで生きる。どうしてもそうしなければならぬ時と、違う時を見極める。二人を頼むぜ？」

そう言っつて、古傷だらけの大きな手で、幼い日のコウサカの頭をヴァンゼインは撫でた。

「そうだとしても、俺は」

「分かった、分かっているよ。あんたが王なんだから、好きにすりゃいい。この国さえ危険に曝さなければ、こっちからは文句はねえよ」

コウサカは置いておいた鞘に大剣を収める。

と、近づいてくる人の気配に、コウサカもアーノルドもピクリと反応する。

「陛下、お疲れでしょうからお飲み物をお持ちしました」

王城の若い少女くらいの使用人、要するにメイドさんが盆に紅茶を載せて近寄ってきていた。

「何度言えば分かる。水で十分だ。それと、水分補給など勝手にやる。君らは俺の世話までする必要は無い」

「え、あ、でも」

そのメイドは、妙に焦ったような表情を浮かべた。

「それに、毒入りの物ではな」

「！」

瞬間、メイドの顔は驚愕に固まる。

「確かに紅茶なら強い匂いで毒の匂いを紛らわせるが、俺には無意味だ」

コウサカは固まるメイドから紅茶の入ったティーカップを取るとそれを飲む。

「ふむ、これはジギタリスか」

ジギタリスは頭痛、吐き気、視覚異常、中枢神経の麻痺、心臓麻痺などの症状が現れる実際に存在する猛毒の毒草である。

「ど、どうして」

偽メイドは、冷や汗を流しながら辛うじてそれだけ言う。

「親父同様、俺も異常でな。肉体が物理的破損でもしなければ、死なない。毒程度なら体内の魔力が勝手に中和する」

「くっ　！」

偽メイド改め、少女の暗殺者は盆を落とすと隠していたナイフを抜く。

「止めておけ。どうせ、君も家族を人質に取られただけなのだろう。動きが素人すぎる」

少女が気付くと、コウサカはすぐ隣に居て、自分の持っていたはずのナイフもなくなっていた。

「色仕掛け、寝込みを襲撃、毒、買収。いくらでもされたきたからな」

それに、とコウサカは呆然と見上げてくる少女の顔を見つめる。

「俺は城の者、三百十八人全ての顔を記憶している。最初から分かっていた」

完全に失敗したことを知った少女は、涙を浮かべその場に崩れた。

「アーノルド」

「分かっているよ。尋問も拷問もしねえよ。どうせ、いつも通りただの捨て駒にされたただけだろうからな」

そう言つと、アーノルドは衛兵を呼んで少女を連れて行った。

「」

コウサカも剣を担ぐと、静かにその場を離れた。

暗殺など日常茶飯事にちじょうちはんじである。

だから、各国の王というのはほとんど近衛このえに護まもられながら行動をする。ひどい王になると、自室からほとんど出なくなることもあるらしい。

エーディルラムトにも、暗殺者は侵入する。コウサカ自身を狙う者については先の通り殺せるわけがないので素通りさせるが、側近や有力者狙いの者については徹底して監視される。場合によっては何か行動を起こす前に問答無用で処理されることもある。

暗殺者、色仕掛け、買収。その全てに一切屈したしないからこそ、コウサカは王として、人格者として慕したわれている。

「兄様にいさまー！」

ふと、コウサカが歩いていると自分を呼ぶ声がした。

「イリアか」

顔を向けると、妹のイリアと母であるフィミルの姿があった。

コウサカはそちらへ歩いていく。

「母上、お加減かげんは？」

「ええ、大丈夫」

フィミルは柔らかく微笑ほほえむ。

もう四十近いが見る者に強く安心感を与える、国民からは聖母とまで言われている女性だった。ヴァンゼインと契ちかってから、その影響でまたフィミルも変わった。とても強く、気高く、優しく。

ただ、ヴァンゼインが逝去せいきよしてから、少し体調を崩しがちだった。

「そうですね。あまり無理を為なさらないで下さい」

「くすくす。あなたは気にし過ぎですよ」

上品に笑うフィミルにコウサカは。

「親父から任まかされていますから」

神妙な顔で言い放つ。

「ありがとう。でも、それをあなたの重りにしないでね」

「心得ています」

コウサカは静かに黙礼を送る。

と、その時。

「無視するなー！」

イリアが割り込んだ。

「無視ではない。優先順位だ」

「最初に声掛けたのわたしなのに!？」

イリアは何やらシヨックを受けたようだった。

今年で十六歳になるイリアは、簡単に言えばお兄ちゃん子だった。父親であるヴァンゼインは戦場ばかりに居て、ヴァンゼインの代わりにフィミルが国政を担っていて、ほとんどコウサカがイリアの面倒を見てたことが大きい。

無愛想であるが常に国民のことを考え、そのために自分を犠牲にしてでも真つ直ぐ進む兄のことが大好きだった。

「すまなかつた」

「いいよ、いつものことだもん」

そうは言いながらも、イリアは少し拗ねたような顔をしていた。

「イリア」

フィミルがイリアの名前を呼ぶと、先ほどいたテラスを指差した。

「あ、そうだ。兄様、今お茶しているんだけど」

「俺は水で十分だ」

イリアに最後まで言わせず、コウサカは断った。

「ねえ、兄様。王様、なんだよね？」

「肩書き上はな。それと行かなければならないところもあるから無理だ」

イリアどころか、フィミルまで軽く溜息を吐いた。

この王は享楽、美食、宝。何も興味を示さないのである。やっていることと言えば、毎日剣の素振りや兵達との訓練、演習、王としての執務。フィミルやイリアが贅沢する分には何も言わないが、自分分は絶対にやるうとしない。

「兄様つて、もしかしてわたしのこと嫌い？」

「すごく不安そうな顔でイリアはコウサカに聞く。」

「そんなわけないだろう。肩書きではあるが、王だからな。やつのところへ言って仕事をせねばならん」

「やつつて、グラウスのこと？」

「ああ」

「グラウスとは、貴族連合の盟主めいしゅグラウス・フェルド・インルートのことである。」

「貴族と言っても、ヴァンゼインの時代に腐った貴族は全てじゆせつ肅清されたため、この貴族連合の者は全て国と民のことを考えている、本物の貴族である。」

「わざわざアーノルドが伝えて来たから、そろそろ俺も行かないといけないのだろう」

「むー」

「この所、ずっと相手をしていないためイリアは不満そうだった。仕事が片付いたら相手をする」

「コウサカは手を伸ばすと、イリアの頭を優しく撫でた。」

「うー わかった」

「不承不承ふじゆふじゆ、イリアは頷いた。」

「では、母上。失礼します」

「いってらっしゃい。インルートいんろと卿きやうに宜しくね」

「はっ」

「一礼すると、コウサカは離れ歩いて行った。」

「その背を、少し複雑そうな表情でフィミルが見つめる。」

「どうしたの、母様かあさま？」

「ん、何でもない。さあ、お茶が冷めてしまっわ」

「不思議そうな顔のイリアの背を押しながら、テラスへと向かう。」

「コウサカの無欲すぎる姿は、年頃の息子を持つ母親としては心配でならないのである。」

王の執務室。

「グラウス」

「遅い！」

コウサカが部屋に入ると、眼鏡を掛けて短く切り揃えられた髪に櫛を入れてばつちり決まっている二十代前半くらいの男性が居た。ただ、整えられていただろう髪は少し解れ、目の下には軽く隈が出来ていた。

「毎回、毎回、毎回！　なんで仕事しないんですか！？」

「俺よりも、お前の方が適任だろう。俺は前線で剣を振るうことに集中したい」

グラウスの周りで書類仕事に追われてた他の貴族達も、また始まった、という呆れ顔で二人を見ていた。

「私が言っているのは、そういうことではなく！」

「なら、お前が王になれ。俺は騎士団にでも入る」

「だから、そういうことではなくっ　！」

「それより、仕事は何をすれば良い？」

「だあああああ！」

グラウスは思わず机を殴る。

「城下の物は？」

「こ、こちらです」

コウサカは主に城下の様子を見たり、問題の解決に向く仕事をよく好む。それは分かっているため、そういう仕事は最初からコウサカ用としてまとめてあるのだ。

「では、行って来る」

「王！」

半ギレしているようなグラウスがそれを止める。

「仕方がないだろう。政略や経済と言ったものは俺には向かない。

お前達がいらないなら俺がやるしかないだろうが、いるのだから頼

りにして何が悪い」

「だからって、以前の貴族共の醜態はご存知でしょうに」
以前の王と一緒にあって、暴力で民を食い物にしていた貴族のことである。

「お前達は違うだろう。何を気にすることがある」

「信じすぎだって言うのですよ」

「仲間を信じなくて何を信じると言うのだ」

それだけ言うと、グラウスの肩を押してどかすとコウサカは出て行った。

「全く、あの人は」

「いいではないですか、インルート卿」
貴族の一人が言う。

「言葉は悪いですが、あの王がいるだけで民は安心します。我々は国民感情を気にせず仕事が出来ます」

その言葉に、他の貴族達も頷き合う。
ヴァンゼインは酒好きだったが、あの青年はそれすらないことにより無欲だった。

「それはそうですが」

「我々では剣を振るって国を護ることはできない。しかし、あの方は出来る。人には向き不向きがありますよ」

グラウスよりも年配の一人が諭すように言う。

「うむ」

グラウスも返す言葉が見つからず、唸る。

「さあ、仕事をしましょう。肉体労働の分は、あの方が持って行ってくれました」

「はあ、そうします」

能力的にどんなに高くても、年の功には敵わない。グラウスはコウサカが出て行った扉を見て溜息を吐くと、自身も自分の席へと戻った。

大剣を背中に背負いながら、コウサカは軽装で城下を歩いていた。
「あ、王様こんちわー」

「陛下、今日もご壮健そうけんですな」

様々な温かい声が投げ掛けられる。コウサカは軽く手を上げたり、頷き返すだけだがそれでも相手は満足したような笑顔を浮かべる。

さて、とコウサカは手に持った書類をペラペラ捲めくる。

内容は、喧嘩の仲裁だの、モンスターが出て作業の邪魔になっただの、王様へお礼がしたいから来てほしいだの、何とも平和なものが多かった。

エーディルラムトという国は、その時勢じせいに置いて本当に極稀ごくまれな平和に包まれた国だった。

それというのも、ヴァンゼインの異常なまでの強さが原因だった。国内の肅清を終わらせたヴァンゼインは、その混乱に乗じて攻め入って来ていた相手国を逆に返り討ちにしたのである。返り討ちにしただけならどこでも聞く話だが、敵方数千のうちその四割以上をヴァンゼイン一人が打ち倒してしまった。

十五歳の頃からすでに前線に出て、ヴァンゼインと共に戦っていたコウサカも父親に劣おとらない強さであったため他国は攻められないのである。もし攻め入ったら、生半可なまはんかの戦力では確実に返り討ちに遭い、潰されるからである。

力こそが全て。力がなければ生き残れない。

悲しいがコウサカという青年は、そんな弱肉強食の世界に生きていた。

「陛下！」

コウサカが近場から仕事を片付けていると、一人の騎士が駆け寄って来た。

「また来たか。人が魔物か、どちらだ？」

「はっ。魔物の方で」

コウサカは軽く溜息を吐く。

「そっちは俺が片付ける。代わりにこれを頼む」

「は？ はっ」

肉体労働ばかりの書かれた書類を騎士は受け取った。

魔物のことは聞こえてはいるはずが、国民達は誰一人不安そうな表情を浮かべていない。ただ、コウサカに応援の声を投げ掛けているだけだった。

「

それにひとつ頷くと、コウサカの姿は気付くと消えていた。否、一瞬で十メートル以上跳んでいた。

そのまま城壁をもう一回蹴り跳び上がって、城壁の上へと着地する。

「弓を」

「はっ」

すでに待機していた兵がコウサカに長弓を渡す。

一キロほど先から八、九メートルはある巨大な魔物が迫って来ていた。

「

静かにコウサカは弓を引き絞る。最大まで引いた所で、ピタリと止まる。

その手は一ミリすらぶれない。

そして、矢に凄まじい魔力が収斂されていく。矢からは魔力的な紫電さえ迸る。

曲射ではなく、真っ直ぐに矢先を魔物に向けて狙いを付ける。

シュツ、と静かな音と共に矢が放たれた。

魔力的に強化された矢は空気摩擦、重力の束縛に影響されず真っ直ぐに進み、数百メートル先の魔物に数秒掛からず着弾し、頭部を粉々に砕いた。

「

コウサカは黙って長弓を兵に返すと、城壁から城下へ飛び降りて行った。

弓を受け取った兵は、そんなコウサカを羨望せんぼうと畏敬いけいの入り混じった視線を向けていた。

その圧倒的な姿が、自分達の王であることを誇りほこに思いながら。

第二十三章 コウサカの過去（後書き）

また一ヶ月も間を空けてしまい申し訳ありません。もう最後に差し掛かっているというのに。

お読み下さった方々に、安らぎがあらんことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5784s/>

また別のマビノギ

2011年11月8日03時20分発行